

津久見 門前遺跡  
瀬戸遺跡  
佐伯 門前遺跡

東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

2005

大分県教育庁埋蔵文化財センター

津久見門前遺跡

瀬戸遺跡

佐伯門前遺跡

東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

## 序 文

本書は、大分県教育委員会が東九州自動車道の建設工事に伴い、日本道路公団の依頼を受けて実施した津久見門前遺跡、瀬戸遺跡、佐伯門前遺跡の発掘調査報告書です。東九州自動車道は、福岡県から大分県の沿岸部を通り、宮崎県・鹿児島県に至るルートを経る東九州地域における最重要幹線道路として計画されたもので、大分県では現在までに大分市と津久見市の間の供用が開始されています。今回、報告書に掲載しました三遺跡は、津久見インターチェンジから佐伯インターチェンジの間の工事に伴う発掘調査の報告です。

この区間は山間部であり、従来はあまり埋蔵文化財が確認されておりませんでした。しかし、今回の報告のようにルート上で三ヶ所の遺跡が調査され、これまで知られていなかった当地の歴史に新たな一頁を加える事が出来ました。

津久見市の門前遺跡は、津久見市内で初めての発掘調査となったばかりでなく、大分県内では数少ない中世の瓦が多量に出土する遺跡で、寺院の跡と考えられます。この遺跡により中世の津久見地域の姿の一端が浮かび上がりました。

瀬戸遺跡は、山間部の谷間にある中世以来の小さな集落の一端を発掘調査したもので、屋敷跡が一軒そのまま検出された貴重な事例となりました。

佐伯市の門前遺跡は、現在の佐伯市街地からやや川を遡った谷部に位置し、県南では貴重な縄文時代早期の遺跡と、梅牟乳城に近いという立地から中世の遺跡も検出されました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、学術研究資料として広く御活用いただけましたら幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力を頂きましたことに対し、こころから感謝申し上げます。

平成17年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター  
所 長 伊 藤 正 行

## 例 言

1. 本書は、日本道路公団の委託により大分県教育委員会が実施した、津久見門前遺跡（津久見市）、瀬戸遺跡（佐伯市（旧弥生町））、佐伯門前遺跡（佐伯市）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、津久見門前遺跡と佐伯門前遺跡は、大分県が管理する遺跡台帳では共に「門前遺跡」であるので、混雑を避けるためにこの報告書ではそれぞれ市名を最初に付けた。
2. 調査は東九州自動車道（津久見－佐伯間）の工事に伴って、大分県教育庁文化課が平成14年度（津久見門前遺跡、瀬戸遺跡）、15年度（佐伯門前遺跡）に実施した。
3. 本書中で使用する中世の陶磁器類に対する分類については下記の文献による。

青 磁 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2  
日本貿易陶磁研究会 1982

白 磁 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2  
日本貿易陶磁研究会 1982

青 花 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2  
日本貿易陶磁研究会 1982

備前焼 栗岡実「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料1』  
中近世備前焼研究会 2000
4. 出土遺物はすべて大分県教育庁埋蔵文化財センターにて保管している。
5. 瀬戸遺跡の所在地は調査当時は「南海郡郡弥生町」であったが、2005年3月3日に合併し、佐伯市弥生となった。しかし、本書中では、現在佐伯市となった旧町村（上浦町・弥生町・本匠村・宇口町・直川村・鶴見町・米水津村・雷江町）については地理的な説明上旧町村名を使用している。
6. 遺物の写真撮影は植島隆二（埋蔵文化財センター主査）が行った。なお、レントゲン写真は山田拓伸氏（大分県立歴史博物館主幹研究員）による。
7. 本書は第1章と第2章は小柳和宏（埋蔵文化財センター副主幹）、第3章と第5章は坂本嘉弘（同調査第二課長）、第4章は植島隆二と松田幸之助（同嘱託）が執筆し、坂本、小柳、植島の三名で編集を行った。

# 目次

序文  
例言

第1章 序説	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	3
第3節 調査体制	4
第4節 調査地域の地理的・歴史的環境	5
第2章 津久見門前遺跡	7
第1節 遺跡の概要	7
1) 遺跡の立地と周辺状況	7
2) 調査の概要	8
第2節 遺構と遺物	8
1) 第1地点	8
2) 第2地点	81
3) 第3地点	83
4) 石造物	83
第3節 小結	85
1) 遺物の分類と年代的位置付け	85
2) 遺跡の存続時期と時期区分	97
3) 遺構の性格	98
4) 門前遺跡の性格	98
5) 津久見の中世と門前遺跡	99
6) 旧字図にみる旧吉江村	105
7) 結論	111
第4節 関連文書史料	112
写真図版	
第3章 瀬戸遺跡	125
第1節 遺跡の概要	125
1) 地理的環境	125
2) 歴史的環境	125
3) 調査の経過と概要	127
第2節 調査の成果	128
1) 遺構	128
2) 遺物	128
第3節 小結	132
写真図版	
第4章 佐伯門前遺跡	133
第1節 遺跡の概要	
1) 遺跡の立地と環境	133
2) 調査の概要	134
第2節 中村地区の調査	137
1) 遺構とその分布	137
2) 遺物	161
第3節 脇地区の調査	183
1) 遺構とその分布	183
2) 遺物	188
第4節 小結	193
写真図版	
第5章 総括	195
報告書抄録	196

# 挿図目次

## 第1章 序説

第1図	東九州自動車道と発掘調査遺跡	2
第2図	遺跡分布図	6

## 第2章 津久見門前遺跡

第3図	津久見地域の遺跡	7
第4図	遺跡周辺の地形と調査箇所	9
第5図	第1地点遺構配置図	10
第6図	SD-1実測図	12
第7図	SD-1出土遺物(1)	13
第8図	SD-1出土遺物(2)	14
第9図	SD-1出土遺物(3)	15
第10図	SD-1出土遺物(4)	16
第11図	S-1実測図	17
第12図	S-1出土遺物	17
第13図	S-2実測図	18
第14図	S-2出土遺物(1)	19
第15図	S-2出土遺物(2)	20
第16図	S-3実測図	21
第17図	S-3出土遺物	21
第18図	S-4実測図	22
第19図	S-4出土遺物(1)	23
第20図	S-4出土遺物(2)	24
第21図	S-5実測図	25
第22図	S-5出土遺物	26
第23図	S-6実測図	27
第24図	S-6出土遺物	27
第25図	S-7実測図	27
第26図	S-7出土遺物	27
第27図	S-8実測図	27
第28図	S-8出土遺物	27
第29図	S-9実測図	28
第30図	S-9出土遺物	28
第31図	S-10実測図	28
第32図	S-10出土遺物	29
第33図	S-11実測図	29
第34図	S-11出土遺物	29
第35図	S-12実測図	29
第36図	S-12出土遺物(1)	30
第37図	S-12出土遺物(2)	31
第38図	S-13平面・断面実測図	31
第39図	S-14平面・断面実測図	32
第40図	第1地点斜面断面図	33
第41図	斜面瓦包含層出土遺物(1)	34
第42図	斜面瓦包含層出土遺物(2)	36
第43図	斜面瓦包含層出土遺物(3)	37
第44図	斜面瓦包含層出土遺物(4)	38

第45図	斜面瓦包含層出土遺物(5)	40
第46図	斜面瓦包含層出土遺物(6)	41
第47図	斜面瓦包含層出土遺物(7)	42
第48図	斜面瓦包含層出土遺物(8)	43
第49図	斜面瓦包含層出土遺物(9)	44
第50図	斜面瓦包含層出土遺物(10)	45
第51図	斜面瓦包含層出土遺物(11)	46
第52図	斜面瓦包含層出土遺物(12)	47
第53図	斜面瓦包含層出土遺物(13)	48
第54図	斜面瓦包含層出土遺物(14)	49
第55図	斜面瓦包含層出土遺物(15)	50
第56図	斜面瓦包含層出土遺物(16)	51
第57図	斜面瓦包含層出土遺物(17)	52
第58図	斜面瓦包含層出土遺物(18)	53
第59図	斜面瓦包含層出土遺物(19)	54
第60図	斜面瓦包含層出土遺物(20)	55
第61図	斜面瓦包含層出土遺物(21)	56
第62図	斜面瓦包含層出土遺物(22)	57
第63図	斜面瓦包含層出土遺物(23)	58
第64図	斜面瓦包含層出土遺物(24)	59
第65図	斜面瓦包含層出土遺物(25)	60
第66図	斜面瓦包含層出土遺物(26)	61
第67図	斜面瓦包含層出土遺物(27)	62
第68図	斜面瓦包含層出土遺物(28)	63
第69図	斜面瓦包含層出土遺物(29)	64
第70図	斜面瓦包含層出土遺物(30)	65
第71図	斜面瓦包含層出土遺物(31)	67
第72図	斜面瓦包含層出土遺物(32)	68
第73図	斜面瓦包含層出土遺物(33)	69
第74図	斜面瓦包含層出土遺物(34)	70
第75図	斜面瓦包含層出土遺物(35)	71
第76図	斜面瓦包含層出土遺物(36)	72
第77図	斜面瓦包含層出土遺物(37)	73
第78図	斜面瓦包含層出土遺物(38)	74
第79図	瓦質火鉢	75
第80図	ビット出土遺物(1)	76
第81図	ビット出土遺物(2)	77
第82図	試掘調査及び表上出土遺物(1)	78
第83図	試掘調査及び表上出土遺物(2)	79
第84図	試掘調査及び表上出土遺物(3)	80
第85図	第2地点実測図	81
第86図	第2地点出土遺物(1)	81
第87図	第2地点出土遺物(2)	82
第88図	第3地点出土遺物	83
第89図	遺跡内出土石遺物(1)	83
第90図	遺跡内出土石遺物(2)	84
第91図	遺跡構集積内石遺物	84
第92図	主玄陶磁器一覽	85
第93図	備前焼口縁部分類図	86
第94図	古瀬戸一覽	86

第95図	上層分類図	87
第96図	瓦質土器火鉢口縁部要図	87
第97図	軒平瓦瓦当文様の分類	89
第98図	軒平瓦瓦当文様の分類	90
第99図	軒平瓦瓦当接合の分類図	90
第100図	文様面・頭貼り付け技法	90
第101図	軒平瓦模式図	91
第102図	丸瓦模式図	92
第103図	丸瓦吊り紐痕の分類	92
第104図	平瓦に付く痕跡	93
第105図	鬼瓦の分類	94
第106図	大分県内出土中世瓦瓦当集成	96
第107図	寺域推定図	99
第108図	石造物位図	100
第109図	石造物実測図	100
第110図	「天友公園」遺構図	102
第111図	大友公園周辺小字集成図	102
第112図	白杵藩築内絵図(部分)トレース図	103
第113図	稜線上における遺構の配図	103
第114図	城郭遺構縄張り図	104
第115図	川下竹江村宇図集成図	107~108
第116図	門前遺跡周辺現況図	109~110

### 第3章 瀬戸遺跡

第117図	遺跡周辺の地形と遺跡	126
第118図	調査区と周辺の地形	127
第119図	カマ下周辺実測図	128
第120図	建物跡実測図	129
第121図	出土遺物実測図(1)	130
第122図	出土遺物実測図(2)	131
第123図	石臼実測図	132

### 第4章 佐伯門前遺跡

第124図	調査位置図(1/1000)	135~136
第125図	中村地区遺構配置図	137
第126図	中村地区1号集石実測図	138
第127図	中村地区2号集石実測図	139
第128図	中村地区3号集石実測図	139
第129図	中村地区4号集石実測図	140
第130図	中村地区5号集石実測図	140
第131図	中村地区6号集石実測図	141
第132図	中村地区7号集石上部実測図	141
第133図	中村地区7号集石下部実測図	142
第134図	中村地区8号集石実測図	142
第135図	中村地区9号集石実測図	143
第136図	中村地区10号集石実測図	143
第137図	中村地区11号集石実測図	144
第138図	中村地区12号集石実測図	145
第139図	中村地区13号集石実測図	146

第140図	中村地区14号集石実測図	147
第141図	中村地区15号集石実測図	147
第142図	中村地区16号集石実測図	148
第143図	中村地区17号集石実測図	148
第144図	中村地区18号集石実測図	150
第145図	中村地区19号集石七部実測図	151
第146図	中村地区19号集石下部実測図	151
第147図	中村地区20号集石実測図	152
第148図	中村地区21号集石実測図	153
第149図	中村地区22号集石実測図	153
第150図	中村地区23号集石実測図	154
第151図	中村地区24号集石実測図	154
第152図	中村地区25号集石実測図	155
第153図	中村地区26号集石実測図	155
第154図	中村地区27号集石実測図	156
第155図	中村地区28号集石実測図	156
第156図	中村地区29号集石実測図	157
第157図	中村地区30号集石実測図	157
第158図	中村地区31号集石実測図	158
第159図	中村地区32号集石実測図	158
第160図	中村地区33号集石実測図	159
第161図	中村地区14区東西上層実測図	160
第162図	中村地区10区東西土層実測図	160
第163図	中村地区出土縄文早期土器実測図(1)	163
第164図	中村地区出土縄文早期土器実測図(2)	164
第165図	中村地区出土縄文早期土器実測図(3)	165
第166図	中村地区出土縄文早期土器実測図(4)	166
第167図	中村地区出土縄文早期土器実測図(5)	167
第168図	中村地区出土縄文早期土器実測図(6)	168
第169図	中村地区出土縄文早期土器実測図(7)	169
第170図	中村地区出土土器実測図	170
第171図	T-29出土縄文土器実測図(1)	171
第172図	T-29出土縄文土器実測図(2)	172
第173図	中村地区出土縄石核実測図	173
第174図	中村地区出土石錐実測図	173
第175図	中村地区出土石器実測図(1)	174
第176図	中村地区出土石器実測図(2)	175
第177図	中村地区出土石器実測図(3)	176
第178図	中村地区出土石器実測図(4)	177
第179図	中村地区出土石器実測図(5)	178
第180図	中村地区出土石器実測図(6)	179
第181図	中村地区出土石器実測図(7)	180
第182図	中村地区出土石器実測図(8)	181
第183図	中村地区出土石器実測図(9)	182
第184図	脇地区S001実測図	183
第185図	脇地区S002実測図	183
第186図	脇地区遺構配置図(1/40)	184
第187図	脇地区S003実測図	185
第188図	脇地区S004実測図	185
第189図	脇地区S005実測図	185
第190図	脇地区S006実測図	186

第190図	脇地区東西土層実測図	186
第191図	脇地区3B区東西トレンチ上層実測図	187
第192図	脇地区3B区南北トレンチ上層実測図	187
第193図	脇地区出土遺物実測図(1)	189
第194図	脇地区出土遺物実測図(2)	190
第195図	脇地区出土遺物実測図(3)	191
第196図	脇地区出土土製品実測図	192
第197図	脇地区出土石実測図	192

## 表目次

第1表	分布調査結果	1
第2表	津久見門前遺跡遺物観察表	119

## 図版目次

### 第2章 津久見門前遺跡

図版1	遺跡全景・第1地点斜面瓦出土状況
図版2	遺跡遠景・遺跡調査風景
図版3	遺跡全景・第1地点斜面瓦出土状況
図版4	S-1・S-2・S-3・S-4
図版5	S-5・S-9・S-10・S-12・S-13・S-14
図版6	遺跡周辺の石造物・白件蓄積絵図
図版7	出土遺物(陶磁器)
図版8	出土遺物(瓦当・鬼瓦)
図版9	出土遺物(軒平瓦・平瓦・丸瓦・鳥食・雁振瓦)
図版10	出土遺物(その他の道具瓦・吊り紐痕など)
図版11	出土遺物(土器・瓦質土器・鉄製品など)
図版12	出土遺物(銅銭・竈前のレントゲン写真)

### 第3章 瀬戸遺跡

図版13	遺跡遠景・瀬戸遺跡建物跡
図版14	出土遺物

### 第4章 佐伯門前遺跡

図版15	中村地区遺構写真(1号集石～7号集石)
図版16	中村地区遺構写真(8号集石～15号集石)
図版17	中村地区遺構写真(17号集石～21号)
図版18	中村地区遺構写真(22号集石～28号集石)
図版19	中村地区遺構写真(29号集石～33号集石)・上層
図版20	脇地区作業風景・S001・上層・S021・S021 遺物出土状況
図版21	中村地区出土土器①
図版22	中村地区出土土器②
図版23	中村地区出土土器③
図版24	トレンチ出土土器
図版25	中村地区出土石器①
図版26	中村地区出土石器②
図版27	脇地区出土陶磁器
図版28	脇地区出土土師器・土製品・土鏃



## 第1章 序説

## 第1節 調査に至る経緯

平成10年5月に日本道路公団九州支社大分工事事務所から、大分県教育庁文化課に対して東九州自動車道津久見佐伯間における文化財の事前調査の依頼があった（平成10年5月22日付け九州支大工第610号）。その際、路線内には周知遺跡として門前遺跡（津久見市、包蔵地：弥生時代）、河野家石塔（弥生町、石塔：室町時代）、樹牟礼城跡（佐伯市、山城：中世）の計3箇所が示されていた。

平成10年12月には、大分県文化課で津久見佐伯間における路線内の文化財分布調査を実施した。その結果、次表のような遺跡が確認された（平成10年12月18日付け教委文第5214号）。

表1表 分布調査結果

遺跡名	遺跡位置	推定年代	遺跡状況	推定面積
河内遺跡	弥生町大字床木字河内	不明	散布地	3,000㎡
一の瀬遺跡	弥生町大字床木字一の瀬	不明	散布地	2,000㎡
瀬戸遺跡	弥生町大字床木字瀬戸	不明	散布地	1,200㎡
門前遺跡	佐伯市大字上岡字脇など	不明	散布地	134,000㎡
門前遺跡	津久見市大字下青江字門前		消滅	

※この段階では遺跡名はNo.1からNo.5遺跡とし、位置については公園のセンター杭番号で示している。

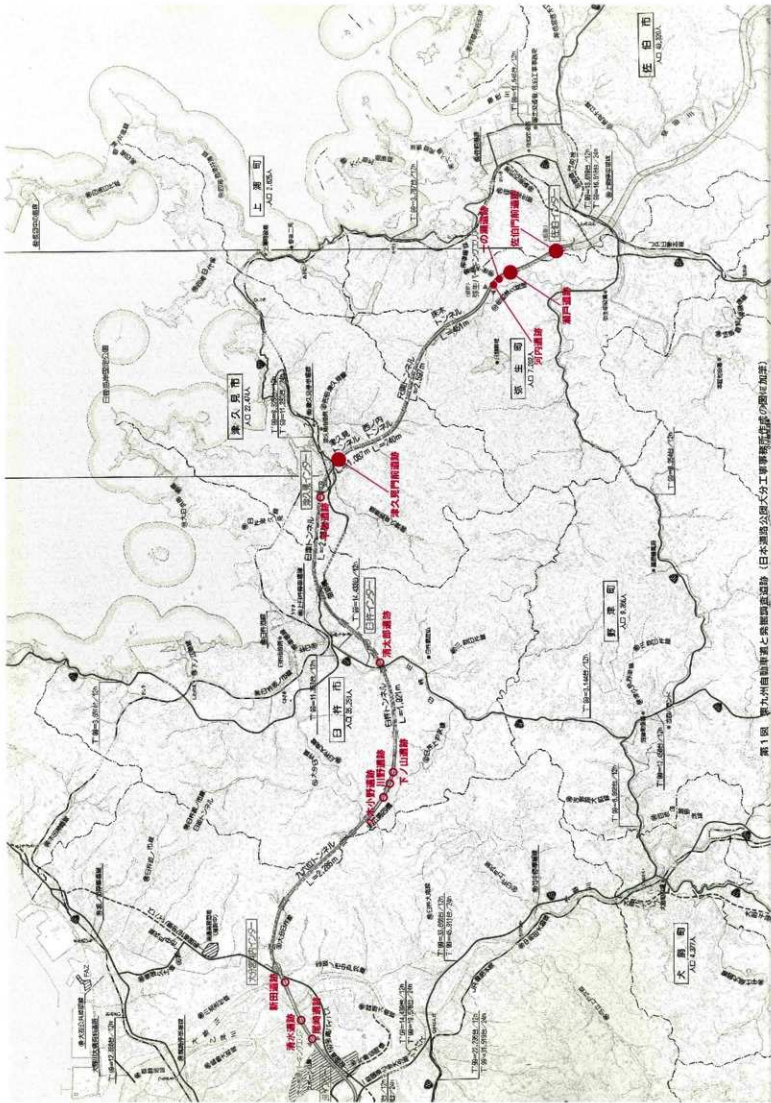
なお、事前に周知されていた河野家石塔については、地元弥生町教育委員会と継続して協議する事とし、埋蔵文化財調査の対象地からは除外された。また、樹牟礼城跡（佐伯市）については、山の裾野まで関連遺跡として周知されていたが、分布調査の結果、周知範囲内はごく僅かで、大半は範囲外となることから新たな遺跡として地区の通称地名を取って「門前遺跡」と呼称することにしたものである。

また、津久見市の門前遺跡については、すでに消滅しているものとしてこの段階では「試掘調査の必要なし」とされた。

平成12年5月には、日本道路公団九州支社より大分県文化課に対して、路線内に係る埋蔵文化財について「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱に関する覚書」に基づいて、津久見市の門前遺跡を除外した4遺跡について、協議の申し入れがあった（平成12年5月10日付け九州支用管第148号）。それに対しては、地方分権一括法案の成立に伴う文化財保護法及び両施行令の改正によって日本道路公団と県教育委員会との関係が変わる事から<sup>1)</sup>、保留扱いとなった。

平成13年7月には、津久見市の門前遺跡について、路線内に寺院跡と見られる場所があるという地元の指摘を受け、大分県文化課では日本道路公団に対して調査対象に含めるよう要請を行ったところ、今後の調査で他の遺跡と同様に扱う旨回答があった。

平成14年4月に日本道路公団九州支社大分工事事務所より、本年度に発掘調査を行うに先立ち、「協定書」を締結したい旨申し入れがあり、同年6月29日付けで日本道路公団九州支社と大分県知事との間で「東九州自動車道（津久見～佐伯）埋蔵文化財発掘調査協定書」を取り交わした。それに基づき契約を行い、平成14年9月より、現地調査を開始した。



第1図 福岡自動車道と隣接道路の相互接続 (日本道路公団大分工務事務所提供の資料による)

## 第2節 調査の経過

本調査に至らなかった遺跡の調査も含め、年度ごとに調査の経過を記す。

### 平成14年度

平成14年9月2日、弥生町の河内遺跡において、重機による確認調査を実施。その結果、中世のものと思われる葉の破片が出土したが、遺構は確認されず、水田開発によって遺跡が消滅していると判断された。

9月3日、弥生町の一の瀬遺跡において、重機による確認調査を実施。その結果、水田床土下から鉄製品が出土したが明瞭に時期の判別が出来ず、さらに遺構は確認されず、水田開発によって遺跡が消滅していると判断された。

9月4日、弥生町の瀬戸遺跡において、重機による確認調査を実施。その結果、中世から近世にかけての遺物が出土し、近世と考えられる屋敷跡が検出された。よって、本調査が必要と判断し、本年度中に本調査を行う事となった。

9月9日から24日にかけて、津久見門前遺跡において確認調査を実施。門前遺跡は山の中腹にあるため、重機が入らずに人力でトレンチを設定し、掘り下げをおこなった。その結果、至る所で中世の瓦片が散布し、また表土下において焼土が認められ、さらにピットが確認されたことから、本年度中に本調査を行う事となった。

10月15日から津久見門前遺跡の本調査を開始する。確認調査では入れなかった重機が通れるように沢流に鉄板を渡すなどして重機を上げ、表土剥ぎを行う。その結果、初日に平川面下の斜面で瓦が堆積しているのが確認された。

調査地点は3箇所あり、それぞれを第1地点、第2地点、第3地点と呼び、試験調査で遺構の確認されなかった第3地点を除き、全面表土剥ぎを行った。

10月21日から作業員が入り、第1地点の南側半分の遺構検出作業を始める。

11月6日から遺構の掘り下げと斜面部の瓦検出作業を開始。斜面では鬼瓦や瓦当などが出土し始める。

11月20日からは第1地点の北側半分の遺構検出作業を始める。その結果、山際に溝が延びているのを確認する。

12月18日からは、第1地点平坦面の形成を確かめるためにトレンチを設定し、掘り下げを行う。

平成15年1月7日から、第2地点の掘り下げを人力で行う。その結果、多くの銅銭が出土する。

1月17日、津久見門前遺跡現場作業終了。

1月22日から瀬戸遺跡の本調査を開始する。2日間重機により表土除去を行う。その結果、遺跡中央で焼土などを検出する。

1月24日、石列を検出。屋敷の内部である事が判明する。

1月31日、石列などの測量や写真撮影を行い、現場の作業は終了する。

2月4日、佐伯門前遺跡の確認調査を開始する。佐伯門前遺跡は広大な面積を有するため、本調査範囲を確定させる必要から各所にトレンチを設定し、重機による掘り下げを行った。その結果、中村地区と脇地区において遺構と遺物が確認された。

2月26日より、中村地区において縄文時代の包含層の広がりを押さえるために、トレンチを拡張し人力による掘り下げを行った。その結果、良好に縄文時代早期の包含層が残存している事、集石遺構が複数あることが確認された。

3月26日、中村地区と脇地区を次年度本調査を行う事とし、重機により埋め戻しを行い、佐伯門前遺跡の試験調査を終了した。

### 平成15年度

平成15年5月13日、佐伯門前遺跡中村地区において本調査を開始。作業員を投入し、残土処理現場など整備を行う。その後、調査区北側最頂部の平坦地(1・2・3・4区)の表土除去作業を開始する。約1ヶ月の作業の

間に表土内から中近世の陶磁器の小片などが出土した。

6月9日、表土除去のため重機搬入。杭打ち、グリット設定を行う

6月20日、調査区南側14区から順次、アカホヤ層および縄文時代の包含層掘り下げ・遺構検出開始。

7月2日、14-C区にて縄文時代早期の集石遺構を初めて検出（S-002）。

8月8日、9月16日、台風対策による現場保全。

10月26日、佐伯門前遺跡中村地区にて現地説明会開催。

11月17日、調査区外西側の谷部に4本のトレンチを新たに設定し、重機による掘り下げを行う。

12月18日、ラジコンヘリによる中村地区遺跡の空中撮影実施。

平成16年1月13日、佐伯門前遺跡脇地区の本調査開始。人力による表土除去の後、包含層の掘り下げを開始。

輸入陶磁器、ピットを検出した。

1月20日、脇地区にて杭打ち後、グリット設定を行う。

2月12日、脇地区の包含層の堆積状況を確認するために、トレンチを設定する。

2月13日、中村地区の現地調査完了。

3月8日、ラジコンヘリによる脇地区遺跡の空中撮影実施。

3月11日、底面に多量の河原礫が投棄された溝状遺構を検出（脇地区S-021）。

3月12日、脇地区の現地調査完了。佐伯門前遺跡の現場作業終了、撤収。

### 第3節 調査体制

年度別の調査体制は下記の通りである。

#### 平成14年度（津久見門前遺跡・瀬戸遺跡）

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	石川公一	大分県教育委員会教育長	
	岩尾康晴	大分県教育庁文化課長	
	麻生祐治	大分県教育庁文化課参事兼課長補佐	
	清水宗昭	〃	〃
調査事務	渡邊重昭	〃	主幹兼管理係長
調査員	坂本嘉弘	〃	主幹
	小柳和宏	〃	副主幹
	浦井直幸	〃	嘱託

#### 平成15年度（佐伯門前遺跡）

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	石川公一	大分県教育委員会教育長	
	今永一成	大分県教育庁文化課長	
	麻生祐治	大分県教育庁文化課参事兼課長補佐	
	清水宗昭	〃	〃
調査事務	渡邊重昭	〃	主幹兼管理係長
調査員	坂本嘉弘	〃	主幹
	横島隆二	〃	主査
	松田幸之助	〃	嘱託

#### 第4節 調査地域の地理的・歴史的環境

東九州自動車道は、大分市から臼杵市を通過した後、鯨南山から延びる半島の付け根を横断して南下し、豊後水道に注ぐ津久見川下流域で一旦沿岸部に出て、再び山間地を抜け番匠川やその支流の造る谷底平野や狭い沖積地を横断し、沿岸の佐伯市に至る。この内、津久見から佐伯に至る地域には急峻な山地や狭小な平野部が多く、元々埋蔵文化財の周知遺跡は少ない地域であった。

津久見市は、四浦半島と臼杵市との境にある半島に挟まれた東西に直線が12km余りの長いリアス式の海岸線と、彦岳(639.3m)、昇盤ヶ岳(716.3m)、鯨岳(619.9m)、鯨南山(536.4m)といった500m以上の山々に囲まれた閉塞的な地形であり、唯一のまとまった平野としては青江川下流と津久見川下流に開けた狭い沖積地があるだけである。遺跡も当然そこに集中し、他の地域では海岸部で僅かに弥生時代の土器散布地が数カ所で確認されているに過ぎない。

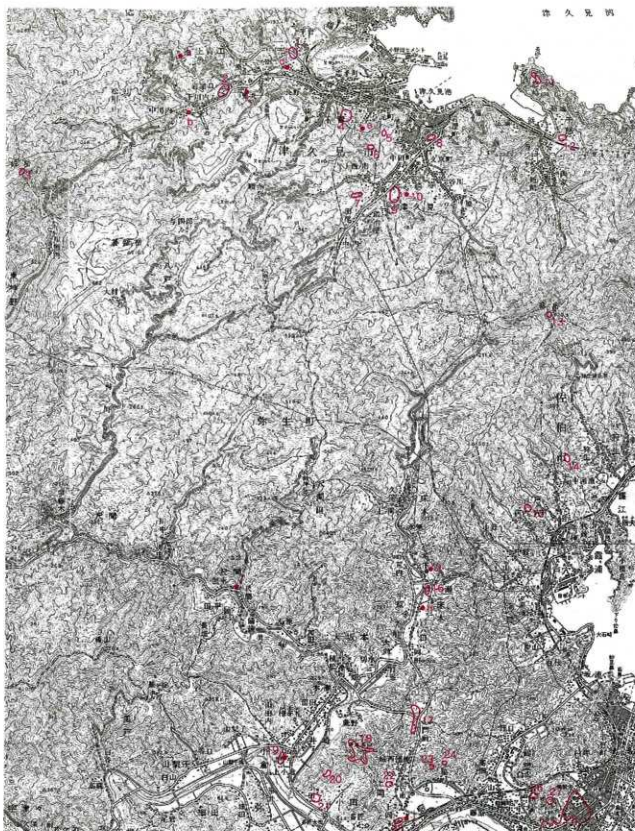
今回調査した津久見門前遺跡は、青江川下流域の平野を望む山地の中腹に立地しており、本来は弥生時代の散布地として知られていた。しかし、調査に至る経緯で記したように、寺院跡という地元の伝承があったことから、調査を行うことになった遺跡である。結果的に中世の寺院跡であることが確認されたが、中世の津久見地域は歴史的位置づけが難しい地域であった。それは、中世この地を名号の地とした「津久見氏」が戦国期に途絶えた事によって文書が伝わらないこと、近世になると、臼杵藩領(北半)と佐伯藩領(南半)に津久見地域が二分され、統一的理解が難しいことなどによる。

しかし、戦国末期には、家督を息子の義統に譲った大友宗麟が隠棲のために津久見に居を移し、この地で死去するなど、豊後の中世史でも重要な舞台となった地である。今回の調査では戦国期の遺物も出土しており、それらとの関係も指摘できる。

東九州自動車道は、津久見市から彦岳より延びる山岳地帯を抜けてさらに南下すると、番匠川支流の床木川が造る狭い谷底平野を横断するように延びる。南北に細長い床木川の沖積地では、そこに注ぐ幾筋もの支流によって谷底平野を枝状に広げ、その付け根あたりに現在の集落が点在している。今回調査した瀬戸遺跡はそのような集落の一つである「瀬戸」集落の最も上流側にあたる地点である。このような現在の集落景観がいつ頃形成されたのかについては、県南地域では特に考古学的な知見に乏しく、注目されるどころであった。結果的には中世まで通り得なかったが、今後も重要な視点であると考えられる。

さらに東九州自動車道は南下し、番匠川の造る沖積地に近い井崎川の流域に至るが、ここまで来るとようやく遺跡の数が増加する。一つには番匠川や壱田川の造る沖積地が広いこと、さらに古代、中世では豊後大神氏に繋がる佐伯氏が戦国末期まで地域全体を把握していたことがあげられよう。後者によって佐伯門前遺跡を埋む牟牟礼山頂に佐伯氏の山城が築かれていることも遺跡の形成に大きな影響を与えていよう。そのような中で調査された佐伯門前遺跡は、縄文時代早期の栗石遺構と包含層が中村地区で、中世の遺構が隣地区で確認された。前者は県南地域では貴重な縄文時代早期の遺跡である。同じ佐伯市の森の本道跡(佐伯市長谷)でも栗石が確認されており、比較的狭い沖積地を望む微高地上に縄文時代早期の遺跡が点在したことが窺える。中世の遺構は、牟牟礼山麓に点在する中世遺跡群の一つであり、全体として中世佐伯氏の動向と深い関わりがあったことが想定されるものの、調査が点でしか行われておらず、明確な位置づけはなされていない。

このように、周知の埋蔵文化財が少ない地域であるからこそ、新たな発掘調査によって得られる情報の価値はより高いものになり、地域の歴史解明に寄与するところが大きいのである。



- a. 村上神社宝篋印塔 b. 川内石幢 c. 鬼丸板碑 d. 道尾石幢 e. 世尊寺五重塔 f. 観音庵宝篋印塔群 g. 河野家石塔 h. 瀬家石幢・板碑  
 i. 遊樂石塔 j. 十三重塔
1. 平岩遺跡(弥) 2. 岩屋I遺跡(古) 3. 殿岳城 4. 津久見門前遺跡 5. 城郭遺構 6. 城郭遺構 7. 三重城 8. 伝大友館 9. 長幸遺跡(弥) 10. 大友宗麟墓  
 11. 大岩本遺跡(弥) 12. 大田遺跡(弥) 13. 彦岳城 14. 河波ヶ城 15. 河内城 16. 瀬戸遺跡 17. 佐伯門前遺跡 18. 榎牟礼城 19. 上小倉横穴墓群(古)  
 20. 小田山城 21. 小田山館 22. 曳地館 23. 二上寺 24. 三上寺 25. 木ノ城 26. 白河遺跡(弥) 27. 佐伯城(近) 28. 佐伯城下町(近)

第2図 遺跡分布図 (S=1/70,000)

## 第2章 津久見門前遺跡

### 第1節 遺跡の概要

#### 1) 遺跡の立地と周辺の状況

津久見市街地周辺では門前遺跡を含めて僅か4ヶ所の遺跡が確認されているに過ぎない。それらは弥生時代から古墳時代の遺跡で、いずれも発掘調査が行われておらず詳細は不明である。門前遺跡は、過去に石炭が出土し、遺跡として周知されたものであったが、実態は不明であった。

門前遺跡は大字下青江字門前の津久見湾に注ぐ青江川下流域右岸にあって、沖積地からの比高差約45mの山地中腹（標高約50m）に立地している。背後には標高約300mの急峻な山地があり、そこから流れ出た溪流が作る小さな谷の谷頭周辺に平地を造成し、遺跡が形成されている。遺跡からは、青江川を作る狭い沖積地や、津久見湾の一部を望む事が出来る。

遺跡を挟んで西側の尾根は石灰岩の露頭が、東側の尾根はチャートの露頭が見られ（古生層の小岡層）、地山中にもそれらの鉱石が含まれる。調査対象区の横には鍾乳洞があり、入口部には寛政8(1796)年に没した真岡玄如首座（解脱園寺第22世）の碑が建っている。これは玄如首座がこの地（門前村朝日寺旧地）で明和4(1767)年に石灰焼（石灰石を焼いて石灰を作る）を「黎明」したとされる記述（「解脱園寺年代記・解脱園寺歳」）に基づくもので、現在津久見市の一大産業になっている石灰生産の発祥の地とされているのである。

調査前は背後の山も含めて一帯が柑橘類（おもに温州蜜柑とカボス）の畑で、石灰石で積まれた石垣が堤防と折り重なっていた。このような柑橘類の栽培は明治中期に始まったもので、山の斜面は段々畑に変えられ、大きく景観が変化した。そのような中で、調査区は比較的広い平地を有していた。このことは、本文中でも述べるが、中世の造成が大きく係わりを持っていたと思われる。この比較的広い平地地周辺からは瓦が多量に出土し、さらに石塔も多く、地元では「朝日寺」と呼ばれる寺院が過去に存在したと言われていた。



第3図 津久見地域の遺跡 (S=1/25,000)

遺跡周辺の歴史的状況を見ると、古代以前はほとんどわからないが、中世の津久見は、豊後国の戦国大名であった大友宗麟臨終の地として知られている。その津久見には「津久見衆」と呼ばれる水軍が大友勢力の一部として様々な合戦で活躍した事は断片的に知る事が出来るが、文書史料の残存が少なく、実態の解明されていないことが多い。今回の調査では中世の遺跡が確認されており、その意味で津久見の中世史解明に寄与するところが大きいと思われる。

## 2) 調査の概要

調査は、東九州道自動車の津久見-佐伯間の「津久見トンネル」津久見側人口部周辺で行った。工事によって削平を受ける部分にトレンチを設定し掘り下げを行ったところ、幾つかのトレンチで中世の瓦や陶磁器が出土した事から、平坦面を中心として調査区を設定し、発掘調査を行う事となった。調査区は調査以前の期の区画に合わせて3ヶ所に設定した。それぞれを第1地点、第2地点、第3地点と呼んだ。

第1地点は、地元では「木堂」があったと言われていた場所で、最も広い平坦地(約1,000㎡)があり、その内削平される約800㎡と、東側にある谷の斜面部約100㎡を調査した。平坦地は蜜柑畑で閉型を受けており、さらに植栽時の一辺1m弱の方形の穴や、スプリンクラーの埋設溝が至る所で見られるなど、遺構の残存状況は良くなかった。明確に中世の遺構と判断されたものは、溝1条(SD-1)と土坑など14基(S-1~S-14)、100基近くのピットである。土坑などの中で明確に性格のわかるものはS-4の池である。さらに、S-13とS-14は一辺約1mの方形で、底と側壁が焼けて硬化した「窯」状のものであった。用途は不明である。さらに、平坦地から東側の谷に向かって傾斜する斜面部においては、多量の瓦が出土した(「斜面瓦包含層」と呼称)。これらのことから、平坦地には瓦葺き建物が建っていた事が明らかになったが、礎石は確認できなかった。

第2地点は、第1地点と谷(溪流)を挟んで東側に位置し、尾根を削平し小さな平坦面を作り出した場所に当たる。平坦地の面積は約100㎡である。表面に瓦片が散乱していた事から掘り下げたところ、遺構は全く確認できなかったが、炭の屑とともに計20枚の銅銭が出土した。

第3地点は、谷の頂点に当たる部分で、第1地点と第2地点を結ぶような位置に当たる。ここは「崖裡」があったと言われていた場所で、山裾には井戸があった。約500㎡の平坦地があり、その約半分が削平される事になっていたが、掘り下げを行ったところ遺構は確認できなかった。また遺物の出土もほとんど無かった。

このように、門前遺跡は弥生時代の遺跡として周知されていたが、今回の調査地点では中世の寺院に係わる遺構や遺物が確認された。

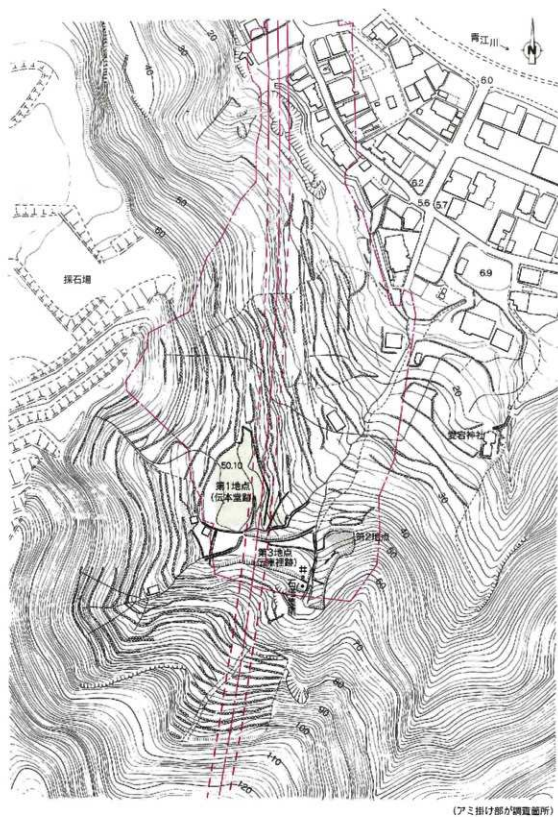
## 第2節 遺構と遺物

### 1) 第1地点

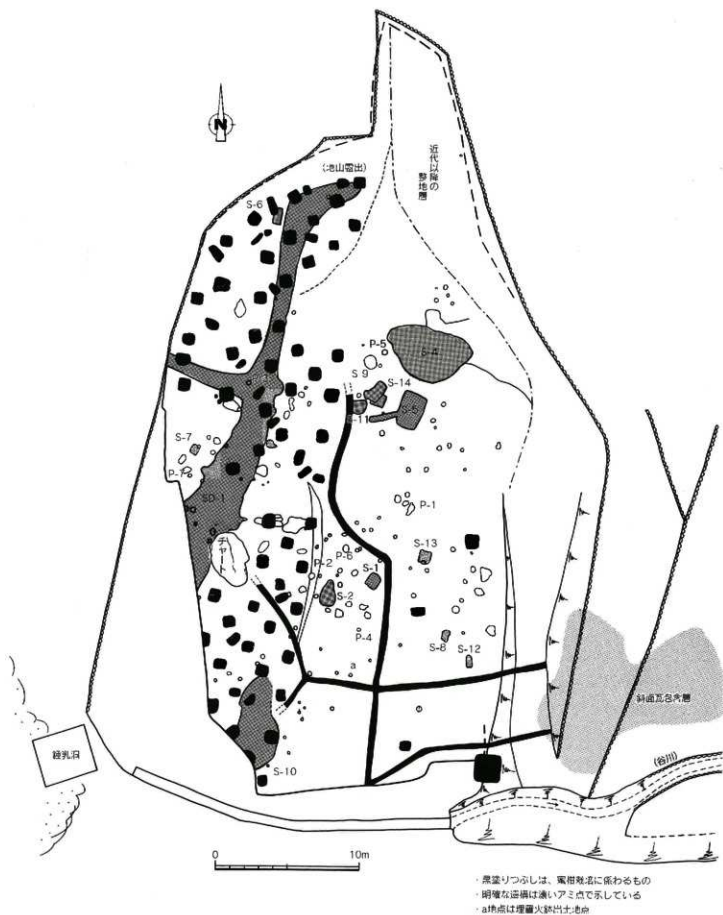
第1地点では、平坦面800㎡と斜面100㎡の計900㎡の調査を行った。第5図のように調査区西側では、柑橘類の栽培に伴う穴(一辺約1mで深さ約50cm)が全面に広がり、さらに調査区南側ではスプリンクラーの埋設溝が走っているため、遺構の残存状況は良くない。さらに、センクションAとB(第40図)でわかるように、平坦地の東側は蜜柑園造成のためと思われる整地層があり、平坦地が谷に向かって拡張されている。このことは、山際を削り込むと同時に、本来の平坦地を削平して土壌を確保したことを窺わせ、その結果中世の生活面が削平を受けることとなったものと思われる。

検出された遺構はSD-1とS-1から14、さらに100基ほどのピットである。ピットから建物を復元する事は出来なかったため、瓦葺きであることから礎石建物が想定される。しかし、礎石は削平を受けていたため検出できなかった。以下、遺構毎に状況と出土遺物について述べていきたい。





第4図 遺跡周辺の地形と調査箇所 (S=1/2,000)



第5図 第1地点遺構配置図

## a. 溝

## SD-1 (第6図)

平坦面の山際に沿って南北方向に伸びる溝である。最大幅2.5m、深さは50cm、検出された長さは26mである。溝は北側で地形に合わせて(調査区の北側は西側から延びてくる尾根で高くなっている)東側に屈曲し、浅くなって終わる。南側は、チャートの露頭のあたりで浅くなって消滅する。調査区はほぼ中央部では、西側に直角に曲がる溝が伸びる。この溝と接続点から北側に伸びる溝で囲まれた区域にはほとんど遺構が無く、ある時期まで山の斜面であったことを窺わせる。

溝埋土には、特に南側で炭化物と共に焼土が多量に見られた。

遺物は第7図1から第10図41がSD-1出土遺物である。SD-1は浅く、層的に分離することが出来なかったため、以下は一括資料である。

1から4は素焼き土器。1と2は土器坏で、口縁端部を小さく積み上げることが特徴である。3は土器小皿。直線的に体部が伸びて、器高が高い。4は体部にロクロ調整痕を残す土器。

5から14までは青磁。5は外面に片切り彫りの無銘蓮弁文を、内面には雷文帯を巡らせる碗。6から8は口縁部が外反する無文の碗。9は内底見込みに花文を描く。高台まで軸がかかり、外底は露胎。10は蓮弁文碗で、蓮弁の下部が高台際まで伸びる。内面には一条の圓線がある。11は香炉で、口縁部は内面に大きく張り出す。口縁部内面まで軸がかかる。12と13は桜花皿で、同一個体と考えられる。口縁部は浅く挟りを入れて桜花にするもので、腰部に線を折り折れる形態となる。外面は圓線状に細い沈線が見られるが無文である。内面は口唇部の桜花に沿って叉状の工具による二条の沈線を入れ、その下にも篋による沈線文を施す。14は皿、または盤の底部で、腰に線を折って折れて立ち上がる。内外面とも無文で、外底面は露胎となる。15は百花の盤で、外面高台に2条、外底部に1条の圓線を有する。内面見込みに草文を描く。

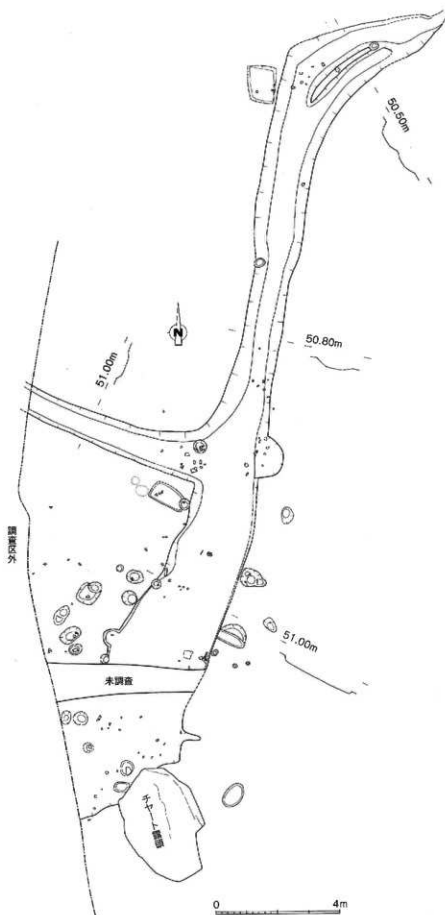
16から25は備前鉢。16から22は裏で、口縁部が直立し断面がやや縦長になるもの(16、21など)と、口縁部が緩やかに外反し玉縁状になるもの(20)がある。23から25は拙鉢である。23は口縁端部がやや上方に積み上げられるが断面三角形形状を呈し、24は口縁端部がやや強く上方に積み出される。26から29は壺である。26の壺は、口縁部と胴部、底部が接合しないが同一個体と考えられる。口縁部と胴部は斜面の互包合唇から出している。口縁部は小さく外側に折れ、短く直立の頸部につながる。胴部は肩が張る。27は口縁部を折り返し、口唇部を広くするもの。28は口唇部を僅かに厚くするもの。

30から33は瓦質土器である。30は断面が半球状を呈する太い突帯を2条巡らせる深鉢タイプの火鉢である。突帯間には菊花文のスタンプ文がある。31は1条の突帯が巡るが、30と同様深鉢タイプの火鉢と考えられる。突帯の上側には菊花文のスタンプ文がある。32は火鉢底部の脚部で、円柱状となる。33は小皿製品の脚部である。色割から132の燗台脚部の可能性もある。

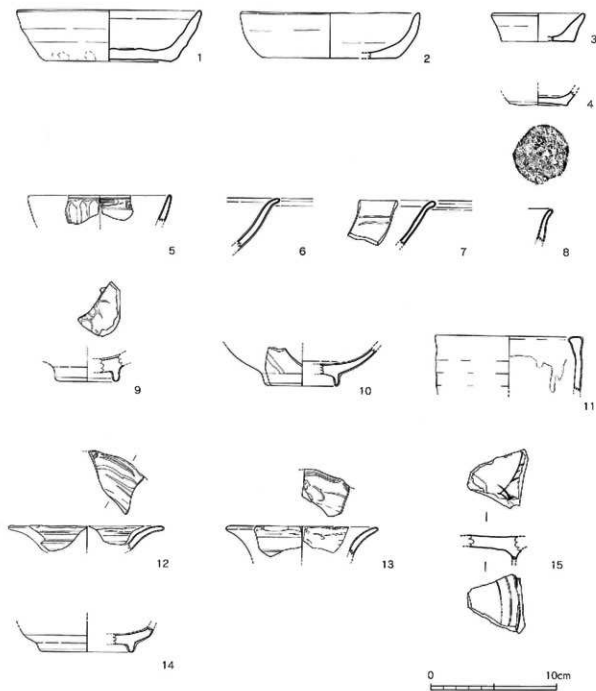
34は古瀬戸の銅皿。35は素焼きの上鉢。36は滑石製の蓋である。片側に斜め方向に穴が貫通している。どのようなものを使用したのかは不明である。

37は鉄製の錠前。大分県内では、古代の錠前の出土例はあるが、中世は初めてである(鎌は大友府内城下町跡から出土している)。横スライド式で、長い弦(カンスキ)が北金具に固定されたいわゆる「海老錠」とされるものである。北金具の筒部の製作方法は、一般例と同様「弦部と筒部の一面を連続して製作し、筒部の3面を「U」字形に造って」いるようである。また、内部の構造について見てみると、バネは二枚で、施錠部のバネ軸金具の先端で折り曲げられているのがわかる。そのバネが、上下にあるバネ受けで止まり、施錠されているのである。これらの諸特徴から、台田氏の分類による北金具「II群c類」、牡金具「A群I類」であることがわかる。

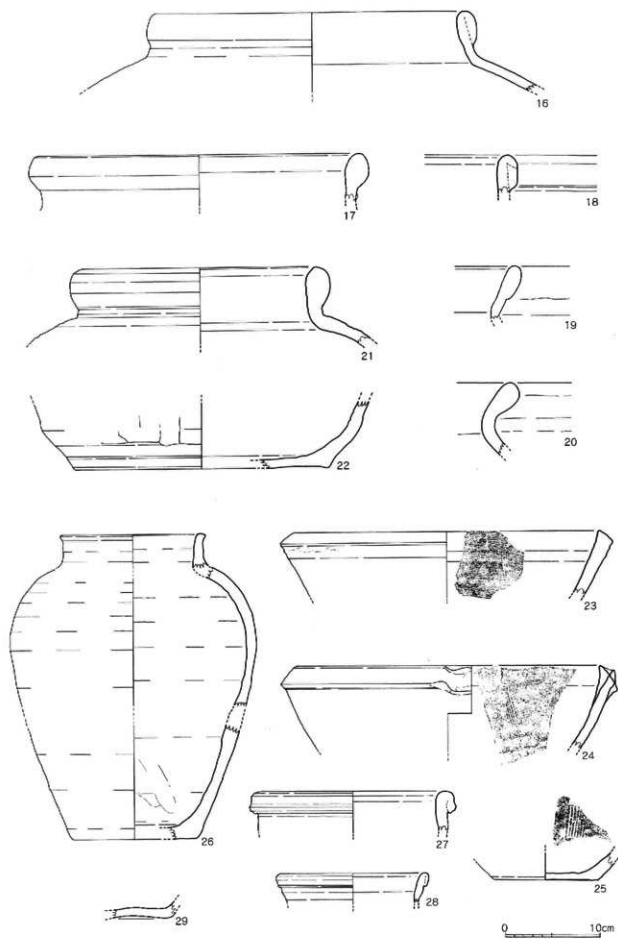
この北金具「II群c類」は、日本では9世紀に出現し、弦が牡金具に固定されるようになる台田氏の「V群」に置き換わり姿を消していく。それは、一乗谷朝倉氏遺跡の有力武將の居住区の井戸から出土した錠前3個がすべて「V群」であったことから、16世紀代には「V群」が出現していた事は確実であるので、門前遺跡の例はそれ以前の15世紀段階では依然として、いわゆる「海老錠」が一般的であったことを示す事例と言える。



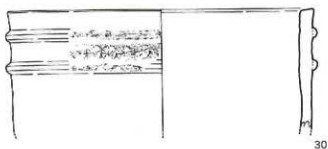
第6图 SD-1实例图



第7圖 SD-1出土遺物(1)



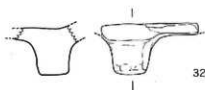
第8図 SD-1出土遺物(2)



30



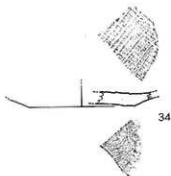
31



32



33



34

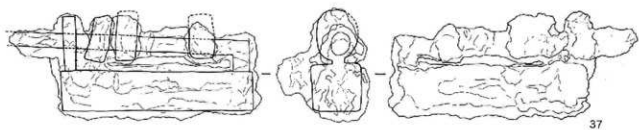


35



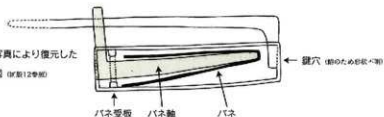
36

0 10cm



37

レントゲン写真により復元した  
内部の模式図 (写真12参照)

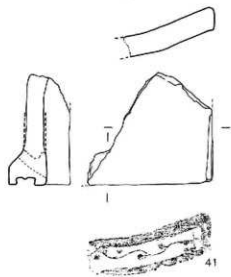
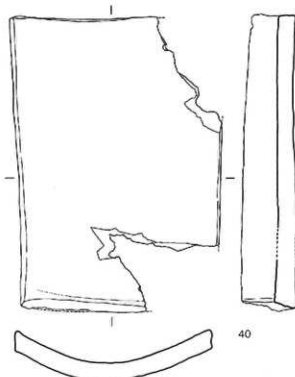
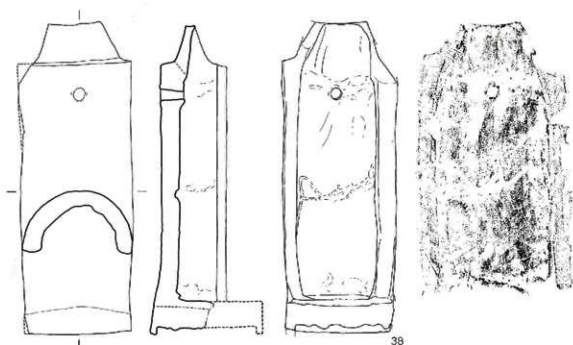


バネ受板 バネ軸 バネ

← 鍵穴 (鎖のため設けられ)

0 10cm

第9図 SD-1出土遺物(3)



第10图 SD-1出土遺物(4)



その中でも、牡金具の弦受け部が短いのは時期を示す特徴の可能性はある。

出土状況を見ると、牡金具と牡金具がかみ合った状態、すなわち施錠された状態で出土している。さらに、弦には錠前を取り付けた対象物に付いていた嵌金具が3つ付いたままであった。つまり、嵌金具の数からして、扉ではなく「箱」状のものに取り付けられていたと考えられ、施錠した「箱」ごと施錠されたか、または金具部分のみが外されるなどして施錠された可能性が考えられる。

38から41は瓦。38は軒丸瓦で、胴部の玉縁寄りに焼成前の釘穴がある。瓦当は左巻き三巴文で、珠文が2-3-2-3と並ぶ2A類である。巴の断面は台形状になる。胴部内面の吊り紐痕は、184、249、322と同じである。39は右巻き三巴文のある1類で、瓦当面に離れ砂がある。瓦当の接合面にはキザミなどは無い。40は2類の軒平瓦で、凸面の頸部と平瓦との接合部に凹型台の圧痕がある。瓦当の接合は瓦当貼り付けである。41は平瓦。

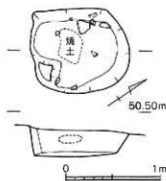
SD-1は溝であるので、やや時期幅のある遺物が出土しているが、基本的には1から3の土器や5の甬文帯を有する碗や12、13の桜花皿などの青磁、備前焼の甕や播鉢などから15世紀前半代の遺物が主体を占め、そこに15世紀後半代から16世紀前半葉の土器4、16世紀代の青花皿15などが加わる。よって、SD-1が機能していた時期は15世紀前半代で、その後16世紀にかけて埋没する途中で遺物が混入したといえることができる。

#### b. 土坑ほか

##### S-1 (第11図)

調査区中央やや南寄りで見出された。東西1.05m、南北0.9mの隅丸の方形を呈する。深さは約30cmで、埋土中に焼けた壁土状のものが出土した。後述のS-13の炉架の可能性はある。

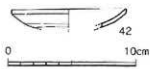
ここからは浮いた状態で遺物が出土しているが、図示できるのはひとつだけである。第12図42は白磁の皿で、口縁部が直口し頸部で僅かに上方に伸びる。これは決りの入る高台を持つタイプの森田編年D群の小皿である。



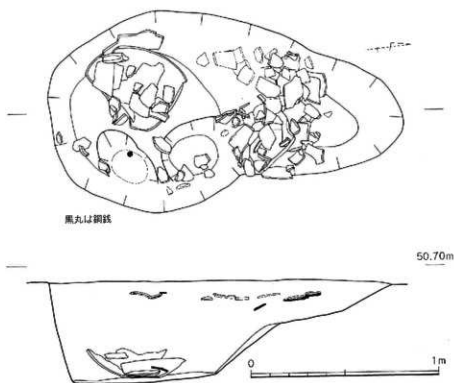
第11図 S-1実測図

##### S-2 (第13図)

調査区中央からやや南西寄りで見出された。南北方向に1.9m、東西最大で1.05mの略楕円形を呈する土坑である。断面図からわかるように、南側が深く50cm程であるのに対して、北側は約10cmほどである。掘り下げを行うと、まず北側に集中して瓦片や瓦質土器、備前焼甕の破片が出土した。これらを取り除くと南側が一段深くになっているのがわかり、さらに掘り下げると備前焼甕の底部が掘えられた状態で出土した。甕の底には大きな鉄製品が錆び付いた状態で出土した。上半部は口縁部の小破片を除いては見つからなかったが、約11m離れたS-12から口縁部が出土し接合している。よって、本来は南側半分ほどの大きさの土坑に鉄製品を入れた甕を埋置したものと考えられ、それが何らかの理由で上半部が破壊されたものであろう。上層断面図を作成しなかったのがわからないが、楕円形に見えた土坑は本来の甕を埋置した円形の土坑を破壊するように拡張されたものである可能性がある。その際に埋められた中に入っていたのが、最初に検出された遺物群であろう。



第12図 S-1出土遺物



第13図 S-2実測図

出土遺物は第14図43から第15図53である。43と44は備前焼甕で、同一個体であるが胴部と半部は接合しなかった。口縁部はやや縦長の玉縁状になり、緩やかに外反する。

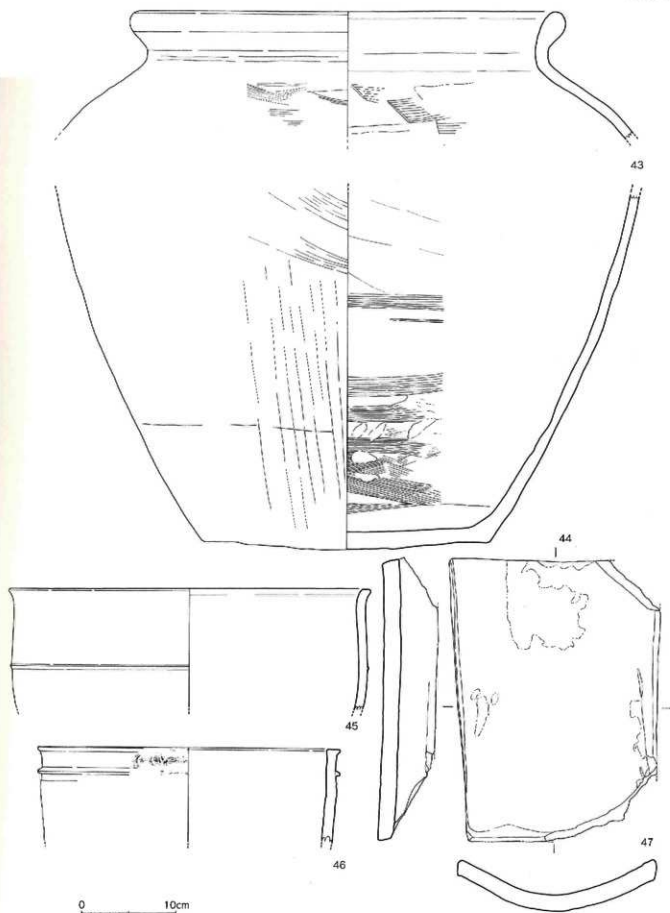
45と46は瓦質土器火鉢である。45は口縁部が緩やかに大きく外反するもので、胴部最大径の所に幅の狭い突帯を巡らせる。46は口唇部を断面三角形形状に外に突出させ、その下に一条の突帯を有するもので、突帯と口唇部の間に菊花文のスタンプ文がある。

47は平瓦である。

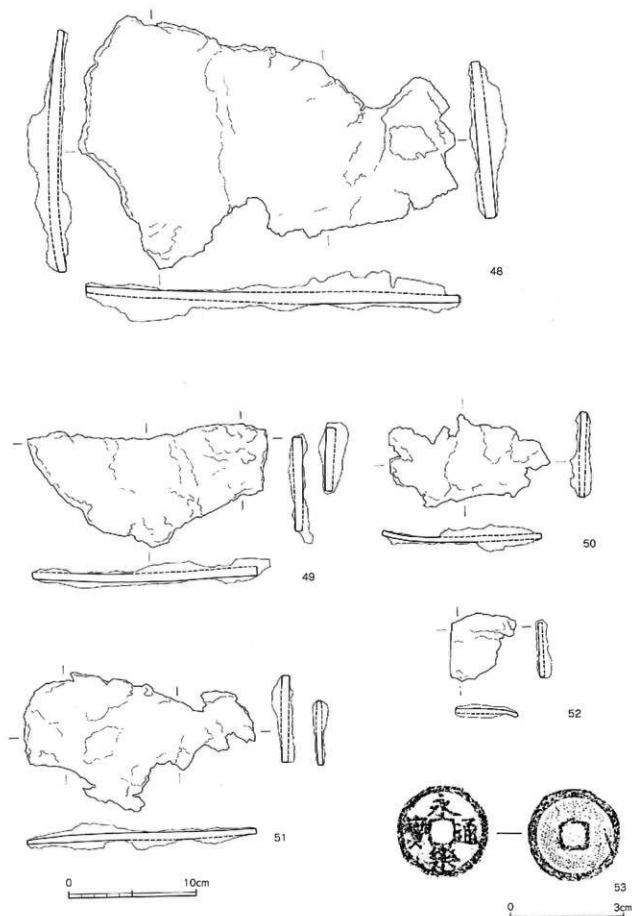
48から52は鉄器で、44の備前焼甕の底に置かれた状態で出土した。錆化が激しく、レントゲン撮影でも形状は不明であった。48の横断面がやや湾曲することから、鑊状のものであった可能性がある。他は48に乗った状態で出土した事から、本米2個体のものが入れられていたと考えられる。

53は永楽通宝である。ただし、出土状態から本来的にS-2に含まれていたものではなく、S-2が掘り返された際に出来たと考えられるピットからの出土である。

S-2の時期は、埋置されていた備前焼甕で決まる。甕は享和四年中世3期aのもので、14世紀後半代である。遺構は後に破壊されており、その際に混入したと思われる遺物が45と46の瓦質土器火鉢、47の平瓦と53の永楽通宝である。その時期は瓦質土器火鉢から見て15世紀前半代と考えられ、永楽通宝の時期と矛盾しない。



第14図 S-2出土遺物(1)



第15図 S-2出土遺物(2)

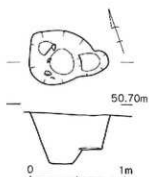
## S-3 (第16回)

調査区中央やや西寄り、SD-1に接するように検出された。東西80cm、南北60cmの隅丸の方形で、二段掘りとなっている。底付近から2点の土器が出土している。

第17図54と55がS-3出土の上器である。いわゆる京都系土師器とされるもので、手づくねで口縁端部を小さく外反させる。



第17図 S-3出土遺物



第16図 S-3実測図

## S-4 (第18回)

調査区中央からやや北寄りで確認された大型の土坑である。東西10m、南北3.5mで、深さは0.8m程ある。両側の縁には、岡のように検出面から2段ほど石積みが見られたが、壁の半分から下側には認められなかった。その石列は土坑の東側ではほぼ直角に折れ、疎らになって斜面に続いている。

埋土は土坑の底近くでは灰褐色を呈しており、還元状態になっていたことから、この大型土坑は水が滞留していた池と考えられる。

第19図56から第20図76がS-4出土遺物。56と57は京都系土師器。手づくねで、口縁端部を小さく外反させる。

58から65は青磁。58は同安窯系の皿。今回の調査で出土した青磁の中で唯一の同安窯系のもので、12世紀後半から13世紀前半代のものである。優品というわけではないので伝世品とも考えがたく、何らかの混入であろう。59は外面に片切り彫りによる無銘連弁文を有するもので、上田分類のB-Ⅱ類である。60は無文の碗の口縁部。口唇部はやや玉縁状にふくらむ。61は大型の無文の碗で、高台部唇付の輪を削り取る。62は内面見込みに花文?を描く。63は盤、または皿で、腰の部分が緩やかに屈曲している。内面に片切り彫りで円文状の文様を描く。64は鈎縁の盤で、端部を上方に拗み上げる。出土部位では無文である。65は鈎縁の後花盤で、口縁部には4条の鋸状工具による沈線が巡る。また、体部は丸ヘラ状の工具で縦方向に窪ませている。66は青花で、小野編年のB群の碗である。上部に二重の回線を彫り、下部に唐草文を描く。67は、小野編年の青花皿C群で、口縁部内面に二条の回線を、外面に波濤文帯を描く。唇部底になるものである。

68は古瀬戸の縁折皿の口縁部で、折れた口縁部の上面に、一条の突帯が巡る。69も同じく古瀬戸で、接合しないうち68の体部になると思われる。そうすると、縁折深皿になるものと考えられる。なお、底部は胎土、色調から表土出土の350と考えられる。

70と71は備前焼。70は蓋で、折り返して肥厚する口縁部。頸部はくの字形に折れる。71は稲鉢で、口縁部は上方に伸び、やや外反気味になる。

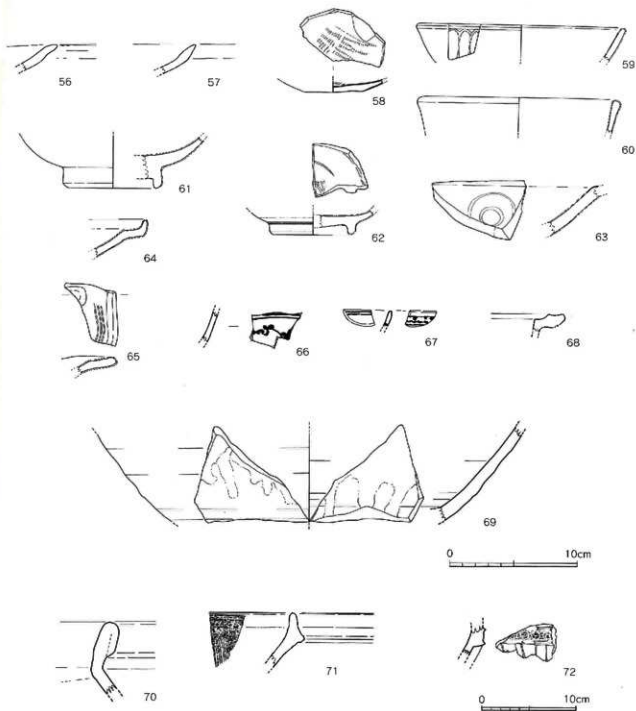
72は瓦質土器の風鈴。横位に二条の細い突帯を巡らせ、その間に花文のスタンプ文がある。また、縦位に三条の突帯が付く。

73から75は瓦。73は左巻き三巴文を有する2B型の瓦当を持ち、先端部分を筒状にする。胴部が無いので葺かれた場所は特定できないが、鳥雲あるいは岡、または拝み川の瓦当である。74は2類の軒平瓦で、両面に一部布目が残る。凸面は一部縦方向に削られている。瓦当の接合法は明瞭に確認できないが、瓦当貼り付けか。75は平瓦である。

76は瓦質の内盤状土製品で、両面に「風鈴」様の線描き文様がある。また、一ヶ所小さな円形の穴が焼成前に



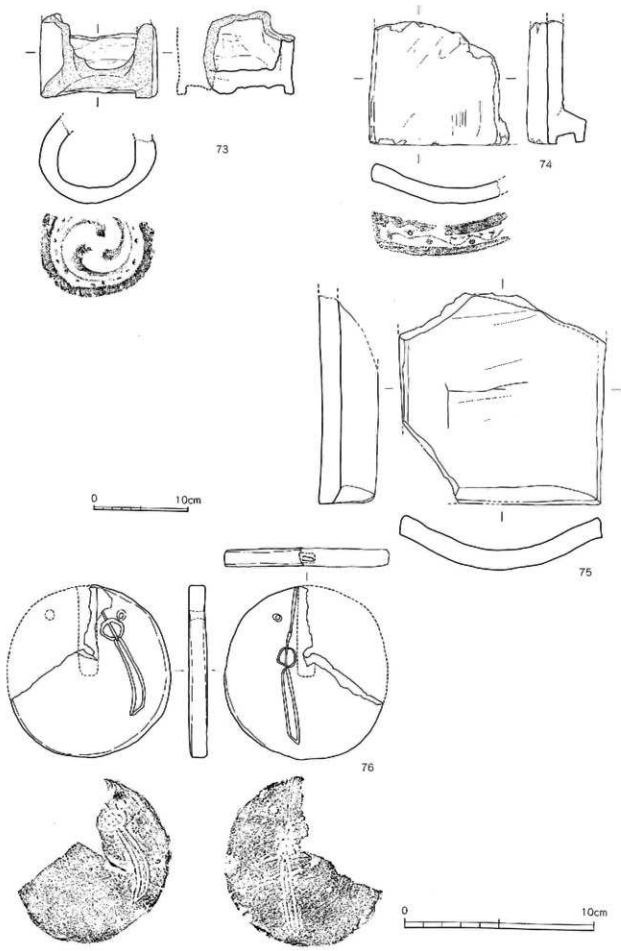
第18圖 S-4実測図



第19図 S-4出土遺物(1)

空けられている。さらに図の上側には、側面から幅7mm、長さ4.6cmほどの板状のものを差し込んでいたと思われる穴がある。用途は不明である。

S-4は池であり、やや時期幅のある遺物が出土している。この状況はSD-1と同様である。まず、主体となる時期は無銘蓮弁文をもつ59の青磁碗や65の桜花盤、66の青花碗で示される15世紀前半代であり、埋没過程でそこに15世紀後半に67の基筒底の皿が加わり、さらに16世紀末葉には56と57の京都系土俵器が入ることになる。



第20圖 S-4出土遺物(2)



## S-5 (第21図)

調査区の中央からやや北側で検出された南北2.4m、東西1.7mのほぼ方形の土坑である。深さは南側の残存状況の良いところで27cmほどである。西側から35cmで、深さ10cmほどの溝が伸びるが、切り合い関係は確認できなかった。土坑のほぼ中央部に大きな石を乱雑に置き、その北側と南側で多くの瓦片と若干の土器が出土している。また、南側の側壁から落ち込むように鉈が出土している。これらはいずれも床面からは浮いており、土坑廃絶時に投棄されたものと思われる。

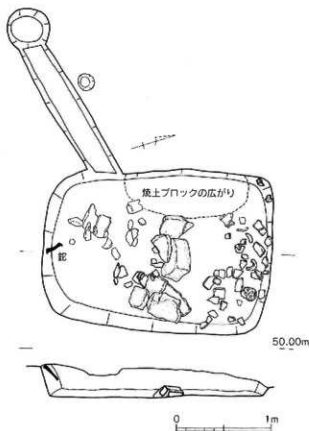
また、西側壁際には焼土のブロックが大量に見られた。

第22図77から82はS-5出土遺物である。77は京都系土師器。78は備前焼の鉢。口縁端部が僅かに上方に伸びるが、断面は三角形状を呈する。

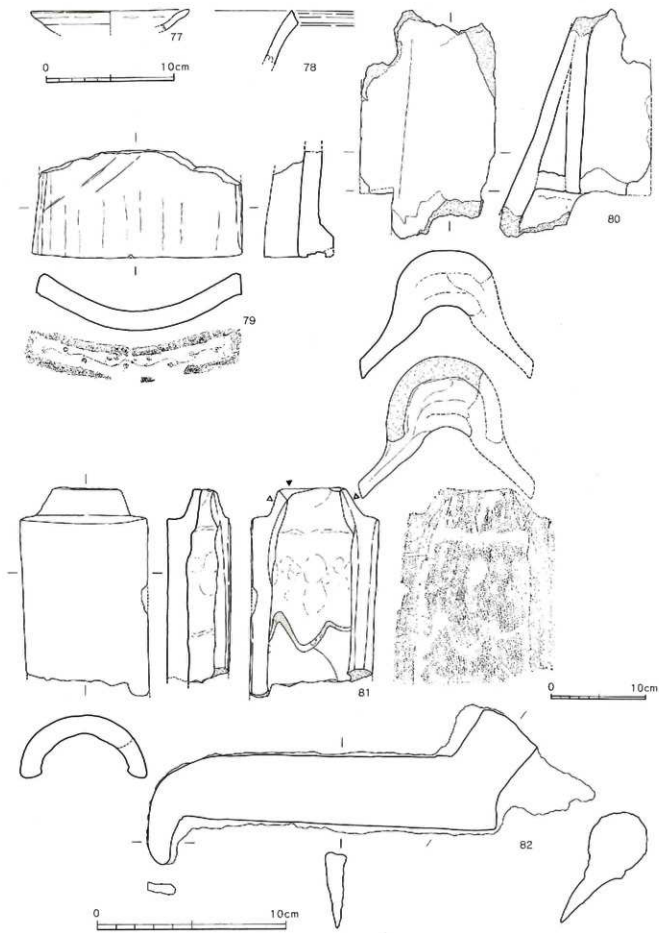
79から81は瓦。79は2類の軒平瓦で、斜面瓦包含層出土のものとは接合した。凹面は縦方向のナデ調整、凸面には離れ砂が認められる。また、頸部と平瓦接合部凸面に凹型台圧痕がある。その圧痕は209、210、213、357と同じである。80は鳥瓮である。雁振瓦に瓦当が付く首部を斜めに重ねながら反りを付けていくが、内部を粘土で充填しないため、内部は空閑になる。81は丸瓦で、凹面中位に吊り紐痕が一条ある。吊り紐は布に隠れている部分と、縄の見えている部分がほぼ1:1の割合である。玉縁凸面伏縁側の両側縁の面取りは僅かで、側部には細かない。

82は鉄製の鉈である。先端部には大きな「鼻」が付き、柄の差し込みとして外付けの「横」を有するタイプである。柄の部分には木質部が残る。

S-5の時期は78の備前焼をとると15世紀前半代であるが、77の京都系土師器が混入でなければ16世紀末まで下る事になる。瓦類は他の瓦と同じものである。



第21図 S-5実測図

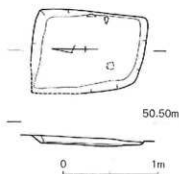


第22圖 S-5出土遺物

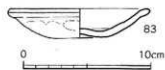
## S-6 (第23図)

調査区北西角付近で検出された南北1.2m、東西0.8mの長方形の上坑である。残存する深さは8cmほどである。北西隅部は蜜柑栽培時の穴によって削られている。

S-6からは図示できるものが1点のみである。第24図83は京都系土師器で、やや器壁が薄く、底部も上げ底状になるなど16世紀中葉頃のものであろう。



第23図 S-6実測図

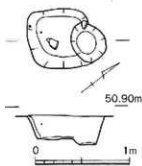


第24図 S-6出土遺物

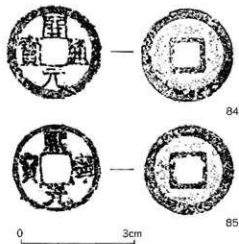
## S-7 (第25図)

調査区中央西側で検出された一辺0.6mの方形を呈する上坑で、深さは約20cmである。北側はピットにより切られている。

S-7からは銅銭が2枚出土している。第26図84は621年初鑄の「開元通寶」で、85は1068年初鑄の「熙寧元寶」である。



第25図 S-7実測図

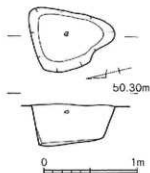


第26図 S-7出土遺物

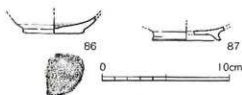
## S-8 (第27図)

調査区中央から南東寄りで検出された南北0.9m、東西0.7mのやや台形を呈する上坑で、深さは40cmある。埋土の上層で第28図86の七器坯と87の上脚買高台付きの碗が出土している。87の碗は高台部が外側にふんばり、ハ字状に開く。

S-8の時期は、86の坯は15世紀代と考えられるが、87の碗は16世紀代の遺跡から出土する例が多いので、16世紀代と考えられる。



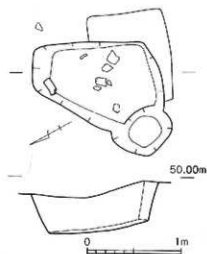
第27図 S-8実測図



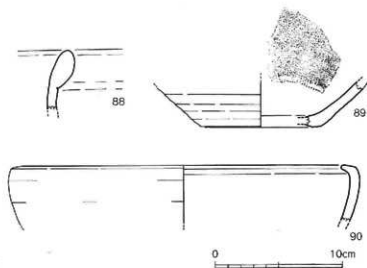
第28図 S-8出土遺物

S-9 (第29図)

調査区中央やや北寄りで検出された南北1.4m、東西0.5~0.9mの台形を呈する土坑である。S-14を切っている。南西隅部はピットによって切られている。深さは40cmほどである。



第29図 S-9実測図



第30図 S-9出土遺物

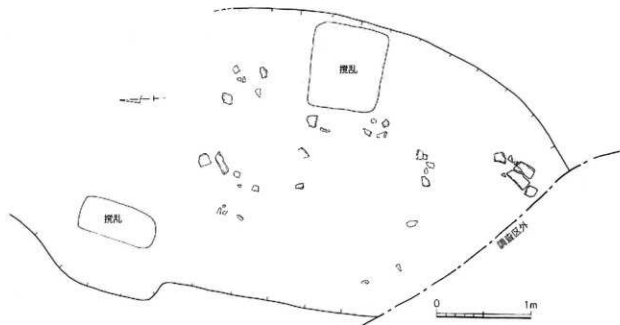
第30図88から90はS-9出土遺物である。88と89は備前焼である。88は甕の口縁部で、断面がやや縦長の楕円形を呈するものである。S-1出土のものと接合した。89は滑鉢の底部である。

90は瓦質土製の浅鉢型の火鉢である。突帯やスタンプ文は無く、無文である。

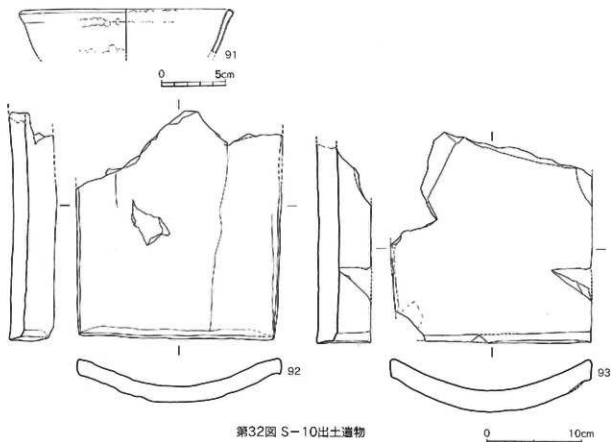
S-9の時期は、15世紀前半代である。

S-10 (第31図)

調査区南西角部で検出されたもので、ごく浅い不定形の土坑である。南北約6m、東西約6mの広がりがあり、深さは5cmから10cmで、ほぼ全面が焼けていたが、特に壁に近い部分は強く赤化していた。瓦などが出土しているが、いずれも火熱を受け、外面が変色している。



第31図 S-10実測図



第32図 S-10出土遺物

第32図91から93はS-10出土遺物である。91は無文の青磁碗で、口縁端部がやや厚くなる。火熱を受けている。

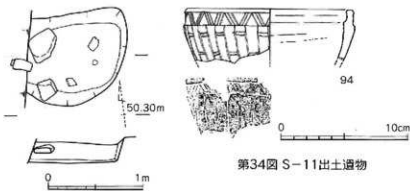
92と93は平瓦である。92には凹面に煤が付着している。

S-10の時期は遺物が少なく確定が難しいが、91の青磁碗が15世紀前半代でも問題ないので、15世紀前半代と考えておきたい。

#### S-11 (第33図)

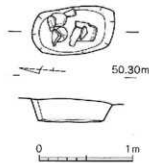
調査区中央やや北寄りで検出された、南北1mで、東西は残存長0.9mの上坑で、深さは約30cmである。西側はスプリンクラーの埋設溝によって破壊されている。

第34図94はS-11出土である。瓦質で、口縁部は内面を強く削り、外面は段を付ける事により揃み上げ状の口縁部を有する鉢状の容器である。直立する口縁部には三条の連続山形文を、体部には梯子状の直線文を線描きする。時期は不明である。



第34図 S-11出土遺物

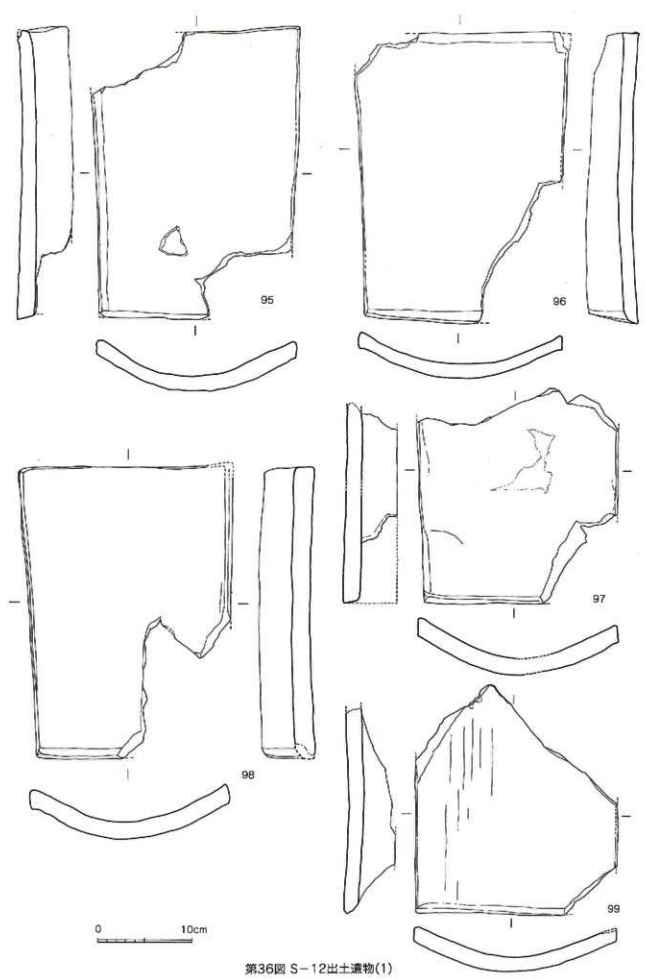
第33図 S-11実測図



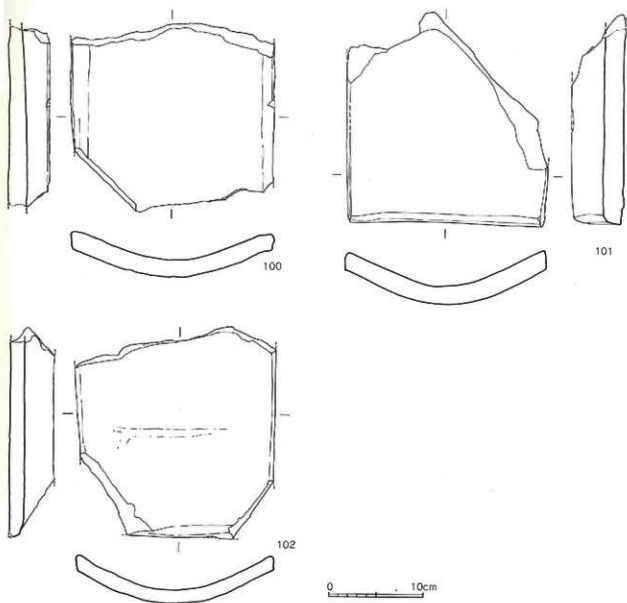
第35図 S-12実測図

#### S-12 (第35図)

調査区南東部で確認された南北0.9mで、東西0.5mの隅丸長方形を呈する上坑である。深さは25cmで、検出面から床面まで平瓦と備前焼甕の口縁部が堆積した状態であった。



第36図 S-12出土遺物(1)



第37図 S-12出土遺物(2)

第36図95から第37図102まではS-12出土遺物で、全て平瓦である。門面狭端部を面取りし、凸面、凹面ともナテ調整を施す。また、S-2出土の備前焼甕の口縁部の大部分は、このS-12から出土した。

S-2出土遺物との接合関係を有する事から、S-2の備前焼甕の破壊と何らかの関係を有する遺構と考えられ、時期的にはS-2が破壊された15世紀前半代と思われる。

### S-13 (第38図)

調査区中央からやや南西で検出された南北0.8m、東西0.7mの角がしっかりしたほぼ方形の土坑で、深さは約10cmである。床面、壁とも強く赤化し、硬化している。床面には炭が見られ、特に北東隅に集中的に見られた。断面図からわかるように、床面からさらに8cmほど下まで暗褐色に変色しており、強い火熱を受けた事がわかる。

遺物の出土はなかった。何らかのものを焼いた「窯」と考えられるが、性格は不明である。



第38図 S-13平面・断面実測図

### S-14 (第39回)

調査区中央からやや北寄りで検出された南北0.8m、東西1.0mの長方形を呈する土坑で、深さは現状で約40cmある。S-9により北西角部を破壊されている。S-13と全く同様のもので、床面には約1cmほどの厚さで炭が堆積しており、床面と壁は赤化していた。

断面図の第2層を掘り込んで、そこに黄色粘質土を充填し、さらにその上部に粘土を貼って床面から壁面を形成している。壁面は床から8~10cm程度しか残存していないが、床面と同様に赤化し硬化している。強い火熱を受けたことが想定でき、「窯」と考えられる。

出土遺物はなく、「窯」で焼かれたものが何かはわからなかった。

なお、S-5の埋土中から多量の焼土ブロックが出土したが、位置関係からこのS-14のものと思われる。



第39回 S-14平面・断面実測図

### c. 斜面瓦包含層

第1地点と第2地点の間には、溪流が流れる幅20mほどの谷がある。その谷に向かって落ちる斜面から多量の瓦類を含む遺物が出土した。出土地点は、平面的には調査区南東部の約100mである。第40図の断面図でわかるように、約20°の角度を持った傾斜面に、厚さ最大で30cmで遺物が堆積していた。本来は平坦面から直ぐに堆積層が始まったと思われるが、後の畑の平坦面造成によって上部が削平を受けた結果長さには12m程となり、傾斜が緩やかになる溪流の手前で薄くなって終わる(第40図参照)。

この瓦包含層の下部は旧表土と思われる暗黄褐色土、その下に平坦地を造成した時に堆積したと思われる礫を多量に含む黄褐色土があり、地山までは掘り下げていない。瓦包含層の上部は、明治以降に相模園の造成に伴って作られたと思われる段々畑の石垣が築かれている。

103から320は斜面瓦包含層出土遺物である。103から106は土器。103は体部下位に屈曲を持つA形式の坏。104は体部にロクロ調整痕を有すB形式の坏、105は体部が直線的に高く伸びるA形式の小皿、106はD形式の京部系土師器である。

107から121は青磁。107は口縁部外面に帯文帯を有する直口口縁の碗、108は内面に花文状のヘラ描き文を持つ口縁部が外反する碗、109は内面に片切り彫りによる花卉状の文様を持つ直口の碗、110と111は口縁部が外反する無文の碗、112は無文で口縁部がやや外反する碗、113は高台皿付を越えて外底面まで輪がかかるが、皿付部分の輪を削り取る碗の底部である。114と115は無文、116は体部内面に7本単位の拂描き直線文を描く鈎縁器である。117は無文の種花皿で、口縁部は緩やかに外反し、腹部でも縁を持たずに緩やかに屈曲する。火熱を受けている。118は緩やかに外反する口縁部を持つ皿。119は肉厚の無縁蓋文を片切り彫りで表現する口折れの皿である。120は直立する頸部に小さく折れる口縁部を持つ小型の鬚台で、体部に破片では2ヶ所に透かし窓が認められる。窓の上部にはハート形の上のような縁を持つ。破片の範囲では無文である。121は香かか器台のような小型品の脚部である。

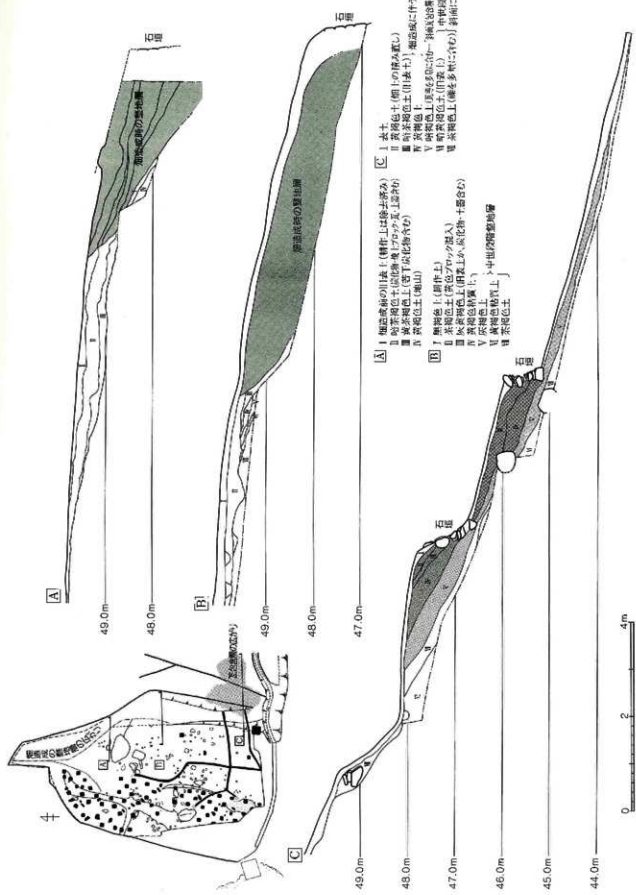
122は白磁の小皿で、口縁部が直口し端部で僅かに上方に伸びる。これは決りの入る高台を持つタイプの森田編年D群の小皿である。

123は青花の碗。磨草文を描く。小野編年の青花碗B群に属する。

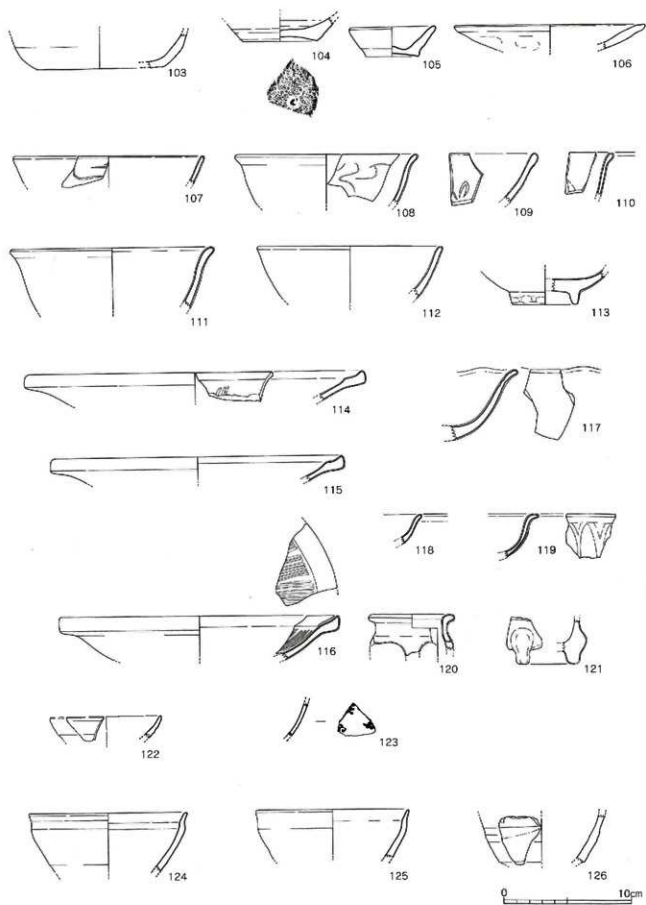
124から126は黒釉の天目碗で、いずれも中国産である。口縁部は一度屈曲して外側に開くものである。



第40図 第1地点斜面断面図



- I 赤土
- II 黄褐色土(細土の層を指し)
- III 黄褐色土(田土)
- IV 灰褐色土
- V 黄褐色土(田土)
- VI 黄褐色土(田土)
- VII 黄褐色土(田土)
- VIII 黄褐色土(田土)
- IX 黄褐色土(田土)
- X 黄褐色土(田土)
- XI 黄褐色土(田土)
- XII 黄褐色土(田土)
- XIII 黄褐色土(田土)
- XIV 黄褐色土(田土)
- XV 黄褐色土(田土)
- XVI 黄褐色土(田土)
- XVII 黄褐色土(田土)
- XVIII 黄褐色土(田土)
- XIX 黄褐色土(田土)
- XX 黄褐色土(田土)
- XXI 黄褐色土(田土)
- XXII 黄褐色土(田土)
- XXIII 黄褐色土(田土)
- XXIV 黄褐色土(田土)
- XXV 黄褐色土(田土)
- XXVI 黄褐色土(田土)
- XXVII 黄褐色土(田土)
- XXVIII 黄褐色土(田土)
- XXIX 黄褐色土(田土)
- XXX 黄褐色土(田土)



第41圖 斜面瓦包舍層出土遺物(1)

127から129は古瀬戸の壺、または甕の肩部である。127は頸部で、現状で2条の櫛描き文が見られる。128と129は肩部に3条の櫛描き文が見られる。

130から132は瓦質上層である。130は黄褐色を呈するが焼成が良好な硬質の瓦質香炉である。現状では1ヶ所しか無いが、3ヶ所に脚が付くと思われる。外面胴部にはへら描きの蓮子文が廻り、裾部には菊花文のスタンプ文が廻る。外面はよく磨かれている。131と132はやや形状が異なるが、皿状の坏部が載る格丁状のスタンプ文を付す短い首部から、筒状に伸びる脚部を有する形の燗台と思われる。門前遺跡ではもう一つ(352)出上しているが、いずれも焼きがややあまく磨きも施されないので、他に県内でも例が無いが在地産と考えられる。

133から143は備前焼である。133から138は甕の口縁部で、断面がやや縦長の楕円形を呈し、ほぼ直立する口縁部から、やや外反気味のものまでである。139は壺の口縁部で、端部が玉縁状になり、僅かに外側に突出する。140は壺の底部と思われる。141は深鉢の口縁部で、上下に伸びて外面に面を形成する。142は深鉢の底部である。8本単位の摺り目を入れる。143は甕の底部か。

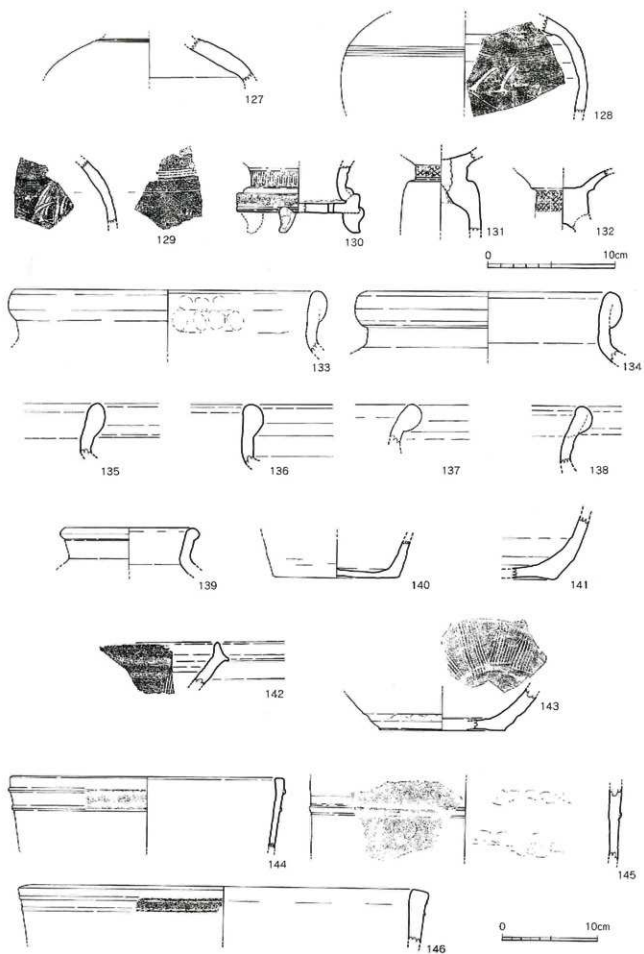
144から161は瓦質上層である。144から153は深鉢タイプの火鉢で、144と146、148は口縁部直下に2条の突帯を付して、その間にスタンプ文を施すもの。147は口唇部に沈線を入れ、口縁直下には細い突帯を貼り付けて、その間にスタンプ文を施すものである。スタンプ文には菊花文(144、147)と、七宝文(148)、雷文(146)がある。145は突帯下位に菊花文を有するもの。169から153は底部で、155以外には突帯が1条廻る。154は火鉢、または風炉の脚部である。155と156は浅鉢タイプの火鉢で、155には突帯間に七宝文のスタンプ文がある。157と158は風炉で、やや内傾する直線的な頸部に、外側に断面三角形状に突出する口縁部をもつもので、頸部にやや大振りの菊花のスタンプ文を施す。159も風炉の口縁部と思われる。やや大振りな二重になった菊花のスタンプ文が施される。160は風炉の底部と思われる。全体が高台状になっている。161は器種不明の口縁部。外反しながら開く。

162から165は底部で、162は須恵質、163と166は土師質、164は瓦質である。

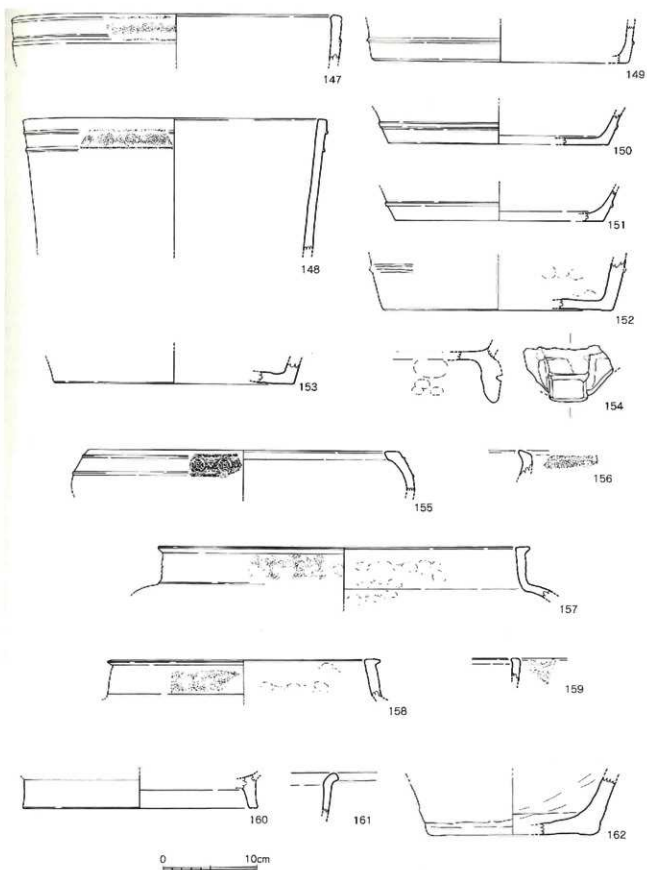
166は瓦質で、土管と思われる。

167と168は鉄製の角釘で、頂部は折って形成している。169は青銅製のもので、頂部まで残る。

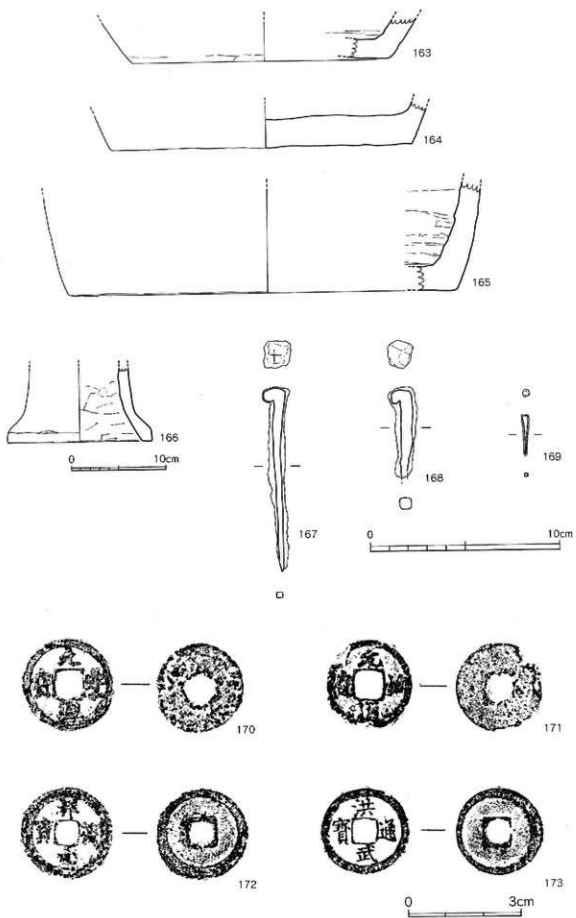
170から173は銅銭である。その内、172は二枚が重なっており、はがすことができなかった。一枚は梓符元貨であった。



第42图 斜面瓦包含层出土遗物(2)



第43圖 斜面瓦、包舎層出土遺物(3)



第44圖 斜面瓦包含層出土遺物(4)

174から192は軒丸瓦である。瓦当文様は右巻き三巴文で珠文の無い1類と、左巻き三巴文で珠文が廻る2類があり、さらに2類は珠文が2-3-2-3-2-3と規則正しく並ぶ2A類と、その間に3個の珠文を彫り加えた2B類がある(第97参照)。174から183は1類で、その内174から179が通常の軒丸瓦で、180から184が烏袋、あるいは隅、または拌み用の瓦当となる。179には剥離しているが、丸瓦部が約6cmほど筒状になる。180と181は筒状にはならないが、瓦当の取り付け角度が鋭角であり、隅か拌み用のものであろう。これらの瓦類は基本的に丸瓦部凸面は樋目タタキの痕跡を縦方向のナデで消している。凹面はコビキ痕の上に布目痕が残る。瓦当と丸瓦との接合面にはキザミなどは認められない。184は瓦当がないが、瓦当部が剥離した痕跡があり、さらに狹端部を両側面から徐々に細く削っているので、183と同様隅か拌み用である。185から192は2類の軒丸瓦である。この内、185から187は通常の軒丸瓦で、188は丸瓦部に筒部を持つ事から隅か拌み用の瓦である。189から192は丸瓦部を短く切り落とした軒丸瓦で、いずれも全長14cmほどである。丸瓦凸面は縦方向にヘラ削りをしている。葺かれた場所は不明である。

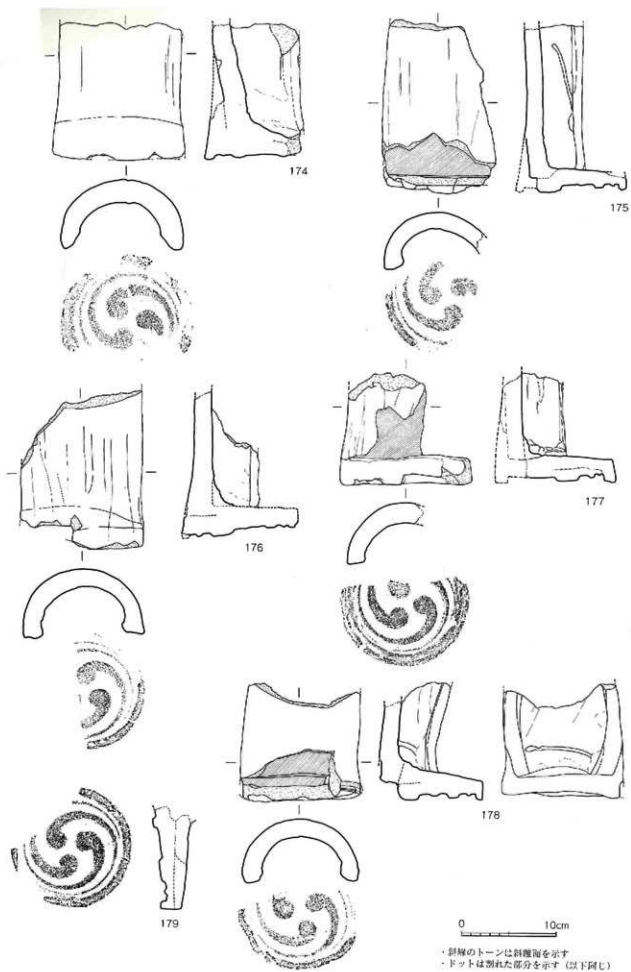
193から221は軒平瓦である。瓦当文様には、上向きに葺が伸びて左右に展開する1類と、下向きに葺が伸びて左右に展開する2類がある。1類は葺の途中に葺の表現があり、2類は子葉の先に珠文を持つ(第98参照)。193から203は1類で204から221が2類である。いずれも同じ範型を用いており、傷も同じである。瓦当の接合は顎貼り付け(198、202など)、文様面・顎貼り付け(211、218など)、瓦当貼り付け(197、208、223など)がある<sup>14)</sup>。これらの違いは平瓦凸面における顎と平瓦との接合角度の違いにも現れる。すなわち、前者はより直角に近いが、後二者は鈍角となっている。平瓦部凸面は基本的に縦方向のナデで、凹面にはコビキ痕が部分的に残り、布目痕も基本的に全ての軒平瓦に認められる。また、凹面には多くに赤褐色の粘土状の痕跡が瓦当に接してコ字状に認められる。葺き上の痕跡と思われ、基本的に痕跡の無い部分が葺き幅、葺き足の長さ(瓦を葺いた時に表面に見えている部分の大きさ)になる。なお、209、210、213の四脚台匠痕は、79、357と同じである。

222から226は切隅瓦である。瓦当が残っているものではいずれも2類である。222には2ヶ所、224と225には1ヶ所の釘穴があげられている。

227から251は丸瓦である。227から229は、玉縁が無くいわゆる行基葺きの丸瓦である。他の丸瓦が凸面の樋目タタキをナデ消しているのに対して、この3点は広端部側をナデ消しているものの、基本的にそのままである。凹面には吊り紐痕が一条ある。特に227の吊り紐痕は233や237と同じものである。よって、これらの瓦は古いものではなく、他の丸瓦と同時期に製作された道具瓦と考えられる。230から251は通常の丸瓦である。玉縁部と胴部に段が生じるものとほとんど生じないものといった差はあるものの、基本的に全て同じ成形、調整であり、時期的な差は認められない。異なる点は凹面の吊り紐痕で、2種認められる。すなわち、幅約6~8mmの紐を下垂させながら差し縫いたものと、幅約1.5cm前後の太い紐を、あまり垂れ下げずに基本的に布の中に入れ込んだもの(232、234、241、246、248)の2種である。後者は帯か、ほとんどが前者である。前者は、布の端への縫い付け方に特徴があるものがある。それは、227、233、237のものと、249のものである。後者は38や184、322と同じになる。しかし、この両者は左右反転の関係にあるので、布の両端に同じように縫い付けられていたのか、または、別の布が使用された時に同じように逆側に縫い付けられたのかどちらかであろう。共通点としては、①凹面の調整は樋目タタキ痕を大部分ナデ消しており、凹面にはコビキ痕が残っている、②玉縁部凸面両側縁の狹端側から小さく面取りをしているが、胴部には届かない、③凹面の両側縁内側の面取りは玉縁部に至るが、外側には削り残しがある、④玉縁部凹面狭端縁は数mmから1cm近い面取りをなすものがほとんどである。広端縁凹面側の削り幅は3から4cm程度である、といった特徴をあげる事が出来る。

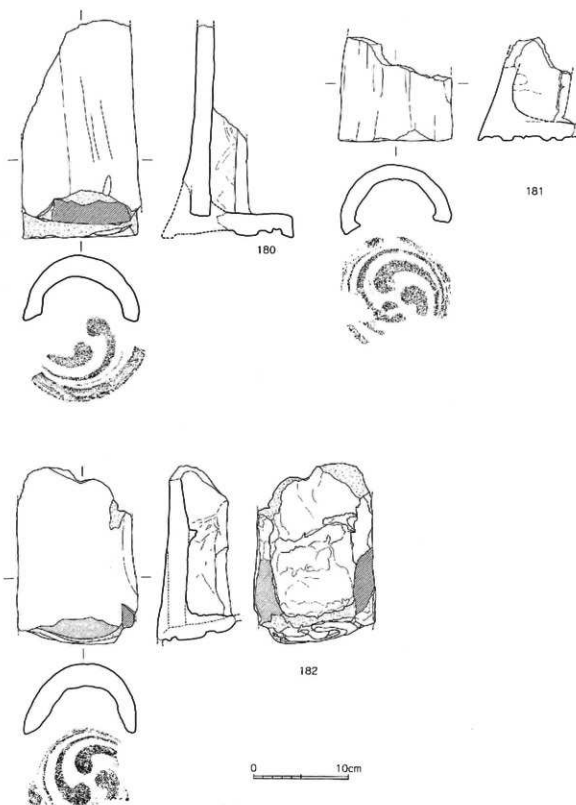
252から271は平瓦である。大きさは平均長さ30.4cm、広端幅22.6cm、狭端幅19.9cmである。凸面には樋目タタキの痕跡を残すものが若干あるが、基本的に縦方向のナデで調整している。凹面は平滑なナデであるが、一部に布目痕を残す。また、軒平瓦と同様葺き上の痕跡と思われるコ字状に赤褐色に変色した部分がある。268から271には方形の釘穴がある。面取りは凹面狭端縁を1cm前後行うのみである。

272から274は面平瓦で、いわゆる蟹面瓦である。丸瓦を切断して作っている。272と273は平面方形であるが、

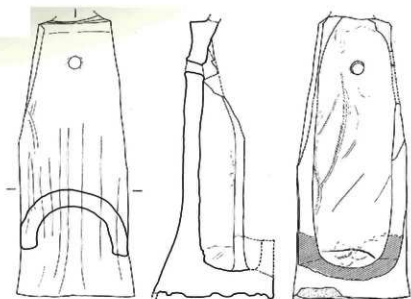


第45図 斜面瓦包含層出土遺物(5)

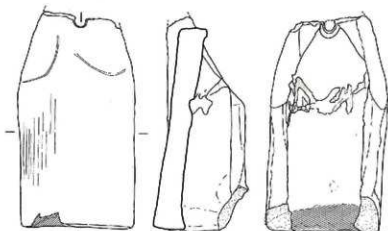




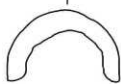
第46図 斜面瓦包舎層出土遺物(6)



183



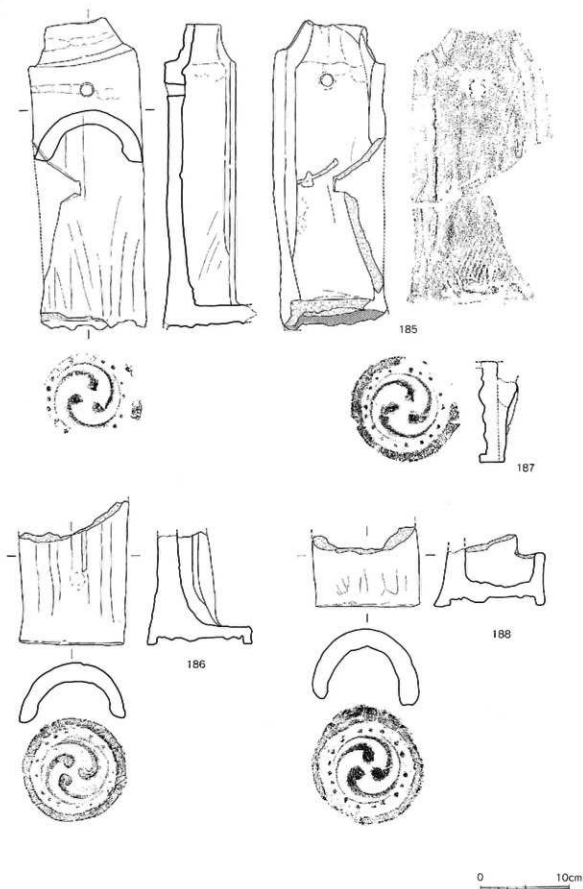
・折り皺のうしろ  
布目が見えている部分は  
ドットのトーンで示す。  
・斜線のトーンは糸織目を示す。



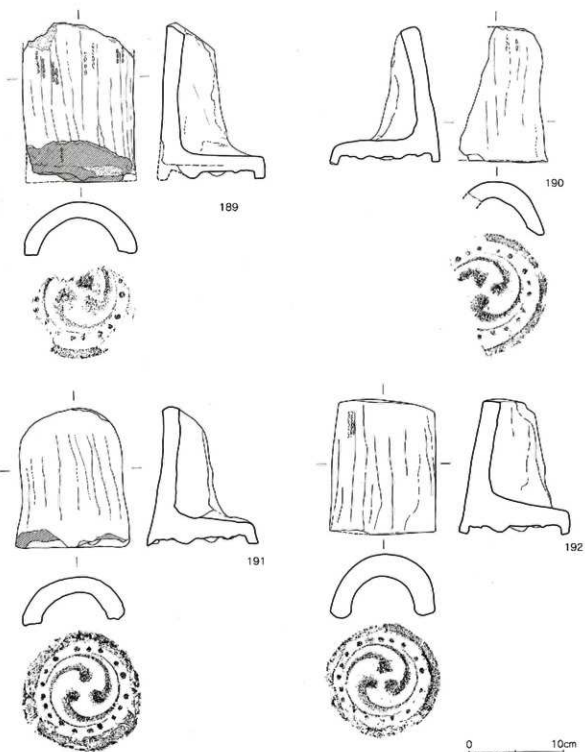
0 10cm

184

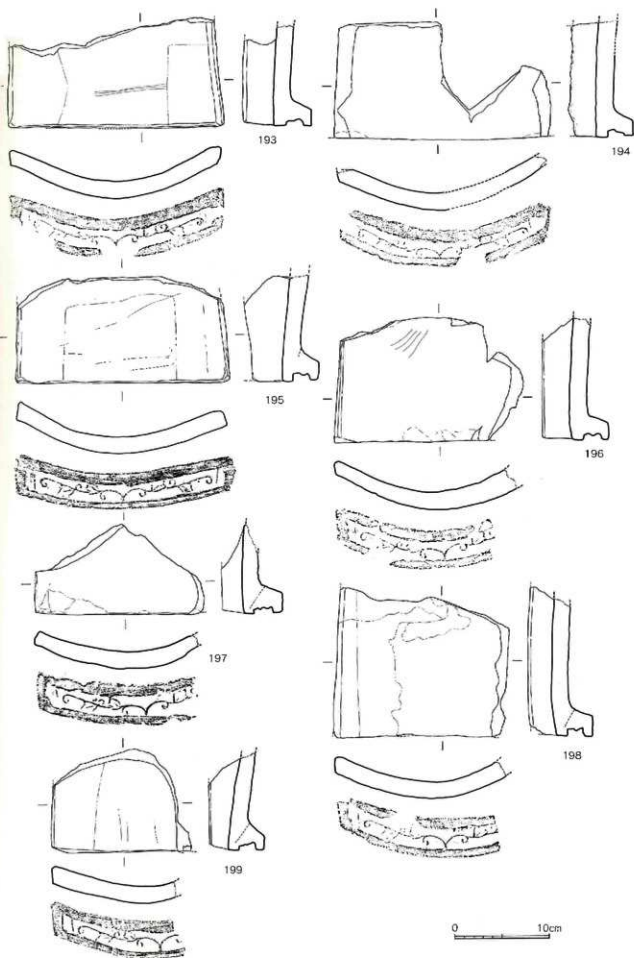
第47図 斜面瓦包含層出土遺物(7)



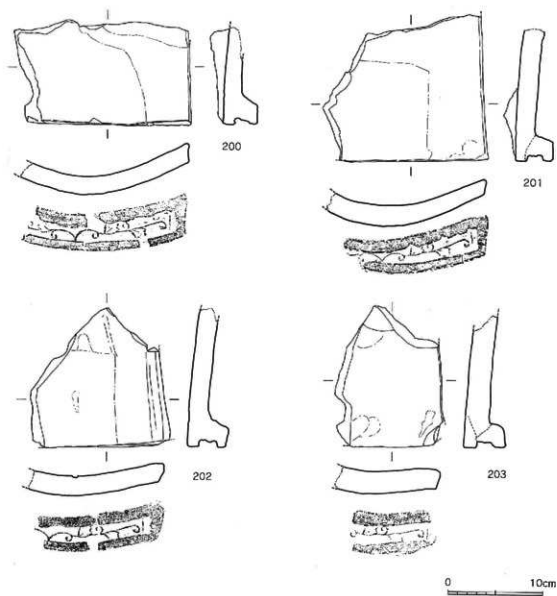
第48図 斜面瓦包舎層出土遺物(8)



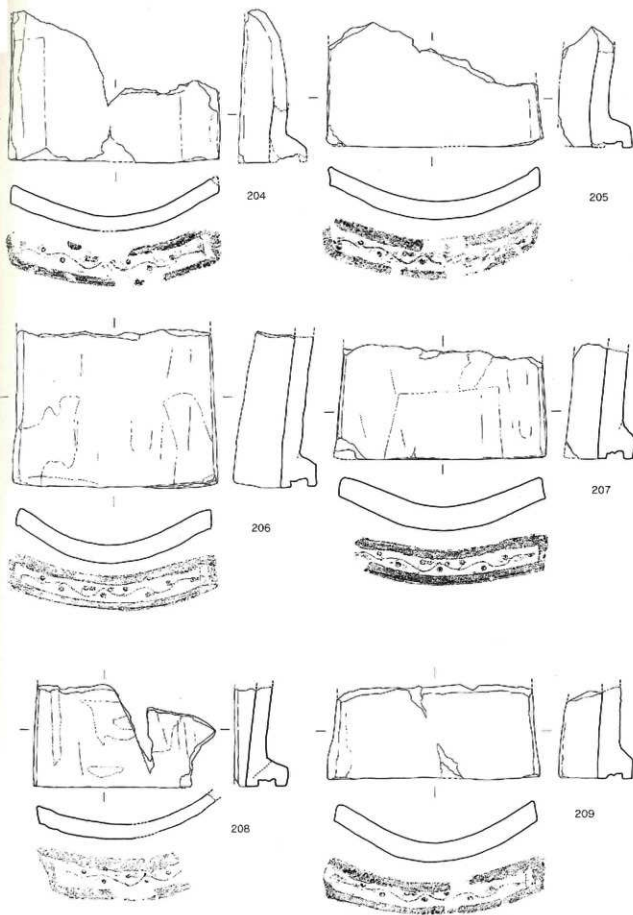
第49图 斜面瓦包舍厝出土遗物(9)



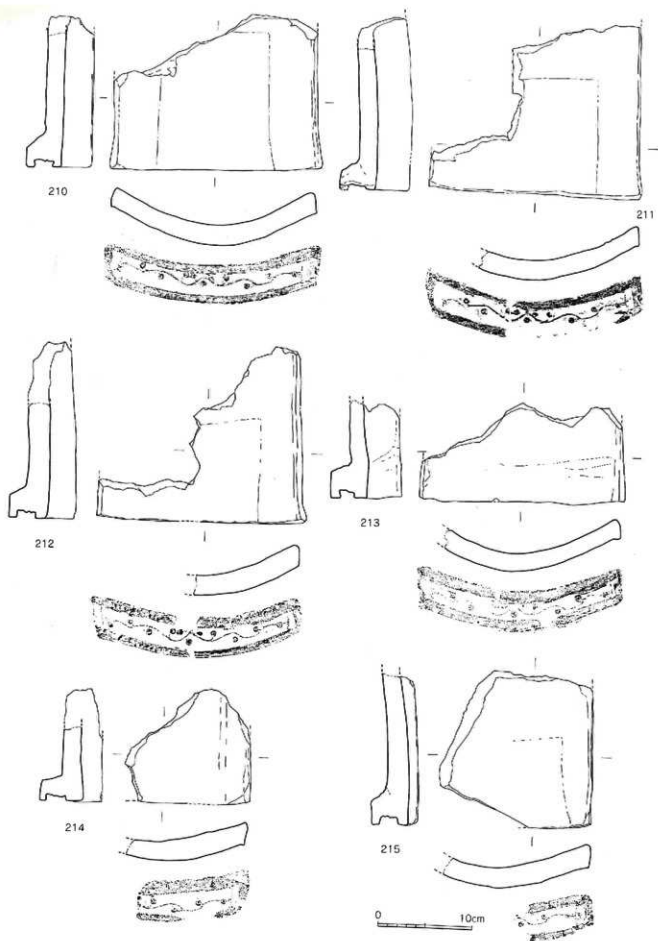
第50図 斜面瓦包舍層出土遺物(10)



第51图 斜面瓦包含層出土遺物(11)

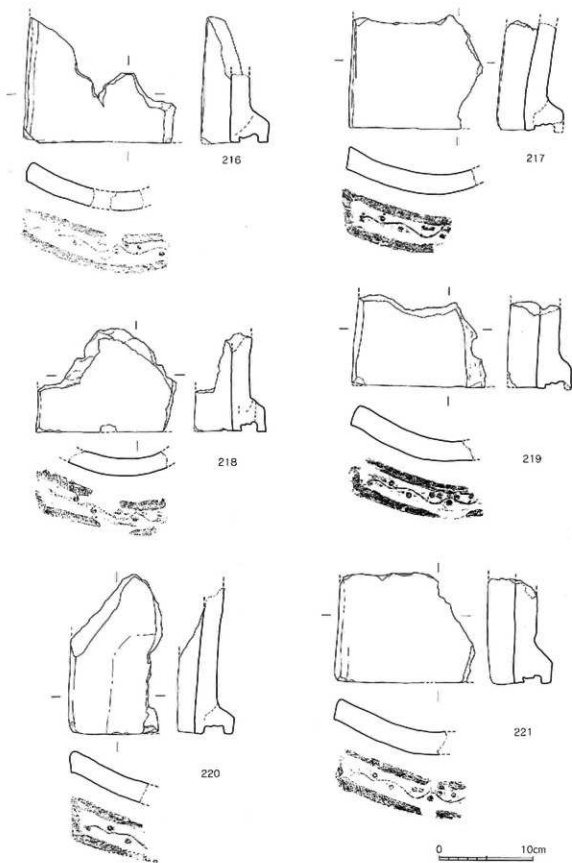


第52図 斜面瓦包含層出土遺物(12)

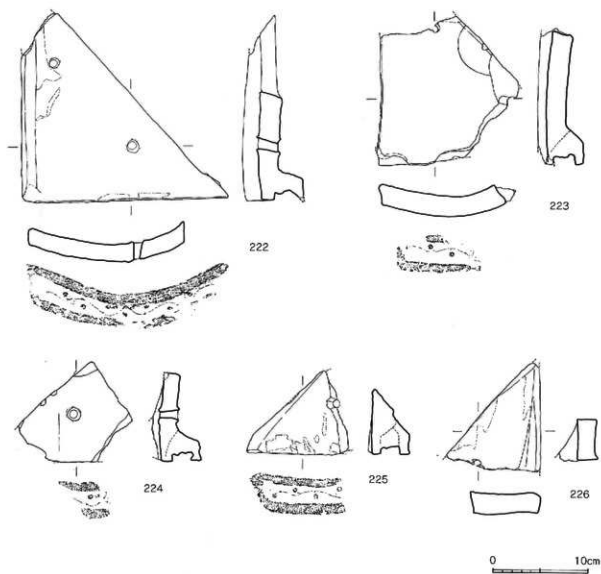


第53圖 斜面瓦包含層出土遺物(13)

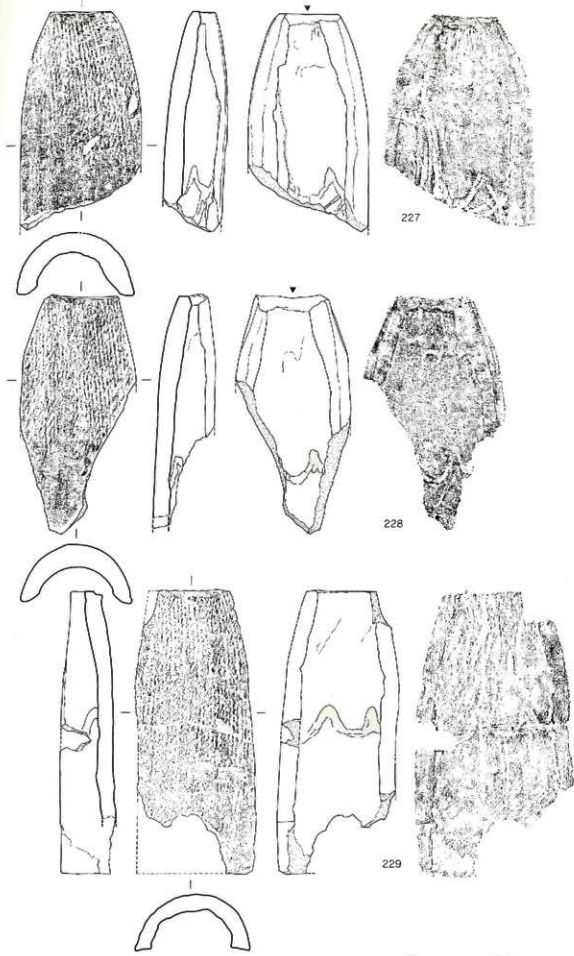




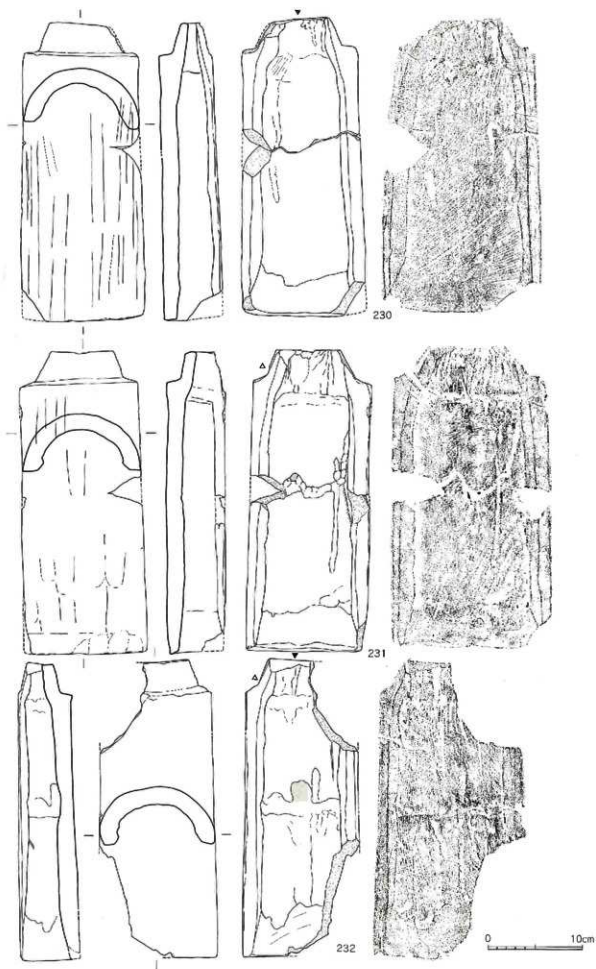
第54図 斜面瓦包含層出土遺物(14)



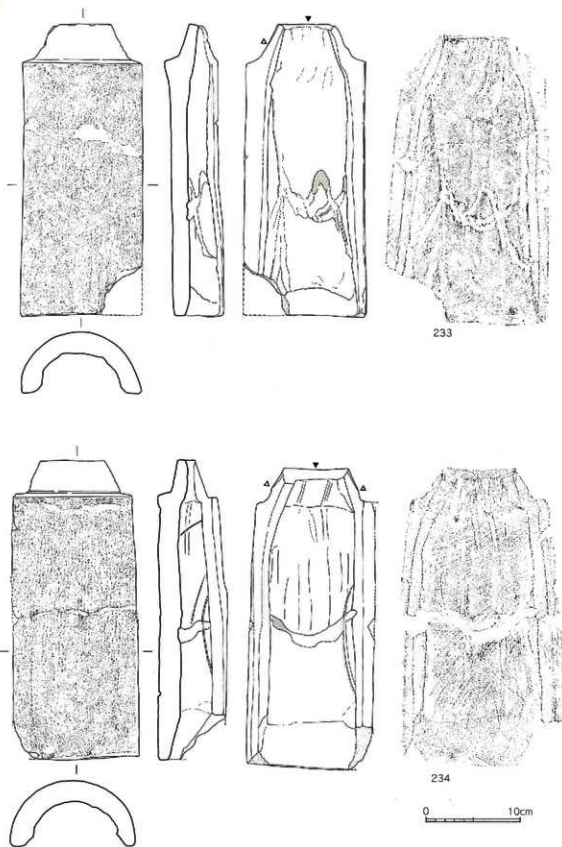
第55圖 斜面瓦包含層出土遺物(15)



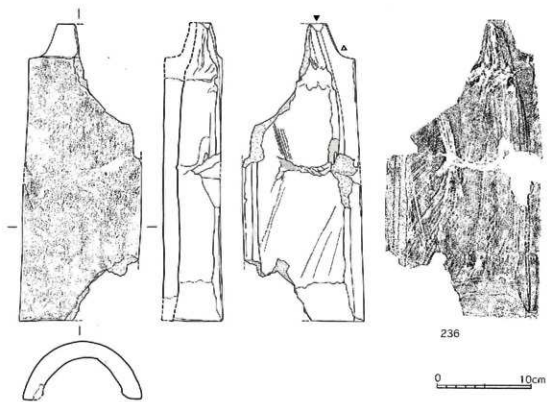
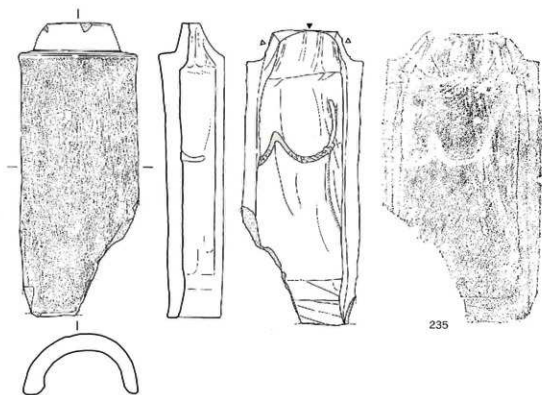
第56圖 斜面瓦包含層出土遺物(16)



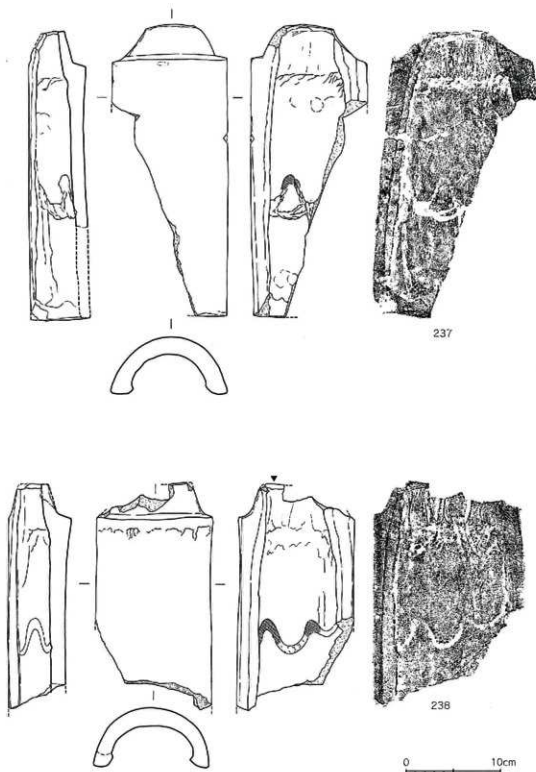
第57图 斜面瓦包舍层出土物(17)



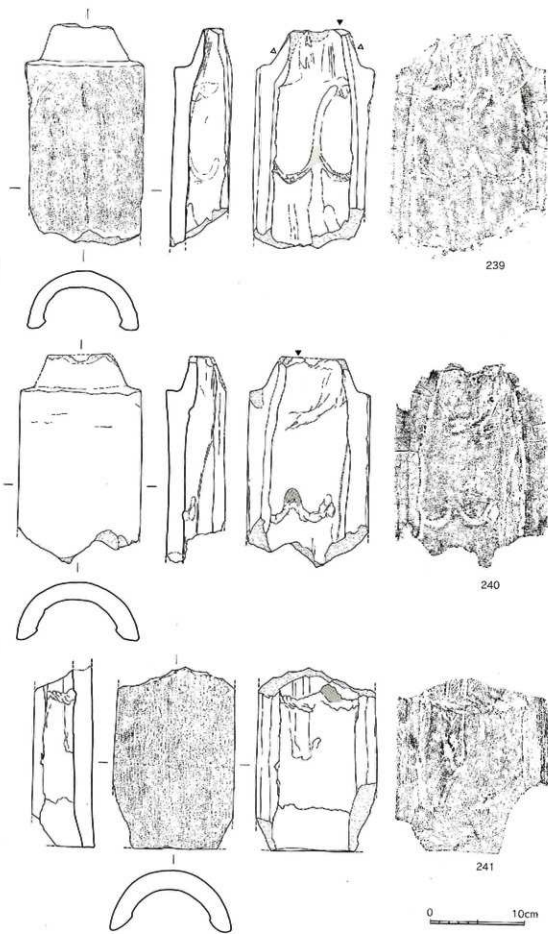
第58回 斜面瓦包含層出土遺物(18)



第59图 斜面瓦包舍层出土遗物(19)

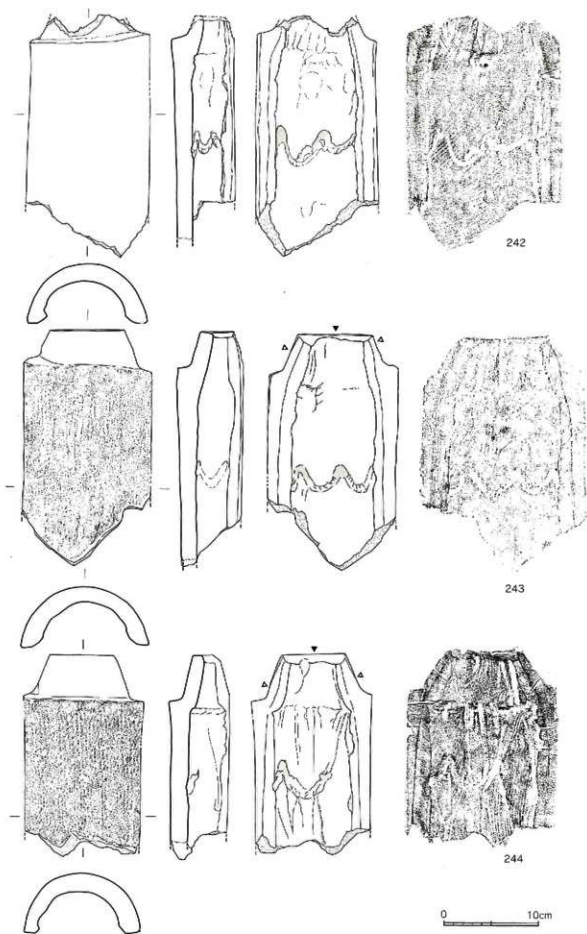


第60圖 斜面瓦包含層出土遺物(20)

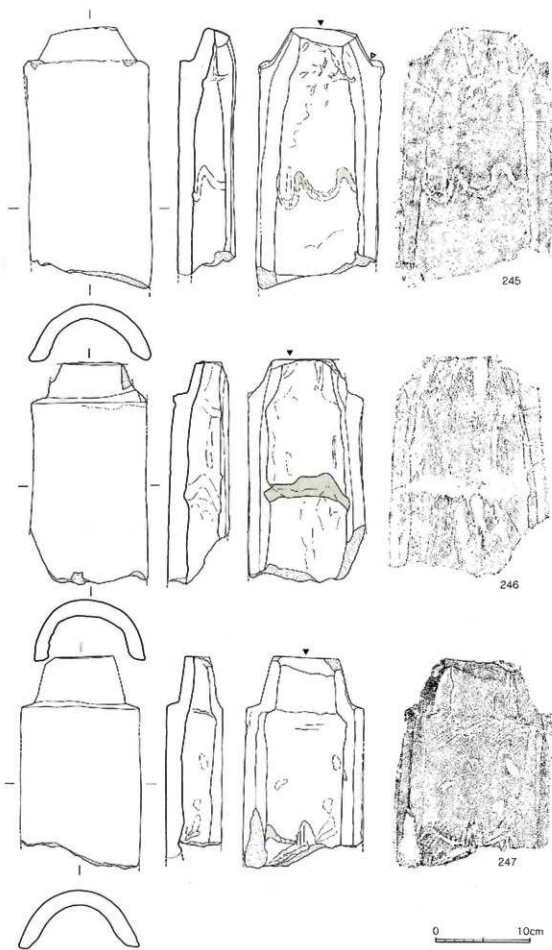


第61圖 斜面瓦包含層出土遺物(21)

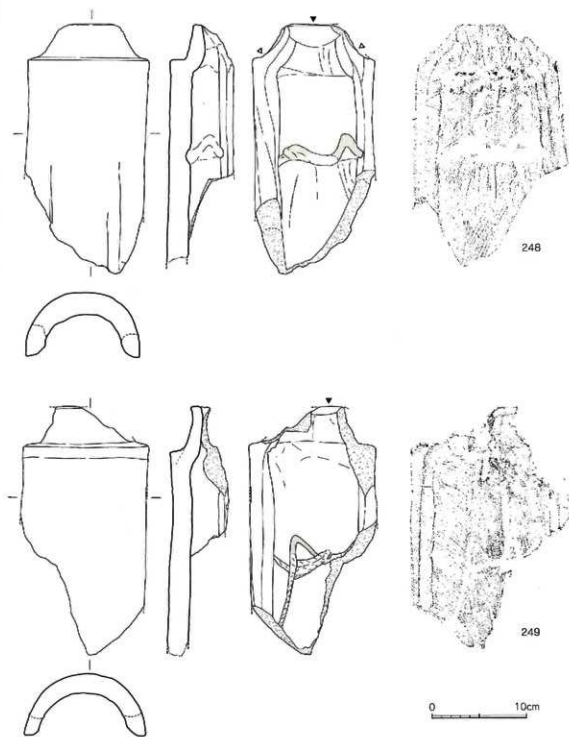




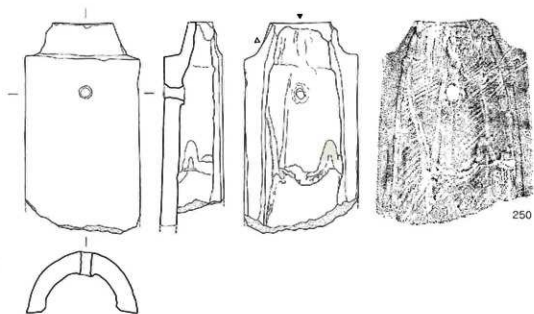
第62図 斜面瓦包含層出土遺物(22)



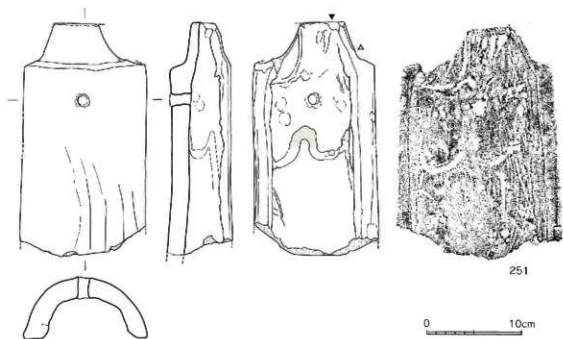
第63图 斜面瓦包含層出土物(23)



第64図 斜面瓦包舎層出土遺物(24)



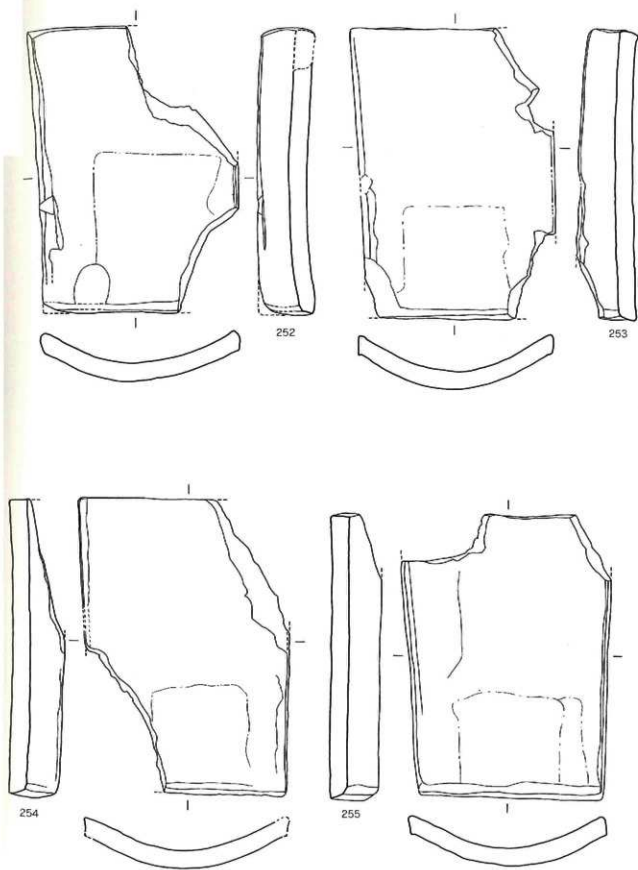
250



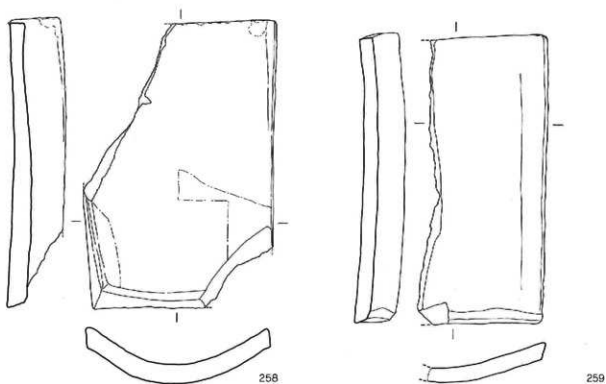
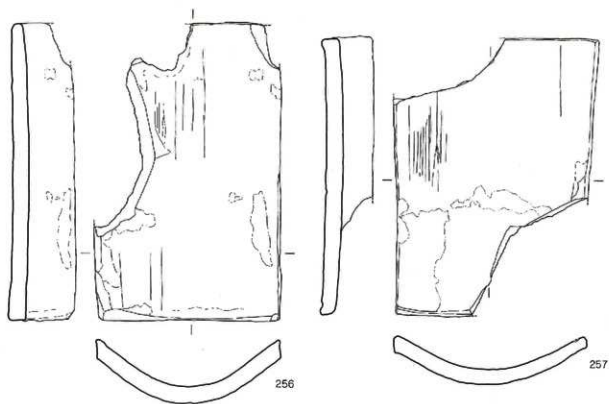
251

0 10cm

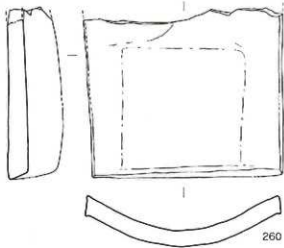
第65图 斜面瓦包舍層出土遺物(25)



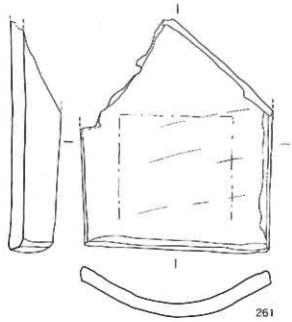
第66図 斜面瓦包舎層出土遺物(26)



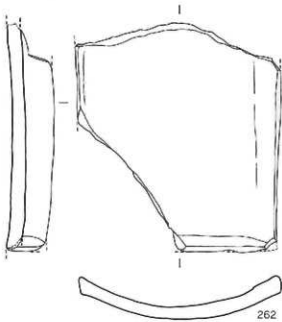
第67図 斜面瓦包舍層出土遺物(27)



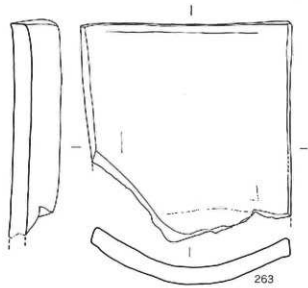
260



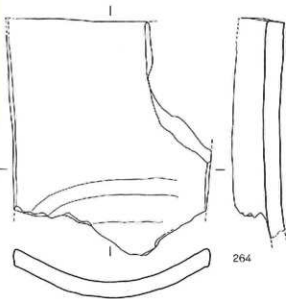
261



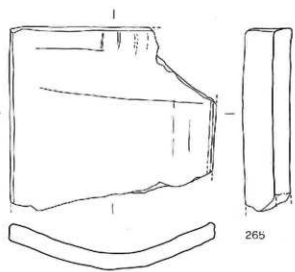
262



263



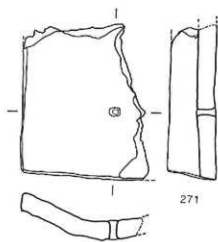
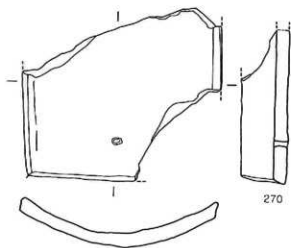
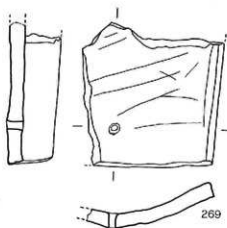
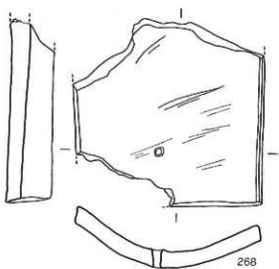
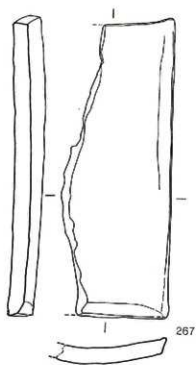
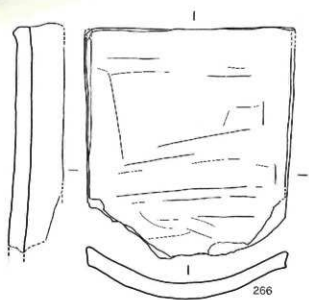
264



265

0 10cm

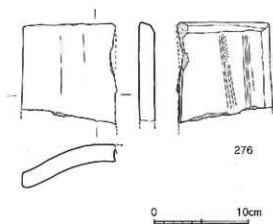
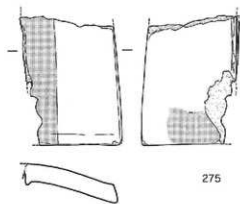
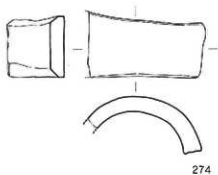
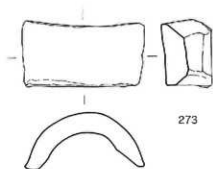
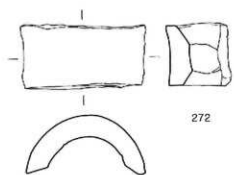
第68図 斜面瓦包舎屬出土遺物(28)



0 10cm

第69圖 斜面瓦包含層出土遺物(29)





第70図 斜面瓦包含層出土遺物(30)

274は若干左右の幅が異なる。いずれも凹面長短両側縁は幅の2分の1ほどを削り込んでいる。

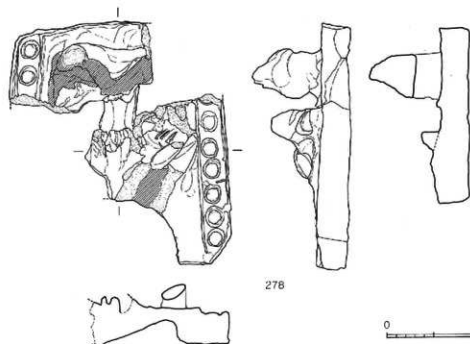
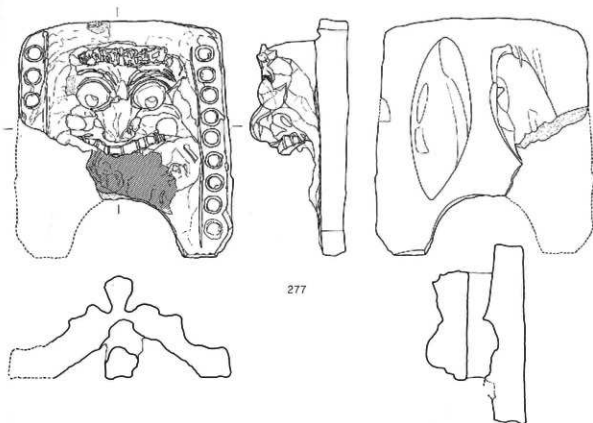
275と276は覆斗瓦で、平瓦に分割線を入れ、そこで割られている。

277から307は鬼瓦である。まず、確実に両側の個体を抽出すると、277から285と287、289の11個体となる。277は全高24.8cmの台形の地板で、脚部の外側は斜めに切断されている。顔面は下顎から下部が剥落しているが、頭頂部から顎にかけては円柱状に中空となる。地板の両側縁には竹管文を一列施し、その内側に鬼を作るが、鬼は立体的で、鼻先までは地板から7cm突出する。角は2本あるが折れており、また下顎から下側は剥離している。口は中空となるが、貫通はしていない。地板表面は把手の周囲のみ中窪みに削り込む。278は全高25.4cmの台形の地板で、脚部の外側は斜めに切断されている。地板の縁は一段低く、そこに竹管文が一列施文されている。鬼の頭頂部には円柱状の空洞があり、顎部まで中空となると思われる。地板の両側縁には竹管文を一列施文し、その内側に鬼を作るが、鬼は立体的で顎先までは地板から7cm突出する。左下の牙が残るのみで、ほとんどの部品が剥落している。裏面は277より大きく削り込むが、地板の形状に沿ってはならず、中央の把手部分を中心として縦長楕円形に削り込む。277は、斜めに切断された左脚部分以外は地板が残っており、全高は不明である。脚部の縁には沈線で挟まれた竹管文が一列ある。頭頂部から円柱状に中空となる。頭頂部は頭髪表現の間に強く突出した眼球状のものがある。その下に本来の目があり、すぐ横に上向きの牙が表現されている。顔面の中央部は大きな鼻である。280は全高35.8cmの台形形の地板で、両側縁には一列の竹管文が施され、脚部はさらにその内側に梯子状にへらで押捺されている。鬼は顔のほとんどが剥落しているが、2本角で大きく顔面に被さる額を有す。眼球は中空であるが貫通はしない。頭頂部から円柱状に中空である。背面は、脚部下端を4cmほど、他の地板周囲を1~3cmほど残しながら中窪みに削り込み、把手を作り出している。281は片側の脚部と顔面の一部が残る。地板の縁には二列の沈線に挟まれた竹管文が一列あるが、他に違ってこの竹管文のみ内部に放射状の沈線が押捺されている。鬼の顔は中央部の突出した鼻と、噛みしめた上下の唇部分のみである。裏面は中窪みに脚部の中まで削り込む。282は片側脚付近のみであるが、脚部には280と同様の竹管文と梯子状の押捺がある。ただし、281のほうがやや大振りであり、同一原体を使ったものではない。鬼の顔は下向きの牙と下顎の部分しか残っていない。裏面は脚部の下端約3cmを残して中窪みに削り込む。285は鬼の顔面の右側一部と脚部しか残っていない。地板の縁には二列の直線文に挟まれ、竹管文が施文されるが、脚部はさらに内側に2列施文される。鬼の顔は上下の牙の痕跡が認められるのみである。裏面は脚部を6cmほど、地板の周囲を1~2cmほど残して、中窪みに削り込んでいる。284は脚部の幅が広く、大型になると思われる。脚部は縁に幅2.5cm、高さ8mmほどの上手状の高まりを有し、その内側に竹管文を一列施す。鬼の顔はわからない。裏面は縁を3cmほど残して削るが、地板自体が薄いため、あまり深く削り込まない。285と286も同様の形状を示す。287は脚部を斜めに切り落とすもので、一条の直線文の外側に竹管文が一列施文されている。裏面は緩やかに中窪みに削り込む。288と289は、左右の脚部端で一条の直線文の外側に竹管文を一列施文されている。290は地板の一部で、一条の直線文の外側に竹管文が一列施文されている。291から293は地板のアーチを描く部分で、いずれも竹管文が地板上縁に回り込むように施文されている。竹管文の外側にはいずれもへら描きの沈線が廻る。

294から307は鬼瓦の部分である。294を除きいずれも別材として作られ、剥離、または折れて単体となったものである。294は鬼の額から左口の部分である。角は2本角となる。額の彫製の間中央に目のような表現がある。279が四つ目とすれば、これは三つ目ということになる。295は角で、3本のキザミを有する。296から300は眼球の部品で、いずれも中程まで円形の穴が空けられている。301は額か鼻となろう。302と303は鼻である。304から306は上下の顎の部分で、歯と髭の表現がある。307は牙である。刺突文が見られる。

308から311は鬼瓦の頭部の上のびる鳥雲である。いずれも瓦当部まで接合しないが、瓦当部につながる首部は雁振瓦に重なりながら徐々に角度を広げ、伸びている。雁振瓦の作りは通常の雁振瓦と変わらない。

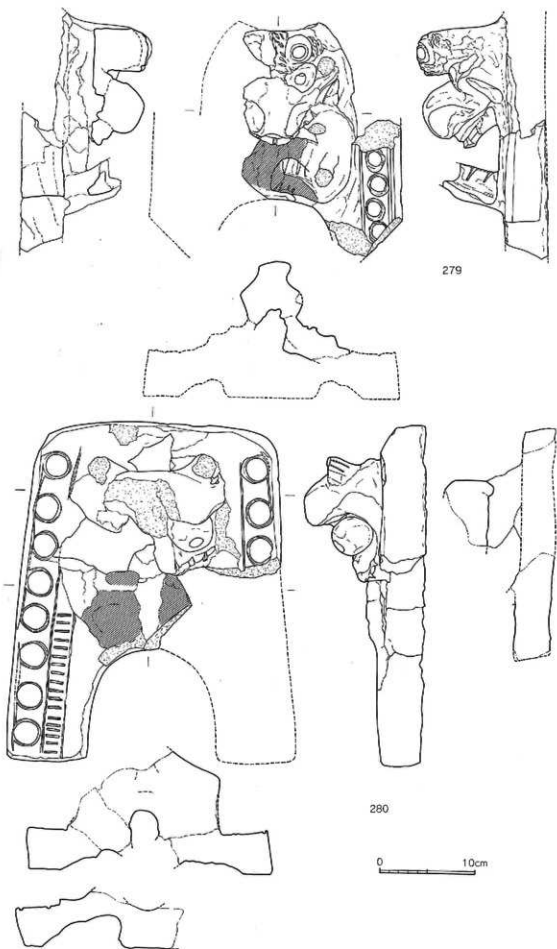
312から320までは雁振瓦である。幅約20cm、長さ25cmほどのやや平瓦より短い粘土板を型に押し当てて「袋」状の屋根の盛り上がりを作っている。その痕跡から308の扁袋と313、314は同一の型を使用した事がわかる。さらにこの3個体は面取りの幅や削り方が同じであるので、同一工人の手によるものであることがわかる。面取



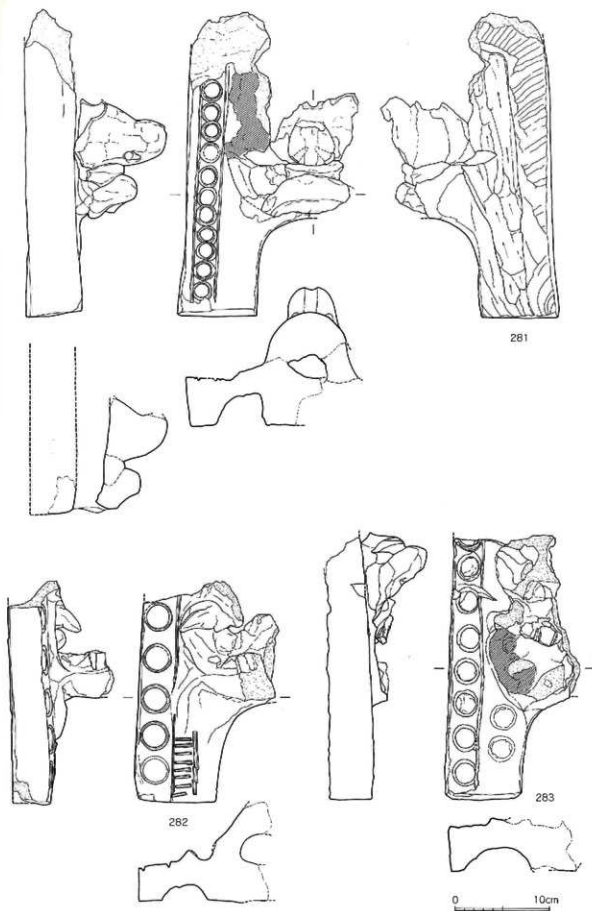
0 10cm

乳輪部は、剥離した痕跡のある部分

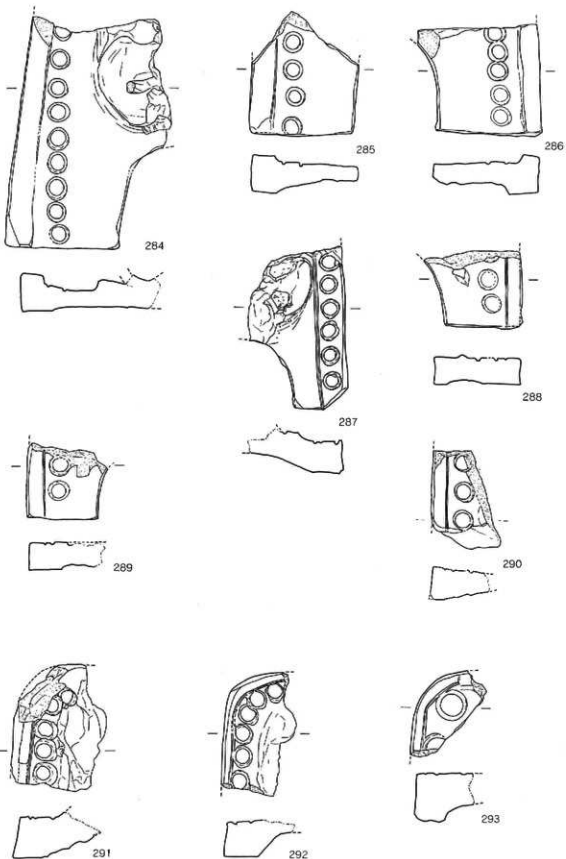
第71図 斜面瓦包含層出土遺物(31)



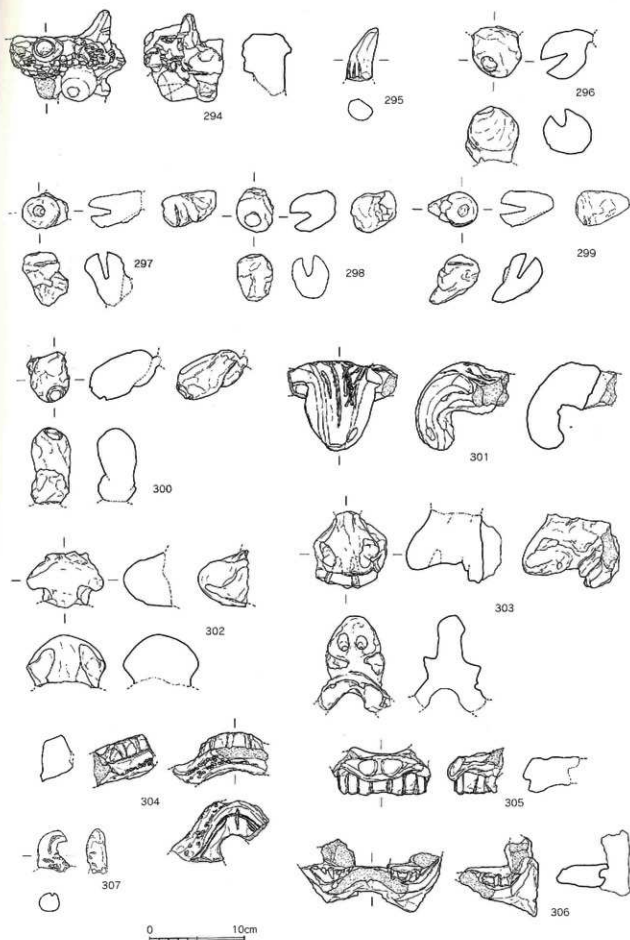
第72圖 斜面瓦包舍層出土遺物(32)



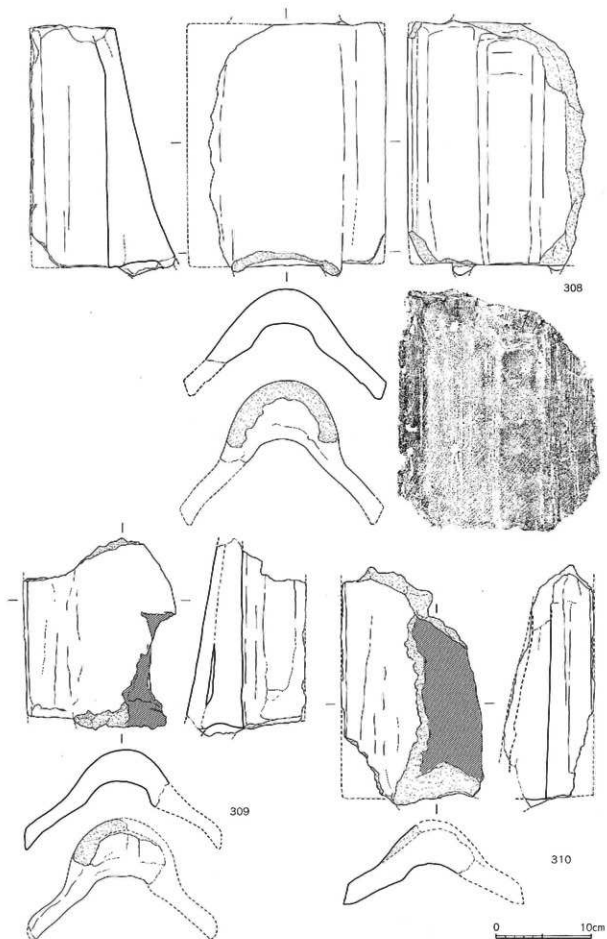
第73図 斜面瓦包含層出土遺物(33)



第74图 斜面瓦包舍層出土遺物(34)

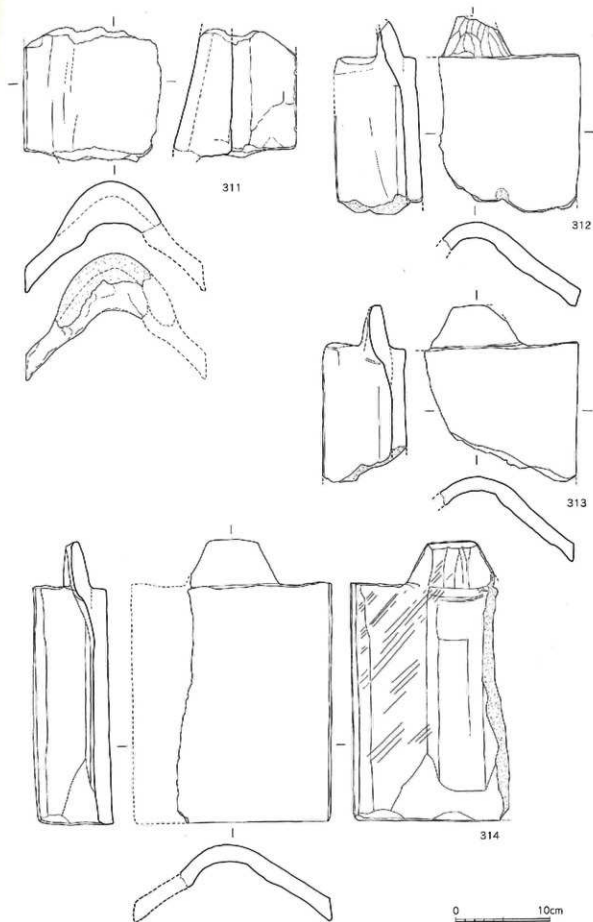


第75図 斜面瓦包含層出土遺物(35)

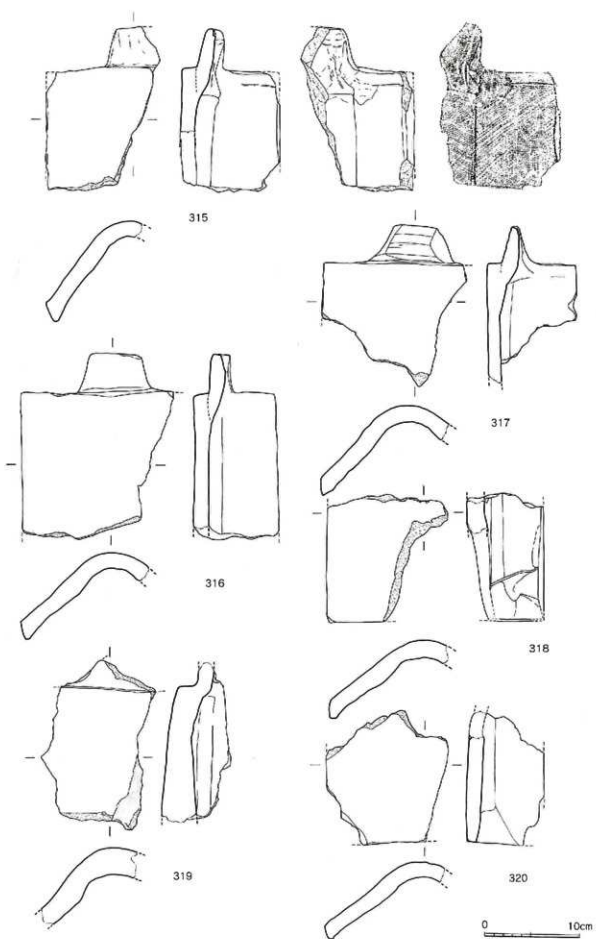


第76圖 斜面瓦包含層出土遺物(36)





第77図 斜面瓦包舎屬出土遺物(37)



第78图 斜面瓦包含层出土物(3B)

り、胴部凹面脚部両側縁と、玉縁と反対側の側縁、玉縁側の側縁の4ヶ所である。274のみは胴部脚部の側縁は面取りをしない。

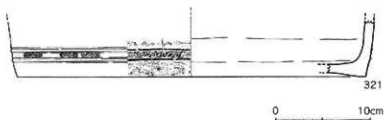
以上が斜面瓦包含層出土遺物である。多量に出土した瓦類の年代的位置づけについては第3節で触れるので、ここでは他の遺物からこの包含層の形成年代を考えてみたい。陶磁器の組成を見ると、青磁では雷文帯を有する碗、無銘蓮弁文の碗、鈔縁の盤、桜花皿、無銘蓮弁文を持つ口折れの皿、小型器台、白磁では挟りの入る高台を持つと思われる小皿、青花では唐草文を描く小野瀬年B群の碗、中国製大口碗など、沖縄県首里城京の内SK01出土一括資料<sup>15)</sup>や、福井県興行寺遺跡第2遺構面出土資料<sup>16)</sup>とほぼ等しく、15世紀前半代の様相を示すものである。備前焼は乗岡編年<sup>17)</sup>の中世3期から4期に属するものであり、14世紀後半から15世紀前半に納まる。瓦質土器は15世紀後半代に下る可能性のある144や16世紀代に下る146があるものの、概ね15世紀前半代の様相を有すると考えて良い<sup>18)</sup>。土器は103と105は15世紀前半代でよいが、104は15世紀後半から16世紀前半、105の京都系土師器は16世紀末まで下るものである。

そのように考えられるとすると、一部の土器や瓦質土器などで15世紀後半から16世紀代に下るものもあるが、この瓦包含層が形成されたのは15世紀前半代と考えてよいであろう。

#### d. 埋置火鉢 (第79図)

調査区ほぼ中央部で、瓦質土器火鉢を埋置した遺構が検出された。上部は削られており、底部付近がかろうじて残存していた。埋置された土層は平坦面を造成した整地層であるが、掘り込みなどは確認できなかった。

321の瓦質火鉢の底部で、細い2条の突帯が通り、その間に双頭燕子飛雲文が2つ1単位で押捺されている。今のところ、双頭燕子飛雲文で15世紀前半代に遡るものは知られておらず、15世紀後半以降と考えておきたい。



第79図 瓦質火鉢

#### e. ビット

約100点ほど検出したビットの内、幾つかからは遺物が出土している。図化できたものは少なく、ここでは8基のビットから出土した遺物を説明する。

第80図322から第81図331はビット出土遺物である。322はP1出土である。丸瓦で、玉縁部に釘穴がある。凸面はタタキの痕跡が見えないほどナデ消している。凹面には中位に布の端に結びつけられた吊り紐痕があり、この吊り紐痕は38、184、249の丸瓦と同一のものである。

323はP2出土の丸瓦で、凹面には一条の吊り紐痕がある。図の右側で布に結ばれている。玉縁凸面両側縁は面取りされる。玉縁凹面状端縁の面取りはない。

324はP3出土土器。P3からは他に同じ器形の破片も数点出土している。口縁部先端を積み上げて細くする環である。

325はP4出土である。325は焼塩壺の蓋を灯明皿として転用したものである。口縁部にススが付着している。

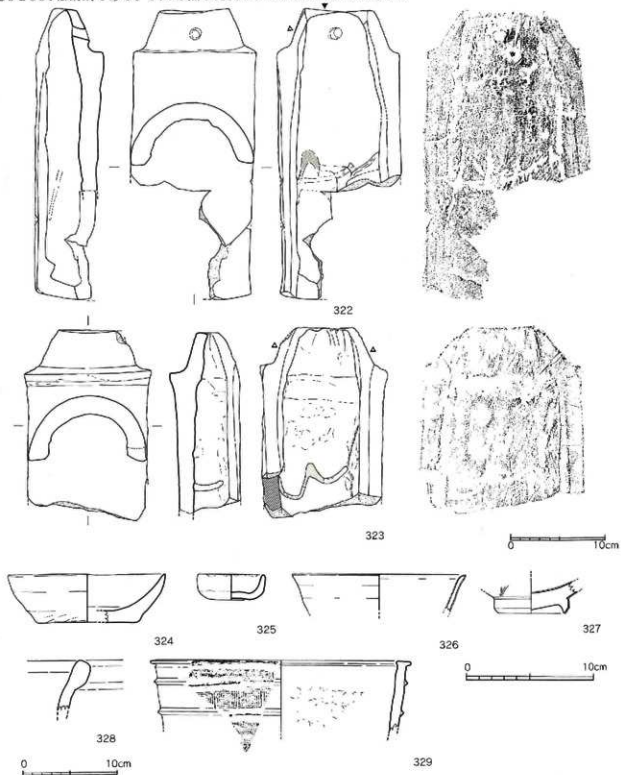
326はP5出土である。口縁端部が小さく外反する青磁碗である。

327はP6出土である。外面にへらで大きく蓮弁文を描くものである。高台部は疊付けには輪が掛からない。

328はP4出土である。備前焼製の口縁部で、断面がやや四角になるが、325の時期まで下るものではなく、15世紀代である。

329はP-7瓦質土器の火鉢である。口縁端部は頂部を平らにし、外側にシャープに突出する。さらにその下位には2条の突帯を廻らせ、周に大振りな雷文のスタンプを施す。

330と331は銅銭である。330は熙寧元寶で、331は元豊通寶である。



第80図 ビット出土遺物(1)



第81図 ビット出土遺物(2)

## f. その他の出土遺物 (第82図～第84図)

遺構や斜面の瓦包含層以外で、試掘調査や表土中から出土した遺物をここで説明する。

332から336は土器で、その内332から334はクロコ痕の明瞭に残るもの。335は器壁が薄く、体部が直線的に外傾して伸びるものである。336はいわゆる京都系上師器で、口縁端部下が強くナアられ外反する。

337から346は青磁である。337は外面に片切り彫りの無銘惠介文を描き、内面口縁帯には帯文をヘラ描きする碗である。338と339は口縁部が外反する碗で、内面にヘラで草花文を描く。340は内面にわずかに蓮弁文の下部と思われる痕跡がある皿、または盤の底部である。残存部ではすべて磨蝕されている。341は平底で、底部外周部にやや厚く軸が掛かる。その一部に脚が別離した痕跡があり、本来は蹴脚のような小さな脚が付く香炉の底部であろう。342は口縁部が小さく外反する外反口縁皿で、内面に片切り彫りで花文(?)を描く。343は桜花皿で、内面は口唇部の桜花に沿って叉状の工具による二条の沈線を入れ、その下にも筥による沈線文を施す。344は鈎縁桜花盤で、鈎上面に二又線状の工具で縁に沿うように桜花を描く。345は鈎縁盤で、先端部を上方に小さく掻み上げる。内外面とも無文である。346は筒状の破片で、水柱の口の部分か。

347は白磁の多角杯である。破片で面が二つしかないが、復元すると八角になるとと思われる。高台は浅い状りを入れている。おそらく4ヶ所となろう。内面見込みに目痕が残る。

348と349は青花碗である。いずれも唐草文を描くが、349は内外面とも二重の圓線を廻らせる。

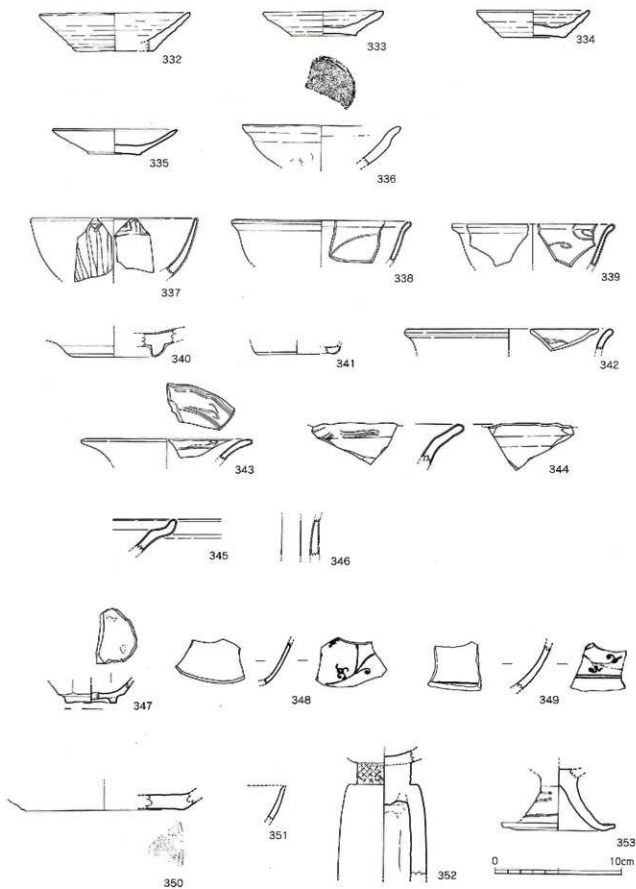
350は古瀬戸の皿の底部。おそらく68、69の底部となろう。

351は黒釉の天目碗。口縁部はあまり強く屈曲せずに直線的に開く。中圍製。

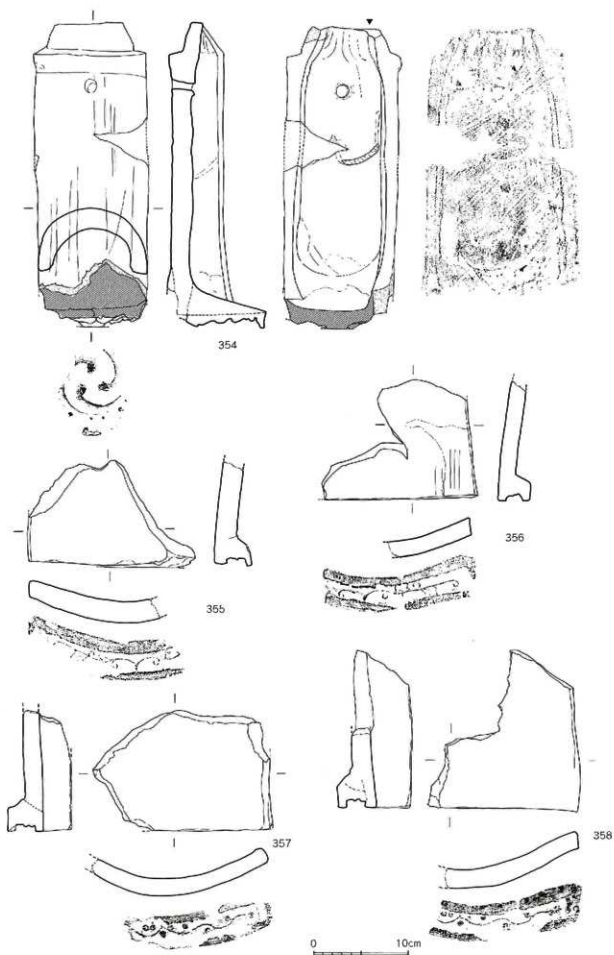
352は瓦質の燭台と考えられる。同様の形態に131、132がある。首部には格子口のタタキを施し、上には坪部が載ると思われる。脚部は長く筒状に伸びる。

353は今回の調査で出土した唯一の中世以前の遺物で、須恵器の高坪脚部である。付近に古墳などは知られておらず、出土した経緯は不明である。

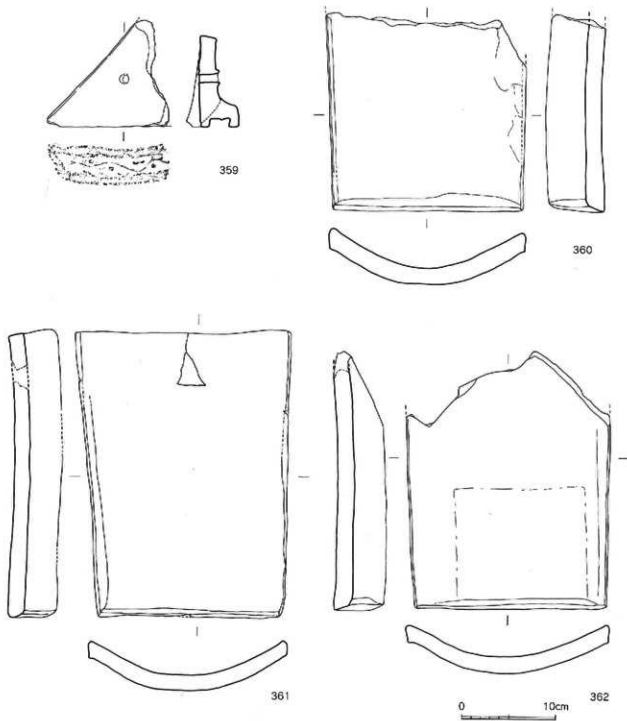
354から362は瓦類である。基本的に瓦包含層から出土したものと等しい。354は2類の軒丸瓦。胴部玉縁寄りに釘穴がある。355と356は1類、357と358は2類の軒平瓦である。355の凹型台庄痕は193、197、199と同じである。357の凹型台庄痕は79、209、210、213と同じである。359は切隅瓦で、2類の瓦当が付く。360から362は平瓦で、狭端側側面に面取りが見られる。362には葺き上の痕跡が残る。



第82図 試掘調査及び表土出土遺物(1)



第83圖 試掘調査及び表土出土遺物(2)



第84図 試掘調査及び表土出土遺物(3)

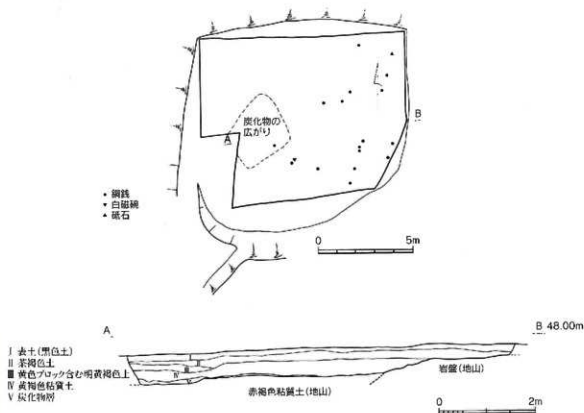


## 2) 第2地点 (第85図)

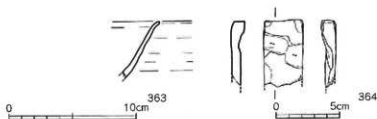
第1地点から幅20mの谷を挟んだ東側の尾根部に位置する。尾根の西側半分を削平し、平坦面約100㎡を作り出したものである。全周的に掘り下げを行ったところ、表上下約50cmで炭化物の広がりが認められ、焼土も若干認められたので、この場所で火を焚いた事がわかる。遺物は白磁と砥石、そして22枚の銅銭である。いずれも、炭化物層を覆うIV層中からの出土である。この内、365から367は無文銭の可能性が高い。

第86図363は白磁の甕で、口縁端部が小さく外反し、麗麗痕を残す。364は珪質泥岩製の砥石である。

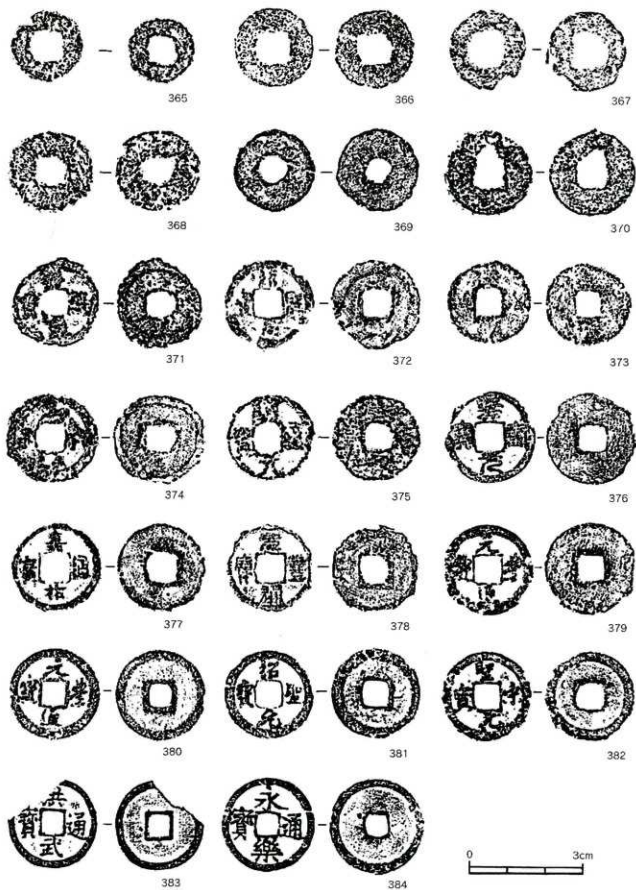
366から385の銅銭の内、最も新しいものが永業通宝であり、この包含層自体が中世に形成されたものであることを示唆する。白磁は森田編年D群に共伴する甕と考えられ、15世紀前半代と考えられることから、銅銭も含めて、この第2地点の包含層は15世紀前半代に形成されたものと考えられる。



第85図 第2地点実測図



第86図 第2地点出土遺物(1)

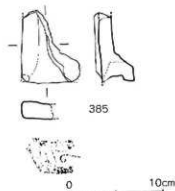


第87图 第2地点出土遗物(2)

## 3) 第3地点

第1地点と第2地点に挟まれた谷の谷頭に位置するのが第3地点である。ここは、トレンチ調査を行ったところ、ごく僅かに瓦片が出土したのみで、遺構は確認できなかったため、全面的な表土剥ぎは行っていない。約半分は工事による削平を免れている。山際には井戸があり、この地点は「麻裡」跡と言われている。

図化できた遺物は1点で、第88図385の軒平瓦である。

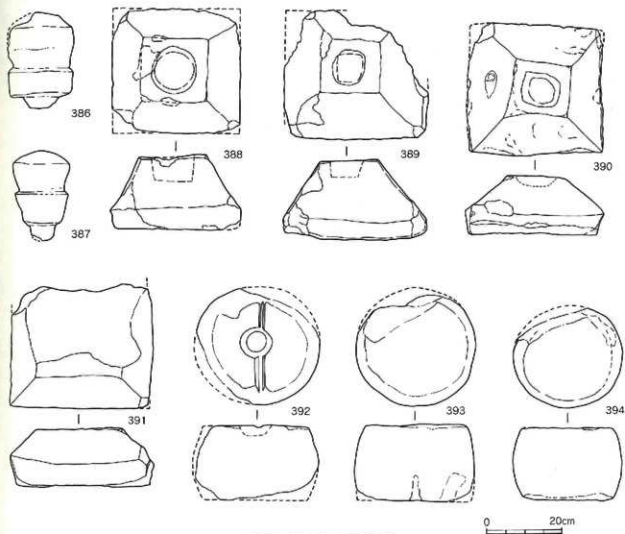


第88図 第3地点出土遺物

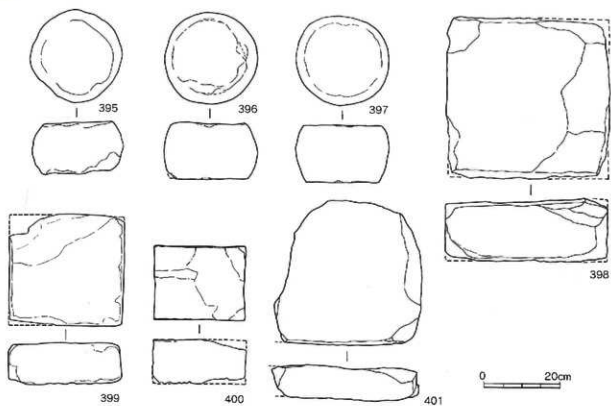
## 4) 石造物 (第89、90図)

386から401は遺跡内で出土した石造物であるが、原位置を保って出土したものはなく、近代の石垣に積まれたものや、表土中から出土したものである。386と387は五輪塔の空風輪、388から391は火輪、392から397は水輪、398から401は五輪塔の地輪、または他の石塔の基礎である。

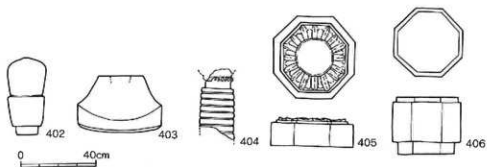
402から406は、第3地点の南東側、調査区外の一隅(第4岡丸印)に積み上げられていた石造物の一部を図化したものである。402は五輪塔の空風輪、403は同じく火輪である。404は空塔の相輪、405は無縫塔の基礎、406は無縫塔の卒部で、いずれも八角形を呈している。



第89図 遺跡内出土石造物(1)



第90圖 遺跡内出土石造物(2)



第91圖 遺跡横集積内石造物

## 第3節 小結

ここでは、門前遺跡出土の遺物を検討することによって遺跡の年代を確定し、また様々な歴史的状況の中で門前遺跡がどのように位置付けられるかを考えたい。合わせて、遺跡周囲にある中世に遡る石遺物や城館などの遺物や遺構を通して、中世の津久見と門前遺跡との係わりを追ってみたい。

## 1) 遺物の分類と年代的位置付け

## a. 土器・陶磁器類

今回の調査では、遺構、斜面瓦包合層中、および表土から土器、陶磁器、瓦質土器などが出土している。その合計点数は、破片で660点である。内訳は素焼きの土器類が182点（内、坏・小皿が156点、その他26点）、瓦質土器が56点、備前焼が310点、古瀬戸が7点、中国産陶磁器が105点である。備前焼が多いのは大型の甕類が多いためであり、この構成比率がそのまま使用時の構成を示しているわけではないが、一応の目安にはなる。すなわち、土器に比べ中国産陶磁器や瓦質土器の占める割合がかなり高いと言える。

## 輸入陶磁器（第92図）

まず、年代の決定のためにもっとも有効な輸入陶磁器から見る事にする。陶磁器105点の内訳は、青磁83点、白磁8点、青花9点、黒釉天目碗5点となって、圧倒的に青磁が多い。

青磁では、上田分類<sup>10)</sup>による甗文帯を持つC-II、外面に片切り彫りの無銘の蓮弁文を持つB-III、無文の口縁外反の碗、鈎緑花盤や棧花皿、外面に肉厚の無銘蓮弁文を持つ口折皿、香炉、盥台などがある。これらの中には14世紀代まで多く見られる鈎蓮弁文碗や、逆に15世紀後半から出現する標指蓮弁文碗が1点も無い。

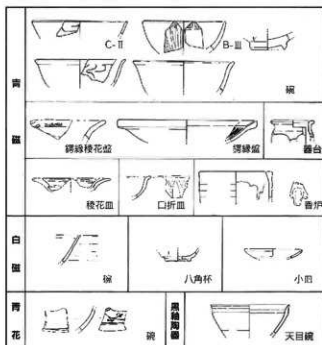
白磁は点数が少ないが、森川分類<sup>11)</sup>D群の小皿と八角杯、さらにそれらに伴うと考えられる口縁部が僅かに外反する碗がある。碗は「首出城跡」報告の「碗II類」に相当しよう<sup>12)</sup>。大分県内では、小皿と八角杯については16世紀代に大友府内城下町跡でも僅かに出土している<sup>13)</sup>が類例が乏しい。

青花は、4点が小野分類<sup>14)</sup>のB群に属す碗、1点はC群に属する碁笥底の皿、1点は甕である。その他、小破片であり図示していないが、SD-1から青花碗C群の碗（蓮子碗）が出土している。

いわゆるB群の青花は、この時期の調査例が少ない事もあって、県内では出土例に限られる。久住町の小路遺跡<sup>15)</sup>からは比較的多く出土しているが、年代的には15世紀後半以降に置かれており<sup>16)</sup>、門前遺跡と前後の関係を有する。その他、大友府内城下町跡で数点確認されているに過ぎない<sup>17)</sup>。

黒釉の天目碗は5点出土したが、いずれも中国産である。

以上、門前遺跡出土の陶磁器の大部分は15世紀前半代の基準資料とされる神護景原山城京の内SKO1出土陶磁器群<sup>18)</sup>や福井県奥伊弉遺跡第2遺構面出土陶磁器群<sup>19)</sup>と共通する内容を有する。よって、遺跡の盛期は15世紀



第92図 主な陶磁器一覽

前半代にあると判断される。それ以降のものは、青花碗C群と青花皿C群のものがそれぞれ1点ずつと、16世紀代と考えられる甗の3点である。

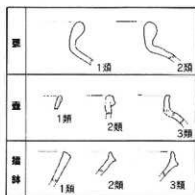
#### 備前焼 (第93図)

甗、壺、柄鉢が出土している。甗は口縁部形態から2類に分けられる。1類は口縁部が外反し、先端部断面はやや縦長の玉縁状を呈するもの。2類は口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、先端部断面は縦方向に長楕円形となるものである。これらは概ね、前者は乗阿実氏による福年<sup>90</sup>の「中世3期a」から「中世3期b」、後者は「中世4期」に位置づけが可能である。

壺は個体数が少なく、口縁端部だけだと甗と区別が付きにくい。小型の壺では3種類の口縁端部の形態がある。1類は口縁部を小さく折り返し、断面が長楕円形を呈するもの。2類は折り返した口縁端部が外側に突き出すもの。3類は口縁端部が小さく外側に突出するものである。この内、3類は15世紀後半以降の様相を示すものであろう。

柄鉢は口縁部形態から3類に分けられる。1類は口縁部内側が上方へ突出し、断面変形となるもの。2類は内湾しながら広く口縁部で、上方に強く伸び、下方へはあまり伸びずに、口縁外面はほぼ平らになるもの。3類は上方に強く伸び、下方へも突出するもので、口縁外面は面をなし、やや反り気味になるものである。これらは1類が乗阿福年の「中世3期a」、2類が「中世3期b」から「中世4期a」、3類が「中世4期b」に相当しよう。

備前焼から見ると、一部を除くと概ね14世紀後半から15世紀前半の時期に納まるので、ほぼ陶磁器によって示された年代を遡認できるであろう。



第93図 備前焼口縁部分類図

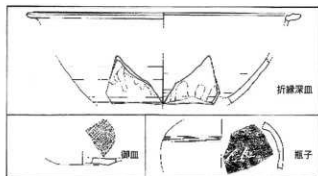
#### 古瀬戸 (第94図)

古瀬戸と考えられる破片は7点出土した。内3点は壺、又は瓶子、3点は大型の皿、1点が御皿である。この内、折縁深皿は藤澤氏編年の「後期II期」に該当し<sup>90</sup>、14世紀末から15世紀第1四半期に位置づけされるものである。

#### 土器 (第95図)

次に土器類であるが、小破片がほとんどで図化出来たものが限られているが、坏と小皿ともに幾つかの種類を含み、時間差や産地の差が想定できる。この差は明らかに「形式」差と考えられるので、ここでは「形式」として扱う。

坏と小皿はA形式からD形式の4つに分けられる。A形式の坏はやや内湾気味に立ち上がる体部で、口縁端部を小さくつまみ上げるのが特徴である。豊後では国東半島から別府湾沿岸地域で14世紀代から見られるものである<sup>91</sup>。小皿は口径に比して器高が高い。この形式は坏と小皿の大きさの差が明瞭である。B形式は、器壁の内外面とも段々になるほどのロクロ調整痕を明瞭に残すもので、豊後では15世紀後半代から16世紀前半代に見られるとされるものである<sup>92</sup>。A形式ほど坏と小皿の差が明瞭ではなく、いわゆる法量分化が見られる。C形式は、いわゆる「京都系土師器」と呼ばれるもので、16世紀第2四半期になって豊後では出現するとされている<sup>93</sup>。これもB形式同様法量分化が見られる。D形式は直線的に大きく開く体部を有するもので、一点のみの出土である。



第94図 古瀬戸一覽

このように土器では14世紀代から見られるA形式から16世紀に出現するとされるC形式まで、各時期のものが僅かつつ出土している。陶磁器で想定されたこの遺跡の中心時期である15世紀前半代を示す土器は従来の編年観ではA形式の小皿のみであるが、量的に優位な坯も確実に15世紀代まで残存すると考えても良いであろう。14世紀代ではセットになるはずの浅い小皿が門前遺跡では一点も出土していないことは、この門前遺跡のA形式の組み合わせが、15世紀前半代の様相を示しているといえよう<sup>94)</sup>

問題は太友府内城下町跡などで15世紀後半から16世紀前半に主体となるB形式である。初現の時期を15世紀前半代まで遡らせて、A形式と入れ替わるように門前遺跡の主体となる時期に存在したと見るのか、あるいは従来の編年観の通り、15世紀後半以降と見るのかで遺跡の評価もかなり違ったものとなる。このB形式は型式変化が明確にはとらえられていないが、初現期のものは外面に段々を付けずに内面だけに段々を付けるという<sup>95)</sup>。そうすると、門前遺跡のものは内外面とも明確に段々が付くことからすれば、やはり新しい時期（15世紀後半以降）に置かざるを得ないだろう<sup>96)</sup>。現状では、15世紀後半の中でも新しい時期と考えられている府内町跡5次S-251下層出土の一群<sup>97)</sup>にはほぼ等しい時期と考えておく。この一群には青磁碗B-N形式が伴う。門前遺跡では、陶磁器の項で述べた青花C群の碗や皿が伴うものと考えられる。

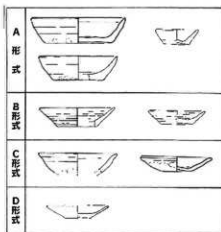
16世紀代では、中葉以降に坯C形式が主体となる。門前遺跡のC形式は器壁が薄いものと厚いものがあり、中でも「第1期」から「第3期」に相当し、16世紀第2四半期から第4四半期の年代が与えられているものである<sup>98)</sup>。

なお、D形式は一個体だけの出土であり、位置づけは不明である。

#### 瓦質土器（第96図）

瓦質土器も比較的多く出土している。大分県内出土の瓦質土器には胎土や器形、スタンプ文などから贋人品と考えられるものと、在地産（この場合であると豊後産）のものがあるのはわかるが、一部を除くと胎土や焼成具合などからそれらの違いを見極めるのは難しい場合が多い。唯一、豊前宇佐周辺に多い一群の瓦質土器が、宇佐産ではないかと考えらる<sup>99)</sup>が、今のところ太友氏に係わるような瓦質土器についての抽出は出来ていないのが現状である。さらに、該期（15世紀前半）の遺物は県内ではほとんど無く、遺構出土の良好な一括資料も大分では知られていない。唯一、大田村の岡の前遺跡<sup>100)</sup>でこの期の遺物が選別出来ているぐらいである。さらに14世紀代の瓦質土器もほとんど無く、岡の前遺跡で数点確認されているに過ぎない。そういう意味で、15世紀前半代の様相を示す門前遺跡の瓦質土器の構成は注打される。

そこで、最も点数が多く型式変化の迫る深鉢タイプの火鉢について、



第95図 土器分類図

口縁部形態の分類と変遷			スタンプ文	
15世紀	A1類	B類	C類	1509 菊花文 1510 七宝文 1511 巴文
	148	46	45	
	144	329	147	1512 菊花文 1513 菊花文 1514 葉文 1515 菊花文? 1516 花文 1517 梅花文 1518 友禅手摺文 1519 梅花文 1520 友禅手摺文
16世紀	小	上	八	1521 梅花文 1522 斜線文 1523 葉文
	146			

第96図 瓦質土器火鉢口縁部変遷図

（小…小路遺跡、役…役株山城跡、上…1門前遺跡）  
（八…八坂中遺跡、番号だけのものは門前遺跡）

15世紀後半から16世紀代の県内他遺跡出土の遺物も視野に入れながらその位置付けを考えてみたい。県内で出土しているものでは口縁部の形状から幾つかに分ける事ができる。A類は直口の口縁部で口縁端部からやや下がった所に2条の突帯を巡らせるもので、突帯の大きさによってA1類とA2類に分けられる。すなわち、通常の突帯を有するものをA1類、幅が狭く指で觸みだしたような突帯を有するものをA2類とする。B類は口縁端部が外に突出し、帯状をなすもので、その下に1から2条の突帯を巡らせるもの。C類は唯一門前遺跡で出土しているもので、口縁直下に突帯が無く、外反しながら口縁部が開き、胴部最大径のところに突帯を施すもの。D類は最近幾つかの遺跡で出土している洗線をよく巡らせるものである。

まず、A1類は、口縁端部内側への突出具合で時期の新古がわかる。15世紀前半代のは、器壁の厚さが口縁端部まで変わらず一定であるのに対して15世紀後半代のは内側へやや突出し、口縁端部が厚くなる傾向が認められる。15世紀後半から16世紀中葉に主体を置く久住町小路遺跡のA1類は口縁端部が内側に影れるものが多い。A2類も基本的には同様の変化をするが、あまり口縁内側への突出はなく、16世紀後葉には口縁端部が全体的に厚くなる。B類は、門前遺跡のものは口縁端部の外への張り出しがシャープで小さく断面三角形に突出している。しかし、16世紀代になると口縁端部の断面が四角形になって大きく突出するようになり、16世紀の後葉になるとその端部の幅が広がる。C類は県内では他に類例が無いので15世紀前半代のもので一応考えておきたい。D類は今のところ系譜もきめて不明であるが、15世紀後半代には存在している。

次に突帯側などに施されるスタンプ文を見ると、門前遺跡のものは大きく分けて4種類に分ける事が出来る。それは菊花文、雷文、七宝文、双頭鷹手飛雲文である。この内、15世紀前半代までに確実に存在するのは、菊花文、雷文、七宝文である。特に菊花文は、豊後では14世紀後半に出現した後、15世紀前半代までは主流を占める。その後15世紀後半からは文様が多様化し、巴文、梅花文（六曜文）、七曜文、同心円文、双頭鷹手飛雲文などが出現し<sup>100</sup>、逆に16世紀代になると菊花文が少数となり、無文のままか、あるいは幾何学的な文様が付けられる場合が多くなる。

以上の兩年間で門前遺跡出土の火鉢を見ると、多くは15世紀前半代の特徴を有すると見られるが、A1類の144は口縁端部がやや内側へ突出しており、七瀬B形式に伴い15世紀後半から16世紀前半代のもと考えられる。また、A2類の146は、口縁端部が厚く、16世紀後葉の太友府内城下町跡から出土するものと等しく、16世紀後葉のものであろう。A1類と考えられる321は、底部付近だけであるので口縁部形状が不明であるが、定式化した双頭鷹手飛雲文から15世紀前半代には上り得ないものとする。B類の329は、口縁端部がやや内側に突出している事から15世紀後半代まで下る可能性がある。

その他に浅鉢タイプの火鉢や風炉、香などの瓦質土器があるが、これについては形式の抽出や型式変化を迫るほど資料があるわけではないので不明点が多いが、今回出土しているものは、一応15世紀前半代のもので考えておきたい。これらの中に銅や釜など16世紀代の遺跡から多く出土するものが含まれていないのは、この段階では器種が限られていた事を示している。

## b. 瓦類

瓦は遺構内から僅かに出土しているが、大部分は斜面に投棄された状態で出土したものである。それらはパンケース（内法46×30×15cm）約200箱におよぶ。今回はそれらの内約1割について図化した。それらは概ね丸瓦、平瓦については三辺以上残存していること、瓦当については半分以上残存していること、遺具瓦についてはある程度形のものである事、という基準で選別をおこなったものである。

そうして確認された瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、面戸瓦、熨斗瓦、鬼瓦、鳥瓦、雁振瓦（袋瓦）の9種類である。屋根に葺かれる瓦類のほぼすべての種類と言ってもよい。それぞれの種類毎に特徴を見ていきたい。

### 軒丸瓦（第97図）

軒丸瓦にも通常の軒丸瓦と隅川の軒丸瓦、さらに葺かれた場所が不明であるが長さの短い軒丸瓦がある。こ



れらは瓦当文様から3種類に分ける事が出来る(第97図)。

1類: 右巻き三巴文で、周囲には圓線や珠文帯がない。巴の頭部はくびれて円形になり、巴の断面の高さは低く全体に扁平である。

2A類: 左巻き三巴文で周囲には圓線はなく珠文帯が巡る。珠文は15個で3-2-3-2-3-2とまとまりをもつ。巴の頭部がくびれて円形になり、断面は半球状で頂部がやや扁平になる。

2B類: 2A類と同範であるが、珠文を3個新たに間に彫り加える事により18個となるもので、巴の断面はやや扁平になもの(a)から、半球状に突出するもの(b)までである。突出するものは、巴の内側に後が入り、外側になだらかに傾斜する。珠文の大きさは2A類に比べて大きい。

これらは、いずれも瓦当部と丸瓦部との接合に際して、キザミヤカキ目は認められない。

また、2A類と2B類は、同じ範型を使いながら二つの点で異なる。一つは珠文の数である。2A類の珠文帯は三つのまとまりと、二つのまとまりを交互に配置し、バランスよくうまく15個で納めているが、2B類は間に3個を入れて配列が不揃いの18個にしている。さらに、珠文の大きさも大きくなる。二つ目は巴文の断面形状で、2A類は確認できた二個体とも断面が扁平、またはやや盛り上がり気味なのに対して、2B類は2A類と同様のやや盛り上がるもの(a)と、突出気味になるもの(b)とがある。

これらを勘案すると、当初は2A類を、次いで珠文の数を増やし、珠文を大きくする事により2B類(a)を、そして巴文の突出をさらに進めて2B類(b)を作っていたものと考えられる。しかし、後者が補修瓦というわけではない。一番数の多いのが2B類(b)であり、次いで2B類(a)、2A類となるので、おそらく一連の製作過程の中で生じた変異であると思われる。そのことは、丸瓦(軒丸瓦の丸瓦部も含めて)の作りに個体差以上の差を見いだし難いことも傍証となる。

次に1類との関係である。2類とはまったく異なる瓦当文様であり、特に巴文の断面が扁平となるなど、やや古式の様相を持つ。とは言っても巴文自体の形状は、頭部がくびれて円形となり、その点は2類と同じである。2類との数的比率はほぼ拮抗しており、いずれかが補修瓦とも考えがたい。前記したように丸瓦の作りに大きな差が無い以上、同時に製作され、使用されたと考えざるを得ない。これは後述する軒平瓦の2種を考える際も同様のことが言える。

なお、釘穴はすべて丸瓦胴部に焼成前にあけられている。

ところで、開用の軒丸瓦は確実なものは2点(+3点・・・これは破片が小さくて烏袋と区別できない)があるが、瓦当面から15cmほどのところから両側面を猿端に向けて徐々に細く削り落とす。玉縁は残っていないが、削れた痕跡を残すので本来はあったものである。

また、長さの短い軒丸瓦は4個体出土している。3個体は完形で、通常の丸瓦部を焼成前に切断し15cmほどの長さにしたものである。完形の3個体は、それぞれ切断方法が異なり、丸瓦に対し垂直に真っ直ぐ切り落とすもの、斜めに真っ直ぐ切り落とすもの、斜めに円弧を描きながら切り落とすものがある。これらは鼠根のどの部位に付かれたものか不明である。

	拓影図	主な特徴
1類		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 珠文なし</li> <li>・ 古巻き三巴文</li> <li>・ 口文が窄下</li> <li>・ 圓線は白色のものが多い</li> <li>・ 瓦当部は粘土が薄く、丸瓦面が丸い</li> <li>・ 瓦当面に彫れ跡付集のものが多い</li> </ul>
2A類		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2,3,2,3の連続した珠文あり</li> <li>・ 左巻き三巴文</li> <li>・ 口文の頭部は半球状</li> <li>・ 数が少ない</li> </ul>
2B類		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2A類に対して、珠文が3個彫り加えられている。(矢印に示す珠文が加えられたもの)</li> <li>・ 巴文の断面は扁平のものとは半球状に突出するものがある</li> <li>・ 瓦当部は粘土が厚く、丸瓦面が丸い</li> <li>・ 瓦当面に彫れ跡が認められない</li> </ul>

第97図 軒丸瓦当文様の分類

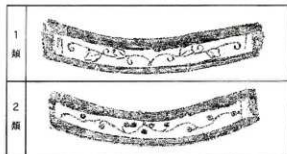
## 軒平瓦（第98図）

軒平瓦にも通常のもと調川のものがあるが、瓦当文様からは次の2類に分ける事が出来る。

1類：中心飾りが無く、唐草文が左右とも3反転する均整唐草文で、子葉の間に左右それぞれ2ヶ所に「葉」を配す。

2類：中心飾りが無く、主茎から左右に4反転する子葉が伸びる唐草文であるが、向かって右側の子葉は2ヶ所で向きが異なる（左右非対称）。また、子葉の先には珠点を置く。中心部にはアンバランスに珠点が3ヶ所あるが、あるいは中心飾りを意識したものかもしれない。

1類、2類とも基本的に中心飾りが無く、近隣で類例を探せば白柁石仏群地域遺跡<sup>300</sup>出土の軒平瓦Ⅱ類がある（第106図参照）。これは中央上方から飛れ下がった唐草が左右に5反転するもので、菊田徹氏は報告書で「ほぼ鎌倉時代後期」とし、山崎信二氏が「中世Ⅵ期（1380～1430）」とする<sup>301</sup>ものである。年代観には差が大きいが、これに近似した資料として神戸市如意寺（34）出土のものが知られている。山崎氏は如意寺出土例を、筆の切り縮めや彫り加えから三段階を設定し、初例を1385年、最終例を1406年に比定している<sup>302</sup>。これが正しいとすると、これに近似する白柁例も鎌倉時代まで遡るのではなく、山崎氏の「中世Ⅵ期」が妥当であろう。唐草文がやや硬直化しているのも時代を下らせる要素であろう。そのように考えられるとすれば、門前遺跡例も「中世Ⅵ期」に比定できるかもしれない。



第98図 軒平瓦瓦当文様の分類

ところで、これら2種類の軒平瓦の出土量は、一定程度の大きさのものでは前者が104個、後者が88個とそれほど有意な差は認められない。むしろ、次に示すように幾つかの共通する点が認められることから、同時に製作されたものと考えられる。

①瓦当の接合に際して、瓦当貼り付け<sup>303</sup>や瓦当文様面と頸部を別々に積み重ねたものが1類、2類共に見られる。

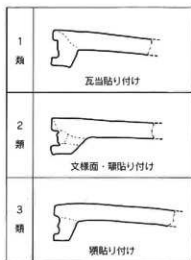
②頸部瓦当裏面（凸前側）の調整は、すべて横方向のナデである

③凸面の瓦当接合（頸部）に「凹型台の圧痕」が認められる。

④凹面は大部分縦方向にナデ消されているが、部分的に布目の痕跡を残す。

⑤凹面瓦当縁部に接して「コ」字状に赤褐色の鉄分を含んだ粘土が付着するものがある。

①については、図99に示すように3類に分けられる。1類はいわゆる瓦当貼り付け<sup>304</sup>のもので、頸の断面形状は段部が角を持って折れ、直線的である。ただし、次の2類も平瓦の切断面に注目すれば1類と同様であったのであり、2類の文様部分と頸部分の粘土の境が検出できなければ、1類と見誤った可能性も残るので、瓦当貼り付け技法の存在は不確定である。2類は、平瓦を斜めに切り落とした上に、文様面と頸部に相当する2本の帯状の粘土を積み重ねたもの。このタイプのものは、瓦当文様面でも下頸と内区との間に明瞭な接合線が見られる（図版10参照）。頸の断面形状は、段部が鈍角に曲がり、やや曲線をもって平瓦と接合する。3類は頸貼り付け<sup>305</sup>のもの。頸部が薄い。ただし、確認できたのが数点であるので、これが手法として明瞭に存在したのかは不明である。

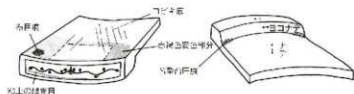


第99図 軒平瓦瓦当接合の分類図



第100図 文様面・頸貼り付け技法  
（西田氏註38文獻より）

太宰府を中心とする九州の軒平瓦には1類の瓦当貼り付けは無いが、大分県白杵市にある白杵石仏群地域遺跡では瓦当貼り付けがあることを指摘したのは山崎氏である<sup>90</sup>。隣接する津久見市の門前遺跡でも存在する可能性が確認できたので、白杵や津久見など東九州の沿岸部には本州と同様の技法が入っていたのかもしれない。



第101図 軒平瓦横式図

また、2類は東大寺の瓦を分析した芦田淳一氏<sup>91</sup>の「文様面・頸貼り付け技法」に近い(第100図参照)。これは、平瓦凸面広端部に粘土を貼り付けて瓦当部を形成するが、さらに文様部を形成する瓦当面にも粘土を貼り付けるものとされる。断面図で見る限りほぼ同一の技法と考えても良さそうである。

なお、門前遺跡平瓦瓦当文様1類、2類では、この瓦当部接合2類の比率は瓦当文様1類に多いことが指摘できるものの、両者に存在する事から門前遺跡平瓦瓦当文様1類、2類の製作に時間的な差が無い事を示している。

②については、ケズリの痕跡を残すものは全くない。

③についてはほぼすべての軒平瓦に認められる。さらに圧痕には幾つかの「型」があるようで、台の傷(?)によって同じ型を使ったことがわかる場合がある。それは2種類確認できており、遺物番号193、197、199、355のグループと79、209、210、213、357のグループである。前者はすべて軒平瓦1類で、後者はすべて軒平瓦2類であるので、それぞれが別個の工程で作られた可能性が高い事がわかる。

④については、上原真氏氏が言うように<sup>92</sup>「軒平瓦の製作においては、布を敷いた伝統的な凸型台を使用」したことを示すものであろう<sup>93</sup>。

⑤については、平瓦の項で扱う。

これらの内、特に①と②は製作時期を示す特徴である。①の瓦当部接合1類の瓦当貼り付け技法は「1260年以降1495年以前」とされる<sup>94</sup>。一方、2類の「文様面・頸貼り付け技法」は、東大寺では1230年から採用され、1290年には瓦当貼り付け技法が出現することにより、1300年以降は瓦当貼り付け技法が定着する、とされる<sup>95</sup>。そうすれば、門前遺跡の1類、2類の共存する可能性の高い状況は1300年前後する時期の様相に近い事になる。しかし、次の②の状況も合わせると、瓦当部接合2類の存在は古い技法を残していたものと考えざるを得ない。

②は地域差があるが、基本的に「中世V期後半(1355~1380)」以降は「各地の軒平瓦の瓦当裏面はココナテ調整痕しか認められなくなる」<sup>96</sup>。この点と①の1類の存在から、門前遺跡出土軒平瓦は1355年から1495年の間に位置付けられる可能性が出てくる。更に、瓦当下縁の面取りが一部で認められ、この特徴は法隆寺の編年では「室町中期1(1397~1436)」に出現し、次期で一般化するとされる<sup>97</sup>ことを考えると、14世紀でも終わり頃が上限として設定できるであろう。

これらのことから、軒平瓦製作にあたっては、瓦当の接合法に古い技法を用いながらも、調整法には最新の技法を導入していた事が窺える。

#### 丸瓦(第102図)

門前遺跡出土丸瓦には、玉縁を有さないものと有するものがある。前者はいわゆる行基瓦の瓦であるが、確認できたもので3個体ある。その割合は細かな破片まで数を数えていないので正確にはわからないが、おそらくごく僅かである(1%以下)。特徴は凸面に縄目タタキ痕をそのまま残す(ナデ消しはごく一部)事で、外見上古代の瓦と区別しがたい。しかし、凹面を見ると明瞭に吊り紐痕があり、中世瓦であることがわかる。さらに吊り紐の形状が玉縁を有する他の丸瓦と全く同一のものがあり、製作時期も同時である事がわかる。すなわち、他の瓦類と一緒に屋根瓦に葺かれたものであるが、おそらく特定の場所に使用された何らかの道具瓦であろう。

後者の丸瓦の特徴は次の通りである（面取りについては、時期を示す要素のみを列挙）。

①凹面には糸によるコビキ痕を残しながらも目の細かな布目痕があるが、その後のタタキなどは認められない。

②凹面に残る吊り紐痕は胴部中に1本のみあり、その痕跡から大きく2種類に分けられる。

③凸面は縄目タタキを縦方向にナデ消している（部分的にタタキ痕が見える）。

④玉縁凸面両側縁の面取りはあるものとなしものは相半ばするが、あるものも丸瓦胴部伏縁にまでは達しない。

⑤凹面両側縁の面取りは、玉縁部の全面には至らず、ケズリ残しがある。

⑥広端縁面側の面取りは、幅3～4cmほどである。

⑦玉縁まで含めた全長は平均31.3cm、胴部の長さは平均27.7cm、幅は平均12.6cmである。

以上の特徴をあげる事が出来る。次にそれぞれの特徴について位置づけを考えてみたい。

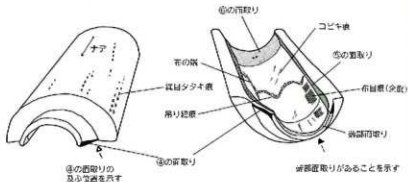
①は、法隆寺の編年では15世紀後半に内タタキが始まるとされるが、門前遺跡では1例も無い。

②は、吊り紐痕の太さから大きく2種に分けられる（第103図）。太いものを1類、細いものを2類とすると、1類は紐の幅が約1cmと広く、あまり垂れ下がらずにほぼ直線的に巻かれ、外に出ている部分（縄目が見える部分）が少ない。2類は通し縫いをされた部分を頂点としU字状に垂れ下がるもので、布に隠れた部分（布目が見える部分）と外に出ている部分の比率は概ね1:1.5前後である。紐はいずれも縦目が2列となる痕跡を持つ。

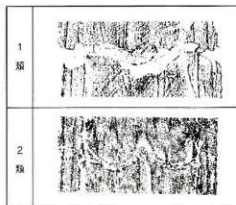
また、2類では布の端に結びつけられた紐の縦目付け方で使用された布袋が同一である事がわかる場合がある。例えば227と233、237の丸瓦は同一の布袋を使用しているのがわかる（図版10参照）。1類はその痕跡から全て同一の布袋だった可能性が高い。

ところで、この吊り紐痕については佐川正敏氏の法隆寺における分析<sup>100)</sup>を受けて、山崎信二氏の全国的な詳細な分析がある<sup>101)</sup>。それによると、時期によって布に隠れた部分と外に出ている部分の比率が変化し、1370年頃には全て「外側のとじつけ」スタイルに変化するとされる。また、その比率が1:1.5ほどのものは1305年前後に位置付けられている。つまり、吊り紐に注目する限り、門前遺跡の丸瓦は14世紀初頭となる。しかし、これは後述のように古い技法が残存したものと考えられる。

ところで、本州では「布袋と丸瓦粘土円筒との粘着力を強く」するために外側にとじつけるという工夫をしたが、「九州では細紐の本数を多くするという形で工夫がなされている」<sup>102)</sup>。すなわち、普通1本から3本程度の吊り紐のところを、7本以上の多糸とするのである。しかも、ほとんど紐は垂れ下がることなく、通し縫い風であるところに特徴がある。しかし、大友府内城下町出土の瓦を見ると、小さくU字状に垂れ下がった多糸の吊り紐痕を有する一群がある<sup>103)</sup>。これとほぼ等しいものは白岩石仏群地域遺跡の現満月寺境内調査区からも僅かに出土しており<sup>104)</sup>、大友膝下の地域における特徴である可能性が高い。同じ「九州タイプ」と一括された中にも、地域差があることを示していよう。これらは凸面の縄目タタキが完全にはなで消されていないものもあり、廃棄された時期は16世紀後葉ではあるが、製作時期は15世紀代に遡る可能性もあるものである。



第102図 丸瓦模式図



第103図 丸瓦吊り紐痕の分類

そうすれば、いわゆる九州タイプの吊り紐が全く認められない門前遺跡の丸瓦はどう評価すればよいのであろうか。一つには地域的なものが考えられよう。すなわち白岬までは九州タイプのものが入っているが、それより南に位置する津久見まではその影響が及んでいないとする考え方である。もうひとつは時間的なものとする考え方である。白岬石仏群地域遺跡の現満月寺境内調査区では大部分は本州タイプの吊り紐であるが、中にごく僅か九州タイプのものが存在する。遺構出土のものが無く、一括性が不明であるので時期比定に困難さを感じるが、共存する陶磁面などから本州タイプの吊り紐を持つもの主体的な時期は13世紀から14世紀前半と考えられる。問題はこの後の時期である。残念ながら資料が少なく現状では推定の域を出ないが、14世紀後半から15世紀前半の間に東九州にいわゆる「九州タイプ」の吊り紐が出現したと考えたい<sup>104</sup>。そして、現状では門前遺跡はその直前の様相を示していると考えておきたいと思う。ただし、地理的な傾斜も考えられるので、時期だけではなく両者の問題と理解しておきたい。

### 平瓦

最も数の多い平瓦については、次の特徴がある。

- ①凸面は基本的に糸によるコビキ痕を残し、離れ砂の使用が認められる。タタキの痕跡は無い。
- ②凹面は「丁」にナデられているが、一部布目痕（報告分では4点）や離れ砂を認める事ができる。
- ③狭端凹面に幅1cm前後の面取りが認められるが、広端凹面には面取りは皆無である。
- ④凹面広端縁部に接して「コ」字状に赤褐色の鉄分を含む粘土が付着するものがある。これは、軒平瓦にもある。

⑤全長は平均30.4cm、広端部幅は平均22.6cm、狭端部幅は平均19.9cm、厚さは1.7cmである。

以上であるが、凹面に離れ砂があり、布目痕も完全にはナデ消さないことや、広端凹面には面取りはなく、狭端凹面に幅1cm前後の面取りをするという技法は法隆寺の編年では鎌倉時代の要素である。

ところで、④については軒平瓦にも認められるが、これは葺き土中の鉄分が沈着して平瓦凹面に付着し、結果的にいわゆる葺き足と葺き幅を示しているものである（第104図参照）。そこから平瓦の全長約30cmに対して、約11cmが葺き足（この場合きき足にもなる）ということになり、現代の本瓦葺きの葺き足の求め方の公式（（全長-60mm）÷2）<sup>105</sup>によって出される数字より1cm小さく、安全性は確保されている事がわかるがそれだけ多くの瓦が必要という事になる。



第104図 平瓦に付く痕跡

### 面戸瓦

三个体出土している。いずれも丸瓦を分割して作っており、いわゆる蟹面戸（大棟下部に使用）にあたるものである。形状は長方形のものや台形状のものがあるが、いずれも凹面側短辺側縁は幅の約2分の1ほどを削り込む。さらに、前者では凹面側縁を厚さの2分の1ほど削るが、後者は削らない。

法隆寺の編年によると、室町中期1期(1397~1436)になると両側縁に弱いふくらみを有するようになる。その点、門前遺跡のものは直線的でふくらみが無く、室町前期以前の様相を持つと言える。

### 製斗瓦

選別の結果、2個体しか確認できなかった。これは割られたものであれば破片が小さくなって選別から漏れてしまった可能性がある。確認した2個体はいずれも分割載縁で割られている。

鬼瓦 (第105図)

鬼瓦は個体数では最低でも11個体出土している。しかし、完形となるものは無いので、全体の形状は不明であるが、各鬼とも形相を違にしている。しかし、次の点が共通点としてあげられる。

- ① 全体的に立体的に作られている。
- ② 確認できるものは全て頭頂部から顎にかけて円柱状に中空(貫通)となる。
- ③ 口は中空である。ただし、貫通はしない。
- ④ 確認できるものでは、角が2本である。
- ⑤ 地板の形状は台形である。
- ⑥ 地板の上に別に作った目、鼻、口、牙などの部品を積み上げていき、鬼の顔を形作る。

これらの特徴の内①から④は、法隆寺の在銘品による鬼瓦の変遷によれば、「室町中期」(1397-1436)以降の特徴である。⑤は鎌倉時代後期からの特徴であり、⑥は手作りである事を示しており、型作りから手作りへという変化は鎌倉時代初期にある。九州の鬼瓦が本州のものと同じ、「中空化はしない」とされていた<sup>90)</sup>ことを考えると、門前遺跡の鬼瓦が「本州的」であるとはいえ、大和の変遷がそのまま地方で通用出来るものであるのかは不明である。<sup>91)</sup>しかし、全体的な立体化、それに伴う2本角の出現や中空化といった大きな流れは14世紀後葉〜末以降とすることは問題はなからうから、門前遺跡出土鬼瓦の上限は最大遡っても14世紀後葉とすることができる。

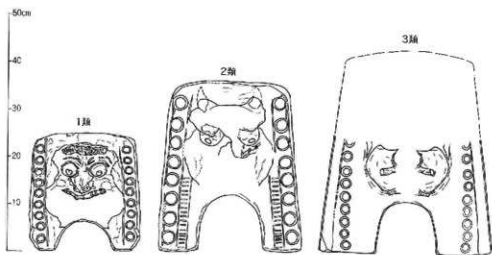
それでは門前遺跡出土鬼瓦の下限はいつだろうか。14世紀後葉から末に完成した立体的な鬼瓦(山本氏のいう「応永タイプ」の鬼瓦)は、以後江戸時代中期まで基本的には変化しない<sup>92)</sup>。この完成された「応永タイプ」の鬼瓦には、a. 脚端を反り返して蕨手状の巻き込みを付ける、b. 頭頂部の2本角の間に宝珠形や法輪、火焰宝珠、日像などを付ける、c. 地板の頂部に鳥雲のかかりを作りだし、各端面を面取りする、といった特徴を有する。これらの初出例を法隆寺で見ると、aは応永13(1406)年、bは応永11(1404)年、cも同じく応永11年と、すべて応永年間でも二桁代である。もちろん、応永年間以降の鬼瓦がすべてこれらの要素を持っているわけではないので一概には言えないが、これらのaからcの要素を持たない門前遺跡出土の鬼瓦は応永年間を大きく下る事はなからう。

また、これらは上に大きさと脚の形状によって3種類に分ける事が出来る。

1類: 全高が約25cmで、最も小型のもの。脚下端外側が、内側に向けて斜めに切り落とされている。地板の周囲にある円形刺突文は1列で、上部までは回らず、鬼との間に沈線を入れる。裏面の削り込みは取っ手部分のみである(277、278、279、287)。

2類: 全高が約35cmと中型である。脚部に施された円形刺突文の内側に、蕨状のもので直線的に梯子状の刺突文を付けるもの(280、282)と、円形刺突文を2列にするもの(283)、円形刺突文が1列のもの(281、289)がある。裏面の削り込みは地板周囲を2cm前後残して削り、取っ手部分を大きく抉り込む。

3類: 全高は不明であるが、2類より大型になるもの。脚部下端の幅が広く、円形刺突



第105図 鬼瓦の分類

(鬼瓦は反転表示している)

文の外側（地板周囲）が一段高くなっているのが特徴となる。地板が1類や2類と比べ薄く作っているため、地板周囲を残す裏面の削り込みは浅い（284、285、286）。

以上3類に分けられるが、これらは置かれた場所による違いと考えられる。1類は最も小型である事と、脚部の形状から隅棟の先端に付けられる隅鬼（くの鬼）と考えられる。3類は最も大型である事から大棟の両端に載せられた鬼瓦（大鬼）と考えられる。2類は隅鬼の上位に取り付けられる二の鬼や降り棟先端の降鬼の可能性が高い。1類から3類がそれぞれ4個体、5個体、2個体出土していることも、仮にすべて同じ建物に葬かれていたとするならば数は矛盾はしない<sup>100</sup>。

### 鳥衾

鳥衾先端に取り付ける瓦当部分は、確実なものは1個体確認、またそれに続く変部は4個体出土している。それらによると、次の特徴を有する。

- ① 背の反りが強くない。
- ② 瓦当外縁上半部の幅が僅かに広い。
- ③ 顎が短い。

法隆寺の瓦では、室町時代中期1（1397～1436）になると背の反りが強くなり、瓦当外縁部の上半部の幅が広い例が主体となる。さらに瓦当外縁部を丸く仕上げたり、瓦当頂部に幅8mmほどの平坦面を作り、顎が長くなるとされる。これらの特徴からは門前遺跡出土の鳥衾の形状は、室町時代前期以前の特徴を有していると言える。

### 雁振瓦

計10点図示した。基本的には同様の作りで、同様の形を呈している。幅20cm、長さ25cmほどとやや平瓦より短い板状の粘土を型に押し当て、「衾」状の屋根の盛り上がりを作る。その際、玉縁門面に布目か及ぶものがあるので、丸瓦と同様玉縁部も一体として形成したことがわかる。その時ついた型の跡が同一のもの（鳥衾80、308、雁振瓦314、316）がある。この4個体の内、玉縁のある3個体では面取りの幅や削り方が同一であり、同一工人によるものと判断できる。他の個体でも最低2種類の面取りのタイプがあり、最低二人の工人が雁振瓦の製作に携わった可能性が高いことがわかる。

全体的な特徴として、面取りの部位は、胴部の凹面脚部両側縁と玉縁と反対側の側縁（玉縁と重なる部分は大きく削り込む）、玉縁の凹面三辺であり、1点のみ胴部玉縁側凹面の側縁も面取りする。いずれも凸面側の面取りはない。また、胴部の横断面の反りはごく僅かではあるが認められる。

法隆寺の編年によると、鎌倉期は各端側縁の面取りは認められず、「室町前期1（1333～1361）」から玉縁凹面側縁の面取りが始まり、「中期1（1397～1436）」には凸面前・後端を除く各端側縁に面取りが施される。それからすると、門前遺跡出土の雁振瓦は「中期1」以前の様相を持つと言える。

### 瓦のまとめ

瓦の特徴を種類毎に見てきた。大分県内ではこれほどまとまって中世瓦が出土した事は無く、散的検討に耐えられる遺跡は数少ない。そのような状況の中で、時期を決定する際に地域産を考慮に入れる事が困難であったため、中央、特に法隆寺の編年観に頼らざるを得なかった面があるのは否めない。しかし、門前遺跡出土瓦がほぼ一時期の所産である事は、他の陶磁器などの遺物の年代観がそのまま瓦の年代にはほぼストレートに反映出来るという大きな利点を有することを意味し、遺物同士の年代観のクロスチェックが可能であったことから、逆に中央の編年がこの地にどこまで普遍性を有するかの検証にもなった。

その結果、瓦と一緒に出土した陶磁器で示された15世紀前半代という年代観は、門前遺跡出土瓦を総体として見た時14世紀後半～末以降で下っても15世紀前半代であるという、法隆寺の瓦による年代観でほぼ問題ないことが明らかになった。しかし、鳥衾や雁振瓦の面取りのあり方、さらに平瓦の瓦当部接合技法や丸瓦凹面の吊り組ははやや古い様相を見せるなど若干の異同が認められる。特に、平瓦瓦当部の「文様面・顎貼り付け技法」

	豊前	豊後
13 世 紀	<p>(府) 珠点文 (府) 劔巴文</p>	
14 世 紀	<p>(府) 蓮華唐草文 (府) 珠点文 (府) 劔形唐草文 (府) 蓮華唐草文</p>	<p>(口) 珠点文 (口) 蓮華唐草文 (口) 蓮華唐草文 (口) 蓮華唐草文</p>
15 世 紀	<p>(大) 蓮華唐草文 (大) 劔形唐草文 (府) 蓮華唐草文 (府) 蓮華唐草文 (府) 蓮華唐草文</p>	<p>(門) 蓮華唐草文 (門) 蓮華唐草文 (門) 蓮華唐草文 (門) 蓮華唐草文 (口) 蓮華唐草文</p>

(丸)…券動寺  
(大)…大衆寺  
(府)…大友府内城下町跡  
(門)…臼杵石仏群遺跡  
(門)…津久見門前遺跡

(各報告書及び山崎氏註33文獻より引用した。)

〈上下の關係が必ずしも密着な時期の前後關係を表すわけではない〉

第106図 大分県内出土中世瓦瓦当集成 (13世紀～15世紀)

豊前地域では、古代から続く宇佐宮神宮寺の券動寺において、13世紀から15世紀にかけて、様々な建物に瓦が葺かれる。鎌倉時代後期には地珠文や劔巴文が見られ、14世紀になると蓮華唐草文が出現し、15世紀代には宝珠唐草文となる。宇佐宮大宮司の菩提寺であった大衆寺も、応永期の追宮に伴う「大衆寺」銘の瓦と宝珠唐草文が出土している。それに伴う軒丸瓦は、珠文が2つと3つの単位で並ぶ、門前遺跡2 A類と同様のものである。

豊後では、臼杵石仏群遺跡出土の地珠文軒平瓦が、当初考えられていた13世紀前半から、山崎信二氏により技法的観点から1300年前後に置く案が示されている。今回はそれに沿って、下らせて考えた。その後石仏群遺跡では蓮華唐草文や劔形唐草文があり、15世紀には中心飾りのない唐草文が置かれる。豊後の中心であった府内では徳治元(1306)年の万寿寺創建を契機に中世寺院の建立が始まる。今のところ蓮珠文軒平瓦が古く、蓮華文軒平瓦は唐草文が連続しておらず、やや下るものと考えられる。15世紀には宝珠波状唐草文がある。津久見門前遺跡の軒平瓦は中心飾りがなく、その点は臼杵石仏群遺跡の唐草文軒平瓦と共通し、軒丸瓦の珠文の並べ方は応永期の大衆寺のものとの共通点と有する。



の存在や丸瓦の吊り紐痕からは、上記したように14世紀初頭に位置付けられる。しかし、各部の面取りの様相などの他の要素からは14世紀初頭に遡ることは考えにくく、平瓦瓦当部接合や丸瓦の製作にあたっては、古相を残していたとせざるをえない。100年近くにわたって古い技法を保持していたものであろう<sup>94</sup>。その要因については大友府内城下町でのあり方など周辺部の状況がさらに明らかになった段階で解明されるであろう。

ところで、丸瓦吊り紐痕については北部九州や山口の大内氏築山跡では「九州タイプ」とされる多条のものがあり<sup>95</sup>、博多では南北朝初期にはすでに出現するなど本州と異なる動きがあった。東九州には先述したように遅れて入ってくるものと考えられ、また独自の展開を遂げた可能性がある。

このように、吊り紐については本州のあり方をストレートに持ってくるにはやや問題があることがわかる。しかし、吊り紐の問題はあるにしても、鬼瓦の様相など瓦総体として見た場合、門前遺跡出土瓦は「本州的」であるといえる。むしろ、「九州的」とされるものが太宰府を中心とした地域性を示している可能性が高く、大友隷下の東九州ではその影響を受けながらも、中央の動きと歩調を合わせていたのではなかろうか。ただ、門前遺跡の軒平瓦当文様は独自のものであり、直接的な影響があったとは考えづらいところもある。山崎氏も白件の瓦を考える際に指摘しているように<sup>96</sup>、四国の様相が明らかになれば、さらに議論が深まるものと期待される。

## 2) 遺跡の存続時期と時期区分

門前遺跡からは1)で触れたような遺物が出土している。それらを総合的に考えて、遺跡として何時から何時まで存続していたのかを考えてみたい。

まず、地鎮の遺構と考えられるS-2の時期が重要となる。前記したようにS-2は内部に鋸状の鉄器を納めた状態で備前焼甕が土坑に埋置されていた。S-2が地鎮の際の土坑であるとすれば、この地の造成を行い平坦地を作り出した後、そのほぼ中央部に大甕を埋置したことになり、年代も遺跡の初現年代を示す事になる。備前焼甕の特徴から14世紀後半代に位置付けられるだろう。

この遺跡から出土した最も古い土器はA類で、14世紀を中心とする時期のものであるが、組み合う小皿などから15世紀前半代のもので考えた。陶磁器では、1点同安窯系の青磁皿が出土しているが伝世品かイレギュラーな混ざり込みと考えられ、総体としては15世紀前半代の様相を呈するものであった。また、出土した銭貨で鑄造年が最も新しいのは初鑄が1408年の永楽通宝であり、流通年を加味して15世紀前半代にそのピークがあると考えられる。

そして、出土した瓦類は14世紀初頭の技法を一部残しながらも、その製作は14世紀末から15世紀初頭と考えられる。S-2で示された14世紀後半という年代と、瓦葺き建物の創建時期が微妙にかみ合わないが、遺跡の開始年代と瓦葺き建物の創建が必ずしも同時でない可能性もあるし、また遺物の実年代がどこまで厳密に詰められるのかという問題もあるのでここではこれ以上詰めることは不可能である。

その後、土器B形式や青花C群など15世紀後半から16世紀前半の遺物は、幾つかの遺構から出土している。特に池状遺構からは若荷底の青花皿の小破片などが出土しており、この遺構が性格上埋まりきらずに後世の遺物が入る余地があったものと考えられる。

また、S-3やS-5、S-6からは土器C形式が出土し、その他焼き塚の蓋も出土するなど16世紀中葉から16世紀末にかけてこの地が再び何らかの施設として利用された事を示している。

さらに、表上中や表塚ではあるが18世紀後半以降の近世陶磁器が出土している。

よって、遺跡の変遷を考えるための時期の設定を下記のように行う。

- |      |                                  |
|------|----------------------------------|
| I期   | この遺跡出土遺物の大半を占める時期で、14世紀末から15世紀前半 |
| II期  | 土器B形式や青花C群で示される15世紀後半から16世紀前半    |
| III期 | 土器C形式で示される16世紀中葉から16世紀末          |
| IV期  | 18世紀後半以後 <sup>97)</sup>          |

### 3) 遺構の性格

門前遺跡は、山の斜面に人工的に平坦地を作り出して形成された遺跡である。そして、その後畑地として利用されたために、平坦地をやや広げている。そのため、山際を削り込むと同時に、平坦面の地下げ(削平)もおこなったはずである。そのため、特に調査前に一段低かった南半分は大きく削られている可能性が高く、残存している遺構が全てであったとは言えない事をまず確認しておきたい。特に、存在したはずの礎石は全く残存していなかった。

調査ではSD-1とS-1からS-14までの遺構が確認された。その他、火鉢を直接埋め込んだものがある。

SD-1は背後の山と寺域を隔する溝である。溝は結界を示すこととともに、水や草の進入を防ぐという実用的な面が大きかったと考えられる。溝は南北に延び、中央で西側(山側)に分かれているが、それによって囲まれた北側の一角ではS-6しか遺構が確認されず、後述のようにS-6がⅢ期のものであることを考えれば、この部分は15世紀段階では木だ山であったと考えられる。その後、平坦地として取り入れられたものであろう。また、特に溝の南半部分の埋土中には焼土や炭が多量に含まれており、S-10が火熱を受け、焼土化した面が広がっていた事と合わせ、火災があったことが想定される。

S-2は鋤状の鉄器を納めた1期の偏前施瓦を埋覆した土坑であるが、地鎮にかかわる土坑である可能性が高い。

S-4はⅠ期を中心としつつも、Ⅱ～Ⅲ期の遺物を若干含む池である。ただし、池に導水する施設は確認できなかった。地上部で何らかの施設が構築されていたのか、削平を受けたのか。石垣は南半部分にのみ確認された。池の水はオーバーフローして東側の谷に流れたものと考えられる。

S-6は、Ⅲ期に属するもので、C形式の土器が出土している。平面形状などから土壇の可能性がある。

S-13とS-14は焼土坑である。S-13はほとんど床面しか残っていないが、構造的には両者ともほぼ同様の構造を持つと考えられ、同じ機能を有した遺構と判断できる。しかし、何が焼かれたのかについてはそれを直接示す遺物がなかったためわからなかった。S-14に隣接するS-5、S-13に隣接するS-1はそれぞれ埋土に焼土壁が見られ、焼土坑の処理に使用された可能性が高い。S-5からはⅢ期の土密が出土しており、焼土坑も同時期に属する可能性がある。

ところで、瓦葺き建物は礎石があったはずであるが、確実に礎石としてもよい石は残存していなかった。そのため、山とは溝で囲まれ、池を配した15世紀前半代に存在した瓦葺き建物は場所や規模がわからなかった。しかし、S-2が地鎮祭の痕跡であるとすれば、瓦が廃棄された斜面に近いことや、池が北側にあることも合わせ、調査区南半に建っていた可能性は高いだろう。

### 4) 門前遺跡の性格

それでは、次に門前遺跡の性格について考えてみたい。門前遺跡の場所は「寺屋敷」と呼ばれ、「麻裡」、「本堂」があったとされる場所も地元で伝えられるなど、寺院跡の可能性が高い遺跡である。

ところで、この地には地元では「朝日寺」という寺があったとされていた(第4節史料九)<sup>99)</sup>。史料的に文祿2(1593)年には「朝日寺」が存在したのは確実(第4節史料四)であるので、文祿期を含む可能性の高いⅢ期は「朝日寺」と呼ばれた寺院に係わるものであった可能性が高い。しかし、調査区内では遺構として寺院を示すものは一切無く、この期に属す瓦なども無いので、本格的な堂宇が調査区を設定した平坦地に建てられていたとは考えにくい。調査区外に展開したのか、「朝日寺」そのものが草堂のような小規模なものであったかどうかであろう。

それではⅠ期やⅡ期も「朝日寺」の遺構であろうか。斜面に大量に瓦を捨てたのが何時の時期なのかでⅡ期の評価が変わってくる。瓦に混じって出土する遺物の圧倒的多数はⅠ期のものであり、遺物の奥縁に伴って瓦類(おそらく柱材なども一緒に運搬されたと思われる)が同時に運搬されたと考えられる。しかし、僅かに1点づつではあるがⅡ期とⅢ期を示す土層B、C形式や瓦質の火鉢でもⅢ期に属すると考えられるものがあり、時間を置いて運搬された可能性も残されている。平坦面の池(S-4)や溝(SD-1)からⅡ期の葺花C群が僅かに

出土しているとはいふものの、Ⅱ期の明確な遺構は無く、Ⅲ期にならないと平坦面に遺構が形成されない事を考えれば、Ⅲ期の遺構形成に伴って、平坦面の確保のために瓦が廃棄（片づけ）されたという考え方もできなくはない。そうすれば、Ⅱ期は依然として池や溝などはその姿を留めていたとはいえ、壊れた建物がそのまま放置されていた事になり、Ⅱ期の寺院の存在は否定される事になる。

そうすれば、Ⅰ期の寺院が直接「朝日寺」と関係を有していたのかどうかはわからなくなる。むしろ100年以上の空白期間があった可能性を考えれば、別の寺院とした方が良くであろう。後述するように隣接する禪宗寺院である解脫園寺の創建が寛安7(1374)年(「明治13年寺院傳堂明細帳」)とも至徳2(1385)年(「白杵小鑑増補」)とも言われているのは、14世紀後半から末にかけて、この地域で造寺活動が行われたことを示唆しており、門前遺跡の寺院もその一端を示すものとして理解しておきたい。

また、「朝日寺」と想定されるⅢ期は16世紀末までであり、Ⅳ期との間に遺物の無い時期があることから、「朝日寺」が廃寺になるのも、文禄年間を大きく下る事はなかろう。

ここでは、Ⅱ期は不明ながらもⅠ期とⅢ期とともに、別々の寺院に係わる遺跡であった可能性が高いというを確認しておきたい。

### 5) 津久見の中世と門前遺跡

前節までに出土遺物から見た門前遺跡の時期や遺跡の性格について検討を加えてきた。次にここでは特にⅠ期とⅢ期の門前遺跡を更に理解するために、青江川下流域を中心とした津久見地域の中世の歴史的状况について考えてみたい。従来、津久見の中世については文書史料からしか語られる事は無かった。しかし、津久見を本貫地とした津久見氏が戦国期後半に絶え文書が伝わらず、まとまった史料としては唯一津久見氏と行動を共にした茶師寺氏に伝わった文書群があるだけで、特定の事件を除いては豊かな歴史叙述が出来なかった。

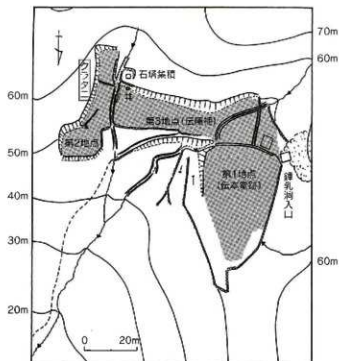
更に、近世になると津久見地域は白杵藩領と佐伯藩領に二分され、当地域を統一的に捉えるのを困難にしていたが、間違いなく中世までは「津久見衆」と呼ばれた水準を中心として、一つの地域を形成していた。

そこで、以下では文書史料以外で確実に中世に遡る、主に石造物や城館といった遺物、遺構に依りながら津久見地域の中世について考え、門前遺跡との関連性を探ってみたい。

#### a. 石造物に見る青江川下流域

青江川中、下流域には中世に遡る石造物が多い。今回は悉皆調査が出来なかったので、青江川下流右岸の門前遺跡周辺に絞って見てみたい。

門前遺跡からは第2節4)で述べたように五輪塔の部品が出土しており、さらに調査区外にはかつて周辺の畑から出たという石造物が積まれている。この中には、中世に遡る無縫塔、空図印塔がそれぞれ最低1基含まれ、他は60基あまりの五輪塔である。つまり、門前遺跡の寺院に対して、供養塔としての五輪塔が奉納され、さらに寺院の僧侶の墓が存在した事を窺う事が出来る。ただし、発掘調査によって原位置を保って出土したものがな



第107図 寺域推定図

近代以降の畑の造成で周辺部はかなり改変を受けているが、瓦の散布や造成の状況等から、中世の寺域は網掛け部のように復元できる。谷間を囲む様に寺域が広がっていたものと思われる。(等高線は現況図から復元したもの)

いで、明確な判断は出来なかった。

一方、周辺部に目をやると、門前道路の東側にある丘陵を挟んで隣の谷にある小字「井無田」には優秀な石造物が点在する。現状では第108図のように三ヶ所で確認できる。a地点は通称「塔の原」と呼ばれ、五重の層塔（第109図左）がかつてあった。現在は近くの世尊寺境内に数十年前に移設されているが、移設の際に下部に漆喰の塗られた大きな箱状の空間があったという<sup>93</sup>。現在は、基礎の上に石幢の産部と中台が狭み込まれている（図では省略）。基礎は現状では無い。相輪は上半部が欠けているが、基礎から上では概ね高さ3mに復元できる。基礎には下半分を浮き彫りにし、上部を線描きする格狭間をそれぞれ一つずつ表す。窓は各層とも煎豆根となり、上部に行くほど幅が狭くなる。相輪は、格狭間の彫られた露盤、反花、蓮花、九輪となる。

県内の層塔の造立年代は鎌倉時代から南北朝期であるが、この五重の層塔はその中でも新しい時期のものであろう。

b地点には比較的大きな五輪塔が七基ある。50年ほど前に山肌が雨で流され、埋まっていたものが露出したという。位置から考えて墓地の可能性がある。戦国期末まで下るものではなく、室町時代のものであろう。

c地点には宝篋印塔（第109図右）1基と五輪塔7基がある。宝篋印塔は隅飾突起は大型で、やや外側に傾きながら開く。基礎は三段になるが、下の二段は一石である。上の基礎には格狭間を彫り窪めて表現している。塔身には金剛界四仏の種子を菊形彫りで刻み、笠の隅飾突起には線刻で線彫りが見られる。笠に載る露盤は蓮子文を刻む。銘文は無いが、隅飾突起の様相から室町時代のものであると考えられる。

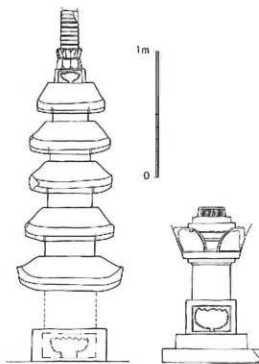
このように、現在解脱園寺や世尊寺から望む事の出来るかつての「井無田村」には、南北朝期から室町期に至る優秀な石造物が集中する。ここは幅150m、奥行き300m近いほぼ平川な谷部であり、明治期の字図では集落が谷の西側奥に形成されていた。この集落の周囲にこれら石造物が点在することは、かつてここが青江川下流域の中核を形成する地区であり、かつ後述する「赤河内」の中でも中核的な地域であったことを示している。この集落こそ「津久見」の地を名字の地とする津久見氏の本貫地ではなかったろうか<sup>94</sup>。その背後の山に後述のように山城遺構が存在する事や、禪宗寺院が集中することもそれを示している。

#### b. 「赤河内」と宗廟の館

門前道路のある青江川流域から津久見川流域の江戸前期の状況を見ると、慶長6（1601）年までに、元々白幡領であった「佐伯庄内保戸島赤河内床木辺」が佐伯毛利領になっている<sup>95</sup>。この中には青江川下流右岸の養圃屋村、井無田村が含まれており、「赤河内」には津久見川流域のみでなく青江川下流域右岸の地も含まれていた事がわかる<sup>96</sup>。その後、白幡領であった奥河内村・鬼丸村と、佐伯領となっていた養圃屋村の交換が行われ、領域は一応確定する<sup>97</sup>。このように、近世の初頭段階では青江川下流域右岸と津久見川下流域はともに「赤河内」と呼ばれる地域として一体的に把握されていた。現在は津久見川下流域にあり、継久年間創建といわれ、「赤（圓伽）」の地名を取ったという赤八幡社は、もと「警固崩ヶ代官屋敷」<sup>98</sup>にあったとされることも<sup>99</sup>、警固屋あたりが「赤河内」に含ま



第108図 石造物位置図



第109図 石造物実測図

れていた事を示すと同時に、むしろ青江川下流右岸の地が、「赤河内」という地名発祥の地であった可能性も浮かんでくる<sup>99</sup>。その「赤河内」に居を構えたのが大友宗麟であった。

大友宗麟は戦国末期の天正10(1582)年頃に臼杵から隠棲のために津久見に来て、天正15(1587)年に死去するまで基本的に津久見に居住する。この地は息子であった大友義統の直轄地であり、宗麟は義統から津久見の地を譲り受けた。その宗麟が住んだ地こそ「津久見赤河内天徳寺」であった(第4節史料五)。また、「大友松野系図」によると、宗麟は「赤河内海辺岩屋茶亭において卒す」(同史料八)とあり、フロイスの「日本史」では宗麟は邸宅で死亡し、教会で葬儀が行われた後、邸宅の庭に葬られた(同史料七)というから、「津久見赤河内」の「岩屋」の内に宗麟の邸宅と墓所があることになる<sup>100</sup>。その宗麟の邸宅は現在の「大友公園」にあったとも言われている<sup>99</sup>。この地は、旧岩屋村に属し、南東から延びてきた丘陵の尾根が平野部に突き出す部分にあたる。周辺との比高差は約30mあり、周囲は大部分が急崖である。残念ながら上部の平地地は大規模に公園として改変されており旧状を窺い知る事はできないが、北側斜面部において遺構が確認できる(第110図)。

北側に突き出した尾根の基部に、幅12mで、曲輪側からの深さ8~10mという大規模な堀切を入れているのが確認される。このような大規模な堀切は、豊後地域の他の城郭ではほとんど見る事は出来ない<sup>101</sup>。当時、海に向け延びていたと考えられる尾根を切断する事によって、海上からの接近を防いだものであろう。さらにこの上側には一段の腰曲輪が認められ(第110図のa)、その一つには井<sup>1</sup>がある。また、現在東側の丘陵との間(第110図のb)は道が通っているが、ここも本来は堀切があった可能性がある<sup>102</sup>。西側に延びる幅の狭い尾根には遺構は認められない<sup>103</sup>。そうすると、現況と旧字図及び公園整備前の地形図(あまり細かいところは表現されていない)から判断すると、丘陵頂部は東西40m、南北20mほどで、そこから2~3段の腰曲輪状の平場が取り巻き、全体としては東西70m、南北50m程の城域を確保し、西側の尾根を除く尾根を掘り切った、周囲を急崖で囲まれた館城とみることが出来る。

堀切の大規模さや「岩屋」という地名からいっても、ここに大友宗麟の館があった蓋然性は高からう。そうであれば、それまでの居城であった海に突き出した島状の臼杵の丹生島城とよく似た立地を選び、規模は小さいものの頑丈な防備の施された館城に住んだことがわかる。それは、天正6(1578)年の日向攻戦を受けて豊後国中が危機意識の高まった中で津久見遷移であり、居所の防壁を頑丈にするのは当然のことではあっただろう。

#### c. 津久見の中世寺院

フロイスの「日本史」<sup>104</sup>によれば、天正11(1583)年の頃、津久見には寺が少なくとも三ヶ所あった(第4節史料七)。熱心なキリシタンであった大友宗麟は津久見に居住するに際して、これら三ヶ所の仏像や経本などを悉く焼却した。戦国末期に存在したと考えられる寺院としては、前記した解脱園寺、もと天台宗といわれ現在浄土真宗の西教寺、門前遺跡の場所にあったとされる「朝日寺」、第4節史料五に見える「大雄禪寺」<sup>105</sup>、近尾村にあったと考えられる「泉近寺」<sup>106</sup>などがあり、慶長年間には「大土院」、「めうこうあん」、「大宝寺」(いずれも松崎村や門前村に田畑を有していた)なども確認できる<sup>107</sup>が、いずれが三ヶ所に該当するのかは判断できる史料がない。

ところで、第4節史料五、六に見るように、大友宗麟の意向(「官命」、「上意」)で小園村の解脱園寺門徒や警固屋村の「大雄禪寺」の門徒が一度キリシタンになったことがわかる。大雄禪寺が現在の「大雄山世尊寺」であれば、この地域で大友宗麟による改宗事業が進んでいたことを窺わせる<sup>108</sup>。当然、この地にあった「朝日寺」も何らかの影響を受けた事は想像に難くない<sup>109</sup>し、「赤河内」に隣接するこれら解脱園寺、世尊寺(大雄禪寺?)、朝日寺の三ヶ寺がフロイスの「日本史」にてでくる三ヶ寺の可能性もあるであろう。津久見川流域では中世にまで遡る有力な寺院は確認できない事も、「赤河内」に隣接する地にあるこれらの三ヶ寺が該当する可能性を示唆するものである。

#### d. 城郭から見た島津軍の津久見侵襲

天正14(1586)年になると、薩摩の島津氏が北上し、豊後国内に侵攻する。この津久見も宗麟がいたことによ



第110図 「大友公園」 透構図 (S=1/2,000)



第111図 大友公園周辺小字集成図 (S=1/4,000)

(字図は津久見市役所保管の明治21年調製のもの)

り島津平の攻撃を受ける事になる。その際、葉師守兵庫助は「津久見要害」にいたが、「不慮之成立」により臼杵の丹生島城へ移って立て籠もることになった(第4節史料二)。また、フロイスの「日本史」では、宗麟が島津軍の米俵を運んで津久見から臼杵へ「出発するやいなや、ただちに教会も、そして同主(宗麟)の邸もすべて掠奪された」と記される。つまり、「不慮之成立」とは島津軍の米俵が急で、宗麟が臼杵に移らざるを得なかったことを指していると考えられる。これより、本来は「津久見要害」が津久見を守る最重要城郭として位置付けられていた事がわかる。また、津久見では「四浦合戦」という海戦が行われたと近世の地誌には記されている<sup>98</sup>。四浦半島には久保泊城があり、そこに四浦の諸氏が

籠もり、島津軍と交戦したという。しかし、同時代史料には記載が無い。

ところで、臼杵市が保管する絵図(近世臼杵藩主稲葉家に伝わった絵図)<sup>99</sup>の中に、天正14年の島津氏豊後侵攻時のと思われる激戦地や城、陣などを記した藩領絵図が存在する<sup>98</sup>。青江川下流域をトレースしたも

(第112図)を見ると、津久見川下流域との境界をなす山の稜線に「物見山」二ヶ所と「古陣所」が一ヶ所あり、その付近で「小セリ相(小竈り合い)」があったことが記されている。さらに解脱園寺の付近と小園で「大勝負」が行われたことがわかり、青江川下流域で島津軍侵攻時に激戦が行われたことが推測できる。

この内、「古陣所」や「物見山」があるとされる山の稜線には第113図のa、b地点に城郭遺構が残されている。a地点には10m四方ほどのあまり明確に削平をされていない郭があり、そこから三方向に伸びる尾根をそれぞれ幅7~8m、長さ20~30mの堀切で遮断している(第114図上)。堀切は上郭側からでは4~5mの深さがあり、かなりの急傾斜をなしている。また、b地点には一ヶ所の堀切がある(第114図下)。幅3mで深さ1.5m、長さ23mほどの直線が郭壁を掘り切っている。これらは絵図からそれぞれ「古陣所」とされる場所と「小セリ相」があった場所に比定できる<sup>95)</sup>。特に前者は「物見山」でもあり、津久見川と青江川の両下流域を見下ろす事が出来る好立地である。

このように、津久見川流域と青江川流域を隔てる山の稜線で攻防が行われた事が遺構からも窺える。宗麟の所在地が津久見川下流右岸に想定できるので、青江川下流域から稜線越えて津久見川流域へ至る島津軍をここで阻止したことが想定できよう。ところで、津久見川右岸の丘陵上には現状で城郭遺構は確認されていないので<sup>96)</sup>、「古陣所」の遺構が文書に出てくる「津久見要害」の可能性が高い。本来は津久見氏の諸城であったと考えられるが、島津軍侵攻の折にも「陣所」や「物見山」として機能し、薬師寺氏などが立て籠もったのであろう。

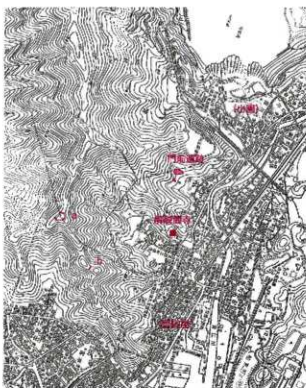
#### e. 小結

ここまで、遺跡周辺に広がる中世の遺物や遺構によりながら中世の津久見について見てきた。そうすることによって、従来あまり注目されてこなかった青江川下流域の重要性が浮かび上がり、さらに天正後半期の大友宗麟の館がほぼ比定できた。そこで、まとめとして門前遺跡の1期、2期が、それらとの関連の中でどのように位置付けられるのかを述べておきたい。

14世紀後半(特に14世紀末)という門前遺跡の開始時期は、門前遺跡の東約300mに位置する解脱園寺の創建年代に近い事が注意される。さらに現在の解脱園寺の寺地にある、「簡淡」という重要な地名<sup>97)</sup>が門前遺跡の地にもある(第107図参照)事を考えれば、15世紀中頃までに廃絶した門前遺跡の寺院が、解脱園寺そのものであった可能性も考えられるのではなからうか。井無田(現在の解脱園寺の門前に広がる地区)では、「解

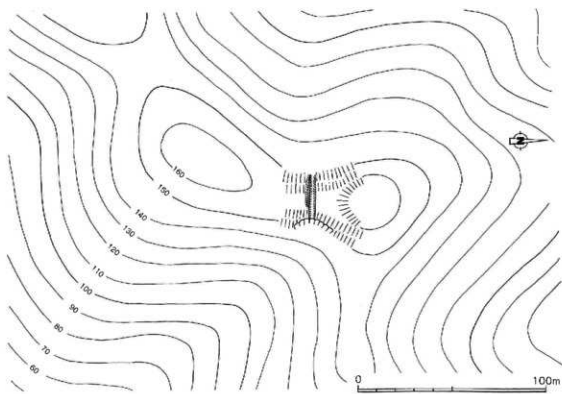
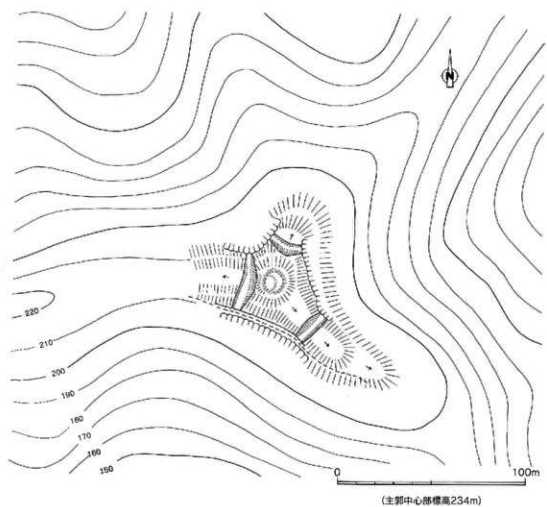


第112図 臼杵藩領内絵図(部分)トレース図



(第112図に方位と縮尺をはき合わせている)

第113図 稜線における遺構の配置(約1/23,000)



第114図 城郭遺構擴張り図 (上. a地点. 下. b地点)



脱開寺は門前から来た」という言い伝えがあり、また、現在の解脱開寺には無縫塔をはじめとした中世に遡る石遺物が全くなく、逆に門前遺跡周辺には無縫塔などがあることもそれを示しているように思える。そうすれば、在地武士団の津久見衆などの強いつながりが想定される。

次に、創建後数十年も経たない15世紀中頃までにこの地で瓦葺き建物が施されたのは何故であろうか。その際、関連が考えられるのが、青江川の最上流域にある姫岳<sup>90</sup>で行われたいわゆる「姫岳合戦」である。この「姫岳合戦」は永享7（1435）年に行われた前巻後回守護の太田持直と、それを討伐しようとした幕府側との攻防戦である。持直は将軍義教によって守護職を奪われたが、なお持直を慕う多くの国人が姫岳に立て籠もり、大内持世を始めとする中国・四国勢を中心とした幕府軍に長期間にわたって抵抗をした（翌永享8年に落城）。その中心的な役割を果たしたのが水軍である津久見氏や茶師寺氏、實嶋氏といった津久見衆であった。この姫岳に長期間にわたって立て籠もり得たのは、海岸部からの物資の補給ルートが確保されていたからとされているが<sup>91</sup>、特に海に抜ける最短ルートである青江川添いのルートは重要であったと考えられる。そのルートの入口部（河口部）にあるのが門前遺跡の寺院であった。姫岳を攻撃する四国勢の河野氏は農園屋に上陸して、青江川上流域の姫岳の麓にある「松皮村陣野及び河原内」に陣を置いたという<sup>92</sup>。この事から、この青江川ルートを巡る攻防があったことが推測できるだろう。

門前遺跡では大塚に谷に捨てられた瓦、また施されたままで、さらに壺金具がついた状態の錠前が出土した。さらに溝には焼土が堆積するなど火災にあった状況が確認されている。このことは、単に寺が無住になって廃絶したというより、突発的な出来事があったと示している。現状では史料的に確かめることができないが、「姫岳合戦」に伴う戦乱の中で、幕府側との攻防で焼き討ちにあった可能性を指摘しておきたい。門前遺跡の寺院が簡記したように津久見氏など津久見衆がかかわる寺院であったとすれば、物資供給上の拠点の一つを失う事になろうし、さらに精神的な支柱を失う事にもなるであろう。

なお、15世紀後半の太田政親の代に「津久見合戦」が行われており、薬師寺弥四郎と薬師寺新六に政親から感状が出されているが、合戦の具体的な内容は不明である。しかし、15世紀後半まで門前遺跡の瓦葺き建物の廃絶が下る事はなからうから、一応除外しておいてもよからう<sup>93</sup>。いずれにしても、門前遺跡のⅠ期については、津久見氏の動向と密接な関係を有すると考えられる。

また、Ⅲ期に関しては門前遺跡は4)で記したように「朝日寺」と呼ばれた寺院と考えられる。この朝日寺は、大友宗隆の津久見居住にあたり、前記したように仏像や経巻が焼かれた可能性もあるが、確証は得られなかった。しかし、門前遺跡のⅢ期については大友宗隆の動向と関係を有する可能性が高い。

ところで、朝日寺は文禄年間<sup>94</sup>の檢地の際差し出した史料（第4節史料四）が解脱開寺に残り、さらに江戸期の元文元（1737）年には解脱開寺が朝日寺跡地（この段階では廃寺）を新地畠として願い出るなど、解脱開寺との関係が深い<sup>95</sup>。おそらく文禄2年以降、あまり時間を置かず朝日寺が廃寺となるに及び、寺領や寺物も解脱開寺に移されたものであろう。

#### 6) 旧字図にみる旧青江村（第115、116図参照）

次に、中世に直接遡る史料ではないが、近世の土地利用状況を反映しているとされる明治年間<sup>96</sup>に作成された字図から、青江川下流域の状況を探ってみよう。津久見市役所税務課には、明治21年調製された「製作者福岡縣遊賀郡上底井野村伊藤興」の判が押された字図（以下「旧字図」と呼称）が保管されている。旧下青江村の旧字図は厚手の和紙により裏打ちをされ、2分冊された冊子になっている。後の分合筆のため書き込みや貼り込みはあるものの、概ね製作当時の状況を復元する事が可能である。

旧下青江村は青江川下流域に広がる河川沿いの平野部を中心とした地域で、近世の「警固屋村」、「松崎村」、「門前村」、「追籠村」、「岡村」、「小園村」が明治8年に合併して成立した。旧字図を見ると、これらの江戸期の村に対応するように「宅地」の集中する地域が点在する。これらを江戸期の村の中心地（以下「ムラ」と呼ぶ）とすることは問題なかろう（第115図中の四角で囲った地名が想定される江戸期の村名）。これら旧村のムラは水田地帯の周辺部に点在しているのがわかる。

ところで、慶長期の村名<sup>97</sup>をもとに、現在の地名と比較して江戸期の村を復元してみると、青江川流域では中、

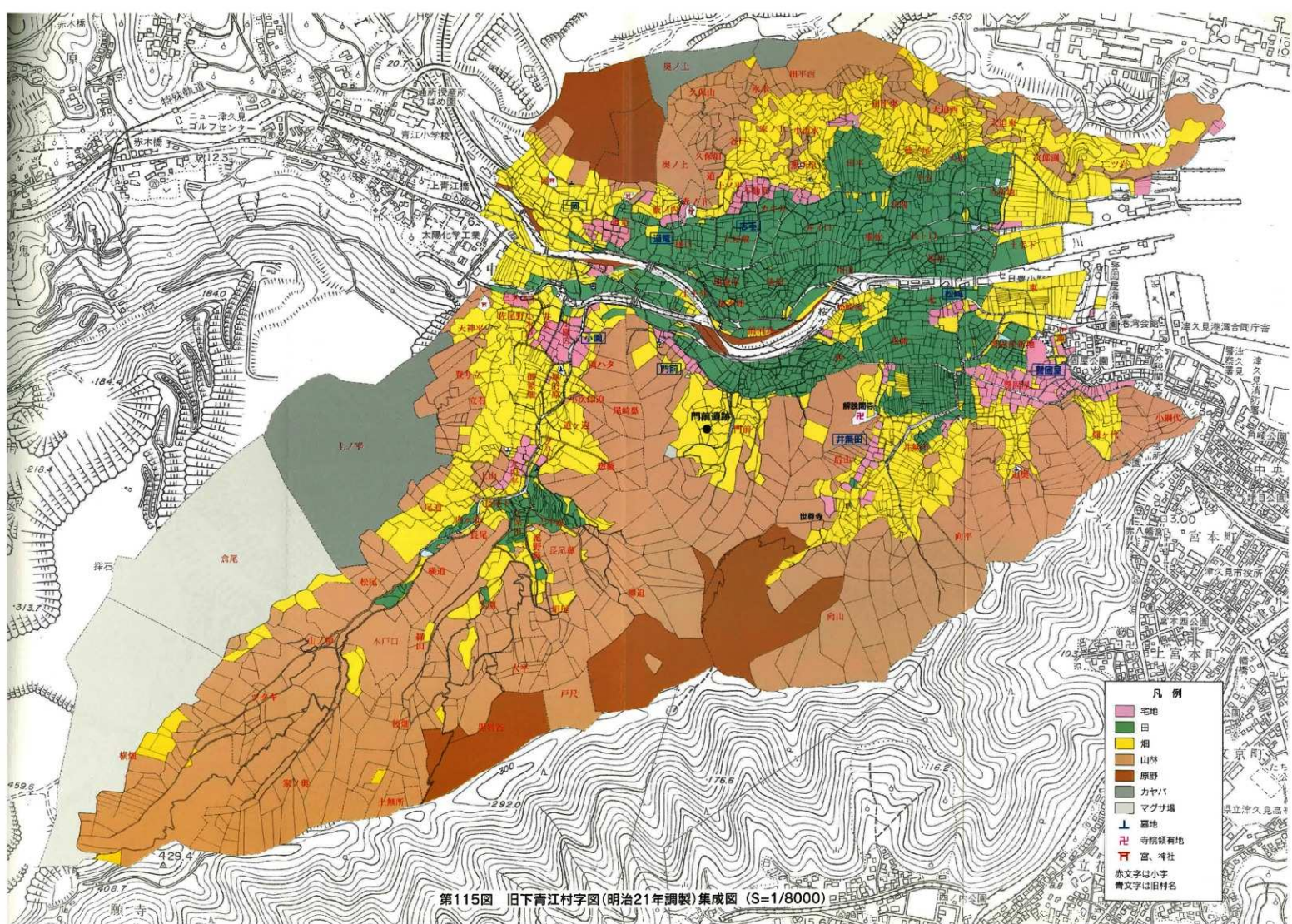
流域から河口までの約3.5kmの河川沿いに村々が広がっていることがわかり、いずれも石高が100石前後から無高の小さな村であった。中世の津久見の状況がわかる史料がほとんど無いので、青江川流域に展開する小さな村々が中世にもそのまま通る事ができるのかどうか判らないが、多くは中世後半期の村落景観をそのまま示すものと考えても差し支えないだろう。

水田を形成した基幹的な水路は、右岸に1本、左岸に1本ある。右岸の水路は「桜ヶ瀬井路」と呼ばれ、開削年代は明らかではないが、小国で青江川支流の小国川から取水し、門前村、井無田村、松崎村、齋園屋村を潤す。一方、左岸には「志手村用水」と呼ばれる水路がある。これは小国川支流の御手洗川に流れる鍾乳洞の湧水を、小字「樋の口」で青江川を渡り志手まで導くもの<sup>90</sup>で、江戸前期の寛文3(1663)年に開削されたという。しかし、慶長2(1597)年の接地帳では村高150石余の内「田方」は130石余であるのに対して、天保9(1838)年の村高129石余の内、田は111石余となり、田と畑の構成比率に大きな変化は認められない。このことから寛文年間の開削が史実であるとすれば、この時の水路開削は新田開発ではなく、旧来の田への安定した水の供給に目的があったものと考えられる事が出来る。おそらく、宇園からも明治段階で灌井が数多くある事から、灌井を利用した雨水や湧水に頼った灌漑が行われていたか、または青江川から取水していたものが河床の低下や流路の変動などによって新たな水路の確保の必要に迫られたかのどちらかであろう。「志手村用水」により灌漑を受けているところは、一段の段丘崖、または旧河道が認められる。おそらく、中世段階では段丘崖下の氾濫原面と段丘上面、あるいは旧河道を挟んだ両側では異なる灌漑体系が存在したものと考えられるが、具体的に知る事はできない。

ところで、門前遺跡は、小字「門前」にある。小字「門前」は、江戸期の「門前村」がそのまま一小字になっているようで、広大な面積を持つ。実際はこの中に小さな「字」（しこな）があったはずであるが、行政的には地名として残らなかった。明治7年の「大分縣管下豊後国各村本校取調簿」（『明治前期全国村名小字調査書第5巻』）によると、小字門前の中にさらに「尾崎」、「薮ヶ谷」、「引地」、「解脫」の地名があったことがわかる。この旧村の門前村<sup>91</sup>は、旧字図を見ると青江川が南に大きく蛇行した事によってできた三日月状の沖積地に水田を作り、洪水を避けるように蛇行点のやや上流山際にムラを細長く形成していたようである。門前遺跡は、そのような門前村のムラの端から小さな溪流を比高差で50mほど登った地点にある。門前村の中核部を見下ろす好立地である。明治21年段階では畑地として利用されていた。

ところで、「門前」の地名は「解脫開寺」の門前に由来するという（『戸村小鑑1』）。しかし、現在の解脫開寺の位置は小字「門前」の東端に位置し、むしろ「井無田村」や「齋園屋村」とのつながりが深いような場所であるため、「朝日寺」の門前がその地名の由来であるとする説もある<sup>92</sup>。しかし、前項までに記したように、門前遺跡の15世紀段階の寺院が解脫開寺の前身であれば、門前村の中心部にあることになり、地名の由来も江戸期の説明で納得がいくのである。

それでは、この青江川下流域で「津久見氏」あるいは「薬師寺氏<sup>93</sup>」などの大友被官層、あるいは在地領主層の存在を裏付けるものがあるだろうか。小字名では小国のムラから青江川支流を越えたところにある「木戸口」と、志手のムラの下に広がる水田にある「上屋敷」の二つが注意される。「木戸口」は、前述した津久見川流域との境界をなす山の後線にある、最も西側の「物見山」に登る入口部を示している可能性が高い。後者は、一辺40mほどの方形区画を囲むように直線的な区画が連なる。「上屋敷」の南側の小字「染屋」や「地蔵本」などのある場所は一段低かった可能性があり（現在は岡場常備や市街化で旧状は不明）、「上屋敷」との間は段丘崖あるいは旧河道が境になっていたと思われる。そこには水路が通り、段丘下の氾濫原あるいは旧河道の低湿地が水田化されている。おそらく、段丘上が水田化されるのはその後であると考えられる事から、段丘上に位置する「上屋敷」は、そこに屋敷が存在したとすればそれ以前のものであろう。この段丘上には中世前期の小集落が点在していた可能性が高い。その中であって「上屋敷」の呼び名を持つ屋敷はこの地における土級武士のものである可能性は高からう。しかし、それが津久見氏や薬師寺氏に繋がるものかどうかは、遺跡地などが他にない不明である。



第115図 旧下青江村字図(明治21年調製)集成図 (S=1/8000)



第116图 門前遺跡周辺現况图 (S=1/8,000)

青江川中、下流域は大友氏の水軍として活躍した津久見衆（その中でも津久見氏）の本拠地として重要な場所であった。特に下流域には禪宗寺院を建立し、石造物の分布からも至近に館があったことを想定させるものの、地名や旧字圖からは読み取る事が出来なかった。

## 7) 結論

津久見門前遺跡は、地元では寺院の跡と言われていた。発掘調査で多量の瓦が出土しそれを裏付けたが、また新たな問題も浮かび上がってきた。14世紀末から15世紀初頭に創建された瓦葺き建物が、15世紀前半代には早くも廃絶し、その後遺跡内では小規模な活動の痕跡は見られるものの、再び瓦葺き建物が造られることなく、16世紀末には「朝日寺」として文書に登場するようになることは、何を意味しているのか。そこには、中世津久見の地で活躍した津久見氏や、ここを終焉の地として選んだ大友宗麟の動きと密接な関係が想定された。まだ言及されるべき点が多いが、今後の考察を待つとして、これまで述べてきた事の主要な点を簡潔書きにまとめてみたい。

- ① 瓦葺き建物は、14世紀末から15世紀初めに建てられ、15世紀前半代に廃絶した寺院の建物である。
- ② 寺院は禪宗寺院の解脱園寺との関係が想定される。
- ③ 廃絶には、永享7（1435）年の「姫岳合戦」が関わっていた可能性がある。
- ④ 建物に葺かれた瓦類は、14世紀初め頃の技法を一部に残しながら、14世紀末以降の新しい要素を加えた瓦類である。
- ⑤ 瓦葺き建物が廃絶した後、15世紀後半から16世紀前半にかけてと16世紀中葉から16世紀末にかけて小規模な活動の痕跡が見られ、後者は「朝日寺」と呼ばれた寺院の跡である可能性が高い。
- ⑥ 「朝日寺」は16世紀の末段階で施寺になったと考えられる。
- ⑦ 大友宗麟の館は、津久見川下流右岸の「大友公園」に比定できる。
- ⑧ 門前遺跡のある青江川下流域は、中世後半期に津久見衆と呼ばれた水軍の本拠地のひとつと考えられ、門前遺跡と丘陵をひとつ隔てた小字「井無田」には津久見氏の居館が存在した可能性が高い。

七 「日本史」 長幹

フロイス

第五十六章 本邦 豊後での出来事について

(前略) 国王は白竹から二里距たった津久見とい

うところで起居していたが、このたび同所に一定

住するためにミサを拝聴する(注)。そして所

その入り口にミサを拝聴するための、美しい祈

待所、すなわち礼拝堂を設置した。そして老後休

養のために、その地での収入を譲ってもらいたい

と願うに願ったところ、(嫡子)は容易にその願

いに応じた。そこで(国王は)朝日、さつそくそ

の地を取納すると、一人の修道士を呼びよらせ

同地にあった二つの寺院のすべての偶像を破却す

るよう命じた。国王はそれらを一体も残さず、

ことごとく焼き捨てるように依頼したのであるが、

それは注意深く実行された。その二寺(院)のう

ちの一つは、国王の好みに合った小さい病院であ

ったので、彼は副管区長の司祭に、どうかここに

一人の司祭と一人の修道士を往まわせるため宮こ

されたと思順した。(国王)はその(旧寺院)

第七七章 国王フランシスコ(大友宗麟)の

逝去について

(前略) 国王は、白竹の包圍が解かれ摩訶勢が豊後から

退去しました。津久見に赴いて静養すること

を望まれ、まず奥方のジュリアと(まだ)少女

である二人の娘とを(その地に)遣わされました

(中略)

国王はこの病気を患われ、二日間発熱して白竹に

滞在の後、私が滞在していました津久見に別荘で

来られました。(中略) (一五) 八十七年(一六)

月二十八日、その同じ日曜日其夜中過ぎに、国

主フランシスコは、この世の旅を終えられました

(中略)

ミサが終わると司祭や修道士たちは棺台の両側

に位置し、香を焚きながら棺のまわり(を廻り)

幾つかの応酬をしました。そしてそれから埋葬

されることになりました国王の邸宅の庭まで

教会(の地盤)から行列が始まりました。(中略)

先陣には十字架が掲げるとともに進みました。教会

九 「郷土資料」 巻後附

二軒裏 大正十四年

朝日寺 隆寺

門前二アリ、境内、段平ツ有シ、眺望佳絶ノ地ナ

リ、昔時八相ノ位位アリシガ、大友藩ノ時ニ共

ニ其ノ災ニ合フ、時代不明ナリ、而シテ寺跡ニ瓦

及ビ石佛ハ小山ノ如ク積立テラレタリ。(後略)

石灰

石灰製造起源ニ付キテハ、評ナラザレドモ以下

記スル所ニヨリ、余程以前ヨリ製セシコト明カナ

リ有シ、今ハ相傳ト稱スル地アリ、約二段平ノ面朝

門前ニ、寺ハ相傳ト稱スル地アリ、此ニ段平ノ面朝

日山朝日寺ト稱スル寺アリシ地ナリ、開祖及ビ

年代ハ詳ナラズ、當寺ニ中酒名僧アリ、或曰庭内

ニテ落葉ヲ集メ、コレヲ焼却セリ、尚ホ疾火ノ危

險ヲ憂ヘ小僧ニ命ジテ水ヲ注ガシム、忽チニシテ

白煙ヲ上ガ熱ヲ免スルヲ不思議ニ思ヒ檢スルニ、

下ニ石灰石ノ陥石アリテ崩壊セリ、尚ホ水ヲ注ガ

シメシニ遂ニ止ミタリ、此寺ニ趣味ヲ有シ其餘放

第4節 關連文書史料

一 豊後国臼杵莊地頭代僧西印等寄進狀

○津久見文書  
○津久見史料上

寄進

津久見湯瀨寺 八幡大菩薩御供田事

合參段者在字やふた

右件田、自往昔以來、為御供田之由有共聞、然而中ニ此式段成所寄田之由、依御願食之、且為上御祈持、且任先例所寄進之由、而則為友水沙汰、有願先例御供、無懈忘可令勤仕之者、依御寄進之狀如件

建長二年三月十六日

○津久見文書  
○津久見史料上

地頭御代官僧西印(花押)

二 大友義統感狀

○津久見文書  
○津久見史料上

今度薩广之悪寇、國中へ現形之刻、津久見要者、別而辛勞之山、感入候、然者依不應之成立、平丹生嶋薩城之山、忠貞之心態、冲妙候、必取納、一様可賀之候、恐令謹言、

正月廿八日

義統(花押)

三 津久見村解脫寺領差出

○津久見文書  
○津久見史料上

解脫寺領差出之事  
合田地可五段大  
高地八段大  
田屋敷一ヶ所

津久見村

右知行、無相違と納候、若一較、錢於處可者、日本國中大小神祇、殊者若考本尊開山御可可聖家者也、仍如件

文祿元年閏九月十五日

○津久見文書  
○津久見史料上

山口玄番頭殿

四 津久見村朝日寺領差出

○津久見文書  
○津久見史料上

朝日寺差出之事

一米拾九石式斗八升

一嵐旗かり屋一納納御用依

右告知行、無相違と納候、若一較一錢於處可者、日本國中大小神祇、殊者若考本尊御可可聖家者也、仍如件

文祿元年閏九月十五日

○津久見文書  
○津久見史料上

山口玄番頭殿

五 津久見解脫開寺古峯寺請證文案

○津久見文書  
○津久見史料上

先祖ハきりしたんの事

一 津久見豊國栗村助右衛門、其父兼正八幡并其身元米津宗門下之徒也、大友休庵公於津久見赤川内天徳寺被歸回之時、隨其官命而、回き里したんに罷成者也、其後大友殿苗裔斷絶之頃、早きりしたんをこころひ、又如前々行之大願并其身、再帰依淨宗、參詣于津久見之大雄禪寺之事、

右之助右衛門、当于十二歳、其母死去也、其時患下右之大雄禪寺之僧而葬之、以其體之事、右之助右衛門之当于十二歳、其父死去之時、是亦患十前之禪寺之僧而、以其體葬之○、其後、慕父母之宗旨而、亦參詣大雄寺、其後、繼而參詣當寺、其手無要局之事、

行之件、助右衛門自身口頭之件也、於此意節○就他個人○欲尋得于行之始末、然而于行村住、無与彼助右衛門比年老人、是故或問于隣近之人、或問于機漁之夫、則其返答曰、其等從幼少只見偏輩之尊安禪宗曲、參詣當寺○、爰以為淨宗門下徒者也、仍如件、

正保二年

○津久見文書  
○津久見史料上

八月二日

御奉行所

六 津久見解脫開寺古峯寺請證文

○津久見文書  
○津久見史料上

先祖ハきりしたんの事

一 津久見小園村七兵衛老母七八歳、已前之頃其父陣亡意、一日きりしたん二歳成者也、渠之七八歳已後父きりしたんをこころひ、取依淨宗也、是故爰未○撰傳受于父之宗旨而、從幼少為淨宗門下徒而至今無改交也、爰以竟未きりしたんの法度在不知也、上二所之事、  
一 津久見小園村七兵衛老母七八歳、已前之頃其父陣亡意、一日きりしたん二歳成者也、渠之七八歳已後父きりしたんをこころひ、取依淨宗也、是故爰未○撰傳受于父之宗旨而、從幼少為淨宗門下徒而至今無改交也、爰以竟未きりしたんの法度在不知也、上二所之事、  
二 津久見小園村七兵衛老母七八歳、已前之頃其父陣亡意、一日きりしたん二歳成者也、渠之七八歳已後父きりしたんをこころひ、取依淨宗也、是故爰未○撰傳受于父之宗旨而、從幼少為淨宗門下徒而至今無改交也、爰以竟未きりしたんの法度在不知也、上二所之事、

行一様之事、彼老母自身之口弁也、於此意節、熟兒業、應、明老善之盛口也、故再不違結聚者也、唯所為證者、其子七兵衛、從未禪宗門中徒、寺僧所也、以之為所證者也、仍如件

正保二年

○津久見文書  
○津久見史料上

八月四日

津久見解脫禪寺

御奉行所

古峯

註

- (1) 平成12年4月1日より、埋蔵文化財の取扱が都道府県の自治事務になったのを受け、日本道路公団と文化財保護委員会（現文化庁）との間の「遺書」は廃止され、新たに日本道路公団内部の通達によって、都道府県教育委員会との協議が進められるようになったもの。
- (2) 合田芳正「考古学ライブラリー66 古代の鏡」ニュー・サイエンス社 1998
- (3) 特別史跡「一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅵ」福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1997
- (4) 第3節1)の「軒平瓦」(90頁)参照
- (5) 「百里城跡 京の内陸発掘調査報告書(1)」沖繩県教育委員会 1998
- (6) 富山正明「福井県興行寺遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』第13号 貿易陶磁研究会 1993
- (7) 乘岡実「福前焼置跡の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会 2000
- (8) 小柳和宏「宇佐森村と中世雑器生産」『大分県地方史』第159号 大分県地方史研究会 1995
- (9) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会 1982 による。以下「上田分類」という場合には上記文献を指す。
- (10) 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会 1982 による。以下「森田分類」という場合には上記文献を指す。
- (11) 註(5)に同じ
- (12) 吉田寛氏(大分県教育庁埋蔵文化財センター)から教示を得た。
- (13) 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会 1982 による。以下「小野分類」という場合には上記文献を指す。
- (14) 『小路遺跡 上層敷遺跡』久住町教育委員会 2000
- (15) 遺跡の存続時期が長期間にわたるため産物もバラエティに富むが、青磁では須文帯を有する碗など門前遺跡出土の陶磁器と一部異なる部分も多く、また土器では後述の坏B類と小皿C類が出土しており、時間的には15世紀前半に遺跡の形成が始まると考えられる。しかし、主体は染付が小野編年C・D群へ移行し、白磁が構成比率を高めつつ森田編年E群が出現する時期である。
- (16) 吉田寛氏(大分県教育庁埋蔵文化財センター)から教示を得た。
- (17) 註(5)文献、及び「明代前半期陶器の研究 百里城京の内SK01出土品一」専修大学アジア考古学研究所報告書 2002
- (18) 註(6)に同じ
- (19) 註(7)に同じ
- (20) 藤澤良祐「古瀬」『複製 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995  
藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ-古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館 1991
- (21) 『豊後国田原郡の調査1』大田村教育委員会 1994など
- (22) 坂本富弘「中世大友城下町跡出土土師器の編年」『大分市市内遺跡確認調査概報-2002年度-』
- (23) 塚地潤一「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」『法政』第6号 博多研究会 1998
- (24) ただし、東九州で15世紀以降浅い小皿が全く無くなってしまいうわけではない。深めのものが主体となりながらも、16世紀前半までは存在する。
- (25) 吉田寛氏(大分県教育庁埋蔵文化財センター)の御教示による。
- (26) 緒方町千人塚遺跡では、門前遺跡のA形式の土器(報告では「金雲母系A類」とされているもの)が15世紀後半から16世紀初頭に西かれ、共存関係はないものの直後にB形式(報告では「赤色粒子系」とされているもの)が出現するとしている。A形式の土器は門前遺跡の坏に比べ1径が小さくなり、形式変化が認められるので、15世紀後半から16世紀初頭という位置づけは首肯できる。そうすれば、やはりB形式は15世紀後半以降に置かざるを得なくなる。(「千人塚遺跡」緒方町教育委員会 1999)



- (27) 註(22)と同じ
- (28) 註(23)と同じ
- (29) 註(8)と同じ
- (30) 「豊後国田原別荘の調査」 大田村教育委員会 1994
- (31) この段階で在地における瓦質土器生産が広範囲に行われるようになった可能性が高い。豊前南部の宇佐高村でも15世紀後半には瓦質土器が作られるようになっていた可能性が高いことも時期的に符合する(註(8)文献参照)。
- (32) 「1件石仏群地域遺跡発掘調査報告書」 臼杵市教育委員会 1982
- (33) 山崎信二「中世瓦の研究」 奈良国立文化財研究所 2000
- (34) 「重要文化財如意寺三重塔保存修理工事報告書」 文化財建造物保存技術協会 1997
- (35) 註(3)と同じ
- (36) 佐川正敏「鎌倉時代の軒平瓦の個年研究—よみがえる中世の瓦—」 『文化財論叢刊』 同朋社出版 1995
- (37) 註(3)と同じ
- (38) 芦川淳「鎌倉時代の東大寺軒平瓦」 『帝塚山大学考古学研究所報告Ⅳ』 2002 帝塚山大学考古学研究所
- (39) 上原真人「京都における鎌倉時代の造瓦体制」 『文化財論叢刊』 同朋社出版 1995
- (40) 後述のように、普通の平瓦においては産地砂を用いたものが一般的な中で、一部に布目肌を残すものが存在する。これは、東洋一氏の指摘する「積み重ね技法」が存在したのではないかと一点を例外と想定するものではない。この点についてはさらなる考古学的な検証が必要であろう。
- 東洋一「平瓦製作における中世の技術革新について」 『研究紀要』 第1号及び第3号 財団法人京都市歴史文化財研究所1994及び1996
- (41) 註(3)と同じ
- (42) 註(3)と同じ
- (43) 註(3)と同じ
- (44) 以下、「法隆寺の編年」という場合には、次の二書を指す。
- 佐川正敏「二、瓦の変遷—5鎌倉時代の瓦、6室町時代の瓦」 『法隆寺の宝篋 瓦』 毎日新聞社 1992
  - 小林謙一、佐川正敏「平安時代～近世の軒瓦」 『伊弉留我御：法隆寺附和瓦財紙編纂所』 1989
- (45) 註(4) a 文献
- (46) 註(3)と同じ
- (47) 註(3)と同じ
- (48) 大友府内城下町跡第12次調査区出土瓦を実見した。それによると、少数の太い紐を吊り紐とする本州的なものと、細い紐を直接的に多条(約5mm間隔)に刺し縫いするもの(これも、他地域出土資料に比べて紐の間隔が密なようである。)、そして多条ではあるがその間隔がやや広く(約1cm前後)、J字形に垂れ下がるもの、の三省が認められた。これらが時期的な点なのかどうかは製作時期が特定できる状況ではないので、現状では把握が困難である。
- (49) 臼杵市教育委員会のご好意で実見させていただいた。
- (50) 豊前ではあるが、宇佐の大乗寺では「必承」のへら書きのある平瓦に伴って「九州タイプ」の吊り紐を持つ丸瓦が出土している。これは応永25(1417)年に完成した護摩堂の瓦と考えられており、これが大分県域で押さえられる最古例であるが、本报告ではあるが、府内(大分市)にあった万寿寺創建際(1306)の瓦群に「九州タイプ」の吊り紐を有する丸瓦が共存するという(資料については大分市教育委員会のご好意で実見)。廃棄された時期は14世紀後半という事であるが、「九州タイプ」の吊り紐の出現が鎌倉時代後期にまで遡る可能性もあり、さらなる検討が必要である。一方、山口の大内氏茶山跡では15世紀中頃と推定される「九州タイプ」の

吊り紐痕を持つものが出土している（山崎氏註(33)文献による）。大内氏が行った応永期の宇佐宮大造管に関連したと思われる大榮寺の造営で「九州タイプ」の吊り紐が使われているとなれば、大内氏に属する瓦も15世紀前半段階では使われていた可能性が高いであろう。

- (51) 坪井利弘 『日本の屋根瓦』 理工学社 1976
- (52) 『特別展 日本の瓦』九州歴史資料館 1993
- (53) 法隆寺では日の中空化の初出資料は応永11(1404)年であるが、天授4(1376)年銘の和歌山華道成寺の降鬼ですで見られる。  
(註(54)文献による)
- (54) 山本忠尚 『日本の美術 瓦』 至文堂 1998
- (55) 一般的な人母屋形式の屋根で、かつ降機を有する場合で考えると、瓦瓦は隅瓦が4個体、二ノ鬼と降鬼が8個体、大棟鬼が2個体となる。
- (56) 豊後国守護であった大友氏5代の貞親は禅宗文化を積極的に取り入れ、徳治元(1306)年に府内に万寿寺を建てた。豊後では日米の大台宗の勢力が強く、いわゆる鎌倉新仏教の豊後への広がりは遅れ、この万寿寺建立を契機としてようやく禅宗が広まったといわれる(『大分県史 中世篇1』大分県 1982)。この14世紀初期という年代と、門前遺跡で確認された瓦製作技法の一部が1300年前後というのは、偶然の一致であろうか。本格的な寺院であった万寿寺などの建設に当たって、瓦工が中央から招き来れたことは十分に考えられるだろう。その時の技法の一部が15世紀前半まで残された、というように解釈できはしないだろうか。
- (57) 博多を巡って争った大内氏と大友氏に共に「九州タイプ」の吊り紐が見られるのは興味深い。おそらく吊り紐などという外見上からはわからない、つまり製作工程上の類似があるということは、工人の移動や造瓦技法の伝授などが博多を中心として行われた事を推測させる。なお、大内氏領山縣に「九州タイプ」の吊り紐があることを指摘したのは山崎氏「中世瓦の研究」である。
- (58) 註(33)に同じ
- (59) 105ページに示したように、1737年に朝日寺跡地が所地となったことと関係するものであろう。
- (60) 井無田の「大谷」と呼ばれる谷へつきだした両谷にも「朝日寺」という地名が残っている。この「朝日寺」と門前の「朝日寺」との関係は明らかではない。
- (61) 土地の所有者に話を聞いた。
- (62) そうすれば、井無田が警閑屋と共に、津久見氏が支配を上げたと考えられる津久見川下流域と一体の地域(赤野河内)として把握され、江戸期になっても飛び地のよう佐伯藩領であったこと(ただし、のち豊後屋は白件藩になる)も理解できよう。逆に考えれば、井無田・警閑屋を含んだ「赤野河内」こそ津久見氏の直接の支配領域であり、16世紀半ばの「二階崩れの變」で一放が壊された津久見氏の拠所地として、大友惣領家の直轄地になったとも考えられよう。この地が、天正9年に義統から宗麟に与えられた「津久見赤野河内」であったのではなかろうか。
- (63) 『白件時代考』(白件藩政史料)による。なお、文禄2年の檢地の後、後の白件藩領には貞弥五郎が、後の佐伯藩領には宮部統綱がはいったのではないともいわれ(平井義人「近世初期の佐伯藩政下の津久見」『津久見史談』第6号 津久見史談会 2002)、大友降陣後直ぐに津久見の地は2分されていた可能性もある。しかし、「佐伯荘」とあることから、中世佐伯荘の内とも混みとれる。そうすれば、元来津久見の地は白件荘と佐伯荘の領域が入り込んでいたことも考えられる。
- (64) 白件市に保管されている廣長回縁圖を写したとされる絵図には、「赤野河内 津久見 毛利」、「赤野河内村 毛利」、「赤野河内 津久見村 毛利」、「海部郡 津久見 福聚」、「津久見内 畑村 福聚」、「海部郡 解嚴閣寺 福聚」の記載がある。記載された場所からみると、解嚴閣寺の横に記された「赤野河内津久見村」が警閑屋村と井無田村に該当すると考えられる。このことからこの両村が「赤野河内」に含まれていた事を示している。(絵図は白件市教育委員会の好意で実現した。)
- (65) 後述の藩領繪圖(図版6参照)で白く抜かれている部分が佐伯領の「井無田村」にあたる。ただし、位置が若干違っている。
- (66) 「畑代」という小字が警閑屋の南の小さな谷を囲む台地にまたがることにある。溝に面した小さな谷部に元来はあったのであろう。

- (67) 寛永年間に現在地に遷ったという。
- (68) 「津久見」という地名は、村名としては江戸中期以降は津久見川下流の佐伯藩領にしか現れない（元禄14(1701)年の『豊後国八郡見幅圖』など）が、此(64)のように文禄・慶長間には青江川流域も「津久見村」と呼ばれていたのであり、決して津久見川流域だけが「津久見」であったわけではない。青江川流域は「海都郡津久見」で、津久見川流域は「赤野河内津久見」であった。
- (69) 現在の部は寛政年間に変更されたものであるという（山北学編『増補訂正編年大友史料』27の313頁参照）。松野大友系圖（第5節史料八）には、「赤河内裡（浦）中村成森、に葬るとある。「成森」は現在の大字津久見字成守（現在の墓所よりやや北側）と思われ、ここに寛政年間以前の墓があったと考えられる。しかし、この墓は宗麟の死後直ぐに義統により仏式で改葬されたものであり（『藤府閩書』）、本来はフロイスが記すように（第5節史料七）「邸宅」の庭に葬られたのであった。松野大友系圖では、死去した場所と埋葬地（この場合は義統による二次的な埋葬）は明らかに異なっており、宗麟が死去した邸宅はあくまでも「海辺岩屋」なのであって、その後の二次、三次の墓所とは何ら位置的な関係はないものと考えられる。しかし、その後の墓所が「天徳寺」と何らかの関係があったところに設けられたことは、文化3年の「津久見村改明細帳」に宗麟墓地（三次?）が「天徳寺御林」の内にありと記されていることから明らかである。
- (70) 渡辺源次氏は現在の「大友宗麟墓地」の地が「天徳寺」と呼ばれた敷会跡で、宗麟の居處はそこから「若干隔った」ところにあったとされている（『増訂豊後大友氏の研究』1982 第一法集）。一方、「岩屋」の地名から現在の「大友公園」（大友町）に宗麟の「茶亭」（＝邸宅）があったのではないとも書かれている（『津久見市史』津久見市1985）。ただし、地元ではそのような伝承はないということである（津久見史談会二羽新吉氏による）。なお、町名や公園名の「大友」という呼称も新しい住居表示がなされるようになった昭和40年頃に作られたものであって、古くからのものではない。
- (71) 『大分の中世城館 第四集 総論編』大分県教育委員会 2004
- (72) 昭和40年ころ今の市道が出来たが、それ以前は尾根を横断する道があったという（旧字図でも確認できる）。ただし、大きな掘り割り状にはなっていなかったということであるので、堀切が存在したかどうかは不明である。
- (73) 西側に延びる尾根の途中に、かつて天台宗の「西教寺」があったとされている。現在の西教寺は浄土真宗で、尾根の先端から下った川向こうにある。
- (74) 以下、引用の場合は新潮文庫版（2000年刊行）を使用。
- (75) 大願山寺考寺のことか？世尊寺は解脱園寺に近接する寺院で、同じ臨済宗妙心寺派に属し、元々の開基は不明である（『白杵小鑑』）が、江戸時代前期の万治年間開基ともいう（『津久見市史』）。
- (76) 青江川をやや遡った道尾にある文相9(1478)年の石幢の銘文に「泉近寺恵禪尼」とある。
- (77) 慶長2年の後地帳である「飛騨帳」による。（『津久見市史』）
- (78) 他にも同様の文書が5通あり（増村隆也『津久見の切支丹資料』『大分県地方史』第24号 1960）、それらによると「志手村」、「徳浦」、「塙浦」の人たちが一度キリシタンになったとあるので、青江川流域から津久見河北部の広い範囲で改宗がなされたことがわかる。
- (79) 『郷土資料』（第5節史料九）には、朝日寺は「大友崩」の際に災いがあったという伝承があったことを記している。「大友崩」が宗麟がキリシタンになって神社仏閣を破壊したことを指しているの、三ヶ寺の一つとして伝承や経巻などが壊された可能性もある。
- (80) 近世の撰纂になる『大友興廃記』など
- (81) 白杵市教育委員会のご好意で発見した。島津氏侵攻時に島津氏が陣を置いた「松尾城」や、大友氏が迎え撃った「鶴ヶ城」など、天正14年の侵攻時に保る城郭が「城」、「陣」、「物見山」、「取出（砦）」付城、要害」に分けて数多く記されており、逆に永享7年の船荷合戦や慶長5年の同藩中川氏による白杵攻めの状況は全く記されていない事から、天正14年の島津氏侵攻に係わるものと判断される。
- (82) その存在は、大分大学豊田寛三氏の御教示によって知った。記して感謝する次第である。
- (83) 「古陣所」の西約1kmの「物見山」や、遺構のあった「小ゼリ相」の場所からさらに北東に伸びる尾根線上には遺構はなかった。

- (84) 2004年11月に丘陵のピークを踏査したが、全く城郭に関する遺構は確認されなかった。
- (85) 解脱園寺を創建した南漢神師が、宋の徑山に留学した際、徑山の境内に「蘭溪」というところがあり、それと同じ名を付けた谷が現在の解脱園寺境内にある。その「蘭溪」から一字づつ取って寺名と僧名にしたという。(『大日本帝國大分縣社寺名勝園跡』)
- (86) 魁岳の頂上は径20mほどと狭いが、頂上をやや下った所に一条の堀切を有する。この遺構が永享年間のものか、あるいは前記81の絵図に「物見山」と記された時期(おそらく天正14年)のものかわからないが、前者の可能性が高い。
- (87) 『大分県史』中世篇Ⅱ 大分県 1985
- (88) 二村薫著『郷土資料』大正14年刊行
- (89) 水澤氏は「宮里城京の内SKO1出土品」に代表される15世紀前半の陶磁器群をさらに分類し、その出現時期を主に東日本で追っている。それによると、門前遺跡出土陶磁器の示す年代は1440年前後から派生する一帯が含まれるので、これが普遍的なものであるとすると、門前遺跡の瓦葺き建物の存続期間が15世紀後半代まで下る可能性が出てくる(水澤幸・『15世紀前葉から中華の貿易陶磁器探検』『貿易陶磁研究』No.24 貿易陶磁研究会 2004)。陶磁器の年代脈の変化によってはいわゆる「津久見合戦」も視野に入れねばならないだろう。
- (90) 朝日寺と解脱園寺の寺領差出は、同じ「徳芳」という解脱園寺の僧侶の署名があることから、朝日寺は解脱園寺の本寺のような状態であったのだろう。また、朝日寺の地が文禄年間には「海部郡内津久見村」にあることも確認される。この点は、慶長2(1597)年の「豊後国海部郡津久見御検地帳」に、門前村が「畑村之内」とされることと矛盾するようであるが、「畑村」は慶長4同絵図を写したとされる絵図では、「津久見内畑村」となっているので、門前村は中世末期には津久見村の内畑村に属していたのであろう。
- (91) 慶長2(1597)年の「豊後国海部郡津久見御検地帳」による。(『津久見市史』)
- (92) 酒井博「百姓と水 志子村の用水路物語」『津久見史談』第5号 津久見史談会 2001
- (93) 前節で述べたように、「門前村」は、江戸初期には「畑村」に属し、その後その中の「小園村」に属していた。しかし、慶長2年の検地で村名が見えるので、村としての姿は当初からあった。
- (94) 詳(88)に同じ。
- (95) 榮壽寺氏の本郷地は昔江川下流域から約1kmほど北の「徳浦」や「壱浦」のあたりに想定される。

津久見門前遺跡出土瓦については山崎信二氏(奈良国立文化財研究所)、陶磁器については、小野正敏氏(国立歴史民俗博物館)に見ていただき、有益な御助言をいただいた。また、津久見市内の文化財については津久見史談会の酒井博会長をはじめとした会員の皆さんの御協力により、現地を確かめることができた。末至ではありますが、記して感謝申し上げます。







## 平 瓦

建群番号	出土 層位	種別	法 重	造 型		造 成	胎 土	色 調	備 考
				全長	最大幅				
97-30	5-12								
98-30	5-12	30.5	22.4	ナナ割型?、瓦端部凹入り	ナナ割型?	平瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
99-30	5-12			ナナ割型 瓦端部凹入り	縁方角のナナ割型	平瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
100-30	5-12			ナナ割型、瓦端部凹入り	ナナ割型	平瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
101-30	5-12			ナナ割型	ナナ割型	平瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
102-30	5-12			平瓦型ナナ割型、瓦端部凹入り	コビキ型、のち縁方角ナナ割型	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
102-30	5-12			ナナ割型、瓦端部凹入り	ナナ割型	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
202-66	6-18	31.1		ナナ割型、瓦端部凹入り	コビキ型、のちナナ割型	平瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
253-96	6-18	30.0		縁方角ナナ割型、瓦端部凹入り	縁方角のナナ割型	平瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
354-96	6-18	31.1		ナナ割型、瓦端部凹入り	コビキ型、のち縁方角ナナ割型、凹入りあり	平瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
355-96	6-18	30.2		コビキ型、のち、縁方角のナナ割型、瓦端部凹入り	コビキ型、のち縁方角ナナ割型	平瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
257-67	6-18	30.8		縁方角ナナ割型、ナナ割型、瓦端部凹入り	ナナ割型	平瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
285-67	6-18	29.2		ナナ割型	ナナ割型	平瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
226-67	6-18	30.5		ナナ割型	ナナ割型	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
259-67	6-18	30.5		コビキ型、凹入り、のちナナ割型	コビキ型、のちナナ割型	縁瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
300-68	6-18			縁方角ナナ割型、凹入りあり、凹入りあり	コビキ型、のちナナ割型	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
301-68	6-18			縁方角ナナ割型、凹入りあり	コビキ型、のち縁方角ナナ割型	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
302-68	6-18			ナナ割型、凹入りあり	ナナ割型	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
303-68	6-18	22.2		ナナ割型、凹入りあり	ナナ割型、凹入りあり	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
295-68	6-18			縁方角のナナ割型	縁方角のナナ割型	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
296-68	6-18	22.2		ナナ割型	ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
297-68	6-18	31.0		コビキ型、のちナナ割型、凹入りあり	コビキ型、のちナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
298-68	6-18			ナナ割型	ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
299-68	6-18			コビキ型、凹入り、のちナナ割型	コビキ型、のちナナ割型	縁瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
270-69	6-18	21.5		コビキ型、のちナナ割型、凹入りあり	コビキ型、のちナナ割型	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
271-69	6-18			コビキ型、のちナナ割型	ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
260-69	6-18			縁方角のナナ割型、瓦端部凹入り	コビキ型、のち縁方角ナナ割型	平瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
261-69	6-18	30.3	20.9	ナナ割型、凹入りあり	ナナ割型	平瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
352-69	6-18			ナナ割型、瓦端部凹入り	コビキ型、のちナナ割型	平瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	

## 丸 瓦

建群番号	出土 層位	種別	法 重	造 型		造 成	胎 土	色 調	備 考
				全長	最大幅				
81-22	5-5	2.8	13.4	寛狭多サキ、のちナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
227-56	6-18	2.8	12.8	縁方多サキ、のち、一平ナナ割し	瓦形端、凹入り縁端	縁瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
228-56	6-18	2.8	12.0	縁方多サキ、のち、一平ナナ割し	瓦形端、凹入り縁端	縁瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
226-56	6-18	29.6	12.4	縁方多サキ、のち、一平ナナ割し	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	縁瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
230-57	6-18	1.8	11.2	縁方多サキ、のち、一平ナナ割し	コビキ型、凹入り縁端	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
241-57	6-18	32.0	12.5	縁方多サキ、のちナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
232-57	6-18	1.8	11.4	12.1 縁方多サキ、のちナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	縁瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
233-58	6-18	2.8	10.6	12.5 縁方多サキ、のちナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	縁瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
234-58	6-18	1.8	34.4	13.0 縁方多サキ、のちナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
236-58	6-18	2.8	30.8	12.2 縁方多サキ、のちナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
235-58	6-18	2.8	31.5	12.3 縁方多サキ、のちナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	縁瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
237-58	6-18	2.8	30.7	12.3 縁方多サキ、のち縁方ナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	縁瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
238-58	6-18	2.8	12.3	縁方多サキ、のちナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
239-58	6-18	2.8	12.6	縁方多サキ、のち縁方ナナ	瓦形端、凹入り縁端	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
240-58	6-18	2.8	13.0	縁方多サキ、のち縁方ナナ	瓦形端、凹入り縁端	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
241-58	6-18	1.8	13.7	縁方多サキ、のち縁方ナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
242-58	6-18	2.8	12.9	縁方多サキ、のち縁方ナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
243-58	6-18	2.8	13.5	縁方多サキ、のち縁方ナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
244-58	6-18	2.8	12.3	縁方多サキ、のちナナ	縁瓦、凹入り縁端	縁瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
245-58	6-18	2.8	13.1	縁方多サキ、のち縁方ナナ	瓦形端、凹入り縁端	縁瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
246-58	6-18	1.8	12.2	縁方多サキ、のちナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
247-58	6-18	2.8	12.7	縁方多サキ、のち縁方ナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
248-58	6-18	1.8	12.7	縁方多サキ、のちナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
349-68	6-18			ナナ割型	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	平瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
350-68	6-18			縁方多サキ、のちナナ割型	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
351-68	6-18	2.8	13.1	縁方多サキ、のち縁方ナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	縁瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
352-68	6-18	2.8	30.7	13.3 ナナ割型	瓦形端、凹入り縁端	縁瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	
353-68	6-18	2.8		縁方多サキ、のちナナ	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	平瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色	

## 道具瓦・鬼瓦

建群番号	出土 層位	種別	法 重	造 型		造 成	胎 土	色 調	備 考
				全長	最大幅				
80-22	5-5	瓦端		縁方角のナナ割型	内側(ノミ)	コビキ型、凹入り、瓦り縁端	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色
272-70	7-10	瓦端	13.0	6.7	縁方多サキ、のちナナ割型	コビキ型	縁瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色
273-70	7-10	瓦端	12.6	6.5	縁方多サキ、のちナナ割型	コビキ型	縁瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色
274-70	7-10	瓦端	6.0	6.0	縁方多サキ、のちナナ割型	コビキ型、凹入り	縁瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色
275-70	7-10	瓦端	1.8	1.8	ナナ割型	内側(ノミ)	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色
276-70	7-10	瓦端	1.8	1.8	ナナ割型	内側(ノミ)	瓦	灰白、青灰、砂粘含む	灰褐色
277-70	7-10	瓦端	24.8	21.5	20.6 11.6 大きく凹く、1.9割の竹文。	凹側(ノミ)ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色
278-71	7-10	瓦端	瓦端	瓦端	縁方多サキ、のち、1.9割の竹文。	凹側(ノミ)ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色
279-72	7-10	瓦端	15.2		凹側(ノミ)に大きく凹く、1.9割の竹文が強く現れる。	凹側(ノミ)ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色
280-72	7-10	瓦端	35.8	30.0	21.6 凹側(ノミ)に大きく凹く、1.9割の竹文が強く現れる。	凹側(ノミ)ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色
281-73	7-10	瓦端	瓦端	瓦端	縁方多サキ、のち、1.9割の竹文、1.9割の竹文。	凹側(ノミ)ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色
282-73	7-10	瓦端	瓦端	瓦端	1.9割の竹文、1.9割の竹文と見られる。	凹側(ノミ)ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色
283-73	7-10	瓦端	瓦端	瓦端	1.9割の竹文、1.9割の竹文と見られる。	凹側(ノミ)ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色
284-73	7-10	瓦端	瓦端	瓦端	1.9割の竹文、1.9割の竹文と見られる。	凹側(ノミ)ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色
285-74	7-10	瓦端	瓦端	瓦端	縁方多サキ、のち、1.9割の竹文。	凹側(ノミ)ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色
286-74	7-10	瓦端	瓦端	瓦端	縁方多サキ、のち、1.9割の竹文。	凹側(ノミ)ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色
287-74	7-10	瓦端	瓦端	瓦端	1.9割の竹文。	凹側(ノミ)ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色
288-74	7-10	瓦端	瓦端	瓦端	1.9割の竹文。	凹側(ノミ)ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色
289-74	7-10	瓦端	瓦端	瓦端	1.9割の竹文。	凹側(ノミ)ナナ割型	瓦	黄白、青灰、砂粘含む	灰褐色



道具具・鬼瓦

測号 測所 測地	出土 品名	種類	法 型	成形、調整および文様		焼成	土 質	色 調	備 考
				外(裏)面	内(裏)面				
200	74	瓦合製	瓦丸	1列の竹管文	縁起まで張り込む	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
201	74	包合製	瓦丸	1列の竹管文	大きく張り込む	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
202	74	包合製	瓦丸	1列の竹管文が上部に張り込む	大きく張り込む	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
203	74	包合製	瓦丸	1列の竹管文が上部に張り込む	大きく張り込む	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
204	75	包合製	瓦丸	三つ山になる竹管文あり	ナシ	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
205	75	包合製	瓦丸	瓦、二本の筋あり	折れている	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
206	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
207	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
208	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
209	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
210	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
211	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
212	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
213	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
214	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
215	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
216	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
217	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
218	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
219	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	
220	75	包合製	瓦丸	瓦、3cmほどの厚さに穴あり	割断あり	良	瓦丸、内側面、砂状含む	灰褐色	

銅 銭

測号 測所 測地	出土 品名	種類	初録年	法 型		重量(g)	備 考			
				径	厚さ					
83	15	S-2	本朝建永	1458	2.45	0.55	0.15	2.5		
84	20	S-7	徳川慶長	1621	2.35	0.70	0.15	2.3		
85	20	S-7	徳川慶長	1661	2.45	0.65	0.10	2.2		
170	44	包合製	徳川元禄	1699	2.40	0.60	0.10	2.1		
171	44	包合製	徳川元禄	1666	0.350	0.05	0.10	1.9		
172	44	包合製	徳川元禄	1699	0.40	0.70	0.250	0.60	一枚落ちていた。	
173	44	包合製	徳川元禄	1666	2.30	0.60	0.15	2.7		
330	81	F号			2.40	0.75	0.16	1.8		
331	81	F号			0.20	0.70	0.10	2.3		
365	87	銅切地点			1.80	0.70	0.30	0.20	一枚落ちていた。	
366	87	銅切地点			2.10	0.90	0.10	1.7	無文銭	
367	87	銅切地点			2.05	0.91	0.10	1.1	無文銭	
368	87	銅切地点			2.20	0.80	0.15	1.6	文字不明銭	
369	87	銅切地点			2.21	0.85	0.13	2.0	*	
370	87	銅切地点			2.20	0.80	0.15	1.7	*	
371	87	銅切地点			0.298	0.908	0.120	1.5		
372	87	銅切地点			2.25	0.70	0.15	2.1		
373	87	銅切地点			2.21	0.65	0.11	1.7		
374	87	銅切地点			2.40	0.71	0.19	2.0		
375	87	銅切地点	興和通寶	1021	2.30	0.80	0.16	2.2		
376	87	銅切地点			2.15	0.71	0.16	2.2		
377	87	銅切地点			1.058	2.25	0.70	0.10	1.7	
378	87	銅切地点	徳川元禄	1678	2.25	0.75	0.12	1.7		
379	87	銅切地点	徳川元禄	1678	2.40	0.70	0.10	2.6		
380	87	銅切地点	徳川元禄	1678	2.25	0.62	0.12	2.8		
381	87	銅切地点	徳川元禄	1664	2.26	0.70	0.15	2.1		
382	87	銅切地点	徳川元禄	1701	2.26	0.65	0.10	2.2		
383	87	銅切地点	徳川元禄	1706	2.20	0.60	0.20	2.6		
384	87	銅切地点	徳川元禄	1698	2.45	0.65	0.16	2.1		

その他

測号 測所 測地	出土 品名	種類	材質	法 型		備 考
				径	厚	
385	95	S-1	上銀	長径5.0	1.0	両面で磨くなる竹筒の1部
386	95	S-1	銀打	径27.0	厚2.0	両面磨り面に浅い溝き、両面反折りのまま、丸口部から縁部にかけて、浅く彫り付けている。
27	95	S-1	銀打			
48	15	S-2	不明	鉄		
49	15	S-2	不明	鉄		
50	15	S-2	不明	鉄		
51	15	S-2	不明	鉄		
52	15	S-2	不明	鉄		
70	20	S-4	不明	丸径 0.90	厚 1.0	両面に「風」または「民」の字と見える浮物の絵を磨き出す。穿孔が1つあり、対になるものか、中央に浅く凹み込んだ溝あり。
80	22	S-5	銅	鉄		
167	44	包合製	打	鉄		
168	44	包合製	打	鉄		
169	44	包合製	打	鉄		
204	85	銅切地点	銅打	径27.0	厚1.0	表裏とも使用痕あり

津久見門前遺跡写真図版

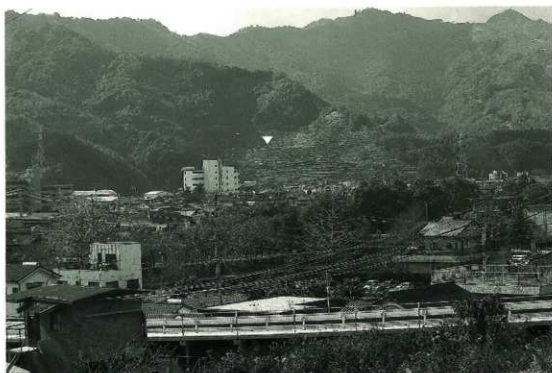




遺跡全景（南から）



第1地点 斜面瓦出土状況



遺跡遠景（北から、山の中腰▽印のところが遺跡）



遺跡調査風景（南西から）



遺跡全景（北西から）



第1地点 斜面瓦出土状況



S-1 遺物出土状況



S-2 遺物出土状況



S-2 遺物出土状況



S-3 遺物出土状況



S-4 遺物出土状況



S-4 完掘状況



S-5 遺物出土狀況



S-9 遺物出土狀況



S-10 遺物出土狀況



S-12 遺物出土狀況



S-13 完掘狀況



S-14 完掘狀況



津久見川下流域  
(中央やや左寄りが「大友公園」)  
(背後の山が城郭のある山)



調査区外に積まれた石塔  
(右側に無縫塔がみえる)



世尊寺五重塔 (本来の地点にあったもの)



C地点 宝篋印塔



白杵藩領絵図 (全体)



白杵藩領絵図 (部分)





青磁 58



346



59



5



337



61



63



116



120



12



119



11



121



白磁 363



347



42



122



青花 66



123



348



349



天目 125



126



古瀬戸 68



69



127 陶磁器類



128



129



軒平瓦 1類



軒平瓦 2類



軒丸瓦 1類



軒丸瓦 2A類



軒丸瓦 2B類



鬼瓦 1類



277



鬼瓦 2類



280



鬼瓦 1類 279



鬼瓦 2類 281



283  
鬼瓦 2類



282  
鬼瓦 2類



278  
鬼瓦



287 鬼瓦 1類



285  
鬼瓦 3類



286  
鬼瓦 3類



鬼瓦部品



206

軒平瓦



平瓦 255



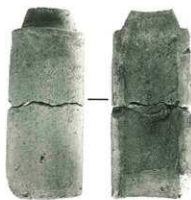
平瓦 361



丸瓦 235



丸瓦 231



丸瓦 234



鳥衾 80



鳥衾 308



雁振瓦 314



短く切断した軒丸瓦(192(手前)と191)



隅瓦(奥側が222で手前左が359、同右が225)



面戸瓦(手前が274、奥側左が273、同右が272)



軒平瓦(左が276で右が275)



隅、又は鳥舎の瓦当部(左が188で右が73)



隅巴(183、狭端部を削り落している)



軒平瓦 粘土接合部



吊り紐痕1類

232



吊り紐痕2類

245



233



237

同じ結び目の吊り紐痕2類



2  
土器A形式 杯



334  
土器B形式



83  
土器C形式



335  
土器D形式



105  
土器A形式 小皿



325  
燒壺壺蓋転用小皿



94  
線刻瓦質土器



76  
用途不明土製円盤



148  
瓦質土器火鉢A1類



144  
瓦質土器火鉢A1類



45  
瓦質土器火鉢C類



154



32



321  
瓦質土器火鉢



33



72



90



155



146



156



160

瓦質土器火鉢



132



352

瓦質土器燗台



131



130

瓦質土器香炉



36

滑石製壺



48



82

鉈



169



51



52



50

不明鉄器



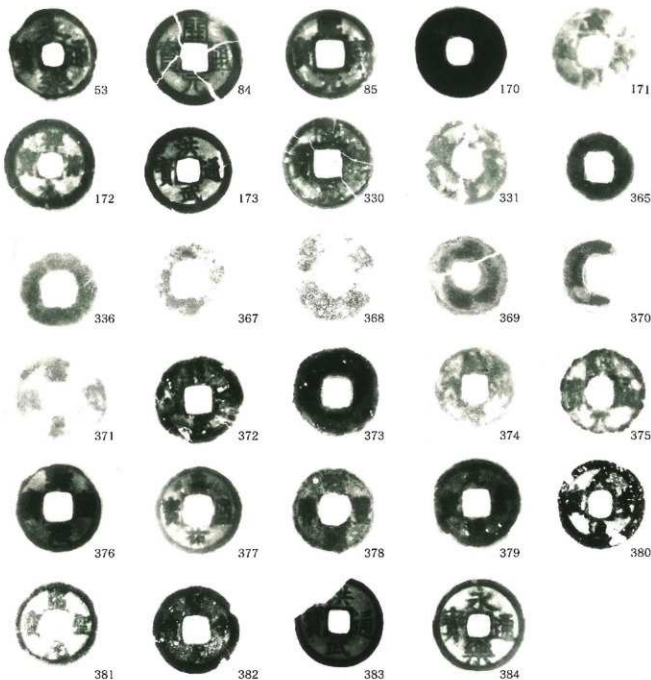
37

錠前



167

釘



銅銭、鍍前レントゲン写真(実大)

### 第3章 瀬戸遺跡

#### 第1節 遺跡の概要

##### 1) 地理的環境

中央構造線が東西に走る大分県南部は起伏の激しい地形をしている。海岸線はリアス式海岸で、平野が少なく、内陸部も山塊と、それを侵食した深い谷が織りなす急峻な景観を見せる。そうした中を県南最大の河川である番匠川は、祖母・傾山系の東端部にあたる瀧利山(753m)や傾輔山(753m)・巾の嶺(546m)などに源を発し、ほぼ東に流れ、豊後水道に注ぐ。その流域は、河川の浸食による狭く細長い、谷底平野を形成し、その部分は水田化している。また、河口部は、三角州が見られ、かつては水田が広がっていたが、現在では県南最大の都市である佐伯市の市街地となっている。この番匠川には多くの支流があり、遺跡は、そのひとつである床木川の流域にある。床木川は、津久見市・佐伯市・上浦町・弥生町の境界である彦岳(639m)を水源とし、尺間山(641m)の東側を南に流れ、同じ、番匠川の支流である井崎川に合流する。その流域は、河川の浸食と堆積で南北に細長い谷底平野が形成され、水田が広がっている。この谷底平野には、さらに、周辺の山々から小河川が流入している。瀬戸遺跡はこうした小河川が東側の山地から流れ込む谷の南側斜面に立地する。

遺跡の標高は約35mで、北側には標高約100mの急斜面の山々がそびえている。南側は、谷から供給される水を利用した水田が経営されており、谷の出口の北側と南側には小集落が展開している。本書で報告する遺跡も、こうした集落やそれに伴う水田経営など、この地域での一連の生産・生活活動と無縁のものではないと考える。

##### 2) 歴史的環境

河川沿いの平地と急斜面の山々囲まれた、瀬戸遺跡のある大分県南海部郡弥生町に遺跡は多くない。縄文・弥生時代の遺跡としては、佐伯市境の番匠川沿いに宮の原遺跡がある。この遺跡からは、縄文時代早期の押型文土器や晩期の黒色研削の浅鉢形土器と扁平打製石斧が出土している。また弥生時代の遺物としては後期後半の複合口縁甕が出土している。

古墳時代の遺跡としては、上小倉横穴墓群がある。この横穴墓群は番匠川の、左岸にある南崖山と呼ばれる標高68mの独立性の強い急斜面をもつ丘陵の東側崖面に彫り込まれた群衆墓である。その規模は、南北180mの間に構築されており、正確な数は不明であるが、少なくとも40基が確認されて、21基が調査されている。調査の結果、横穴墓から勾玉や管玉・水鳥製切子玉、金箔を貼った耳環などが出土した。築かれた時代は一統に出土した須恵器の形態から6世紀後半から7世紀前半にかけてであることがわかった。

古代の佐伯市を含むこの地域の問題として「佐伯院」の位置がある。これは、「本朝世紀」天慶4年(941)11月29日条に登壇するもので、「賊徒、今月六日に当海部郡佐伯院に婁きたり」とある。「院」とは律令国家が地方においた倉と考えられており、県内でも湯布院・安心院など地名が残されている。この「佐伯院」の推定地のひとつが、弥生町上野の小倉付近に想定されている。

中世になると弥生・佐伯などの海部地方は佐伯荘と呼ばれるようになる。その成立については、平安時代末には存在していたと考えられており、その範囲は、海部郡の約2割を占める大きな荘園であったと想定されている。中世も後半の室町時代になると遺跡や遺物は、町内の各所に点在している。その最大のものは、東側の佐伯市境にある標高223mの樹牟礼城である。この山城は佐伯氏の居城で、山頂の曲輪群を中心に、周辺の斜面には堅堀群が配設されており、南西方向に連なる標高176mの小田山にも山城が築城されている。この山城をめぐる軍事的な緊張は、1527年に謀反を起こした佐伯惟治を大友氏の命を受けた臼杵長景が2万余りの兵で攻めている。その後、1578年に大友氏が日向耳川で大敗し、県南にある樹牟礼城は防御施設を整備し、1586年の島津氏の侵襲を受ける。

この他、注口される中世の石遺物として磨崖石塔がある。この石塔群は、約25mの範囲に宝塔8基、五輪塔34基が刻まれており、嘉暦元年(1326)・嘉暦四年(1329)・康永四年(1345)の銘が見られる。また、瀬戸遺跡周辺に文明七年(1475)の銘のある板碑、天正七年(1579)の銘のある重石石幢がある。



第117図 遺跡周辺の地形と遺跡 (1/30,000)

- |         |          |         |           |          |
|---------|----------|---------|-----------|----------|
| 1. 瀬戸遺跡 | 2. ノノ瀬遺跡 | 3. 河内遺跡 | 4. 佐伯門前遺跡 | 5. 樺平礼城跡 |
| 6. 古市遺跡 | 7. 上小倉穴群 | 8. 二上寺跡 | 9. 三上寺跡   |          |

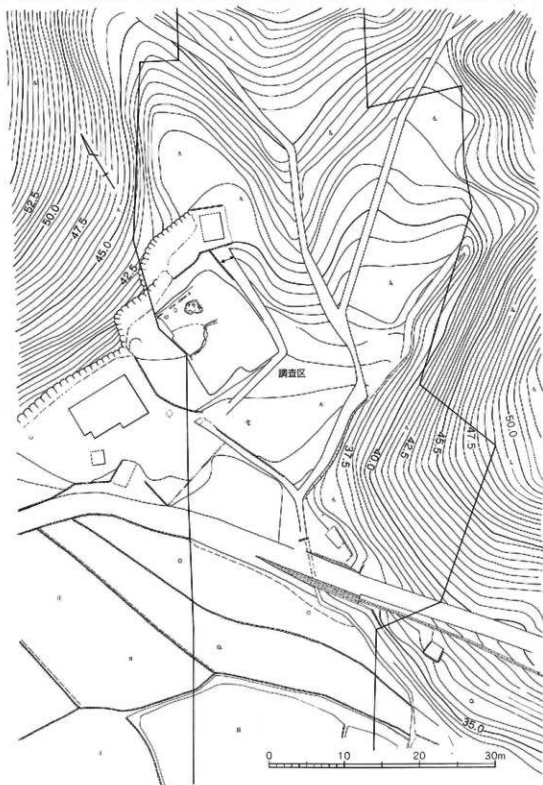


## 3) 調査の経過と概要

遺跡は谷間に立地する小規模なもので、調査の期間も10日間程度の短期間であった。試掘調査の結果、路線内の西側境界部分で遺構・遺物を検出したため、調査区はその範囲を拡張する方針で設定した。その範囲は南北12.5m、東西10mとなった。遺構は重機で表土剥ぎを行った直下で検出された。

瀬戸遺跡の調査の結果、近世の遺構・遺物が検出された。遺構は建物跡と考えられるものと、それに伴うカマド跡を検出した。また、遺物は近世から近代の陶磁器や石臼、鋤先や釘などの金属器が出土した。

調査は遺構検出、写真撮影、遺構実測、遺物取り上げのち重機で埋め戻しを行って終了した。



第118回 調査区と周辺の地形

## 第2節 調査の成果

### 1) 遺構

発掘調査を行った平坦地は、周辺地形から見ると、調査区の北側から南側に傾斜する斜面地を造成して平坦面を形成している。すなわち、北側半分は斜面を切り取り、南側半分に埋め立てている。第120図の1点破線がその境である。

その範囲で検出した遺構は、調査区の北側の石列が4.7m、南側の石列は1.7mの長さである。二つの石列の間隔は6.7mで、両者は平行しており、円連するものである。また、調査区の東北部からは、約1.8の長さで、人頭大の石を南北方向に並べた石列が検出された。これは先の東西方向の二つの石列とは直角に交わる方向を持つ。さらに、この南北方向の石列の西側には1.8mの範囲で深さ20cmの掘り込みが見られる。さらに、この周辺は、地面が踏み固められており、土固の状況が作り出されている。

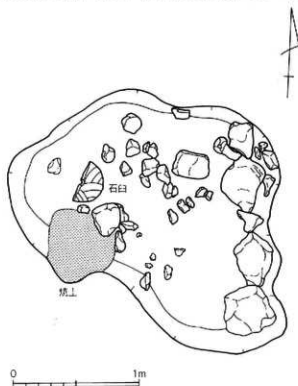
この掘り込み部分は、第119図に図示しているが、東側の東西石列は被熱しており、掘り込み内からは焼土が多く出土している。こうした状況から、この施設はカマド施設と考える。

以上のことから、検出された遺構は礎石と推定されるものは確認できなかったが、横木などを基礎とした建築物が存在していたと思われる。建物の東北隅にはカマドが作りつけられ、その周辺は土間として機能していた。しかし、壁については、壁土などが検出されず、板などそれ以外が考えられる。また、瓦の出土もないことから、屋根は藁葺きか板葺きだったものと考えられる。

### 2) 遺物

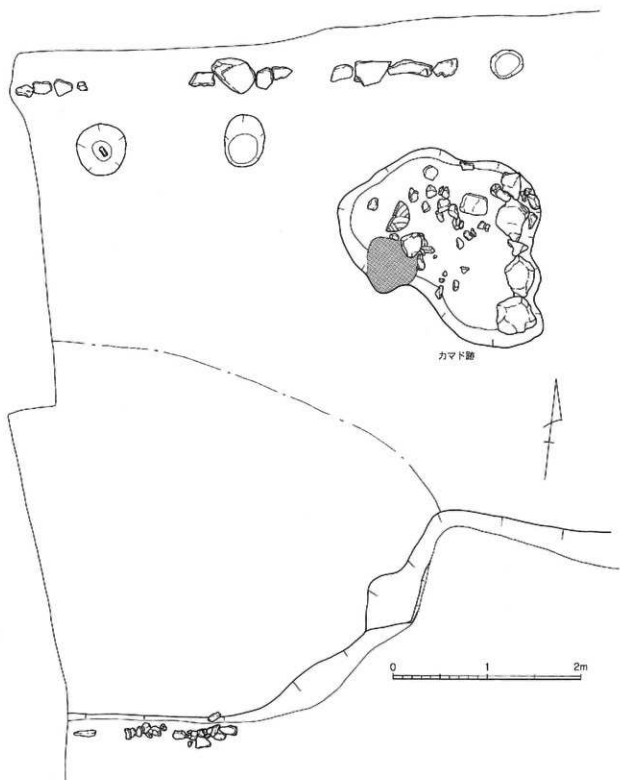
瀬戸遺跡からは、近世から近代の遺物が出土している。ここでは近世に属する陶磁器や金属器・石印を報告する。第121図に図示した1は口径15cm、器高2.2cm、底径8cmの肥前磁器の染付け皿で、素描の文様が描かれている。2は口径10cmの肥前磁器染付けの端反碗である。3は口径12cm、器高5.6cm、底径6cmの肥前磁器の染付け広東碗である。4は、口縁部が八角形になる関西系陶器である。口径は16.8cm~17.2cmで、器高7.1cm、底径7.2cmである。5は淡黄色をした関西系の行平鍋の把手である。6は、関西系の陶器で作られた木滴である。淡黄色で縦3.4cm、横3.5cmで、直径5mmの焼成前の穿孔がある。7は関西系陶器の淡黄色をした行平鍋の蓋である。口径は12.4cmである。8・9は肥前系陶器の播鉢である。口縁部外面が肥厚している。同一個体の可能性が高い。10は、関西系陶器の鉢である。口径は23cmで、口縁部は内薄し、外面が肥厚する。11は塀・明石系の陶器の播鉢である。口径は31.4cmで、内面の掘り目は10本を単位にしている。色調は、内面が茶褐色、外面が橙褐色をしている。

第122図には金属製品を図示した。12は銅製の煙管の吸口である。長さは6.9cmで、直径は吸い口が0.7cm、罫宇との接合部は1.3cmである。13は、全長17.9cm、先端部の幅2.6cm、基部の幅1.8cm、厚さ1cmで、木製の柄が付着していた痕跡がある。鉄製で用途不明である。14は銅製の釘である。長さは28.7cmで断面は隅丸方形で、厚さは0.8cmである。釘の頭は直径2.9cmの円形をしている。15は鉄製の鋤先である。全長37.5cmで、幅は13.5cmで、木を装着する部分は断面がY字をしており、長さは19.3cmである。16は扁平な鉄板である。長さ17.3cm、幅14.2cmで、厚さ0.6cmである。

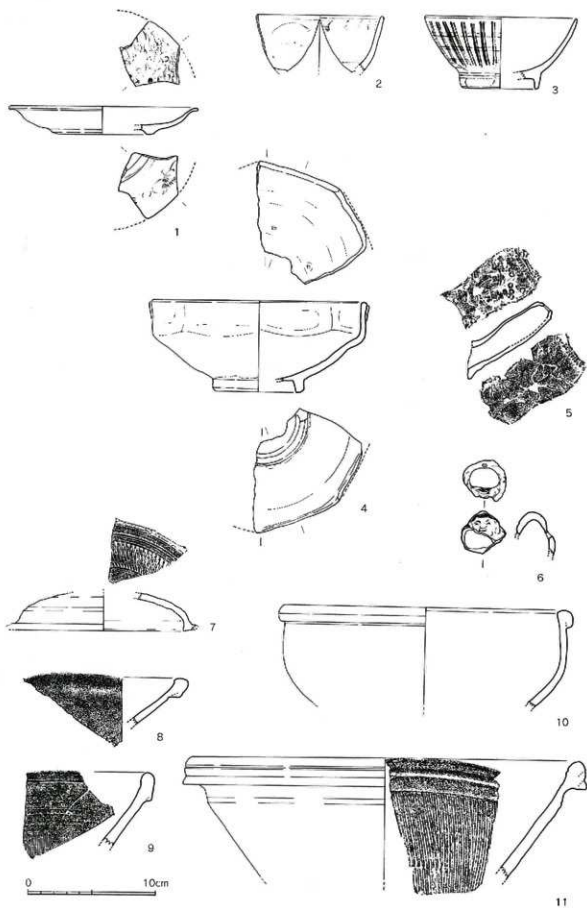


第119図 カマド周辺実測図

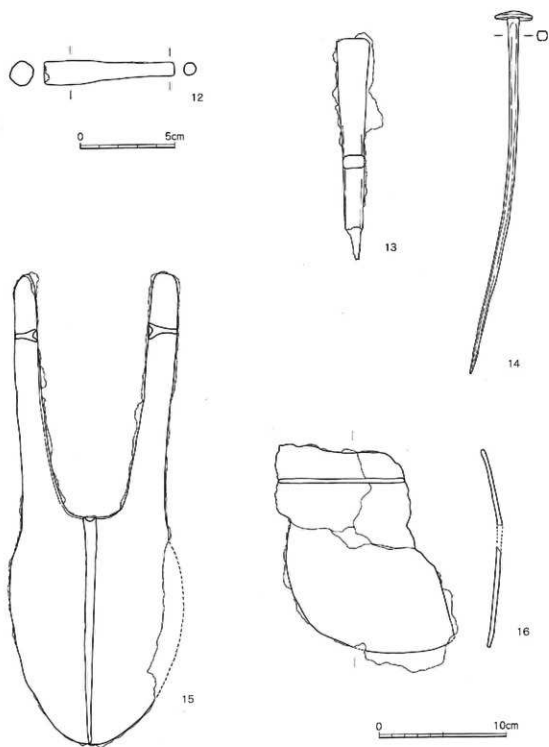
第123回は2点の石臼である。1は下臼で、直径33.8cm、厚さ約7cmの硬質凝灰岩製である。播り口は6分  
 画3柄で粗い。2も下臼で播り口の部分は直径19.4cm、受け皿部分の直径は39.7cmで、高さは13.2cmであ  
 る。播り口は磨耗しており不明である。硬質の凝灰岩製である。



第120回 建物跡実測図



第121图 出土遗物实测图 (1)



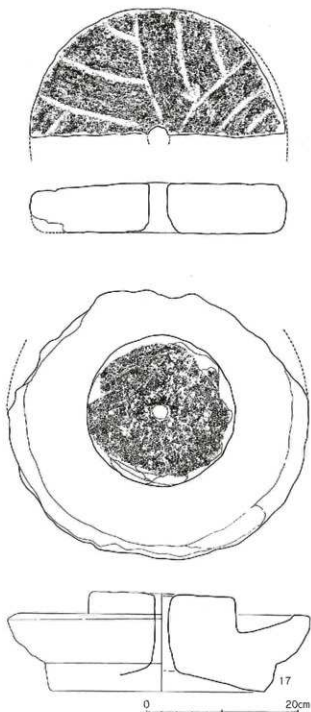
第122図 出土遺物実測図(2)

### 第3節 小結

瀬戸遺跡で検出した遺構は近世の建物遺構である。遺構は、山の斜面を造成し、平坦地をつくり、そこに構築している。存続期間は、出土した陶磁器から見ると、18世紀後半から19世紀前半までと考えられる。建物の床面は土間状に踏み固められ、硬化している。また、東北隅には作り付けられたカマドがある。出土遺物には、茶碗・皿・碗・行平鍋・搦鉢などの食器類、舞宮などの嗜好品、石臼などの加工道具、鋤先または鋸先などの農具がある。以上の状況から、この建物では継続的に生活されたものと推測される。

現在、遺跡周辺では、谷水や床木川の水を利用し、水田経営が行われている。周辺には15世紀や16世紀の石遺物が存在することから、その頃にはこの地域で人々の活動があったことを示している。おそらくこの地域の水田開発は中世末には行われていたものと考えられる。当然近世には水田経営が行われていたものと推測される。この経営者たちの居住する場所は、現在でも平坦地を水田として有効に利用するためか、周辺の山塊の接点部となっている。

こうした水田と家屋と山林で織り成す景観は、近世には出来上がっていたものと考えられる。調査した建物遺構は、こうした景観に組み込まれていたものと推定され、周辺の水田を直接経営する農民が居住する家屋であったと考えられる。そうすると、出土した陶磁器などの遺物は、当時のこの地域の農民が一般的に所有できたものとしてとらえることができ、江戸時代の流通を考える上で注目される。



第123図 石臼実測図



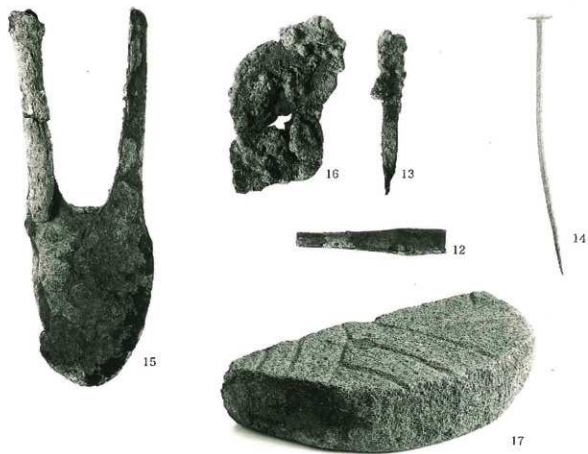
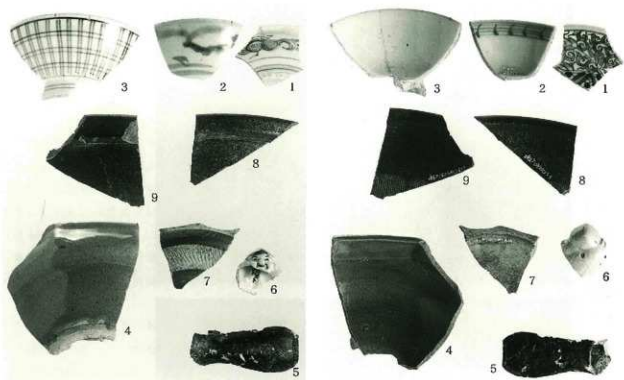
瀬戸遺跡遠景1



瀬戸遺跡遠景2



瀬戸遺跡建物跡



瀬戸遺跡出土遺物



## 第4章 佐伯門前遺跡

### 第1節 遺跡の概要

#### 1) 遺跡の立地と環境

##### 地理的環境

大分県の中央部には臼杵―八代線などに代表される中央構造線が走るため、北部地域と南部地域とでは、大きく地形が異なる。すなわち、東九州道の津久見―佐伯間の建設される南部地域の海岸線は、豊後水道に臨む複雑なリアス式海岸が展開しており、臼杵・津久見・佐伯の三つの大きな湾と多くの入り江を形成している。一方内陸部は、急峻な山塊とその間を流れる河川の浸食と堆積で形成された沖積地である、細長い谷底平野が見られる。

豊後水道の南部に位置する佐伯湾を望む佐伯市は、年平均気温が16.3度で、冬でも雪を見ることのない温暖な気候である。その地形は、祖母・植山系の東端部にあたる酒利山(753m)や佩嶺山(753m)・中の嶺(546m)などに源を発し、ほぼ東に流れる番匠川、鳩照山(661m)や石神峠(466m)に源を発し、北流する壠田川、元越山(582m)を源に北流する木立川の3河川が豊後水道に流れ込む下流域には沖積平野が形成され、水田地帯が展開している。中でも、最大の流域面積を持つ番匠川は、多くの支流を持ち、それぞれがその流域に細長い谷底平野を形成している。

佐伯門前遺跡はそうした番匠川の支流のひとつである門前川流域にある。門前川は西側にある標高223mの樗半礼山と東側の標高218mの山上寺山に挟まれた谷の中央を南流し、番匠川に合流する。川の兩岸は水田化されている。遺跡は、この中で、樗半礼山から北側に延びる尾根の断面の緩斜面上に立地し沖積地を東に見下ろす。

##### 歴史的環境

海岸部の平野と急峻な山塊からなる佐伯市では、旧石器時代の遺跡は不明であるが、縄文時代以降の遺跡が知られている。縄文時代の遺跡としては下城貝塚・亀の甲遺跡・森の木遺跡がある。これらの遺跡からは縄文早期の押型土器や器系土器が出土しており、森の木遺跡からは集石遺構も検出されている。また壠田川流域にも遺跡が分布し、早期の押型土器・チャート製石器を包含する遺跡が過去調査されている。縄文時代後期の遺跡は、白濁遺跡(B地点)において後期土器片が発見されている。

弥生時代になると下城貝塚や白濁遺跡など中期から後期にかけての遺跡が知られている。これらの遺跡は戦後1940年代の後半に発掘調査されたもので、下城貝塚から出土した口縁部の外面に刻み突帯をめぐらす翼形土器は「下城式土器」と呼称され、東九州で弥生時代前期から中期にかけて分布する特徴的な土器として知られている。また、白濁遺跡は県指定史跡として保存されている。

古墳時代の果浴遺跡は汐月遺跡で小規模の堅穴住居が調査されている。また、市内の各所に古墳が点在している。佐伯湾内の上には箱式石棺(新島片岩製)をもつ東島古墳、短甲や鉄剣が出土した宝剣山古墳が知られている。また番匠川の河口部の丘陵先端には凝灰岩製の箱式石棺をもち、人骨3体などが出土した檜野古墳があり、その他同の谷古墳・石清水古墳がある。

古代の本地域は海部郡に属し、穂門郷に比定される。穂門郷の中心地に想定される上の台遺跡では奈良時代の掘立建物跡が調査されている。またこの地域の「佐伯」の名称の初出として、「本朝世紀 天慶4年(941)11月29日条」に登場する。その内容は「賊徒、今月六日に当海部郡佐伯院に襲いきたり」とある。「院」とは律令国家が地方に置いた倉と考えられている。この「佐伯院」の推定地のひとつとして、この時期の遺構や遺物を多く出土した汐月遺跡がその候補として考えられている。

中世になると佐伯市を含む海部地方は佐伯荘と呼ばれるようになる。その成立については、平安時代末には存在していたと考えられており、その範囲は、海部郡の約2割を占める大きな荘園であったと想定されている。その荘園の支配は、豊後国の守護職である大友氏と密接に関係する佐伯氏が治める地域であった。特に室町時代、

佐伯氏の統治の中心は標高223.7mの榑牟礼山に築かれた榑牟礼城である。榑牟礼城の築城は大永年間（1521～1528）、10代佐伯惟治の時代と考えられており、その東側山麓の古市地区などに町屋が形成されていたと想定されている。また、2003年に榑牟礼城の東麓で行われた角の木地区の発掘調査においては、15世紀後半から16世紀代に属すると推定される掘立柱建物が発見されており、榑牟礼城関連の遺跡として捉えられる。

榑牟礼城はその後、1578年に大友氏が日向耳川で大敗し、島津氏との緊張感が高まる中、防衛施設を整備するが、1586年の高津氏の侵攻を受ける。佐伯氏は榑牟礼城とその周辺を拠点とし10代佐伯惟治から14代惟定まで継続するが、文祿2（1593）年に豊後国守護大友氏が豊原秀吉によって改易されると推定も佐伯を去り、榑牟礼城もその役目を終える。

山城以外でも、周辺には石造物や寺院など中世の遺跡が多く存在する。中でも佐伯市上岡字八戸所在の上二重石塔直下および周辺部からは平安末～鎌倉時代に属する蔵符器が出土しており、大分県の有形文化財に指定されている。

大友氏の豊後国支配が終わると、豊後国はいくつかの小藩に分立される。それに伴い佐伯地域の政治経済の中心も、榑牟礼城とその周辺を中心とした地域から東に移動する。すなわち、海岸に近い佐伯湾を見下ろす八幡山（城山）に城郭を築城し、その東側山麓に城下町が形成され、毛利氏の支配する佐伯藩が成立する。毛利氏の佐伯藩は、江戸時代を通じて行われ、明治時代を迎える。そして大分県となった近代以降、この城下町は県南地域の拠点的都市である佐伯市の核となっている。

## 2) 調査の概要

弥生町と佐伯市にまたがる榑牟礼山系の東側山麓部に位置する佐伯門前遺跡の文化財発掘調査は東九州自動車道（津久見～佐伯）建設工事に伴い、日本道路公団からの委託を受け平成14年度と平成15年度に実施した。遺跡は、周知遺跡である榑牟礼城跡の周辺部にあたり、門前の地名や石造物が分布することから中世遺跡の存在が予測された。

平成14年度の調査は遺構の保存状況や分布を知るためにまず試掘調査を行った。試掘調査は佐伯市側から重機で実施し、遺構や包含層がある部分は人力で行った。その範囲は、南北約600m、東西約100mで、6つの尾根の先端部とその間の谷部6ヶ所で、約50ヶ所に試掘トレンチを設定した。その結果、中村地区からは縄文時代早期の土器や石器、加えて築石遺構を検出した。また脇地区からは、輸入陶磁器と土師質土器、柱穴遺構が確認された。なお、試掘調査でまとまった縄文土器が出土したT29試掘区は、客土であったため、その周辺の本調査は、実施しないことにした。

平成15年度の調査は、前年度の試掘調査の結果を基に日本道路公団と協議し、本調査は中村地区から取りかかり、終了後に脇地区の調査を行うことにした。中村地区の本調査は平成15年5月13日から実施した。この地区は、弥生町と佐伯市にまたがる榑牟礼山系から東に延びる尾根の先端部が、扇状に広がる緩斜面の西側部分にあたる。中村地区の北側の一部は重機の進入が困難であったため、作業員を投入し、人力によって表土の除去を行った部分もある。発掘調査は、中村地区の南西部にある築地が調査区南東部に移転する計画があったため、その工事用取り付け道路の建設のために、調査区の南4分の3を早めに終わらせる必要があったため、調査区南側から順次北に向けて調査を行った。中村調査区の調査対象面積は約3000㎡であり、調査の結果、芋人の礎を積み重ねた縄文時代早期の築石遺構を32基、縄文時代前期と考えられる築石遺構を1基検出した。築石遺構の周辺からは、縄文時代早期の土器片や石器が出土した。

脇地区の調査は平成16年1月23日から着手した。脇地区は中村地区の西側、佐伯市街地寄りに位置し、榑牟礼城から延びる尾根の先端部にあたる。調査区は約500㎡と狭い範囲だが、中世（13世紀～16世紀）のものとされる遺構や遺物が検出された。遺構は調査部分の平坦地そのものが、上層の堆積状況から中世の時期に、尾根の先端部を、山側の土砂を削った土砂で埋め立て築地し、テラス状の土地を形成し、生活を営んでいたことがうかがわれる。その平坦面からは、柱穴や土坑が検出された。遺構内からは土師器や陶磁器などが出土した。

平成16年3月12日には全ての調査を完了した。



試験トレンチ (T)  
 本調査地区

第124図 調査位置図 (1/2,000)

## 第2節 中村地区の調査

## 1) 遺構とその分布

佐伯門前遺跡中村地区の調査では、第Ⅱ層のアカホヤ層から縄文時代前期以降に属する集石遺構1基（1号集石）、第Ⅲ層では縄文時代早期に属する32基の集石遺構を検出した。集石遺構の分布は調査区全体に散在する状態で、中でも第Ⅲ層の集石遺構が集中する箇所を1・2B区境地点、8BK、9BKで確認した。第125図に本調査で出土した全集石の分布図を示した。

集石は全て火熱を受けており、遺構を構成している礫は赤褐色に変色している。

集石遺構の形態を分析すると、大まかに次のように4分類することが可能である。

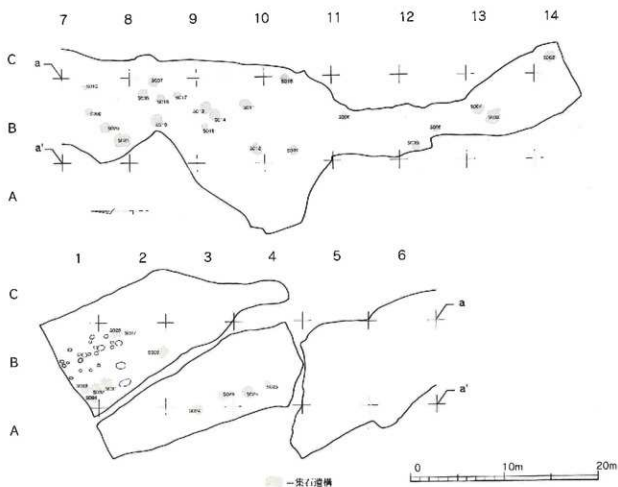
I類・・・掘り込みに基底部となる扁平礫や大礫を配置して、上部に拳大の礫が多数認められる集石遺構

II類・・・掘り込みを伴った拳大の礫群のもので、基底部が青かれている集石遺構

III類・・・掘り込みを伴わず、拳大～人頭大の礫群をもつ集石遺構

IV類・・・掘り込みを伴わず、平面中心部や基底部に人頭大の礫が認められる集石遺構

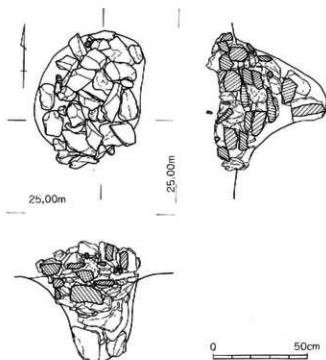
佐伯門前遺跡は後述のように無文土器と単一的な祭文土器が多く、逆に編年の位置づけの明瞭な遺物が少ないために遺物と集石遺構との関係を相対把握することができなかった。遺構全体の集石遺構の分布を平面的にみると直径1m以上の明確な円形状の輪郭を持つ集石は、2～5基を単位とした、まとまりが確認できる。集石の変遷は、指標となる遺構内での遺物の検出が無いに等しく、時期の決定ができず、層位的な前後関係も把握することができなかったため今回は省略した。



第125図 中村地区遺構配置図

### 1号集石 (第126図)

1号集石は調査区北端、1B区の調査区外との境界線付近において第1層のアカホヤ層上面で検出した。規模は長径75cm、短径49.5cm、深さ50cmで、平面プランは楕円形を呈する。当遺跡調査区の中では最も深い掘り込みをもつもので、この掘り込みに拳大の角礫が、隙間無く詰め込まれた状態で検出された。礫の大半が凝灰岩で、一部、片岩やチャートが混ざる。他の集石遺構と比較すると、本集石の小礫は極少数で、全体的に被熱しているが、他の集石に比べてその度合いは低い。組成としては、大きめの掘り込みの中に黒灰色土を用いて縁を整え、底辺部に厚みのある人頭大の礫を数個配置し、中盤の扁平な礫層の上に均一的な大きさの礫を配置して、あたかも全体のバランスをとるような構成になっている。埋土は全体的に灰橙褐色で細分するほどの目立った相違は見られず、細かい白粒を多く含む。遺物等は検出されなかった。当遺跡調査区の他の集石遺構と標相を異にし、また、アカホヤ層の上位に構築されていることから、遺構の時期は縄文時代前期以降と推定する。集石の類別ではⅡ類に属する。



第126図 中村地区1号集石実測図

### 2号集石 (第127図)

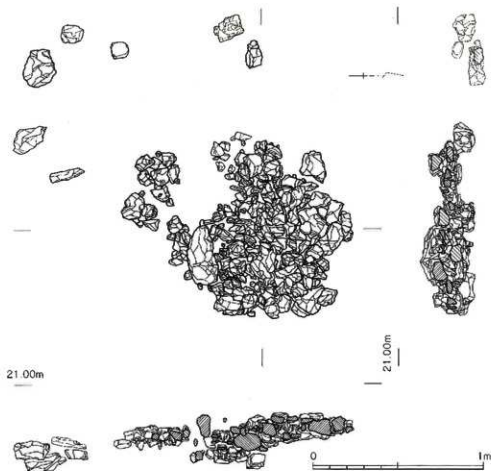
2号集石は調査区南東、14C区の第Ⅲ層上部で、他の集石とは孤立した状態で検出した。中心部にある多数の小礫を、拳大の礫が周りを取り囲むように配置されている。遺構内に長径30cm大の凝灰岩を伴うが、炭化物や、石器類の検出は認められず、石皿等に使われたと考えるよりも、ここでは集石の一部分とみるのが妥当である。集石の規模は長径142cm、短径90cmを測る。遺構周囲に礫器一点を含む人頭大の礫が、集石と同レベルで多数散在している。集石表面の中心部で特に強い火熱を受けた痕がみられる。集石の類別ではⅡ類に属する。

### 3号集石 (第128図)

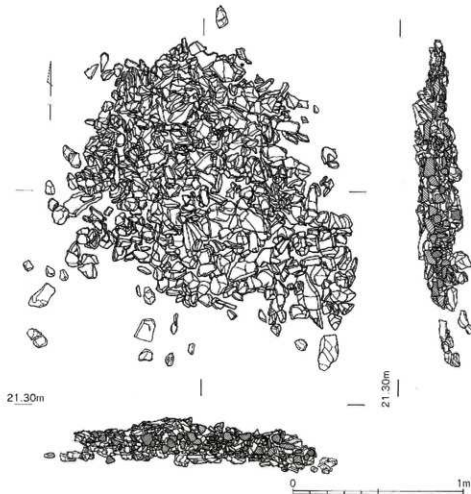
3号集石は13B区の中央よりやや北寄り、第Ⅲ層から検出された。集石の規模は、長径約200cm、短径約140cmで、本調査区最大の集石遺構である。集石下位には掘り込みや土坑は検出されなかった。集石の状況を観察すると、南東部分には15cm大の礫が集中しており、北西部分には8~10cm大の小礫が集中していることがわかる。集石のプランは楕円形を呈するが、南西部分が崩れ落ちたとは考えにくく、順次、集石が拡張された状態を呈しているものと推定する。もとは一箇体の割礫が集石の表面に多数広範囲で見られ、レンガ状に強く変色していることから、長期間、もしくは頻繁に、調理等の活用で使用されたと推定されるが、炭化物や土色の変化は、認められなかった。また、集石が密となっている南西部分で土器片が一点出土したが、この集石との関連は不明である。集石の類別ではⅡ類に属する。

### 4号集石 (第129図)

4号集石は13B区、3号集石の北東に隣接し、その規模は長径約120cm、短径100cmである。平面プランは楕円形を呈する。集石の東西断面両側に傾斜を持つ。検出面は第Ⅲ層である。大礫を含まず、小礫を下敷きとして、遺構表面に同じような大きさの角礫を配置した構成は3号集石の南東部分と共通しており、検出されたレベルを



第127図 中村地区2号集石実測図



第128図 中村地区3号集石実測図

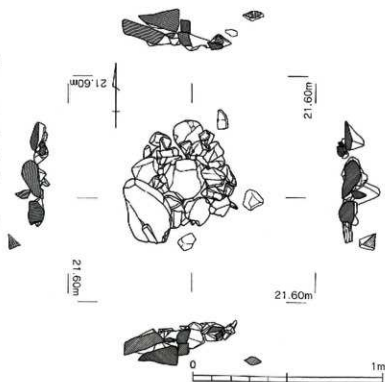
考慮しても、この2基は近い時期に使用されたものと推定される。、集石に伴う掘り込みは明確には認められない。南側部分の礫には強い被熱による変色が見られ、礫表面が脆くなっているものが多く認められた。集石底辺部から上層片が一点出土した。集石の種類ではⅢ類に相当する。



第129図 中村地区4号集石実測図

#### 5号集石 (第130図)

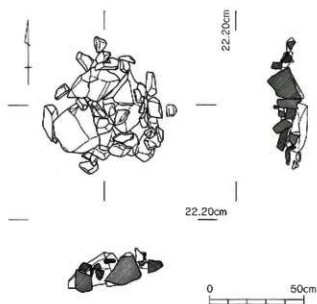
5号集石は第12B区の西側に位置する。集石の規模は長径約70cm、短径約50cmである。平面プランは、ほぼ円形を呈する。当集石を構成する礫は強い火熱を受けているものが多く観察された。遺構の下位には集石に伴う掘り込み等は検出されなかった。また、小礫の割合が少ないことから、本来の集石が崩れ、上位の礫は遺失したと推定される。集石遺構の種類ではⅢ類に相当する。



第130図 中村地区5号集石実測図

## 6号集石 (第131図)

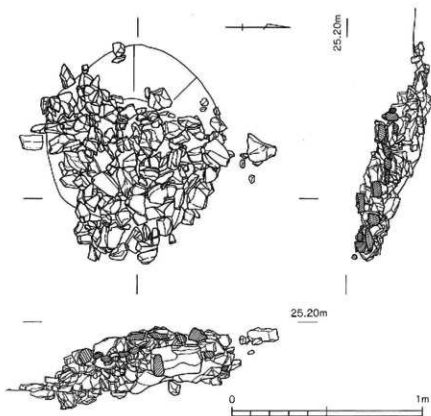
6号集石は11B区の中央北寄りに位置する。集石の規模は直径約65cmで、ほぼ円形の平面プランを呈する。3個の30cm大の礫が下位に認められる。大礫の前には小礫が多数散らばり、本来上位には小礫が密に置かれていたと推定される。集石に伴う掘り込みは認められなかった。礫は全体に火熱を受けており、特に小礫には強い変色が認められる。集石遺構の類別ではIV類に相当する。



第131図 中村地区6号集石実測図

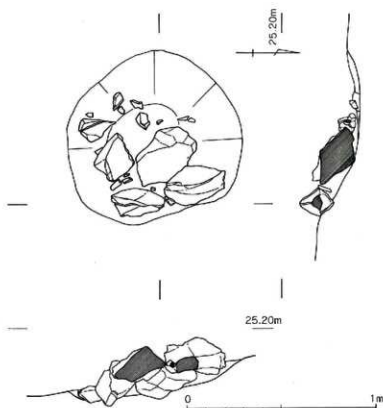
## 7号集石 (第132図・133図)

7号集石は8B区と8C区の境に位置する。規模は長径約110cm、短径約70cmの範囲で広がり、平面プランは不整楕円形を呈する。当集石は長径95cm、短径、90cm、深さ約10cmの明確な掘り込みをもつ。掘り込みの中には人頭大の扁平角礫が4個置かれ、その上位に孕人の小礫を密集するように置いている。全ての石に被熱による変色が見られ、底部の大礫4個にも強い被熱による剥離と変色が見られる。集石類別ではI類に相当する。



第132図 中村地区7号集石上部実測図

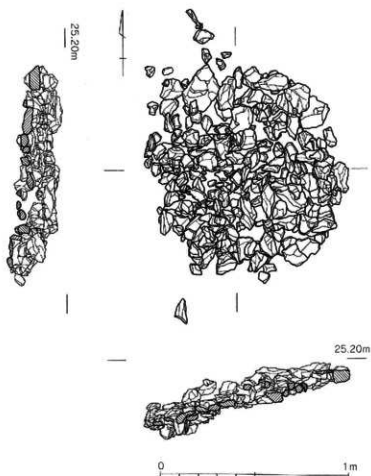




第133図 中村地区7号集石下部実測図

#### 8号集石 (第134図)

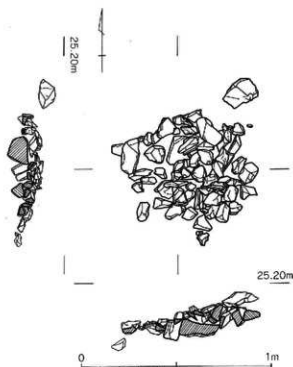
8号集石は8B区、7号集石のすぐ北西に位置し、西にむかって緩やかに傾斜する地形に沿って存在する。規模は長径120cm、短径110cmの範囲で広がり、平面プランは楕円形を呈する。集石の下位には直径約100cmの円形を呈する掘り込みが認められる。集石上位には火熱を受けた平大の礎が無数に重なり、下部掘り込み部分には扁平な大礎数個が広く密に配置されていた。隣り合う7号集石と同時期もしくは近い時期に使用されたものと考えられる。集石遺構の類別ではII類に相当する。



第134図 中村地区8号集石実測図

## 9号集石 (第135図)

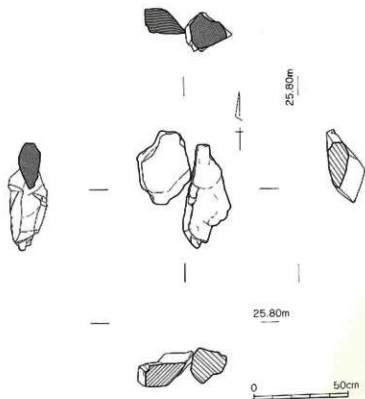
9号集石は7B区に位置する小規模の集石である。主に小礫で構成されており、その規模は長径80cm、短径60cmで、不整形円形の平面プランを呈する。集石下位には掘り込みは確認できないが、全体に火熱を受けていて、実用された遺構として機能していたと考えられる。集石遺構の類別では第Ⅲ類に相当する。



第135図 中村地区9号集石実測図

## 10号集石 (第136図)

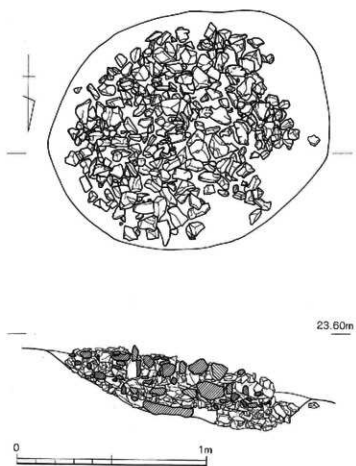
10号集石は7B区北東に位置し、入道大よりも少し大きな2つの凝灰岩礫のみからなる。弱い変色が見られ、周囲から微量の炭化物が検出できたため、何らかに活用されていたものと思われる。



第136図 中村地区10号集石実測図

### 11号集石 (第137図)

11号集石は9B区南東に位置する円レンズ状の掘り込みを伴う集石である。土坑の規模は長径150cm、短径125cm、深さ25cmの楕円形を呈する。集石はその土坑の中に全部納まり、拳大よりも小さい角礫がぎっしり詰まっている。集石は130cm×95cmの規模に広がる。掘り込みの底部には、人頭大より大きめの扁平角礫一個の周囲に、長径15cm前後の岩礫を数個配し、その上を多数の小礫が薄い層を形成している。基底部の大礫は平面図では判断し得ない。全体的に凝灰岩とチャート質の礫が混在しており、表面上では、火熱を受けたことによる変色が観察できる石はまばらで、集石の中層に特に強い変色が認められたものの、粘性を帯び締めまりのある理上からは土器や炭化物、焼土粒類の検出は確認されなかった。集石遺構の類別ではI類に相当する。



第137図 中村地区11号集石実測図

## 12号集石 (第138図)

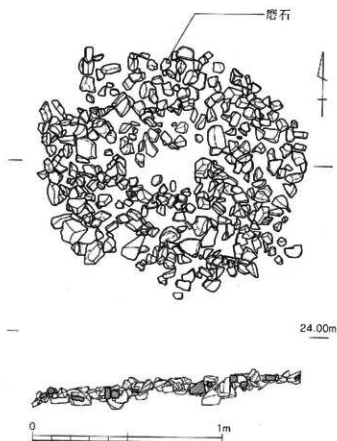
12号集石は9B区南西に位置する集石である。9区には集石5基が存在するが、そのうち4基は集中して存在するのに対し、当該基はそれらと距離を置いた状態で検出された。規模は長径145cm、短径70cmで、平面プランは楕円形を呈する。大小様々な礫が薄い層を形成した状態で検出された。全体に刺い火熱を受けた跡がみられるが、集石に伴う掘り込みは検出できなかった。集石遺構の類別では田類に相当する。



第138図 中村地区12号集石実測図

### 13号集石 (第139図)

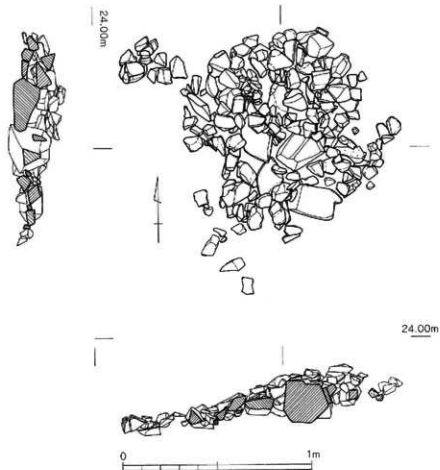
13号集石は9B区の中央北側に位置する集石である。規模は長径145cm、短径100cmで楕円形のプランを呈する。レンガ状に変色した5~10cm大の小礫が薄く広がり、中央部分には礫が希薄でドーナツ状を呈する。全体的に礫の変色はわずかで、平大の礫が疎らに配置されている。礫同士の重なりは少なく、明確な掘り込みは認められなかった。集石遺構の類別ではⅢ類に相当する。



第139図 中村地区13号集石実測図

### 14号集石 (第140図)

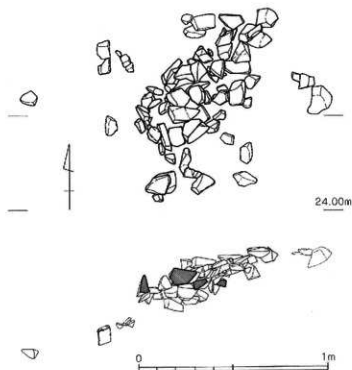
14号集石は9B区に位置し、13号集石の南西に隣接する形で構築されている。規模は長径135cm、短径75cmの範囲で広がり、楕円形の平面プランを呈する。集石は5cm~30cmの大小様々な角礫が多数折り重なり、特に、遺構中央から南側にかけて、数個の大礫が確認された。全体的に火熱を受けたことによる変色が確認でき、一部に表面が剥落した状態が観察できる。磨石と思われる丸礫が遺構北側より出土した。遺構の薄い堆積と、明確な掘り込みが確認できなかった事は同レベルで検出した13号と特徴的に共通するが、両集石とも明確な輪郭を呈している事から、同時期に形成され、別々の独立した遺構として実用されていたと考えられる。14号集石の1m西側に流れ込みと思われる平大の疎らな礫群と、30cm大の扁平な凝灰岩3点出土した。集石遺構の類別ではⅣ類に相当する。



第140図 中村地区14号集石実測図

## 15号集石 (第141図)

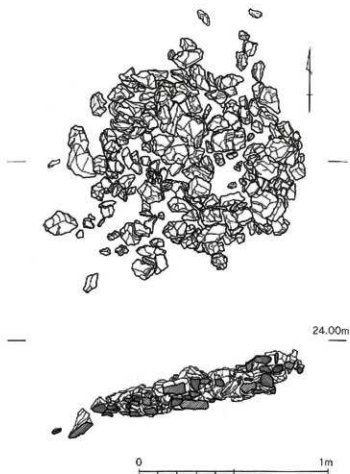
15号集石は9B区に位置し、13号集石と14号集石の西側に存在する。主に縦横約10cmの角礫で構成されている置き込みのない散石状の遺構である。石の一つ一つにわずかな変色が見られるが、顕著なものではない。整体的にもまとまりがなく、一部礫が無造作に散乱していることから、他の遺構から寄せ集められた転礫の可能性がある。以上のことから当該遺構が集石として機能していたかは疑問が残る。集石は縄文層の地山に沿って西に傾斜をとっている。遺構中に炭化物、礫器の検出は確認できなかった。



第141図 中村地区15号集石実測図

### 16号集石 (第142図)

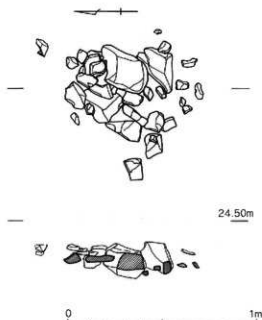
16号集石は10B区から10C区に位置する。規模は長径125cm、短径85cmの範囲で広がり、楕円形の平面プランを呈する。集石下位には深さ14cm程の凹レンズ状の掘り込みを持つ。集石は10cm未満の小礫層の上に、拳大の礫を全体に並したような構造で、火熱を受けた大小の礫が均等に配置されている。底部中央部に長さ18cmの平礫が認められる形式は、11号集石と共通している。礫の材質はほとんどが地元の凝灰岩で、集石全体に火熱を受けている。埋土は黒褐色で粘性を帯びるが、埋土中に炭化物、焼土は確認できなかった。



第142図 中村地区16号集石実測図

### 17号集石 (第143図)

17号集石は8B区南東に位置し、その規模は長径75cm、短径45cmで、平面プランは楕円形を呈する。集石は、まとまりのない5~30cm大の礫の小規模な集合で、全体に弱い火熱を受けている。集石下位に掘り込みは確認できなかった。



第143図 中村地区17号集石実測図

## 18号集石 (第144図)

18号集石は8B区に位置する集石である。8B区には集石が5基存在するが、そのうち一番西側にあたり、近世における農地整備による石垣の掘削がすぐ近辺に迫る調査区隔から検出した。規模は長径115cm、短径60cmである。周囲には礫の散乱が認められた。周囲の礫の散逸は、農地整備の影響による可能性が高い。集石下位には深さ10cm程の凹レンズ状の掘り込みが確認できた。掘り込みの中には30cm大の礫が敷き詰められており下位遺構を構成している。集石上位の礫は拳大の礫と小礫で構成され、全体に火熱を受けている。集石からは土器が一点出土したが、遺構に関連するものであるか定かではない。

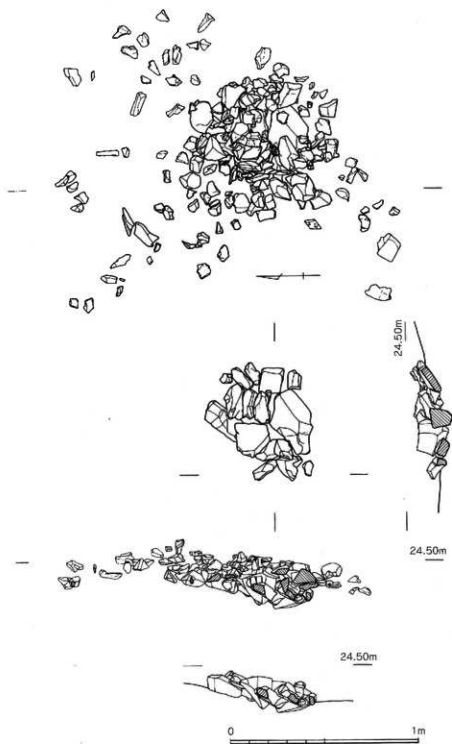
## 19号集石 (第145図・第146図)

19号集石は8B区に位置する集石遺構である。四方を集石遺構で囲まれた状態で検出され、その規模は長径140cm、短径115cmの範囲で広がり、楕円形の平面プランを呈する。集石下位には長径150cm、短径130cm、深さ12cmの浅いレンズ状の掘り込みを伴う。掘り込みの中には人頭大の凝灰岩が敷き詰められており、その上位に5cm～10cm大の小礫が折り重なるように積み上げられている。積み重ねられた礫はいずれも強くレンガ状の変色が認められる。8B区の集石遺構は、石材、検出レベルともに共通するものがあり、同時期に機能していたものと考えられ、粘性と強いしまりを持つ黒褐色の埋土も5基の集石に共通している。集石遺構の類別としてI類に相当する。

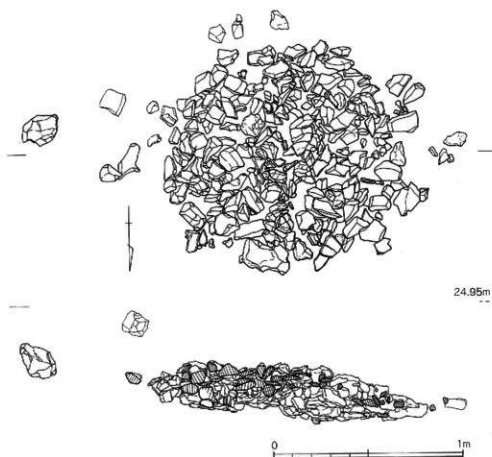


中村地区 8-B区 集石

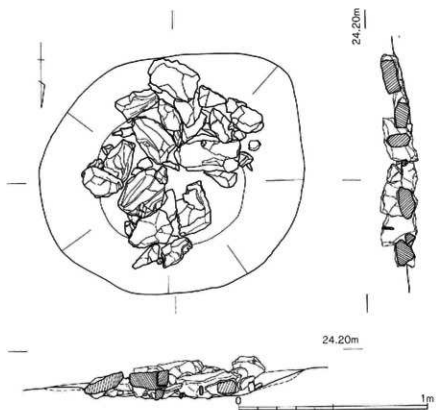




第144图 中村地区18号集石実測図



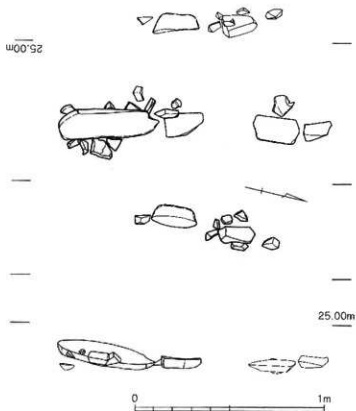
第145図 中村地区19号集石上部実測図



第146図 中村地区19号集石下部実測図

### 20号集石 (第147図)

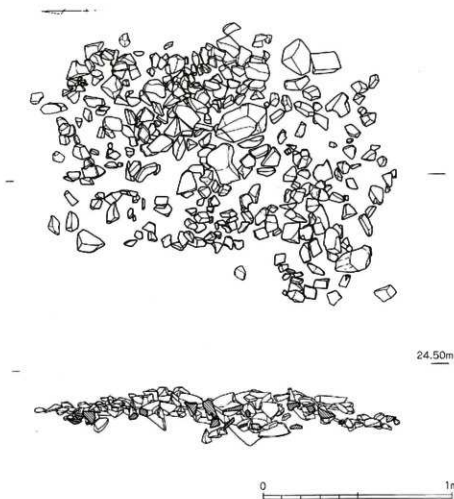
20号集石は7B区の中央よりやや南に位置し、しまりの強い縄文包含層下部から検出した。周囲には無数の小礫が散乱しているが、その中で当遺構は、ほぼ南北方向に礫を2列に配置するように構築され、周囲の散乱した礫とは様相を異にする。西側の列は、50cm大の石皿と思われる扁平礫一個とそれを固定するような多数の小さい角礫、加えて赤大の凝灰岩3個で構成され、東側の列は、長さ20cm前後の礫2個と複数の小礫で構成される。何らかの意図をもって配されたものと推定されるが、当遺構の機能などの詳細は不明である。遺構下位には掘り込みや、土坑の類は検出できなかった。礫には表面的に赤みがさす程度のわずかな変色が見られる。



第147図 中村地区20号集石実測図

### 21号集石 (第148図)

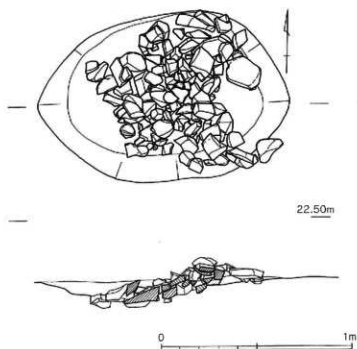
21号集石は7B区の南西に位置する集石である。規模は南北190cm、東西105cmの範囲で広がり、やや長方形の平面プランを呈する。縦横10cm未満の小さい角礫が絨毯上に薄く広がり、長さ20cm前後の岩礫を疎らに包含する。集石下位には明確な掘り込みは確認されず、集石を構成する礫は全体に被熱している。20号集石周辺の小礫が流れ込んだものと思われる小配石群を遺構北東部に広く検出した。礫が疎な箇所が部分的にみられ、炭化物、焼土は遺構内から検出できなかった。変色の度合いも極めて弱いもので、調理などで実用された遺構であるかという点では疑問が残る。



第148図 中村地区21号集石実測図

## 22号集石 (第149図)

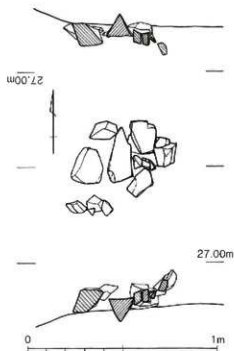
22号集石は10B区の北西に位置する集石である。規模は長径115cm、短径60cmである。集石下位には長径125cm短径90cm、深さ10cmの浅い円レンズ状の掘り込みを伴い、その中に礫がほぼ収まる。集石を構成する礫は10cm前後の角礫が大部分を占め、掘り込み底辺部と集石外周部に人頭大の凝灰岩を配置している。掘り込みの平面的な広さに比べ、礫の集合範囲が小さい。全体に強い変色が見られるが、被熱したことによる礫の破砕はない。埋土は、粒子が細かく茶褐色を呈し、床面近くで徐々にしまりが認められる。遺物、焼土等は認められなかった。



第149図 中村地区22号集石実測図

### 23号集石（第150図）

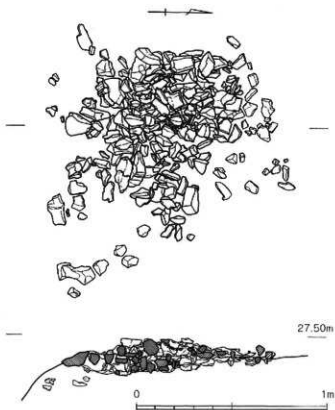
23号集石は4B区の中央西側位置する集石である。規模は長径60cm、短径45cmの範囲で広がり、10～30cm大の角礫の集合体である。本来これらの礫の上位には小礫が積み上げられていたと考えられるが、後世の攪乱等によって散逸したものと推定する。遺構中央に配置された長さ30cmの頁岩は地元産のもので、周囲の凝灰岩同様、強く被熱しているが、集石遺構内から炭化物や遺物は検出できなかった。



第150図 中村地区23号集石実測図

### 24号集石（第151図）

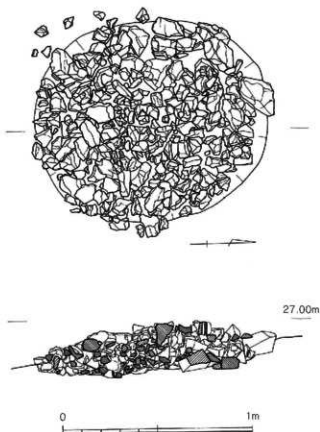
24号集石は3A～3B区に位置する集石である。規模は長径140cm、短径65cmの範囲で広がり、集石下位には深さ5cmの浅いレンズ状の掘り込みが伴う。5～10cm大のレンガ状に赤く変色した小礫が遺構西半分に隙間なく積み重ねられており、その外周部に弱く被熱した赤火の礫が配置されている。遺構東側は破壊を受けたようにまとまりを欠くが、黒褐色の柔らかい理上には極微量の炭化物を含んでいる事から、当集石が調理等に使用されていたと考えられる。



第151図 中村地区24号集石実測図

## 25号集石 (第152図)

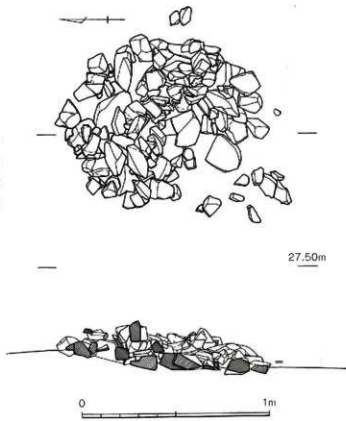
25号集石は4B区北西部、T24の傍に位置する集石である。規模は長径130cm、短径85cmの範囲で広がり、深さ10cm程度の浅い凹レンズ状の掘り込みを伴う。集石はこの掘り込みの中にすべて納まる。掘り込みの中には、大小多数の礫がぎっしり詰まっており、強い焼成によって破砕した石が多く見られる。小礫群のまわりに形を整える格好で、拳大の凝灰岩が南側を中心に配置され、円形状にまとまりを持つ。黒褐色で柔らかくしまりのある埋土中に炭化物や、遺物は確認できない。



第152図 中村地区25号集石実測図

## 26号集石 (第153図)

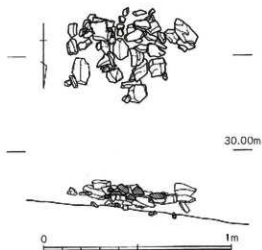
26号集石は3B区の南東部に位置する集石である。25号集石から約1m離れた地点に構築されており、規模は長径115cm、短径65cmである。12cm～30cmの角礫と小礫の集合で平面プランは略円形を呈する。集石の南西部分には変色したこぶし大の礫が散乱しており、当遺構から散逸したものである可能性がある。集石の南側で土器片一点が出土した。



第153図 中村地区26号集石実測図

### 27号集石 (第154図)

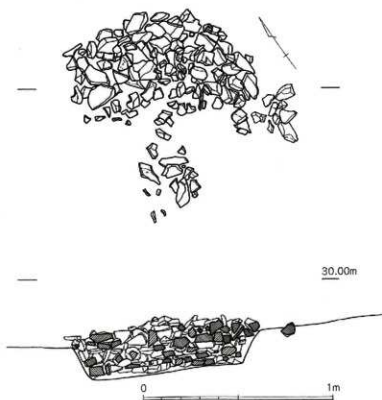
27号集石は2B区の東側に位置する集石である。規模は長径75cm、短径40cmである。集石下位には明瞭な掘り込みは確認できなかった。集石は、平面的に大小15cm未満の礫が不均等に配置されている。近世の農地整備により大部分が攪乱されていた。礫全部に被熱したことによる変色がみられる。



第154図 中村地区27号集石実測図

### 28号集石 (第155図)

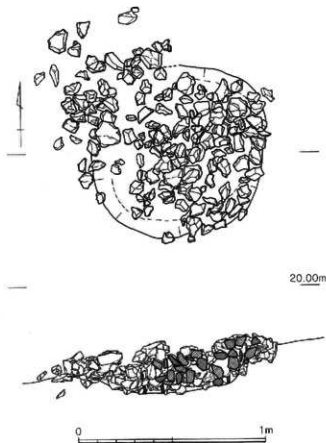
28号集石は2B区の北東部に位置する集石である。規模は長径125cm、短径50cmである。近世の農地整備における削平の影響で遺構の南半分が攪乱された状態で検出した。集石下位には断面的に箱型を呈する深さ20cm程度の土坑状の掘り込みを伴い、10cm大の礫がぎっしりと積み重なっている。土坑内の埋土に炭化物や焼土、土器片の検出はなかった。



第155図 中村地区28号集石実測図

## 29号集石 (第156図)

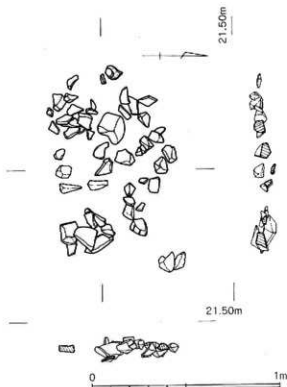
29号集石は2B～3B区に位置する集石である。遺構北西部で礫が散逸しており、攪乱を受けているが、南側では、礫の集中と明確な凹レンズ状の掘り込みが検出された。本来の規模は長径100cm、短径90cm、深さ15cmの略円形を呈するレンズ状の掘り込みの中に構築されていたものと推定される。集石は主に拳大の礫で構成され、いずれも弱く被熱している。黒褐色で粘性のある、しまりのしっかりした埋土に、微量の炭化物が含まれていたが、土器片は確認できなかった。



第156図 中村地区29号集石実測図

## 30号集石 (第157図)

30号集石は12B区の北西部に位置する集石である。東西105cm、南北45cmの範囲に広がる。集石を構成する礫は被熱している。礫同士の厚い重なりは見られず、遺構の輪郭は不明瞭で明確な掘り込みは確認できなかった。

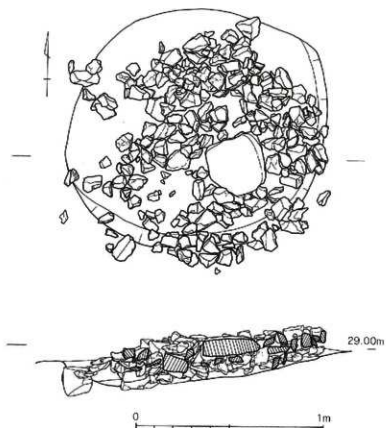


第157図 中村地区30号集石実測図



### 31号集石 (第158図)

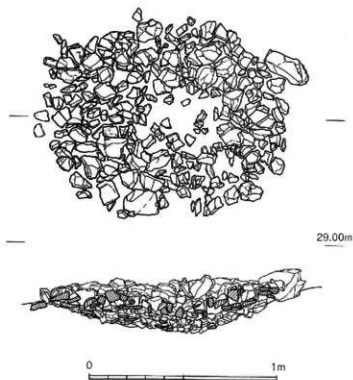
31号集石は2B区の北に位置する集石である。集石下位に凹レンズ状の掘り込みを伴い、155cm×115cmの範囲に広がる。掘り込みは深さ15cm程度で、略円形を呈する。掘り込みの中には拳大の礫と小礫が混在しているが、集石が疎らな部分が目立つ。集石の上位に、40cm大の石皿と考えられる扁平な大礫が置かれていた。全体に被熱しているが、変色の具合が礫それぞれで異なる。埋土中には無文七器片数点が含まれおり、炭化物が微量ながら確認できたことから、調理などに実用されていたと考えられる。



第158図 中村地区31号集石実測図

### 32号集石 (第159図)

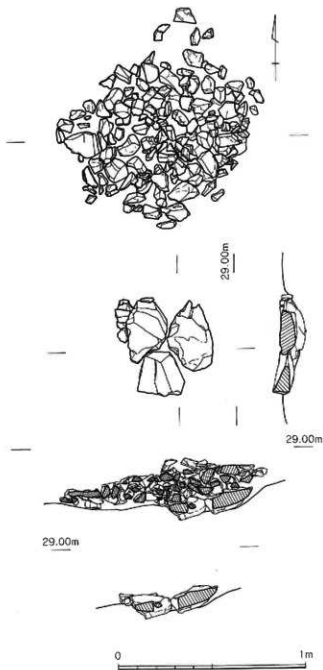
32号集石は1B～2B区に位置する集石である。31号集石と33号集石に扶まれる形で検出した。規模は長径150cm、短径95cmの範囲で広がり、略円形の平面プランを呈する。集石下位にはレンズ状の掘り込みが認められ、深さ15cm程を測る。礫はすべてこの掘り込みの中に納まる。掘り込みの底部には小礫が敷き詰められ、その上に拳大の礫が層を成している。遺構中央に集石が疎らな部分があり、平面的にドーナツ状に形成されている。集石は全体に弱く被熱しており、埋土中に微量の炭化物と土器片を2点確認した。集石遺構の類別としてはII類に相当する。



第159図 中村地区32号集石実測図

## 33号集石 (第160図)

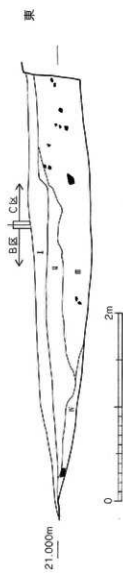
33号集石は1B区の南西部に位置する集石である。調査区外との境付近に長径110cm、短径70cmの範囲で広がり、略円形の平面プランを呈する。集石下位には、深さ5cmの浅い凹レンズ状の掘り込みを伴う。掘り込みの底部に頁岩1個を含む人頭大より大きめの礫3個が配置され、その上に掘り込みを覆うように、拳大の礫が積み上げられている。即上中に、この遺構に関連すると思われる炭化物のブロックを確認できたが、土器、石器等の遺物は出土しなかった。



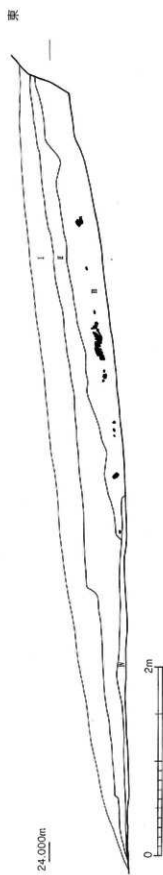
第160図 中村地区33号集石実測図

佐伯門前遺跡中村地区 基本層序

I	淡灰褐色上層	表土	
II	暗赤黄色土層	アカホヤ	非常に脆い、小礫・土胞片を含む（二次産物か?）
III	黄褐色上層	縄文早期包含層	やや堅く締まる 礫（20cm～30cm）、小礫、土胞片を含む
IV	暗灰褐色上層	地山	非常に固くよく締まる 小礫を多く含む



第161図 中村地区14区東西土層実測図



第162図 中村地区10区東西土層実測図

## 2) 遺物

## 包含層出土遺物

## (1) 土器

佐伯門前遺跡中村地区において、検出した33基の集石遺構の内、32基の遺構は厚さ20cm~80cmの第Ⅱ層で検出され、同じ層から縄文時代早期の上器片が多数出土した。出土遺物の分布は総じて散在的で、一定の分布傾向を示すものではない。内訳は、焼成の整った条痕文と無文の土器片が主体を成し、その他に押型文が数点出土した。胴部の大形破片、口縁部も随所に検出できたが、同一個体の判断が困難なものが多く、完璧な接合復元ができなかったのが実状である。また平成15年5月の調査開始に先だって、調査区に任意に設けた5本のトレンチの内、T24にて縄文後期に属する土器の口縁部が数点出土した。

第163図の1・2は山形文を施すもので、薄手の胴部と考えられる上器片の外全面に、1は7段、2は8段の山形文が施されている。内面に文様は認められないが丁寧な調整が成されており、胎土には砂粒が多く、いずれも角閃石や長石、石英を多分に含んでいる。焼成は良好で表面全体に煤の付着が観察でき、特に2は焼成が堅緻である。

第163図3のような、尖底部の頂部に至るまで施文された土器も出土したが、押型文土器の出土はこれを含め、ごく少数にとどまるものだった。第163図4は1B区から検出した口縁部片で暗茶褐色の色調を呈するものである。器面には貝殻刺突文が連続的に施文され、内側の調整は滑らかに仕上げられている。胎土に角閃石、長石を多く含み、割合良好な焼成である。厚さは10mmを測る。1~4の内面はナデ調整が施されており、色調は内面外面共に暗茶褐色で、焼成は良好である。第163図5~18は薄手の条痕文土器の口縁部である。5~12の口縁部は外反するようにやや開く。6・12の条痕文は凹凸を指先に感じる程度で、条痕文の上からナデ調整が加えられている。13・16は口縁端部でやや内湾気味となる。14~18は口縁部は直線的に外傾する。条痕文は内面を横方向に施し、外面はそれより幾分立ち上げた施文の様相を呈するが、相対的にみて統一性にかけている。16~18は特に条痕文が明瞭で、内外面横方向のナデ仕上げである。

第164図19~45は無文・厚手の口縁部である。19~21は、内傾する口縁部外面に粘土痕をつけた土器である。19は胴上部から口縁部にかけての破片で口唇部を欠損している。残り22~45は無文・厚手の土器で、内面の多くに煤の付着がみられる。29・43は口縁部が直線的にやや内傾し、内外面ともに横方向に丁寧なナデ調整が施されている。焼成は良好である。口縁がほぼ直立する41・44や、口縁先端部が急に外反している36のようにある程度のバリエーションが認められるが、佐伯門前遺跡において無文・厚手タイプの口縁部の大半は、胴部からの滑らかな曲線で外反を呈するもので構成される。

第165図46~55、第165図57~59は無文土器の口縁部破片で、整理段階で接合した土器も含め大型破片を図示した。これらの破片は、第163図5~18の器壁が薄いタイプと第164図19~45の器壁の厚いタイプとの中間を成すもので、器形は深鉢を呈するものと推定される。いずれも焼成は良好で胎土は細かい粒子の中に0.3~0.5cmの石英を含む。51には煤の付着が顕著に見られる。59はやや胴部が張り出すと考えられる。51・56は口縁部から底部に向け砲弾形を成し、尖底になることが考えられる。54は口縁がやや外反し、外面に横方向のナデ調整が施され、内面に指圧痕が認められる。さらに胴部上方に横方向のミガキ調整が認められる。

第166図60~72は外面に条痕文が明瞭に認められる厚手の口縁部破片である。70は口縁部が外反して立ち上がる深鉢片で、外面に加えて内面にも明瞭に条痕文が認められる。外面の条痕文は横方向に施文されることを拮抗と穿つが統一性を欠く。68はやや外反する口縁を成し、外口縁下に穿孔を有する。穿孔は外面から内面に向けて穿たれており、穿孔部の径は外面直径約8mm、内面直径約3mmを測る。

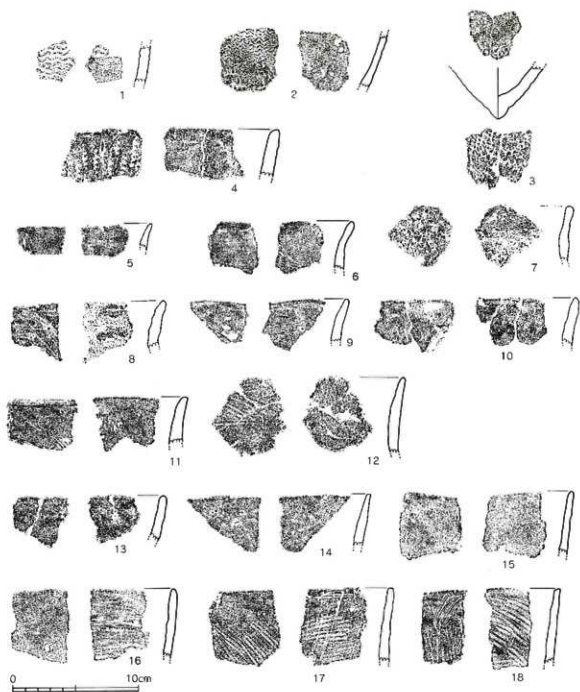
第167図73~88は胴下部の破片である。内外面ともに条痕文を施すもので、器壁の厚さは厚手と薄手のほぼ中間のものからやや厚みを帯びるものまで確認されている。ここでは比較的大形の破片で状態の良好なものを図示した。磨耗の少ない条痕文とともに横ナデの器面調整で滑らかに仕上げられているものが多くを占める。79・84・87は破片の傾きから底部に近い部位と考えられる。88は横方向の上に縦方向の条痕文が施されており、網目状を成す。器面の色調は内外ともに赤褐色で焼成は良好である。器厚は6mmを測る。

第168図89～100は条痕文土器の胴部薄手から一部厚手のものを図示した。全体的に条痕は明瞭で、施文方向は統一性に欠けているが、98・99以外は横方向の施文が基調となる。焼成は良好である。93は特に器壁の厚い資料で、内面は撫でられており、外面も条痕文を施した後、撫でられている。96・99・100などからは、胴部がややふくらむ器形が想定できる。底部は、106～109の尖底、110の平底、111・112の丸底があり、器形にはかなりの多様性を認めることができ、時期差の問題も考えられる。

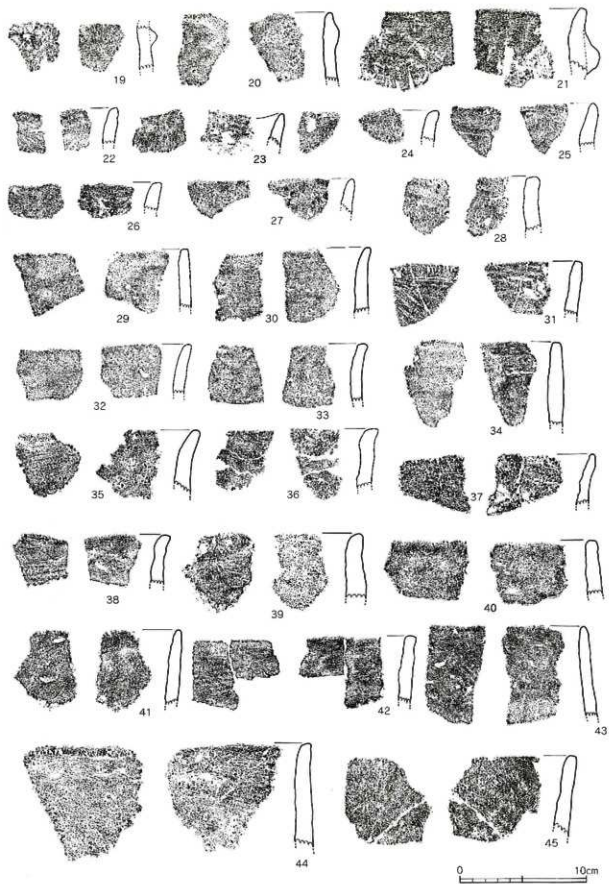
第169図101～106は無文土器・条痕文土器の底部に近い胴下部である。いずれも良好な焼成を受け、丁寧なナア調整をうけている。105は丸底タイプの胴部で強い煤の付着がみられる。第169図107～112は無文・条痕文の縄文土器底部で、うち107～109は無文土器の尖底部である。胎土中に0.2mm～0.5mmの石英・角閃石を多量に含み粒子はきめ細かい。110の平底を有する土器は表面の剥離、磨耗が激しく、文様は明瞭には確認できない。第169図111・112は共に丸底タイプのもので、112には3条の条痕文が残る。

第170図113～142は上に調査区内のトレンチから出土した縄文後期の土器である。114・115は内面口縁部に1条の沈線を施し、内外面にヘラ磨き調整を行っている三刀田式の深鉢形片である。胎土は1mmの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面茶褐色、外面茶黄褐色である。132・133は直立する口縁部底外面に2条の沈線をもろ器面全体にわたって丁寧な磨きが施されている。132は赤茶褐色であり、133は灰褐色である。119は直立する口縁部の外面に平行する3条の沈線文が施文されている。122はややしめる頸部から段をもって外傾する口縁部の外面に2条の沈線がめぐる深鉢形土器である。内外面には磨きによる調整が行われている。129は上げ底の底部である。135には口唇部に浅い刻み目がある。これらの土器は、縄文時代後期末～晩期初頭に位置づけられる。132は沈線部に至るまで丁寧な磨かれており、色調は茶紅色で鮮やかである。135は胴部のふくらむ浅鉢形土器で、口唇部と第2沈線下位に浅い刻み目を伴う。134は浅い波状口縁をなし、頂部外面には凹点文が施文される。136は黒色磨研土器の様相を呈する。140は10A区から出土した高杯の胴部である。外面はヘラを用いた研磨がみられ、内面は横ナデが施されている。色調は外面内面共に淡赤黄色である。焼成は良好である。141は壺形土器の肩部の破片である。140・141と古墳時代の遺物である。142は、中世の土器の可能性をもつ、土器片である。

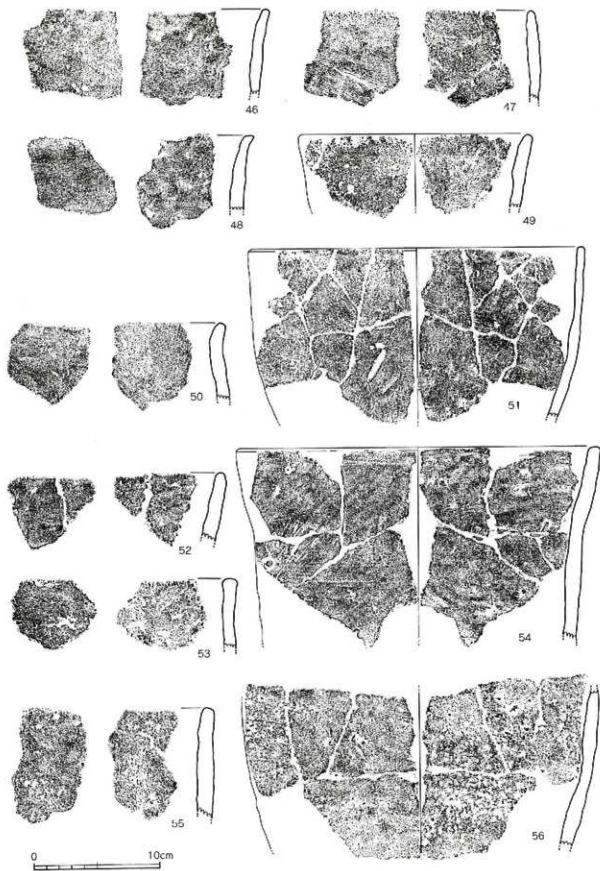
第171図、172図の143～183はT-29トレンチ内から出土した遺物を図示した。143は口縁部内面に沈線が1条めぐり、144は口唇部に有軸羽状文の刻目が施文されている。145～150は、ゆるくしめる頸部から、内側の直立する口縁部の外面に、2～3条の沈線をめぐらす深鉢形土器である。151は肩部に2条の凹線がめぐり、152は頸部に1～2条の、沈線がめぐり、153は口縁部が内湾する深鉢形土器である。154～171の166以外は口縁部が外反する深鉢形土器の資料で縄文時代後期後葉の土器である。179・180は御領式の浅鉢である。内外面共に丁寧なヘラ磨きが施されている。181・182は173～176の底部の可能性が高いが、183は縄文時代晩期後半の深鉢形土器の底部である。縄文後期の遺物のうち第171図143～第172図180は本調査区と谷を挟んだ向かいの丘陵の南斜面に設けた試掘トレンチ(T029)客土中より出土した。



第163图 中村地区出土縄文早期土器实例图 (1)

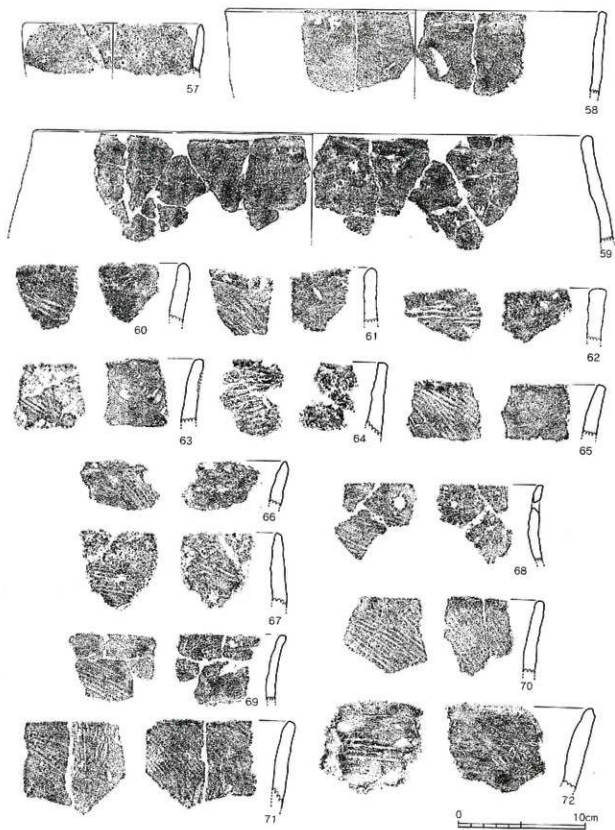


第164图 中村地区出土縄文早期土器実測图(2)

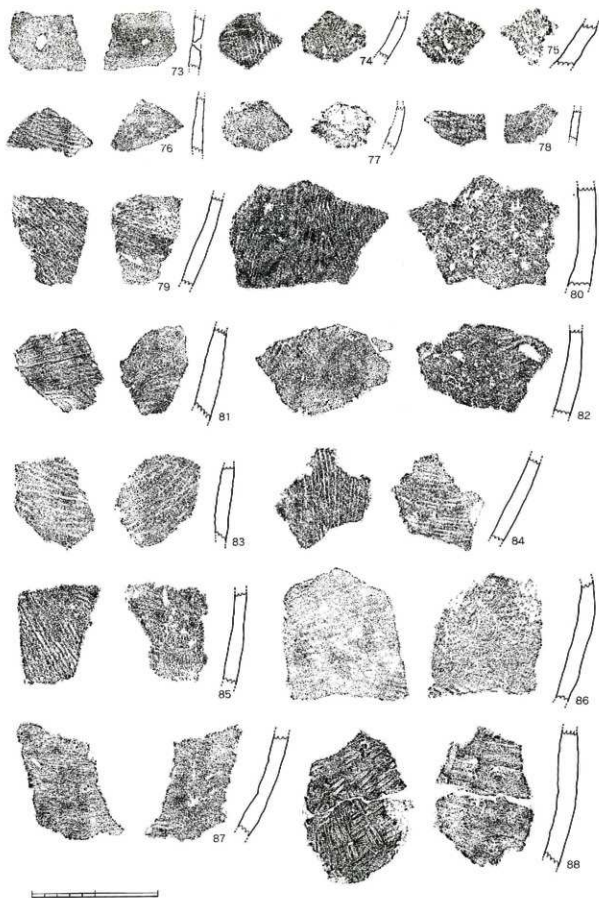


第165图 中村地区出土縄文早期土器実測图(3)

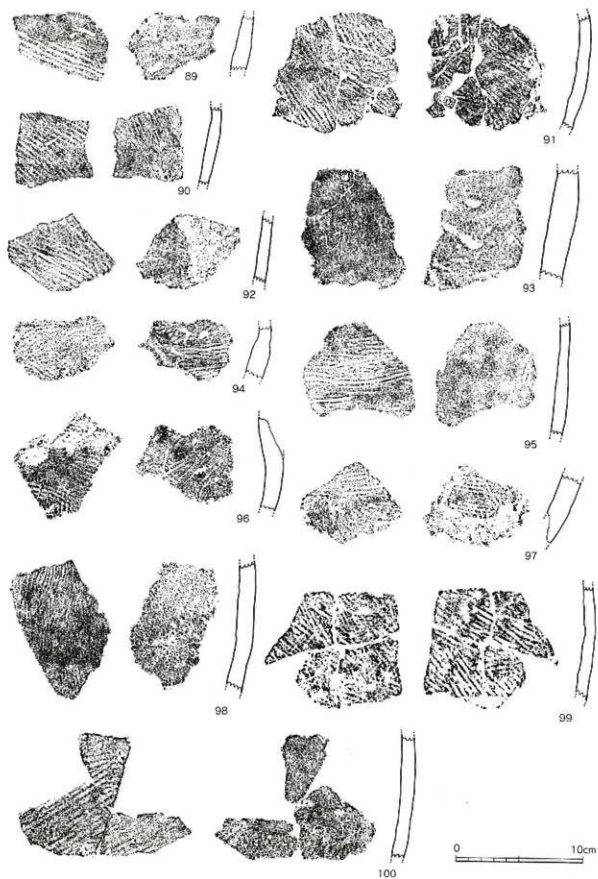




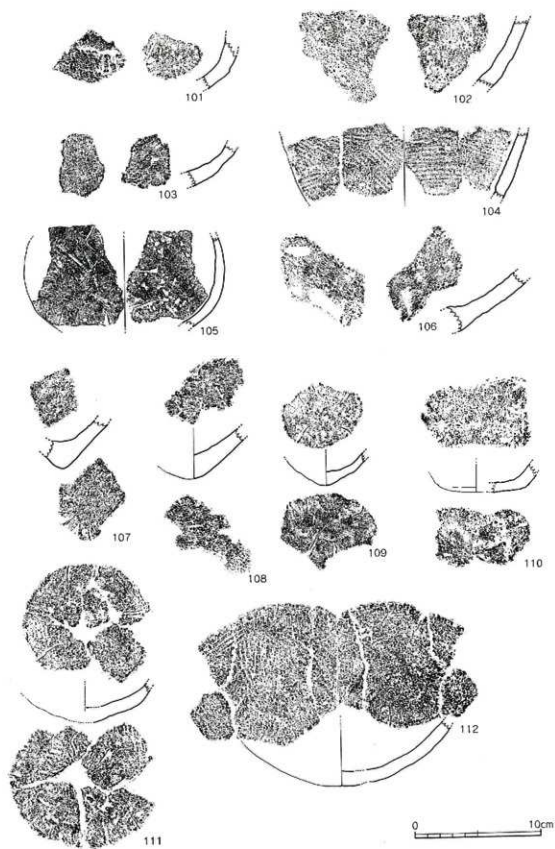
第166図 中村地区出土縄文早期土器実測図(4)



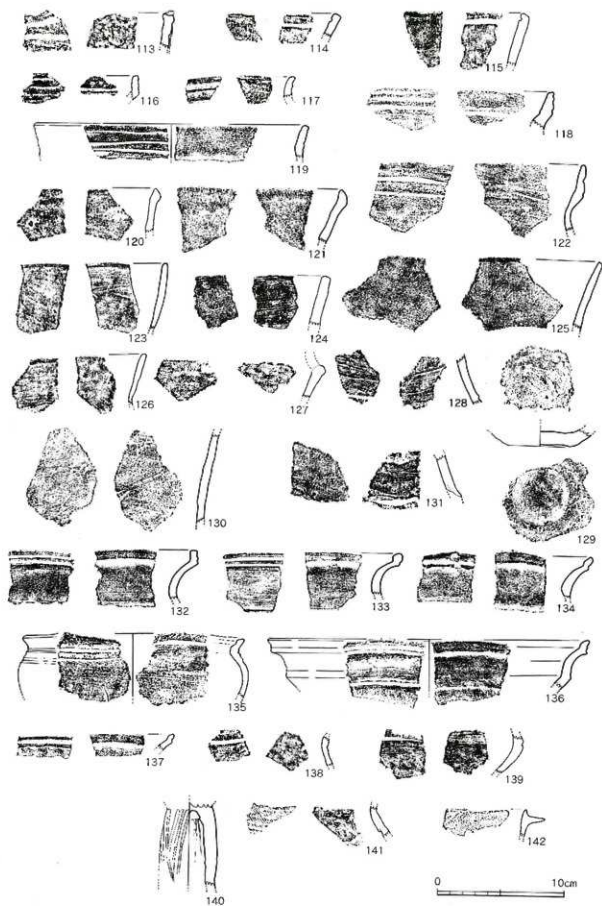
第167图 中村地区出土縄文早期土器実測图(5)



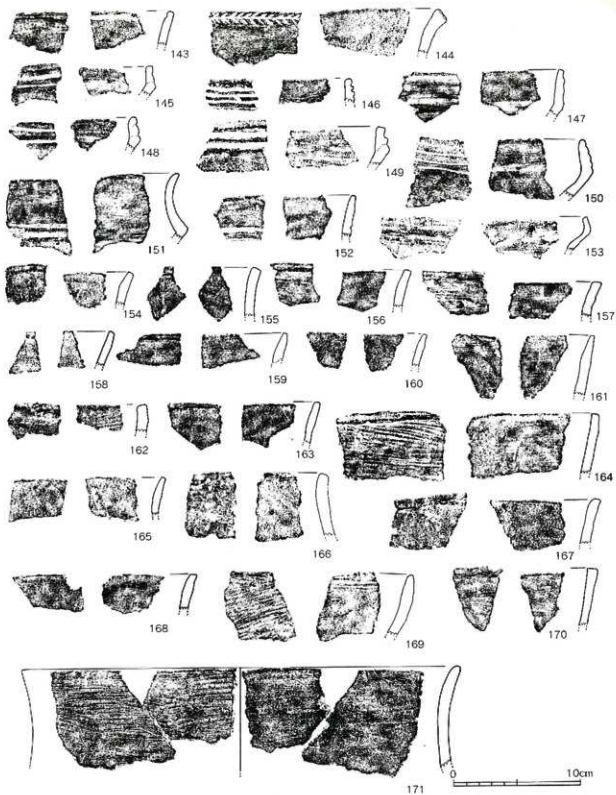
第168图 中村地区出土縄文早期土器实测图 (6)



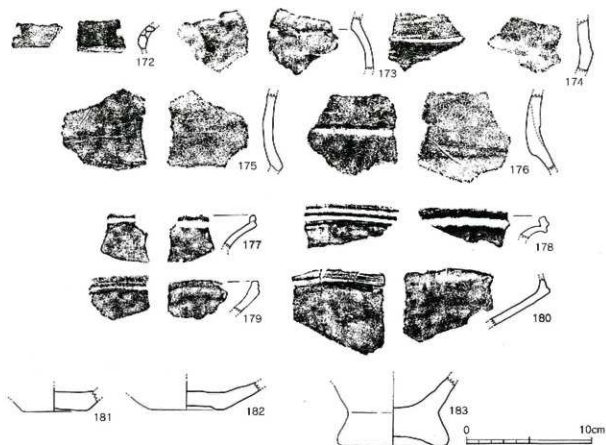
第169図 中村地区出土縄文早期土器実測図 (7)



第170图 中村地区出土土器美测图



第171圖 T-29出土縄文土器実測図 (1)



第172図 T-29出土縄文土器実測図(2)

## (2) 石器

門前遺跡中村地区からは多様な石器類が出土している。内訳は石鏃、鏃鏃、スクレイパー、使用痕ある剥片、剥片、砕片、石核である。出土した土器のなかには主体を占める縄文時代早期の土器の他に、縄文時代晩期の上層も少量含まれていることから縄文時代晩期に属する石器類が混入していると考えられる。しかし石器類のほとんどはアカホヤ火山灰の下からの出土であり、概ね縄文時代早期のものと考えてよいといえる。

**石核** 網石核の可能性が高い石核が縄文時代早期の包含層から1点出土している。石材は牟田産と思われる漆黒色の黒曜石を用いているが、僅かに気泡がみられる為、小国産黒曜石の可能性もある(第173図)。E面に打面を作出後、小口のA面、側面のB面、次いで側面のD面側で剥離作業を行っていることが剥離痕の切りあい関係から読み取れる。小口であるC面は細かい剥離痕とやや幅広い剥離痕の切りあっており、細石刃剥離痕と同じものであるのか判断が難しい。しかし全体的には細石核の特徴に共通する形態であり、深い関連を有するものかもしれない。重さは1.7グラムである

**石鏃** 石鏃は4点図示したが、このほかにチャートで石材とする石鏃の破片が3点ある。図示した石鏃は基部の挟りが深い例と(第174図2)、挟りの浅い基部を有する例からなる(第174図3～4)。図示した石鏃の石材は、1例目が紫島黒角閃安山岩(第174図2)、2例目が紫島産黒曜石(第174図3)、3例目がチャート(第174図4)、4例目が頁岩(第174図5)を石材としている。なお1例目と3例目の石鏃の縁は細かい押し剥離の結果、鋸歯状となっている。2例目は裏面側の調整は縁部の周辺に施しており、重さは0.6gである(第174図3)。3

例11の形造的な特徴は両側縁が外側へ緩やかに湾曲しつつ基部に至り、基部は逆刺が尖り、重きは1.3g(第174図4)。4例目は流紋岩を石材とする。形態的な特徴は尖端部から基部の逆刺にかけての両側縁が直線的に開き、逆刺は尖る(第174図5)。

エンド・スクレイパー 2例ある。1例は図示したものは典型的なサムエンドスクレイパーに分類されるもので、縄文時代草創期から早期にかけてしばしばみられる(第175図8)。石材は頁岩で、素材は小型の不定形剥片を用い、素材端部を半円形に整形している。重量は10.1グラム。2例目は幅広の剥片を素材に用い、端部の裏面側に半円形の整形を施す(第175図7)。

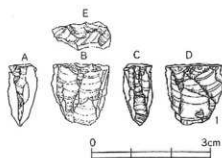
削器 1例ある。a面左側縁とb面左側削縁部に入念な加工がみられる。石材は飯島産黒曜石で重きは16.9グラム。

使用痕ある剥片 3例図示した。いずれも頁岩を石材とする剥片で、縁辺部に微量剥離痕がみられる。1例目は重量が5.5グラムの例(第175図12)、2例目は重量が12.9グラムの例(第175図12)、3例目は頁岩を石材とする縦長剥片を用いたもので、重量が17.6グラムの例(第175図12)である。

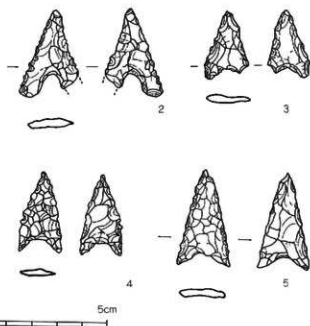
加工痕ある剥片 3例図示した。1例目は頁岩を石材とする不定形剥片を用いたもので、重量は18.0グラムである(第176図19)。加工は表裏面に粗い剥離痕が観察され、形態が水滴型に近いので、あるいは尖頭状石器または石鏃の未成品である可能性は高い。2例目は重量が31.9グラムで、a面の右端部に2回の平坦剥離痕がみられ、チャートを石材とする(第176図22)。3例目は重量が56.0グラムで、c面(主要剥離面)の左側縁にノッチ状の加工痕がみられる例で、チャートを石材とする(第176図23)。加工痕は鋸歯状である。

剥片 剥片は7例図示した。いずれも不定形の剥片である。1例目は頁岩を石材とする不定形剥片を用いたもので、重量は10.8グラムである(第175図9)。2例目は不定形剥片を用いたものである(第175図10)。3例目は頁岩を石材とする不定形剥片を用いたもので、重量は9.7グラムである(第175図11)。4例目は頁岩を石材とする縦に長い不定形剥片を用いたもので、重量は8.4グラムである(第175図13)。側縁は入りこんでおり、整ったものではない。5例目は縦に長い不定形剥片である(第175図14)。側縁は入りこんでおり、整ったものではない。6例目は頁岩を石材とし、寸詰まりで長方形の剥片で、重量は13.5グラムである(第175図16)。7例目は飯島産黒曜石を石材とする縦に長い不定形剥片であるが、右側縁は入りこんでおり、整ったものではない。両端部の裏面に加工痕のような剥離痕が観察されるが、明確な意図のもとによる連続剥離ではない。重量は31.2グラムである(第175図17)。

石核 石核は7例を図示したが、形態と剥離状況によって6類に分類できる。1類：礫を分割し、礫面を打面として分割面側で短い不定形剥片を剥離した石核である。1類の石核は1点のみで、脈の多いチャートを石材とし、重きは123.3グラムである(第177図28)。2類：分厚い剥片を素材とし、両側縁、または片側縁の方向から直交するように両面あるいは片面に剥離痕がみられる石核。2類は2点あり、いずれも脈の多いチャートを石材としている(第176図20、25)。2点の内、大型の例は寸詰まりでa面側が主要剥離面であり、素材の打面部は下端部にある(第176図25)。3類：分厚く幅広の剥片を素材とし、分割後に山形の打面を作出し、分割面側に幅広の横長剥片を生産するもので、旧石器時代後期に盛行した瀬戸内技法に酷似した例である。3類は1点あり、良質のチャートを石材として

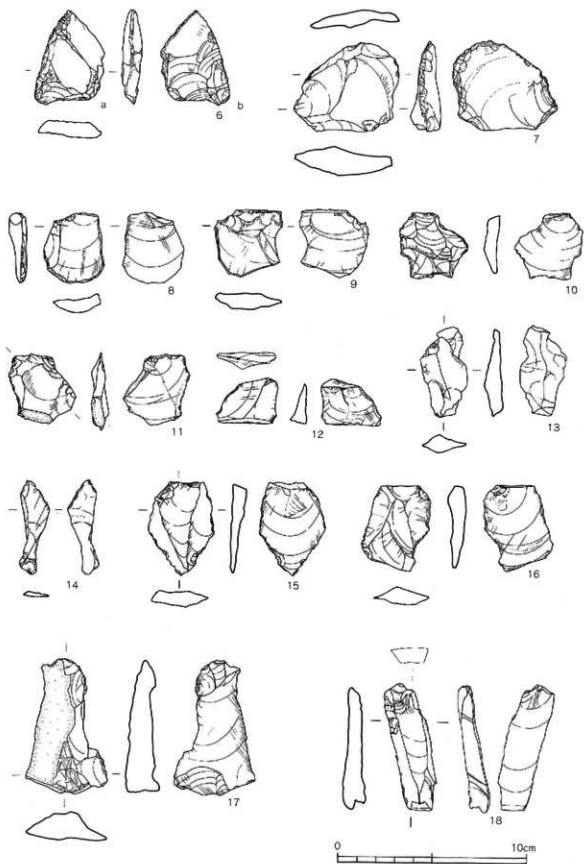


第173図 中村地区出土細石核実測図

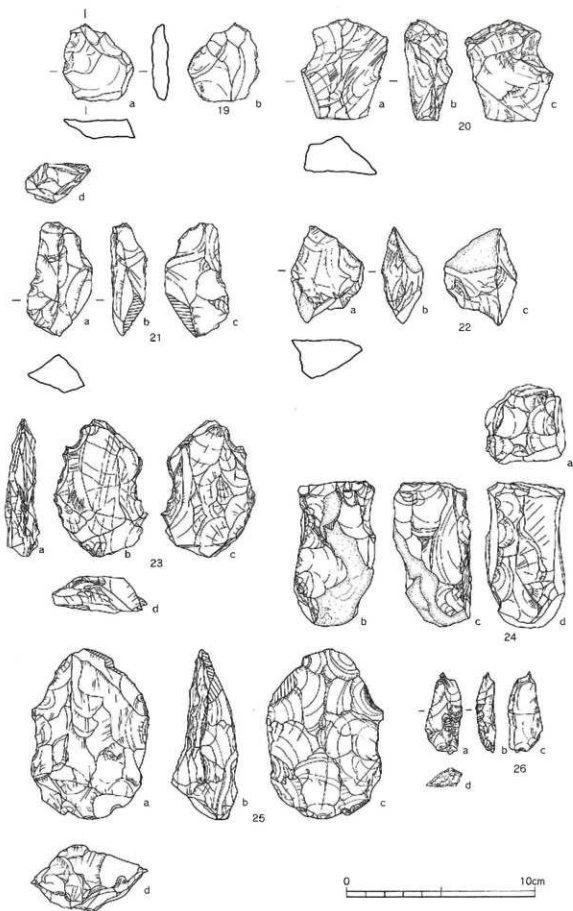


第174図 中村地区出土石鏃実測図

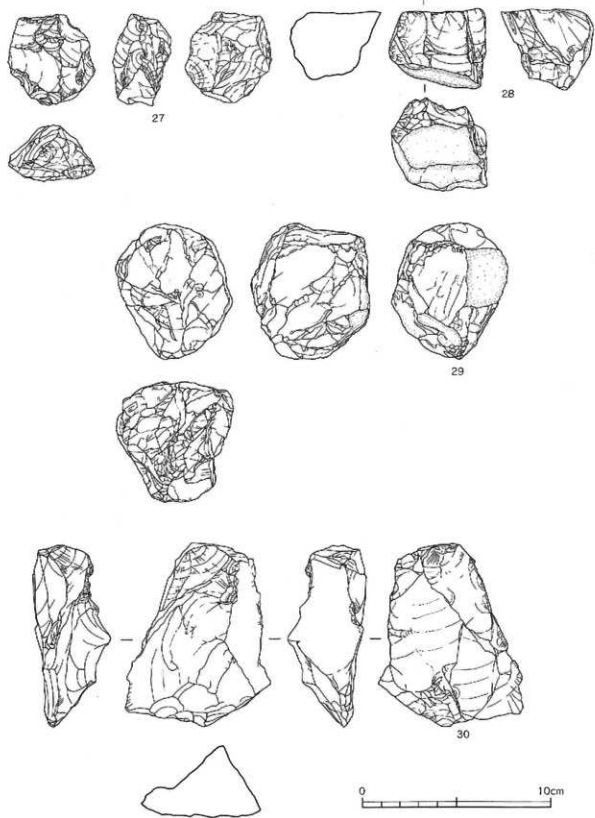




第175图 中村地区出土石器实例图(1)



第176图 中村地区出土石器实测图(2)

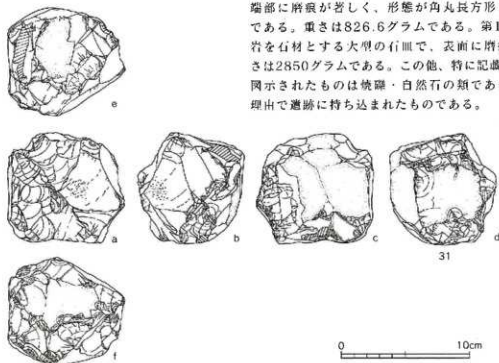


第177图 中村地区出土石器实测图 (3)

いる(第176図21)。4類:素材ははつきりしないが、求心的な剥離が両面で行われた結果、円盤形の残核形態をとる例。4類は1点あり、脈の多いチャートを石材とし、重さは60.4グラムである。5類は角礫を素材とし、打面を移動(転移)させてつ剥離作業を行った結果、形態が多面体となった例。5類は1点あり、大型のチャートの角礫を石材としており、重さは833.3グラムである(第178図31)。なお本例は敲石に転用されたようで、a面に打痕が残る。6類:分割などによって片状形態を示し、短軸方向に剥片剥離と打面移動(打面転移)を繰り返した例で、端部にも打面調整剥離が観察される例。6類は1点あり、脈の多い頁岩の角礫を石材としており、重さは184.8グラムである(第178図31)。

敲石・磨石・凹石 敲石・磨石・凹石類は17点ある。第179図32は受熱によって破損しているが、表面に磨痕がある磨石である。石材は砂岩で、重さは148.8グラムである。第179図33は受熱によって破損しているが、表面に磨痕がある磨石である。石材は砂岩で、重さは53.8グラムである。第179図34は小型の敲石で下端部に打痕があり、大きさからみて石器の細部加工用の敲石であろう。第179図36は砂岩を石材とするほぼ円形の敲石で、下端に打痕がある敲石である。重さは307.6グラムである。第179図37は破損しており、表面に磨痕、下端に打痕がみられる敲石である。第179図38は砂岩を石材とする楕円形の凹石で、a面の左側面を除く各面に打痕が残る。表裏両面に凹部があり、右面には顕著な打痕があり、重さは257.3グラムである。第179図39は破損しており、表面に磨痕がみられる磨石で、石材は不明、重さは309.4グラムである。第179図40は破損しており、側面部に打痕のみられる敲石である。第179図42は石材不明で、表裏両面に僅かに磨痕がみられる磨石である。形態はほぼ円形で、重さは341.4グラムである。第179図43は砂岩を石材とするほぼ円形の磨石で、表裏両面下端に磨痕がある。重さは644.5グラムである。第180図44は砂岩を石材とするほぼ円形の敲石で、右側面に打痕がある敲石である。重さは352.9グラムである。第180図46は砂岩を石材とするほぼ円形の敲石で、左側面と表面に打痕がある敲石である。重さは911.9グラムである。第180図47は受熱破損し、下端に細かい打痕がある敲石である。第180図48は受熱によって赤化しているが、裏面に磨痕、下端に打痕がある。石材は砂岩で、重さは532.1グラムである。第181図51は砂岩を石材とするほぼ円形の敲石で、側面部に打痕があり、重さは624.0グラムである。第180図53は砂岩を石材とするほぼ円形の敲石で、下端に打痕がある敲石である。重さは1470グラムである。第182図54は砂岩を石材とする楕円形の敲石で、右側面と両端部に打痕がある敲石である。なおa面側中央部に赤色顔料が観察される。重さは667.5グラムである。第182図

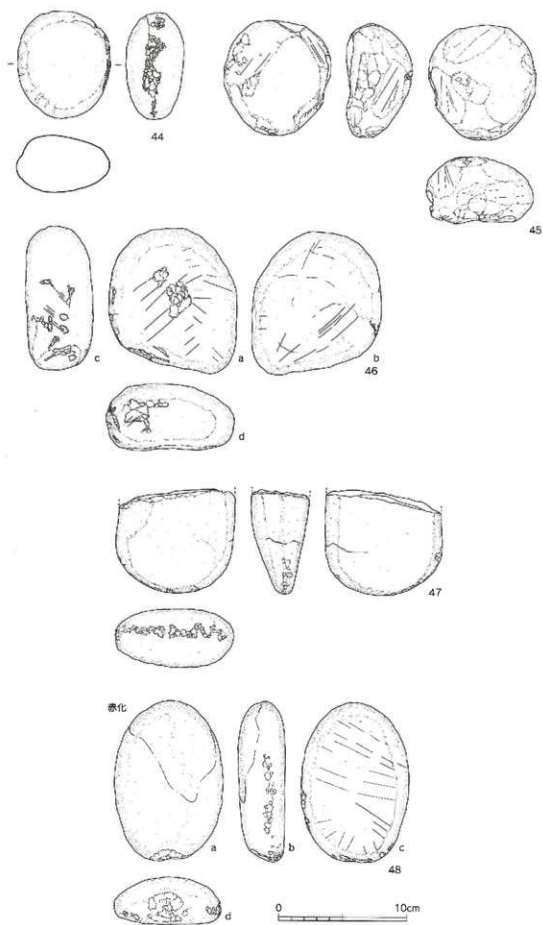
55は砂岩を石材とする敲石で、表裏両面・両側面と両端部に磨痕が著しく、形態が角丸長方形となった磨石である。重さは826.6グラムである。第183図56は砂岩を石材とする大型の石皿で、表面に磨痕があり、重さは2850グラムである。この他、特に記載はしないが、図示されたものは焼礫・自然石の類であって何らかの理由で遺跡に持ち込まれたものである。



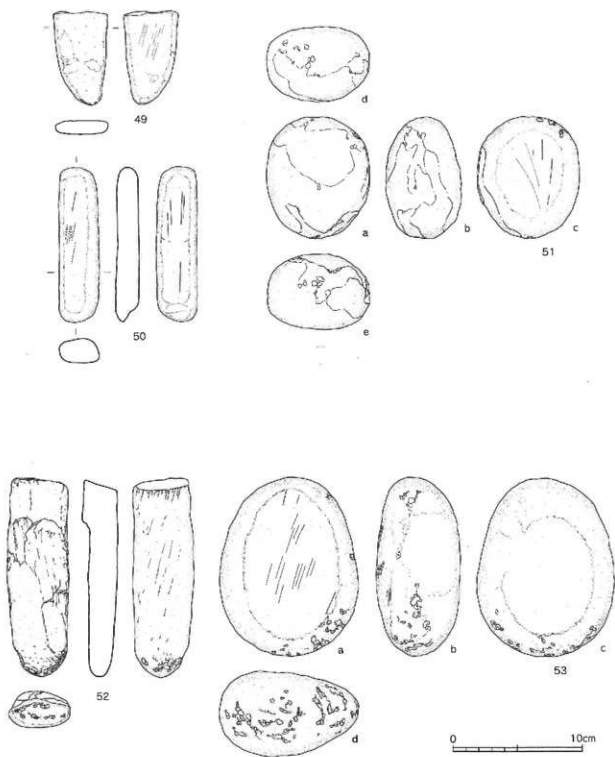
第178図 中村地区出土石器実測図(4)



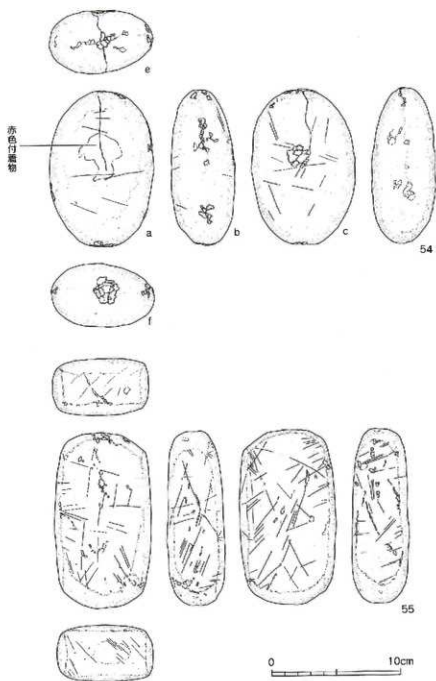
第179图 中村地区出土石器实测图(5)



第180图 中村地区出土石器实测图(6)



第181图 中村地区出土石器类测图(7)

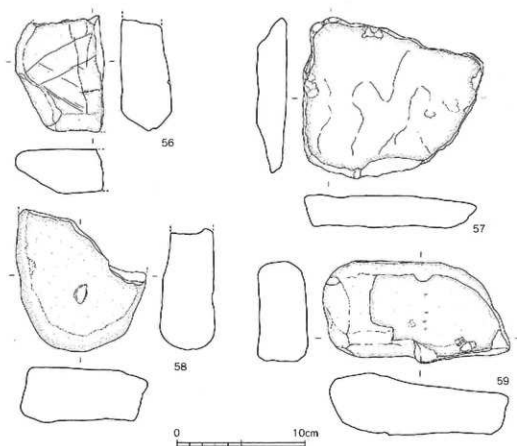


第182圖 中村地区出土石器実測図(8)



まとめ 以上石器類について観察してきたが、若干気が付いたことを記しておきたい。まず石鏃のうち第174図2は「鏃形鏃」と呼ばれているものに類似するので、出土した石器のうちの押型文土器の段階に関連が深いものである。石材の面からみると、第174図3の石鏃、第175図6の削器、第175図17の剥片は姫島産黒曜石を石材としている。姫島産黒曜石は縄文時代早期の田村式土器段階以降にその利用が活発化することからみて、本遺跡における姫島産黒曜石利用の遺物も田村式土器段階以降の遺物と考えたい。ともかく本遺跡において姫島産黒曜石利用の遺物は少数で、主体を占める古相の無紋土器群との関係を考える必要はないであろう。しかし本遺跡の主体を占める無紋土器群に関連する剥片石器の石材としては、量的に突出したありかたを示すチャート、頁岩を石材とする遺物を考えるのが自然であろう。こうしたチャート、頁岩を剥片石器の主要石材組成とする状況は近年調査された佐伯市森の木遺跡の特徴でもあり、県中部、県西北部と異なった県南部地域の特徴と考えられる。

今回本文執筆中に見つかった磨石表面の赤色付着物の分析は行っていないが、ベンガラ等の赤色顔料であれば、顔料の作成に関わった磨石ということになる可能性が高い。縄文時代早期前半の赤色顔料の類例は多くなく、その意味で重要な資料となろう。



第183図 中村地区出土石器実測図(9)

## 第3節 脇地区の調査

## 1) 遺構とその分布

佐伯門前遺跡脇地区は、榊牟礼山の山塊の裾部が東に張り出した部分にあたる。このため、北側と南側は、門前川に流れ込む谷が狭い入っている。遺構が検出された部分は、急斜面を埋め立て、標高20～21mの平坦面を約500m<sup>2</sup>の下段の平坦面がある。

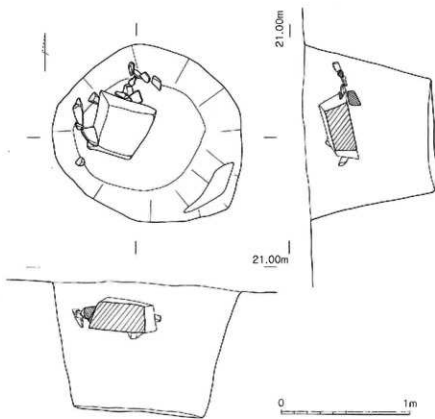
下段の平坦面に対しては、約50%を試掘調査で確認したが、遺構は検出されなかった。上段の平坦面についても、約50%を試掘調査したが、北側の半島状に延びる部分には遺構は残されてなかった。こうした結果、脇地区で遺構が集中的に分布するのは、上段の平坦面の南より、約80m<sup>2</sup>の範囲のみであることがわかった。検出された遺構は、柱穴状の上杭、溝などである。

## S001 (第184図)

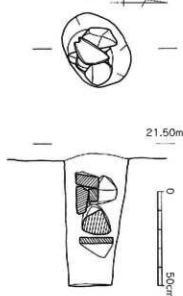
S001は3B区に位置する土坑である。その規模は長径155cm、短径130cm、深さ105cmで、平面プランは楕円形を呈する。当遺構が所在する部分は中世以降何度かの整地が行われており、土坑は最終的な整地が行われた面から掘り下げられている。土器等の遺物の出土はなかったが、土坑埋土位から大小の凝灰岩礫数点と45cm四方の断面台形状に加工された石遺物1点が出土した。この石遺物には全面に調整痕や磨痕のような工具痕が認められ、明らかに人工的な加工がなされている。用途そのほかの詳細は不明であるが、礎石等に利用されたものと推定される。最終整地層から掘り込まれていることから、当遺跡の中では最も新しい遺構と推定されるが、時期を判断する出土遺物はなく遺構の時期は不明である。

## S002 (第185図)

S002は2A区に位置するピット状の遺構である。規模は長径42cm、短径34cm、深さ70cmで、楕円形の平面プランを呈する。埋土は暗青灰色の色調を呈し、硬くしまりを持つもので、細かい砂岩を多量に含んでいる。埋土中に凝灰岩が充填されており、礫を埋める際に、意図的に石を組みながら埋めたようにも観察される。出土遺物はなく遺構の時期は不明である。



第184図 脇地区S001実測図



第185図 脇地区S002実測図



第186図 験地区遺構配置図 (1/40)

## S003 (第187図)

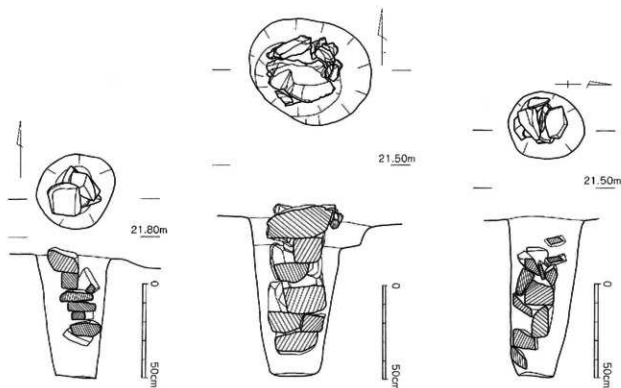
S003は3Aに位置するピット状の遺構である。規模は長径43cm、短径38cm、深さ67cmで、平面プランは楕円形を呈する。遺構埋土位から下位にかけて8個の凝灰岩が埋め込まれている。礫は薄く扁平なもので、縦断面で積み石状に重ねられた状態であった。S002、S005と当遺構は同等なスケールであり、直線な柱状の配置をなす。出土遺物はなく遺構の時期は不明である。

## S004 (第188図)

S004は2B区に位置するピット状の遺構である。規模は、長径67cm、短径54cm、深さ85cmで、楕円形の平面プランを呈する。遺構内はほぼ全体に人頭大の凝灰岩礫が埋め込まれている。土坑縦断面中央で意図的に組み埋め込まれたように観察できる。出土遺物はなく遺構の時期は不明である。

## S005 (第189図)

S005は2A区に位置するピット状の遺構である。規模は長径42cm、短径35cm、深さ85cmで、平面プランは楕円形を呈する。遺構埋土中には10~20cm大の礫が埋め込まれている。なお、S005・S002・S003は約2.0m間隔に一列に並び、何らかの建物が建っていた可能性が考えられる。出土遺物はなく遺構の時期は不明である。



第187図 脇地区S003実測図

第188図 脇地区S004実測図

第189図 脇地区S005実測図

S006 (第190図)

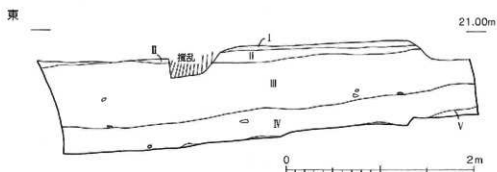
調査区南部3B区に位置する溝状遺構である。暗褐色を呈する整地層最下部で検出した。東西に軸をもち、東側は調査区外に逃げるが、後世の宅地造成に伴い削平されているものと推定される。溝の中では大小の角礫が検出されたほか、竹筒碗や土師質土器が出土した。遺構の時期は、出土遺物から12～13世紀代に比定される。



第190図 脳地区S006実測図

佐伯門前遺跡脇地区 3B区土層観察表

I 層	明赤褐色土層	整地層で粘質がある
II 層	黒褐色土層	小礫を含む
III 層	淡黄褐色土層	多くの小礫を含む 0.3mm程の砂粒子を多く含む
IV 層	黒褐色土層	炭化物を含む 5cm~10cm大の礫を多く包含する 1cm大の明黄褐色粒を多く含む
V 層	明黄色土層	粘質がある
VI 層	黄褐色土層	1cmほどの白色小礫粒を含む
VII 層	暗黄褐色土層	粘質がある



第191図 脇地区3B区東西トレンチ土層実測図



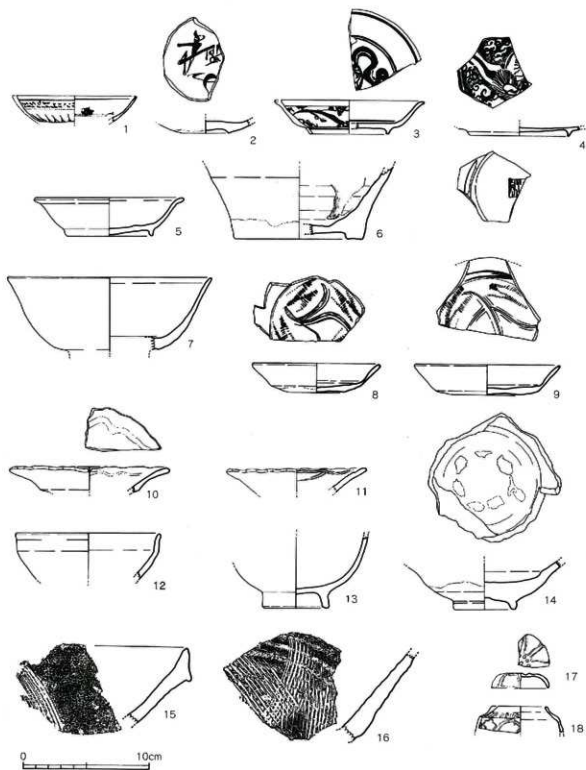
第192図 脇地区3B区南北トレンチ土層実測図

## 2) 遺物

脇地区出土の陶磁器類(第193図) 第193図は佐伯門前遺跡脇地区出土の陶磁器類である。6・7は最下部の遺構S006出土のものであるが、その他は包含層出土の遺物である。出土遺物は13世紀代の青磁から近世の肥前系陶器まで様々だが、中心となるものは15世紀から16世紀代の遺物である。1～4は中国景德鎮窯系青磁花皿である。

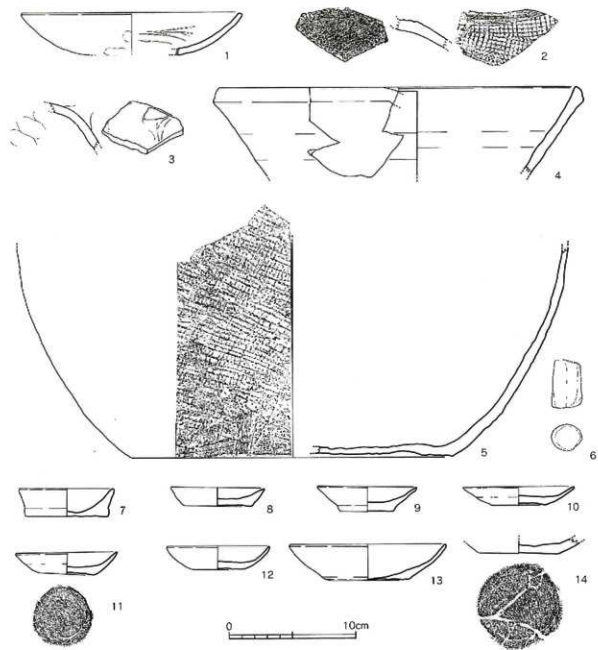
1～2は底部がいわゆる「蒜背底」になるもので、小野分類<sup>(1)</sup>の皿C群に比定される。15世紀後葉から16世紀前葉の所産である。1は口縁部破片である。口縁部がかかる内湾気味になり、外面口縁下に波瀾文から変化した列点文を描き、胴部には芭蕉葉文を描く。内面には花文を描く。2は底部破片である。外底部は露胎となり、見込みには文字を描く。「福」字か。3は口縁部が端反りになるもので、小野分類の皿B1群に比定される資料である。15世紀中葉から16世紀前葉の所産である。外面に唐草文を描き、見込みには龍文を描く。高台付きは露胎となる。4は見込みに蛟龍文を描き、高台内には四角の枠取りをした「福」を描く。小野分類の皿E群に比定される資料で、低い内湾した胴をもつものと推定される。16世紀後葉の所産である。5は中国産の白磁皿である。口縁部は端反りとなり、高台付きは露胎となる。森田分類<sup>(2)</sup>のE群に比定される資料で、15世紀後葉から16世紀中葉の所産である。6は底部破片である。被熱しており、器面全体は変色しているが白磁か。壺の底部片とも推定されるが、内面にも一部軸が掛かり、器種の詳細は不明である。7～11は青磁である。7は中国龍泉窯系青磁碗の破片である。無文で黄色味を帯びる緑色の釉調を呈する。横山・森田分類<sup>(3)</sup>の碗1-1に比定される資料である。8～9は中国同安窯系青磁皿である。8は体部外面下半以下には施軸されず、見込みに片彫りによる文様とジグザグ状の節点描文を有する。横山・森田分類の皿1-1bに比定される。9はやはり見込みに片彫りによる文様とジグザグ状の節点描文を有するが、底部外面の軸が掻き取られており、横山・森田分類の皿1-2bに比定される。10～11は口縁が稜花を呈する皿である。10は被熱により全体が変色している。口縁部には軸ダレが認められる。11は内面に柳状工具による波状文が施される。12は瀬戸美濃系天月茶碗である。13～14は肥前系陶器である。13は碗で透明軸が掛かり、高台付きは露胎となる。17世紀後半代の所産である。14は皿の底部破片である。灰軸が掛かり、胴部下半から外底部にかけては露胎となる。見込みには砂目による目跡が残る。製作年代は1600～1630年に比定される。15～16は備前系陶器摺鉢である。15は口縁が上方へ拡張し、口縁外面の半ばに屈曲部をもつ。下角の垂下は顕著である。中世4期<sup>(4)</sup>に比定される資料で、15世紀前葉から中葉の所産である。16は胴部破片である。放射状開口に加えてナメ方方向の開口が認められ、近世1期に比定される資料である。17は青白磁合子の蓋である。外面中央に珠文を配し、胴部に逸弁を施す。口縁端部と内面は露胎となる。18は青白磁の小壺もしくは水注か。胴部には凸線による文様が施されるが、欠損のため文様の詳細は不明である。また、短い頸部下には凸逸弁文を一周する。内外面に施軸されるが、口縁端部は露胎となる。

脇地区出土瓦質土器・土師質土器(第194図) 第194図1はS006出土の瓦器碗である。内面に横方向のヘラミガキが認められ、外面に指頭痕が残る。畿内産か。2～3は瓦質土器である。2は壺もしくは壺の肩部破片である。外面に格子状のタタキ目が認められる。3は羽釜の肩部破片である。欠損しているが外面には縦方向の耳がつく。内面は指圧痕が残る。4は東播磨の程ね鉢と思われる口縁部破片である。5は壺の底部から胴部である。外面に格子状のタタキ目と横方向のタタキ目が認められ、内面はケズリ調整が施される。6は脚の破片である。7～13は在地系土師質土器皿坏である。7は赤褐色系の色調を呈し、胴部下半から外底部にかけて煤が付着する。底部には糸切り痕が残る。8～14は淡黄色系の色調を呈するものである。11、14以外は摩滅により底部の糸切り痕は不明である。現状では佐伯地域における土師質土器皿坏の資料に乏しく、年代の特定は難しいが、出土する陶磁器から15～16世紀代の資料に比定される可能性が高い。



第193図 胎地区出土遺物実測図(1)

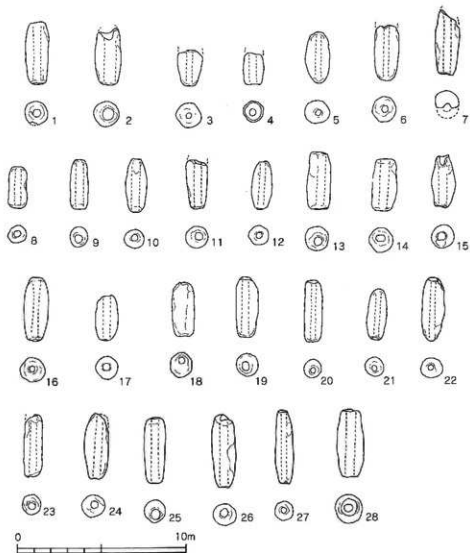




第194图 临地区出土文物实测图(2)

## 臨地区出土土鍾 (第195図)

第195図は佐伯門前遺跡臨地区出土の土鍾である。いずれも小型管状土鍾で、出土した層位や伴う遺物から中世の所産と考えられる資料である。7・10~11・15・20~21は外面が黒変しており、19・22は煤が付着する。24~25は被熱によるものが灰白色を呈す。



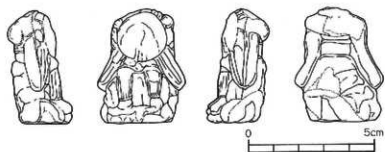
第195図 臨地区出土遺物実測図(3)

脇地区出土土製品（第196図）

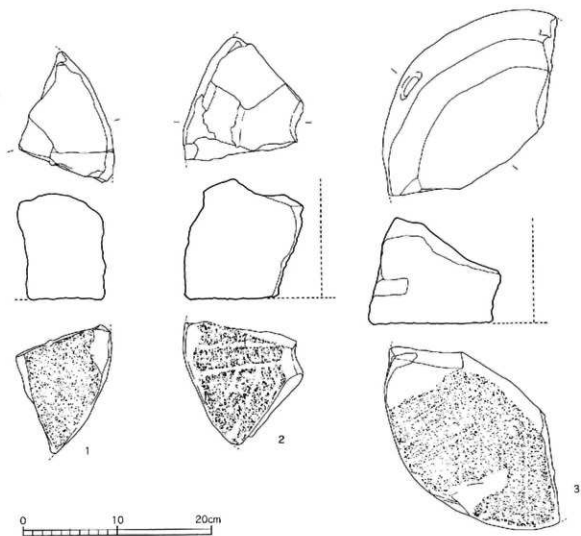
第196図は土人形である。頭部は欠損しているが、高さ約4.5cmを測る。胸に笠をもち、蓑の法着姿を表したと思われる。西行法師像であろうか。

脇地区出土石臼（第197図）

第197図1～3は佐伯門前遺跡脇地区出土の石臼破片で、すべて上臼の破片である。3の側面にはフルギアナが認められる。



第196図 脇地区出土土製品実測図



第197図 脇地区出土石臼実測図

## 第4節 小結

## 佐伯門前遺跡中村地区

佐伯門前遺跡中村地区の調査で明らかになったのは、集石を伴う縄文時代早期の集落跡である。ここでは、出土した土器の時間的な位置づけを行い、その時期を想定する。また、第163図4に図示した貝殻文系土器についても、その意義を考えてみたい。さらに、集石についても、県内の周辺地域の発掘調査例と比較を行い、佐伯門前遺跡の例を、その中で考えてみる。

九州の東北部に位置する大分県では、これまで押型文土器を出土する縄文時代早期の遺跡が、100箇所以上知られている。このため、調査例も豊富で、1950年代から賀川光夫を中心に、押型文土器の編年の研究も、九州の中でも先進的な役割を果たしてきた<sup>(5)</sup>。中でも、佐伯地域の意義は、1948年の下城遺跡の発掘調査で、弥生土器の包含層の下層から押型文土器が出土したことにある。それまで、九州の押型文土器は、縄文時代以後も存続し、弥生土器に伴うと一部で考えられていたが、この調査成果で終止符を打った<sup>(6)</sup>。

その後、1970年代までに、押型文土器の編年は、川原田式土器・稲荷山式土器・早水台式土器・川村式土器・ヤトコロ式土器・手向山式土器の大筋が出来上がり<sup>(7)</sup>、さらに、1981年に早水台式土器と川村式土器の間に下管生式土器が認められる<sup>(8)</sup>など、細分化も試みられている。この編年の中で、押型文土器に無文・条痕文土器が伴う比率を見ると、川原田式土器・稲荷山式土器・早水台式土器に多く伴い、それ以後の時期には激減する。川原田式土器には大量の無文・条痕文土器に、数点の横四角の押型文土器が伴い、稲荷山式土器の標識遺跡である杵築市稲荷山遺跡では、約73%を無文・条痕文土器が占める。さらに早水台遺跡での比率は63%となる<sup>(9)</sup>。

そこで、佐伯門前遺跡の縄文時代早期の出土土器を見ると、圧倒的な比率で、無文・条痕文土器が存在する。押型文土器はわずかに2点の山形文だけである。また、無文・条痕文土器は、器壁が厚手と薄手の2種類に分類できる。さらに、条痕文は条痕調整後にナアられており、縄文時代草創期に見られる、比較的くつきり痕跡を残す条痕文とも異なる。

このような数点の押型文土器と大量の無文・条痕文土器が出土する遺跡として、臼竹市東台遺跡<sup>(10)</sup>がある。この遺跡からは、佐伯門前遺跡と同様な無文・条痕文土器に伴い、押型文土器でも最古型式といわれる、帯状施文の山形押型文が出土している。

九州での縄文時代草創期から早期にかけての土器が、条痕文土器から無文土器へと変遷して行く中で、押型文施文方法がこの地域で出現すると考えることは困難であり、他地域からの伝播を想定しなければならない。そうすると、佐伯門前遺跡や臼竹市東台遺跡のような土器様相は、九州出現期のものとと言える。すなわち、佐伯門前遺跡の時期は、そうした時期と考えられる。

次に第163図4に図示した土器であるが、この資料は、直口する口縁部外面にサルボウやアカガイなど放射肋のある貝殻の腹縁を連続的に縦方向に刺突した文様が施文されている。類似する土器の周辺地域での出土例は大分県直人郡萩町政所馬渡遺跡の例がある<sup>(11)</sup>。この土器は、砲弾型をした器形で、直口する口縁部に放射肋のある貝殻の腹縁を連続的に刺突している。こうした、放射肋のある貝殻で施文された土器は、野津町菅無田遺跡でも出土しており、その文様は、貝頂部を外面に押し込んでいる。

こうした、貝殻を施文具として多用し、土器の表面に文様を描く地域として南九州がある。この地域では、縄文時代早期に独自の貝殻文系土器文化を展開させる<sup>(12)</sup>。しかし、九州北半分に展開する押型文土器との関係は、明瞭ではない。この1点から、南九州のどの土器型式に相当するかは明確ではない。しかし、この時期の地域間交流を物語る貴重な資料と言える。

また、第173図1に図示した石器は佐賀県早田産の細石核の可能性の強いものである。旧石器時代の終末期に属する。発掘調査区は遺跡の西側斜面に設定したことであり、遺跡本体がある緩斜面の中心部には旧石器時代の遺物包含層が存在する可能性がある。

最後に集石であるが、調査区のほぼ全域に分布しており、33基が検出された。こうした、縄文時代早期の集石は、県内の押型文を出土する遺跡では、普遍的に検出される。1998年に調査した佐伯市森の木遺跡<sup>(14)</sup>でも集石が検出されている。こうした、集石にはいくつかのタイプがあることが、これまで論じられている<sup>(15)</sup>。佐

佐伯門前遺跡でもⅠ類～Ⅳ類の4タイプに分類したが、集石の使用 방법이 蒸し料理に使われたものとする。これらは、使用前の礫を集めた状態、調理中の状態、調理後に集落が移動し置き去られた状態など、いくつかの状況を示すものと考えられる。

掘り込みのない平地に置かれた第13号集石などや、散乱状態で検出された第30号集石などは、使用前の状態や置き去られた状況を示す可能性がある。また、第19号集石のようなタイプは、菅無田遺跡や大分市下黒野遺跡<sup>(9)</sup>などでも検出されている。こうした集石は、皿状に船窪められた穴に、花弁状に大きな扁平な石を配石し、さらに多くの礫で覆っており、使用状況を示す状態と考える。

#### 佐伯門前遺跡地区

佐伯市の門前地区は発掘調査前、その地名や後背地に中世の山城である野牟礼城が有ることから、寺社や居館の周辺地と想定していた。また、地区の中心にある神社の境内には五輪塔などの石造物があり、そのことを裏付ける有力な証拠と考えていた。調査の結果、そのことを証明するように、脇地区で中世の遺構を検出した。その遺構は、野牟礼城のある山塊の南側裾部の東側斜面を切り盛りで造成し、約70㎡の平地帯を造り、そこに施設を設けている。出土した遺物からその時期を見ると、15世紀頃に土地が造成され、その後16世紀の後半まで存続している。出土遺物はわずかであるが、在地の土層の上層に伴って中国製陶磁器が出土しており、その組合せは中世都市と大差ない。

ところで、佐伯市門前地区の北側の山塊を超えると弥生町床木地区があり、床木川を中心に水田を経営している。この地区には15世紀や16世紀の石造物があり、この時期にはすでに、こうした水田開発が行われていたものと推測できる。同じように、門前地区にも年代は不明であるが、神社の境内に五輪塔などの石造物があることや、地形的に類似していることなどから、ほぼ同時期に水田開発がおこなわれたものと考えられる。

そこで、佐伯門前遺跡地区の造成された築園を見ると、面積は約70㎡であり、第191園、第192園の土層図で見ると、比較的大きな土木事業と見え、家敷労働で造成したものと考えられない。また、立地する場所は、東に門前川を中心に広がる水田を見下ろす位置にあたる。そこで、想像をたくましくすると、この地域を象徴するような施設があった可能性も考えることができる。

- 註 (1) 小野正敏「15～16世紀の染付磁・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 1982年
- (2) 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 1982年
- (3) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978年
- (4) 栗川 実「中世備前焼(壺)の編年案」・備前焼跡の編年案」『第3回中世備前焼研究会資料』2000年
- (5) 賀川光夫「縄文文化の発展と地域性 九州東南部」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』1965年
- (6) 賀川光夫「東九州における押型文土器と弥生土器」『考古学雑誌』第37巻第1号 1951年
- (7) 藤島信「大分県九重町二丁目制穴の調査」九重町文化財調査報告第2集 九重町教育委員会 1977年
- (8) 後藤一重ほか「密生台地の遺跡 N」竹田市教育委員会 1982年
- (9) 坂本道弘「西日本の押型文土器の展開—九州からの視点—」『古文化論叢 第35集』古文化研究会 1995年
- (10) 清水宗昭編『東台遺跡』白幡市教育委員会 1974年
- (11) 賀川光夫「早期縄文土器の新資料 大分県杵入郡萩町政所出土—」『考古学雑誌』第46巻第3号 1960年
- (12) 坂本道弘「菅無田遺跡」『野津川流域の遺跡』野津町教育委員会 1986年
- (13) 黒川忠広「南九州貝殻文系土器 Ⅰ—鹿児島編—」南九州縄文研究会 2002年
- (14) 高橋信武「森の木遺跡」大分県文化財調査報告第109編 大分県教育委員会 2000年
- (15) 栗田勝弘「平草遺跡」天瀬町教育委員会 1982年
- (16) 真野和夫「下黒野遺跡」大分県教育委員会 1975年

## 佐伯門前遺跡写真図版



佐伯門前遺跡空中写真



第1号集石



第2号集石



第3号集石



第4号集石



第5号集石



第6号集石



第7号集石(上部)



第7号集石(下部)



第8号集石



第9号集石



第10号集石



第11号集石



第12号集石



第13号集石



第14号集石(上部)



第15号集石(下部)





第17号集石



9区集石群



第18号集石(上部)



第18号集石(下部)



第19号集石(上部)



第19号集石(下部)



第20号集石



第21号集石



第22号集石



第23号集石



第24号集石



第25号集石



第26号集石



第27号集石



第28号集石(上部)



第29号集石



第31号集石



第32号集石



第33号集石(上)



第33号集石(下)



10区 北壁土層



14区 北壁土層セクション



脇地区 作業風景



S001



S006



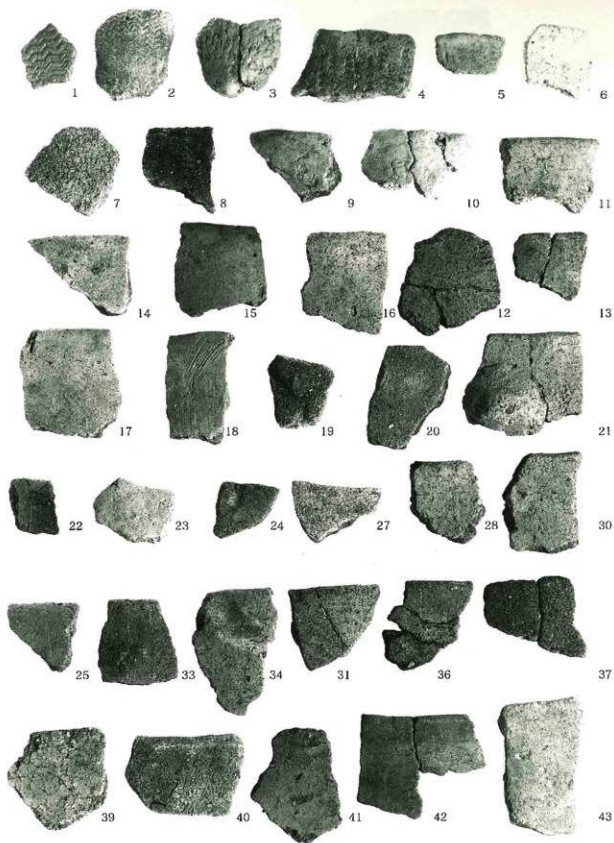
3-B 土層セクション



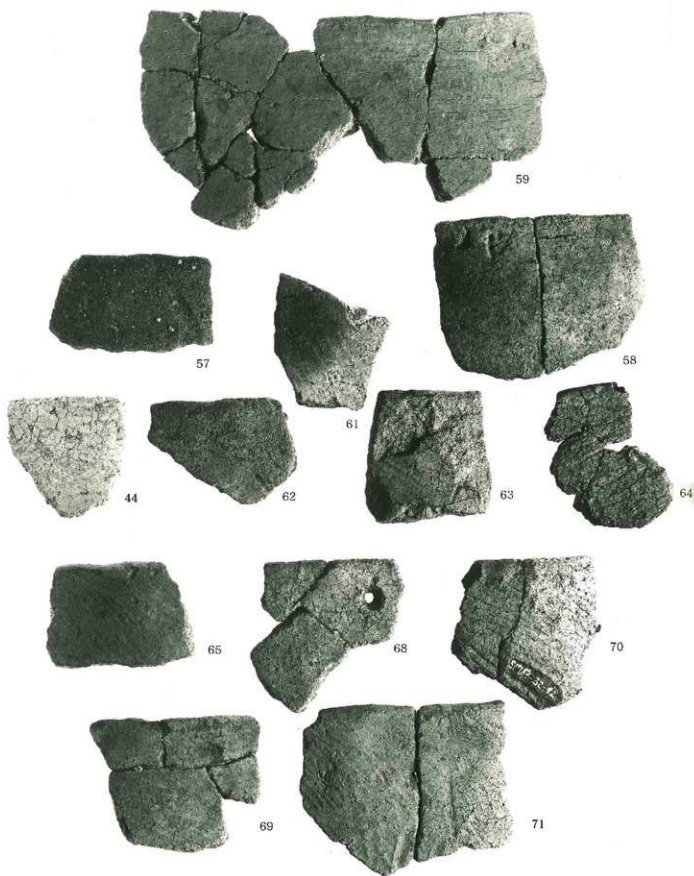
S006



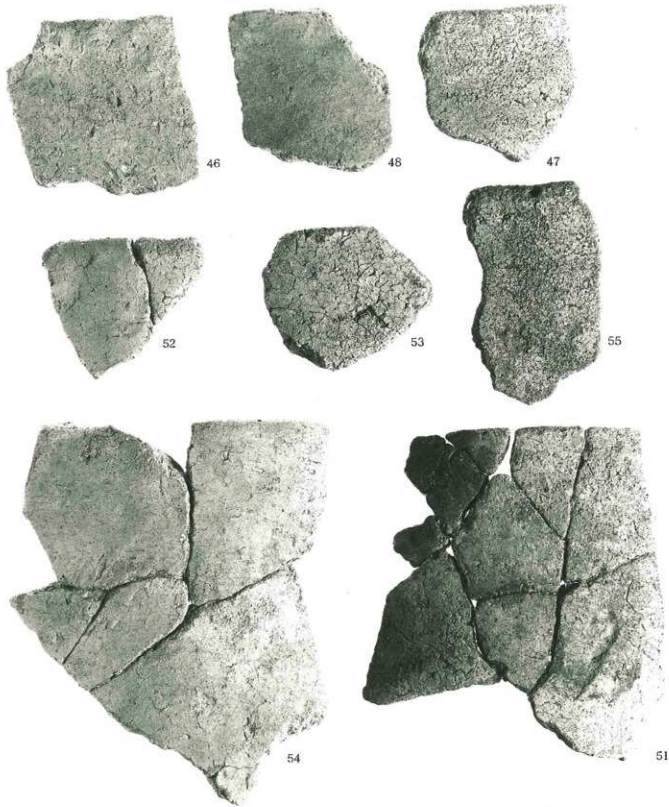
S006 遺物出土状況



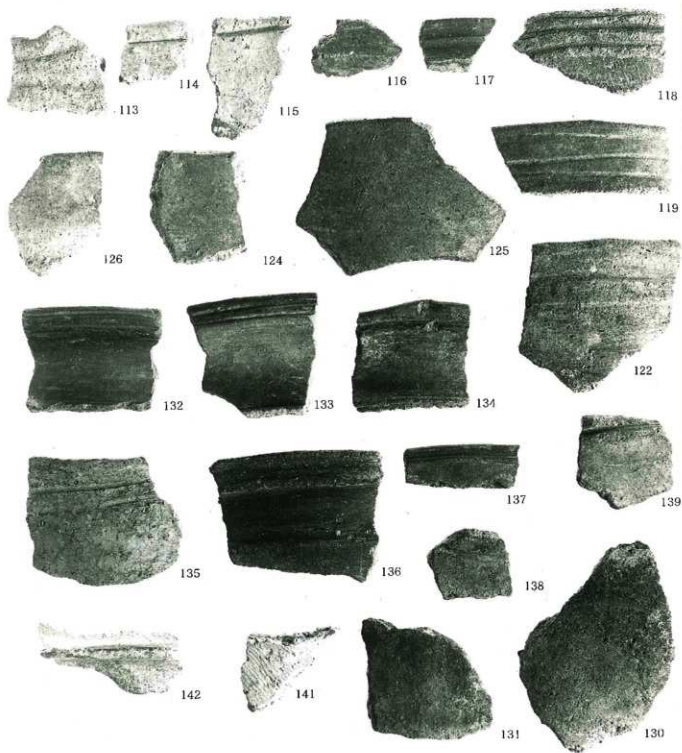
中村地区出土縄文土器①



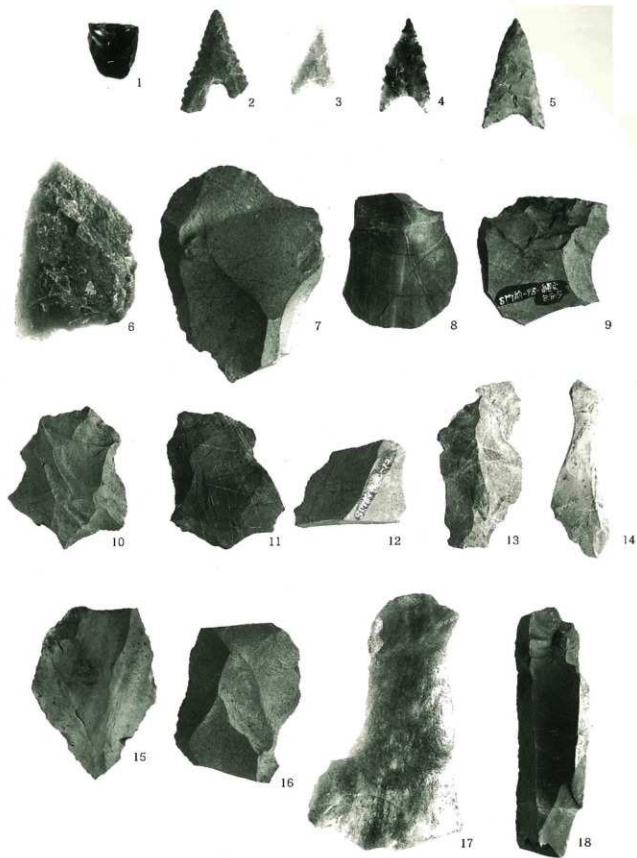
中村地区出土縄文土器②



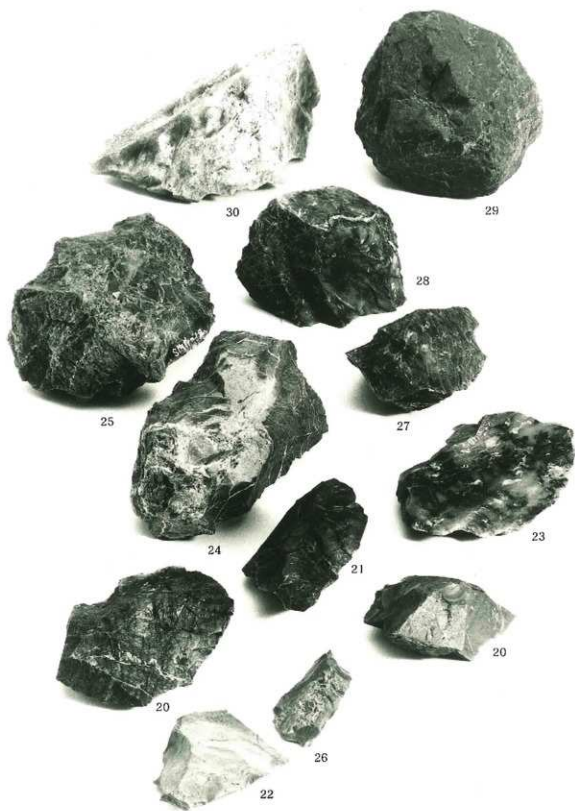
中村地区出土縄文土器③



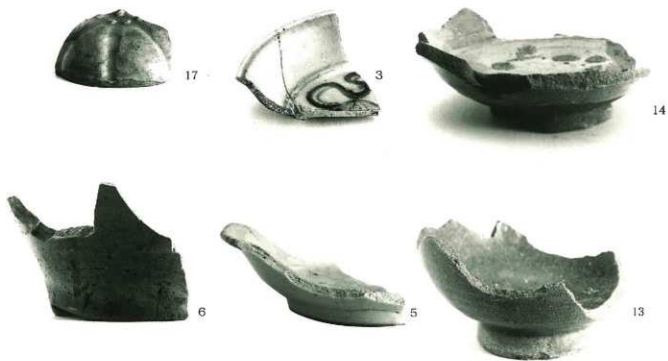
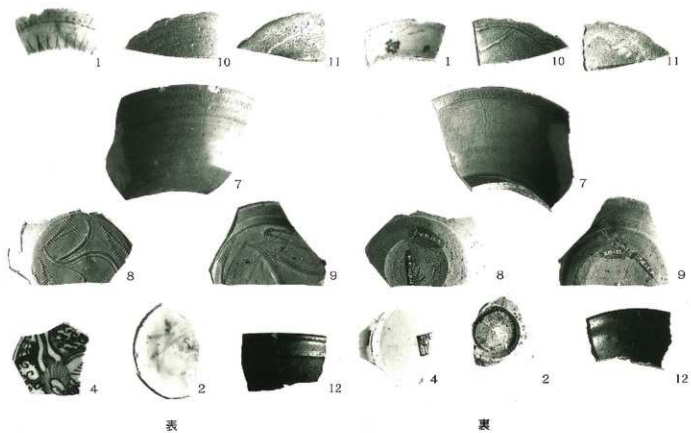




中村地区出土石器①



中村地区出土石器②



臨地区出土陶磁器



7



8



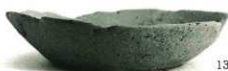
9



10



11



13

脇地区出土土師器



脇地区出土土製品



中村地区出土土鐘

## 第5章 総括

日本道路公園が建設する東九州自動車道の津久見-佐伯間の埋蔵文化財発掘調査は、平成14年から本格的に開始された。この間の発掘調査対象遺跡は、津久見市の津久見門前遺跡、弥生町のノ瀬遺跡・河内遺跡・瀬戸遺跡、佐伯市の佐伯門前遺跡の5遺跡で、弥生町ノ瀬遺跡・河内遺跡については、確認調査の結果、遺跡の保存状態が悪く、本調査に至らなかった。本調査を実施したのは本書で報告した3遺跡である。その結果、県内でも比較的遺跡の希薄な県南地域、土地に刻まれた歴史の一面を明らかにすることができた。

津久見門前遺跡は、津久見市青江地区の山の中段にある中世寺院跡である。発掘調査の結果、多量の瓦と貿易陶磁器などが出土した。中国製の貿易陶磁器の分析の結果、14世紀末から15世紀初頭に建立され15世紀前半代で廃絶していることが判明した。その後、この場所では15世紀後半から16世紀前半と、16世紀中葉から16世紀末にかけて小規模な活動の痕跡が認められた。こうした事実は考古学調査で明らかにされたが、寺院等の名称などは古文書調査で補充した結果、初期の寺院は禪宗寺院である「解脱園寺」、最終末期は「朝日寺」であることが明らかにされた。

次に、こうして発掘調査と古文書調査で明らかにされた寺院が、何故この地に建立されたかを理解するためには、これを支えた地域の問題を明らかにする必要がある。そこで、周辺の石造物や旧字図の調査を行い、門前遺跡のある青江川下流域が、中世後半期の津久見衆と呼ばれた水軍の本拠地の可能性があることを指摘した。さらに、津久見氏の居館が、門前地区と丘陵をひとつ隔てた「井無田」地区の可能性が高いことが判明した。そして、16世紀後半のこの地域での最大の出来事である天正10年（1582）頃の大友宗麟の隠居場所、そして天正14年（1586）の島津侵攻の際の門前遺跡周辺への動きを再現した。

このように、中世寺院跡である門前遺跡すなわち解脱園寺・朝日寺の存在は今回の発掘調査で初めてその存在が明らかになったものである。その調査を通じて明らかになったことは、これまで語られてきた津久見地域の中世史を、新たな視点で見つめ直すこととなった意義深いものである。

弥生町瀬戸遺跡の調査成果については、江戸時代から明治初期の農村の一端を明らかにすることができた。遺跡のある床本地区は、床本川を中心にその周辺は水田化している。瀬戸遺跡の北側の集落である川内地区には町指定の15・16世紀の石造物があることから、その時期には水田開発がおこなわれていた可能性が強いことがわかった。瀬戸遺跡で発掘した遺構は、こうした水田を経営していた人々の生活の跡である。出土した遺物を見ると瀬戸内海を通じて備前や大阪地方の陶磁器がもたらされており、当時の物流範囲を示す資料であった。こうした、居住した跡や生活道具の検出は、江戸時代のこの地域の人々の暮らしを具体的に示すもので、貴重な資料となった。

佐伯門前遺跡の中村地区は縄文・弥生時代遺跡の希薄な県南地域にあって、縄文時代早期の33基もの集石を伴う集落跡であった。出土した土器から見ると、縄文時代早期の古い時期にあたり、九州の押型文土器の出現期の様相を理解する上で良好な資料と言える。また、遺跡からは、南九州の貝殻文系土器も出土しており、縄文時代早期の地域間交流や土器型式の並行関係を考える上で、重要な資料である。さらに、多くの集石には幾つかのタイプがあり、縄文人の生活の一端を知ることができた。

また、脇地区においては、中世の山城である樹牟礼城のある山塊の裾を造成し、15世紀から16世紀にかけて存続した遺構を検出した。瀬戸遺跡が近世の農村の一部とするならば、佐伯門前遺跡脇地区で明らかにされた遺構は、中世の農村の一端を見ることが出来たとと言える。

以上、東九州自動車道の津久見-佐伯間で発掘調査をした津久見門前遺跡・瀬戸遺跡・佐伯門前遺跡の調査成果とその意義を述べ、総括とする。

## 報告書抄録

ふりがな	つくみもんぜいせき せどいせき さえきもんぜいせき							
冊名	津久見門前遺跡 瀬戸遺跡 佐伯門前遺跡							
副書名	東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第4集							
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	坂本嘉弘 小柳和宏 横島隆二 松田幸之助							
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-1113 大分市大字中村1977番地 TEL 097-597-5673							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つくみもんぜいせき 津久見門前遺跡	大分県津久見市大字下青江字門前	44207	324004	33° 04' 20"	131° 51' 03"	021015 1 030117	1,000	道路建設
せどいせき 瀬戸遺跡	大分県南海部郡弥生町大字塚本字瀬戸(現佐伯市)	44402	432006	32° 59' 16"	131° 52' 07"	030122 1 030131	400	道路建設
さえきもんぜいせき 佐伯門前遺跡	大分県佐伯市大字上岡字藤、中村	44205	430026	32° 58' 14"	131° 51' 56"	030513 1 040312	3,500	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
津久見門前遺跡	寺院	中世	溝、土坑など	瓦、輸入陶磁器、土器、鏡前、鉈				
瀬戸遺跡	集落	近世	竈	石臼、陶磁器				
佐伯門前遺跡	包含層 集落	縄文 中世	集石 ピット	土器 陶磁器				
要約	<p>津久見門前遺跡は14世紀末から15世紀前半代に創建された寺院跡で、15世紀前半代には瓦葺き建物が廃絶する。その後、戦国末期まで僅かに活動が見られる。中世、津久見地域で活躍した津久見衆に係わる寺院か。瀬戸遺跡では近世農村の一角で埴敷跡を一朝調査した。出土した遺物から、当時の瀬戸内地域を通じ、備前や大阪地方などの物流範囲が想定された。佐伯門前遺跡では、中村地区で縄文時代早期の集石33基を調査し、埴型文土器出現期の状況が明らかになった。脇地区では、中世の招平礼城の視野を調査し、15世紀から16世紀の輸入陶磁器などが出土した。佐伯氏との係わりなどが想定される。</p>							

---

---

津久見門前遺跡  
瀬戸遺跡  
佐伯門前遺跡

—東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(4)—

平成17年3月31日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター  
〒870-1113  
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地  
TEL (097)597-5675

印刷 高山活版社

---

---

